

川村学園女子大学

25年  
の  
あゆみ

Twenty-Fifth Anniversary



memories

感謝の歌

か  
み  
よ  
も  
と  
じ  
に  
み  
る  
も  
あ  
る



## 徽章(校章)

学園の三羽の鶴の徽章は、大正13年(1924)秋に制定されました。三羽の鶴の徽章は、学園を表象するとともに、学園の精神をもっともよく表しています。三羽の鶴の足元に描かれている三つの玉は、川村学園の「川」の字でもあり、宝玉ともいえる人の「こころ」を表し、玉を抱く三羽の鶴は、中心の鶴が園児・児童・生徒・学生、左右の鶴は保護者と教職員を表し、園児・児童・生徒・学生一人ひとりをご家庭では保護者が、学園では教職員が温かく見守りはぐくむ様を示しています。

学園の創立者である川村文子は、徽章の制定に熟考を重ね、「鶴」を選ばれた後も、現在の形に定まるまでに、大勢の方々の意見も参考にされたといわれています。創立者の理念を託された鶴について述べておきます。

### 《一 鶴は尊厳と崇高とをあらわします。》

鶴はめでたいとされる鳥です。さらに、学園の鶴は、日本の国の尊厳、人間の尊厳、女性の尊厳などの象徴される鳥でもあります。

### 《一 鶴は平和と愛のこころをあらわします。》

鶴は、親子・夫婦・友愛など、「まことの愛」をあらわす鳥です。

### 《一 鶴は高潔をあらわします。》

鶴の姿はクジャクのような華麗さはないが、上品で気高い姿です。高尚であること、純潔であること、また秀麗であることを示します。

### 《一 鶴は「ゆたかさ」をあらわします。》

鶴の姿は、莊嚴であるだけではなく、朗らかで明るく、悠揚せまらざるゆたかな落ち着きがあります。このような姿勢こそ人間の理想の生き方であると考えます。

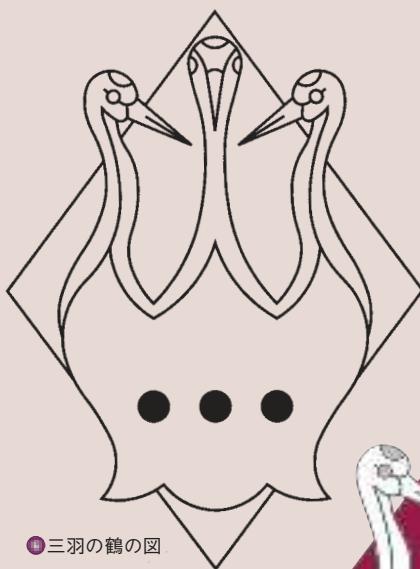
### 《一 鶴は永遠の向上をあらわします。》

たゆまざる勤勉と研究とによる、永遠の向上を表象するのにふさわしい鳥こそ、鶴ということです。

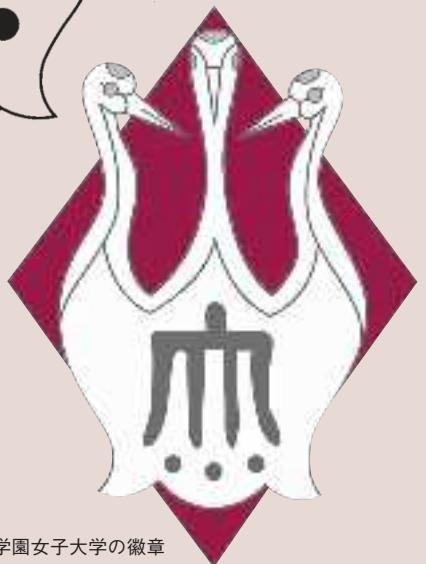
創立者文子は、「鶴」の表象する理念を人間のあるべき姿ととらえ、これを教育の基本に置きました。また、鶴を「三羽」にした理由については、二元論のような対立の図式ではなく、人の輪、平和の図式として基本数と考えました。人間の歴史的生活でみれば、祖先と自己と子孫、家庭についていえば夫婦と子ども、学園では保護者と園児・児童・生徒・学生と教職員、文子は、これら三者はいずれも欠くことのできない要素であり、それが調和するところに学園の真の発展が生まれると述べています。「三」という数字は、意義深い数であるので、「三羽の鶴」となりました。



●創立者 川村文子先生(昭和30年ごろ)



●三羽の鶴の図



●川村学園女子大学の徽章

## 学院旗(学園旗)

学院の発展とともに、種々の場面で多数の生徒が一団となって出かける機会が多くなったのを機に、院長の発案で昭和3年(1928)2月28日に制定されました。

高島屋で調製され、学院内での諸儀式、運動会その他の重要行事には、必ずその場に安置される慣例であり、対外的に学院として出席する場合にも必ずともないました。現在でも諸儀式や行事の場に置かれます。

## 感謝の歌

川村学園の教育理念を表すこの「感謝の歌」は、創立者川村文子により作歌作曲され、日々の朝礼、学園の諸行事において歌われているもので、この学園に関係する人びとにとっては忘れ得ぬものになっています。大正14年(1925)ごろのある清澄な朝、新築されたコンクリートの校舎(旧第一校舎)の屋上で、東の鬼子母神の方角から昇る朝日を拝めた文子は、湧きあふれる感激とともに

かしこしや この世守りて とこしへに

みいつも愛も かぎりあらじな

と歌を詠じました。「自然の偉大さ」「万物を育む太陽の力」の示す無限の恩恵を受ける人間としての感激、この世に生をうけた喜びと同時にそれに報いなければならないという文子の決意が込められています。昭和2年(1927)の春ごろから学園精神を表徴する歌として齊唱されるようになり、今日に及んでいます。学園にとっても重大な意義をもつ歌といえます。学園歌ではないが学園歌以上の重要さをもって、日々の朝礼、諸行事において、今まで歌い継がれています。

「私自身毎朝この歌を歌うことによって、その日一日の気持ちを整理いたしておりますし、職員や学生生徒も、朝礼におけるこの歌の齐唱によって、朝の気持ちをひきしめたり整えたりいたしているのであります。朝礼におけるこの感謝の歌の歌い方の中に、その時その時の学園の精神状態が表ると申してもよろしいと思うのです」と文子は述べています。

## 感謝の舞

創立者川村文子は「感謝の歌」の振付けを石井漠に依頼。昭和4年(1929)11月12日の運動会で初めて披露され、昭和35年(1960)より3人ずつ3組の9名の舞として、小学校から高校まで講堂での誕生祝や学園祭などに代表生徒が舞い、現在にいたっています。

## 学園歌

学園歌は、学園内から生まれるべきものであるとの川村文子の考えにより、歌詞は生徒から募集し、多くの作品のなかから高等女学科第5学年(4期生)の加藤昌子の詩が選ばされました。学院講師成田為三が作曲し、昭和9年(1934)5月5日の10周年記念式典で最初に歌われました。昭和2年(1927)2月17日から「感謝の歌」を校歌として扱っていたため、はじめは「第2校歌」ともいわれていましたが、現在は学園歌として、入学式・卒業式・始業式・終業式などの諸行事で歌われています。

## 学園歌の舞

「感謝の舞」同様、創立者川村文子が石井漠に依頼して学園歌に振付けした舞。昭和29年(1954)4月13日・14日の創立30周年記念で中学3年生と小学校4年生(当時最上級生)が舞いました。現在では、小学校のひなまつりや6年生を送る会で舞っています。

●「三羽の鶴」のマークを  
デザインした学園旗

学園歌

一 目白が丘の朝ぼらけ  
その紫のいろこみて  
ゆかしさにはふ  
学び舎は  
永久にさかゆる  
姿かも

二 直き心の吳竹や  
松のときはの色かへぬ  
ゆかりの鶴と  
しるしにて  
道ゆかん

三 高き理想の山仰ぎ  
慈愛の教守りつつ  
いやとこしへに  
さかえゆく  
我が学び舎を  
讀へなん

# 刊行にあたって

川村学園女子大学の創立25周年史を学園創立90周年の節目に当たる今年に刊行いたしますことは、誠にご同慶の至りに存じます。

学園の足跡を回顧するとき、歴史と伝統を築き営々と継承された諸先輩方の教育への真摯な姿勢と情熱に心から敬意を払うとともに、今日これを守りさらなる発展の努力を傾注されている教職員の皆様に、深甚なる感謝を申し上げます。

学園の創立につきましては、周知のことと存じますが、川村文子先生が当時女性に参政権も認められない時代に女性の地位向上、ひいては世界平和に貢献できる人材の育成という高遠な理想の下、大正13年(1924)に川村女学院を創設されました。

創立者は、教育理念の要諦として、「学問」「人格陶冶」をその双璧に挙げております。そして、この具現化におきましては、建学の精神として、「感謝の心」すなわち人間の純粹な心の發

露である大自然の摂理の恵みと厳しさに畏敬の念を持つ心、そして「女性の自覚」——眞の女性とはどうあるべきかを反省し自覚して自己を確立し責任ある行動をとる——、これらを身につけ女性の本分をわきまえ積極的に「社会への奉仕」を実践することが、川村教育の支柱に据えられました。この教育理念は、今日にいたるまで搖るぎないものとして学園の各校において一貫して堅持されております。

創立者の高邁な見識は、女性の高等教育の必要性にまでおよび、大学にいたる女子一貫教育の構想を描かれておりました。この夢の実現に当たりましては、前学長の川村澄子先生の英断により、今から四半世紀ほど前の昭和63年(1988)に、「北の鎌倉」と称され古代文化繁栄の地であり、また多くの文豪や文化人が居を構えた文化の薫り高い我孫子の地に、川村学園女子大学が呱々の声をあげました。爾来、本学は1万人を超える才媛を輩出し、社会貢献を果

たしております。この間、設置当初に一学部からスタートした本学は、社会ならびに時代の要請に応え、変遷を重ね、現在では大学院を擁する三学部九学科の文系女子総合大学に発展しております。

豊かな自然に包まれた大学の教育は、専門的学術の修得にとどまらず、原点回帰をキーワードに「こころ」の教育の浸透を図り、おおらかかつ人間力の涵養<sup>かんよう</sup>に努め、これを本学のアイデンティティと自認しております。

本学園における「こころ」の教育は、その基礎に当たる小学校で、入学の初日から「ありがとう」の言葉がもっとも大切な言葉として教えられています。「ありがとう」により表現される「感謝の心」は、自らも周りの人びとにも愛の心を育み、譲り合い・助け合いの心に繋がり、人と人との絆になるものと確信しております。

このたびは、テーマを学園最高学府の創設から現在にいたる過程をとりあげました。卒業

生をはじめ学園関係者の皆様には、広くご一読いただき往時を偲ばれるとともに、新しい伝統・文化づくりにご助言ご尽力を賜りたくお願ひいたします。

当年史編纂に携わられた編纂委員の皆様には、業務との兼務の大変ご多用にもかかわらず、立派に完成できましたことに対しまして、心から感謝申し上げます。

結びに、光輝ある歴史と伝統をふまえ、来る学園創立100周年に向けて、女性の特性を活かし健全で明るい社会づくりの原動力となる人材の育成に不易流行の運営方針で、教職員がベクトルを合わせ邁進する所存でございます。

川村学園女子大学学長・川村学園学園長  
**川村正澄**

# 歴代の学長・副学長

*The successive Presidents*



初代学長・名誉学園長

Kawamura Sumiko

川村澄子



第2代学長・学園長

Kawamura Masazumi

川村正澄

# *The successive Vice-presidents*

初代副学長  
*Okuda Shinjo*  
**奥田眞丈**



第2代副学長  
*Motoki Ken*  
**元木 健**



第3代副学長  
*Kawabata Kaori*  
**川端香男里**



第4代副学長  
*Okamura Yutaka*  
**岡村 豊**



第5代副学長  
*Kumagai Sonoko*  
**熊谷園子**



# 川村学園の創設

Kawamura Masazumi

川村正澄

大正12年(1923)9月1日、関東大震災が起こり、日本ではかつてなかったほどの大規模な被害をもたらしました。そのとき学園の創設者川村文子は48歳で、政府の高官をつとめられた夫・竹治に十分な内助の功を尽くし、6人の子を育てるきわめて一般的な良妻賢母であったといえます。そして震災当日は夫の任地であった中国・瀋陽に滞在中でした。ところが震災の報に接するや——幸い東京・目白の本宅に異常がなかったことは、ただちに知らされました——子どものためもあって、とるものもとりあえず帰国し、横浜からまだ復興も始まらぬ震災後の東京の瓦礫のなかを帰宅しました。たいへんな行動力といわねばなりません。

そうしてようやくたどり着いた本宅で皆の無事を確かめた翌朝、目白の丘から神田川を白い帆をあげていく舟が見えたそうです。同時に見渡すかぎりの惨状の跡の上に、太陽が燐々と昇るのを見て、心から畏れを感じたということです。感謝の歌の「畏<sup>さんさん</sup>こしや」には、そのような

創立者の思いが込められています。そのときこの災害の上にたちあがり、再建していくために、女性の力が必要であるという思いにかられ、女子の教育に献身することを決意したといいます。

いったん決意してからの行動力は並大抵のものではなく、目標を定めてからたった1年で川村学園の母体となる川村女学院本科つづいて高等女学科を発足させました。初めから、単なる良妻賢母教育ではなく、自覚をもって女性の役割を果たすという明確な教育理念のもとで開学しましたので、当時からたいへんユニークな教育をするということで、評判になっていたそうです。その後糾余曲折がありましたが、文子の理念に賛同された下田歌子、美濃部達吉、内藤湖南、石井漠、成田為三ら多くの著名人の協力を経て、今日の川村学園が築かれたといえます。

(平成25年9月25日の講演内容を抜粋)



創立者 川村文子先生の話をする川村正澄学長(3号館大講義室にて、平成25年9月)



●開学当時の大学全景(昭和63年)



●教育学部増設当時の大学全景(平成3年)



●現在の大学全景



## グローカリズム *Glocalism* —物事を考え行動するに当たって—

Okuda Shinji  
奥田眞支

私は昭和63年(1988)から平成10年(1998)3月まで川村学園女子大学に勤めた。その間のさまざまな想い出は尽きないが、いろいろと関係の皆様方にお世話になり、本当にありがとうございました。心からお礼を申し上げたい気持ちである。

私は“実践”を重視し、特に“教育は実践”をモットーとし、P(計画)—D(行動)—E(評価)—I(改善)をその在り方としてきた。この P—D—E—Iを考えるに当たって最近グローカルという言葉をよく使うようになった。これはグローバル(global)とローカル(local)からの造語である。周知のように今はグローバルばかりだが、昔は国際的といわれ、今は地

球的、近き未来は宇宙的となるかもしれない。別にグローバルに反対するものではないが、実践的に考えてみると、まず、自分はどうか、自分の周辺はどうかということも十分に慎重に考えなければならないことである。すなわちローカルな事柄は決して無視すべきではないであろう。あれこれ考えてみると、グローバルという言葉に酔い、流されてしまうのではなく、しっかりとローカルに根を下さねばならないこともたくさんあるのではないかと思う。

先般の大学審議会の答申でも、21世紀の大学は「課題解決能力」を身につけるようにしなければならないと提言しているが、これはまさにグローカルな視点に立つ必要があるということだと思う。

こんなわけで私は、“グローカリズム”を提唱したいのだが、如何だろうか、御批正をお願いしたい。

(『花時計』第5号、平成11年2月)

## 大学の未来

Kawabata Kaori  
川端香男里

21世紀を迎えるも一向に明るい展望が開けてきません。人はみなそのことを歎きますが、このような事態を招いたのが他ならぬ日本人であったということを、あまり反省していないように思われます。

高度成長神話のバブルに踊らされて、軽薄で物事をじっくり考えないわゆる「能天氣」な雰囲気が世を覆いました。日本の未来を支えるべき教育の場の荒廃にも目を覆う惨状がいたるところに見られます。

学力の低下もどん底にきているのに「ゆとり教育」という方針が打ち出される始末です。文科省の英文ホームページによると、ゆとり教育とは〈a liberal, flexible and comfortable school life〉だそうで、これは何も言っていないのに等しく、

能天氣な話であります。

このような状況で数々の改革の段取りをつけてくださった元木健先生の後を受けて副学長に任命されましたが、平成16年度に照準を合わせた諸改革を実行することが私に課せられた任務であります。

立教大学はリベラルアーツの立場に立つ「全学共通カリキュラム」というすばらしい改革を成し遂げましたが、その改革記録の中に「建学の精神に戻って改革の方向が見えた」という一節がありました。

川村学園には女子教育についてのすばらしい建学の理念があります。21世紀は女性があらゆる領域で、社会においても家庭においてもかつて歴史に例をみないほどに重要な役割を果たす時代であります。このような展望に立って、川村学園女子大学は21世紀の撥刺とした女性の行き方を提示します。そのための教育・研究を中心にはじめた新しい大学像を構築し、広く世に訴えたいと思っております。

(『花時計』第12号、平成14年7月)

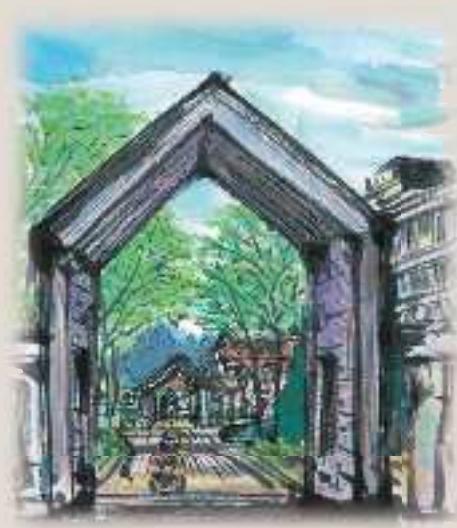


●雪原に舞う三羽の鶴



●川村文子先生の描かれた三色すみれ

- 1 学園歌
- 2 徽章(校章)／学院旗(学園旗)
- 3 感謝の歌／感謝の舞／学園歌／学園歌の舞
- 4 刊行にあたって——川村正澄
- 6 歴代の学長・副学長
- 8 川村学園の創設——川村正澄
- 9 大学全景(開学当時・教育学部増設当時)
- 10 大学全景(現在)
- 12 *column* グローカリズム——奥田眞丈  
*column* 大学の未来——川端香男里



第 | 1 | 章

川村学園の創立者

- 19 川村文子とその思想  
〈女性の自覚〉と〈感謝の心〉
- 20 川村文子の半生——翠川文子
- 21 川村文子の故郷と家系・家族
- 22 父の敷いた道
- 24 上京後の文子
- 27 川村女学院の出発——西川 誠
- 28 近代日本の女子教育——大正期までの概観
- 29 川村文子の理想
- 33 特色あるカリキュラム

第 | 2 | 章

## 37 川村学園女子大学の誕生

大勢の人の情熱の結晶として

- 38 大学の発足と今日——熊谷園子  
準備室(学園事務局大学設立準備室)
- 41 大学の運営
- 46 今日の大学
- 49 入学式(第一回)式辞——川村澄子
- 51 卒業式(第一回)式辞——川村澄子
- 52 *column* 原点・回帰——川村正澄
- 53 *column* バーナード・リーチと柳宗悦——中村恭子
- 54 大学の教育を考える——元木 健  
建学の精神とアイデンティティ
- 55 大学教育の改善について
- 57 *column* 一般教育を担当して——市川比良久

- 58 川村学園女子大学図書館の変遷
- 60 *column* 読書論——石川 宏
- 61 *column* 本の楽しみ——尾藤正英
- 62 *column* インタビュー 今、問われる女子大学の役割とは——豊田三郎  
川村学園女子大学の設立時をふりかえって

## 第13章

### 65 学部・学科のあゆみ

活力あふれる我孫子キャンパス

#### 66 文学部

大学は文学部からスタートした  
一学部での発足／三学部体制のなかで／時代の波を越えて

##### 68 国際英語学科

英語でものを考え、プレゼン力を養う

- 72 *column* 研究余滴——黒川樟枝

- 73 *column* つながる絆——田中淑子

##### 74 史学科

錚々たる教授を迎えて誕生、歴史体験をとおして学ぶ

- 78 *column* マンキーパッドの態度——松井 透

- 79 *column* アジアの文学を読もう——佐伯有一

##### 80 心理学科

「心って何だろう?」から始まり、高度な知識と技能の修得をめざす

- 84 *column* 校風は、優しさ・気配り・素直——浅井義弘

- 85 *column* トルコの図書館今昔——松井 洋

##### 86 日本文化学科

特色ある切り口で日本文化を見直す

- 90 *column* 利根川の夕映え——中村恭子

- 91 *column* 私の留学生活——陳 浩瑜

#### 92 教育学部

新たな大学教育の道を開く  
設立の経緯／設立期の学部の体制

##### 94 幼児教育学科

バラエティーに富んだ学習から学ぶ

- 98 *column* 創設25年によせて——塚脇澄子

- 99 *column* 幼児教育学科の思い出——小松省三

*column* 中澤和子先生のこと——西村和子

##### 100 児童教育学科

「川村らしさ」を備えた教員の養成をめざして

- 104 *column* 児童教育学科の発足——岡村 豊

- 105 *column* 伸び代のある学生たち——上橋菜穂子

##### 106 社会教育学科

「みんなの学び」と「みんなの幸せ」

- 110 *column* 若ものとボランティア活動——岡本包治

- column 充実した歳月を思う——北村浩一郎
- 111 column ジョンの魂——西川将巳
- 112 **情報コミュニケーション学科(情報教育学科)**  
時代の先端をいく施設と設備のなかで
- 116 column 情報教育学科の誕生——古藤泰弘  
column 美しいキャンパスをふり返って——青木道彦
- 117 column 教育の本質の場——本村猛能

## 118 **生活創造学部(人間文化学部)**

新時代の「人間文化」を創造する  
はじまりは人間文化学部から／切り口は「日本・観光・生活」、キーワードは「人間・ジェンダー・文化」／さらなる変化を重ねて

### 120 **生活文化学科(生活環境学科)**

社会に貢献する栄養士を育成する

- 124 column 学科創設のころ——富田昌志  
125 column 短期大学から4年制の生活文化学科へ——永吉道子  
column 生命の尊厳と健康——坂口武洋

### 126 **観光文化学科**

実体験や地域との連携などをとおして学ぶ

## 132 **大学院**

独創性豊かな「知」の新地平を切り拓く  
**人文科学研究科**

- 133 心理学専攻  
教育学専攻  
134 比較文化専攻

column 若桑みどり先生への想い——池川玲子



## 137 **学内外の活動**

“川村”の気風を背負って

### 138 **課外活動 明るく、楽しく、一生懸命に**

- SAセンターとSA  
139 ツヴァイディメンショナル  
ハンドベル部  
140 ブラスバンド部  
141 ラクロス部  
142 わく♪ボラたんぽぽ  
143 華道部  
茶道部  
144 美術部  
145 歴史考古学研究会

### 146 **大学行事 こころに残る思い出を刻む**

オリエンテーション・キャンプ

(学生コラム) 行きは「しぶしぶ」、帰りは「るんるん」

### 148 **学園祭(鶴雅祭)**

- 学生コラム** “鶴雅祭(つるがさい)”の誕生
- 150 **体育祭(スポーツディ)**  
**学生コラム** 堂々と、ほのぼのと——綱引き対決
- 152 **研修・実習** かけがえのない貴重な体験  
海外研修  
154 教育実習(中学校・高等学校)  
155 博物館実習
- 156 **研究所・センター** 建学の精神を生かしながら  
女性学研究所  
157 **column** 川村学園女子大学女性学研究所の紹介——若桑みどり  
158 心理相談センター  
159 子ども学研究所／比較文化研究センター／国際日本学研究所  
**column** 国際日本学研究所の活動——川端香男里
- 160 **地域貢献・社会貢献** 大学の使命として  
161 **column** 大震災から学んだこと——斎藤哲郎
- 163 **川村学園女子大学附属保育園** 大学との連携をとおして

## 第15章

### 165 卒業生からのメッセージ 生き生きと輝いて

- 166 一書との出会いが転機に——菅原淳子  
母親としても研究者としても輝いていたい——菊池(旧阿部)百里子
- 167 **学生コラム** 美女の埴輪—私の発掘体験記  
大学時代の友人を大切に——霜村(旧松濤)春菜
- 168 学園での生活が今を支える——青木絢子  
たくさんのお喋りが仕事に役立っている——小田原幸  
先生や両親は自分たちの味方——金澤瑞穂
- 169 私の夢と人生は——佐々木政子  
笑顔と挨拶を大切に——小林清華
- 170 幼稚園教諭になって——岡田安代  
「自分のやりたいことをやりなさい」の一言——吉川千晶
- 171 子どもたちの輝く瞳——諸角 舞  
「自然の家で働きたい」との思い——友松由美
- 172 大学時代に学んだことを生かす——崎野綾子  
仕事のやりがい——山谷晴香  
「伝える力」——石坂麻美
- 173 コミュニケーションの大切さ——飯田(旧白井)真澄  
毎日の給食——岩戸仁美
- 174 会津の良さを伝えたい——増井千紗  
大学院時代を思い出し、今を生きる——伊藤弘美

- 176 **付録**(参考資料)
- 177 **川村学園90年のあゆみ(学園暦)**
- 186 **本大学の教育研究組織の変遷**
- 188 **我孫子市の史跡・名所案内**



第

1

章

川村学園  
の  
創立者

# 川村文子 と その思想

---

〈女性の自覚〉と〈感謝の心〉

# 川村文子の半生

Midorikawa Humiko

翠川文子

川村文子は、昭和26年(1951)5月、藍綬褒章を受けました。教育に対するすぐれた業績に対してです。文子、75歳のときでした。この記念に文子の肖像画を依頼された洋画家 笹鹿彪(明治34~昭和52年〈1901~77〉。日展参与)が、思い出を『紫雲』に寄せています。このなかには理想的なモデルであった文子の様子が記されていますが、そのおり「私のパレットを御覧になり、その絵具の配列の美しさに大変関心をよせられ、絵具の購入と共にその取扱いの手ほどきを致す事になった」といいます。晩年の文子が油絵に親しむようになったきっかけです。笹鹿は、油絵に取り組む文子を次のように述べています。

楓の若木を鉢植にして林に見立てられたり、庭樹いじりの其の片鱗にも自然の美に対する情操の深さ感受性は、人一倍強くあらわれた事と思います。其の上絵筆を並べて使用するのに大変便利な用具などを、いつの間にか思い付きになると云うような、理性的な合理性と、美しい情操と、どこ迄も探求される根強い研究心とが、こんな些少な面にも良く現われていると思いました。何か心の中にあるものを表現しようと、無闇と絵具を塗りつけて苦心されておる事もありました。雲の表現はどんな具合にしたものかと、よく質問されましたが、園長先生の心の中に描かれている雲は、仲々我々が想像もつかない世界と思わせるようでした。……人間的な種々の試練を経られて、ある瞬間に人間本来の姿、天地宇宙の大器に溶け合う境地に達せられた……瞬間の美しさを、再現しようと苦心されていたようです。こうした余りにも精神的な境地は、説明的に表わせるものではなく、仲々困難な事で、抽象的な試みとでも申しましょうか、何かにひかれたようにこの難



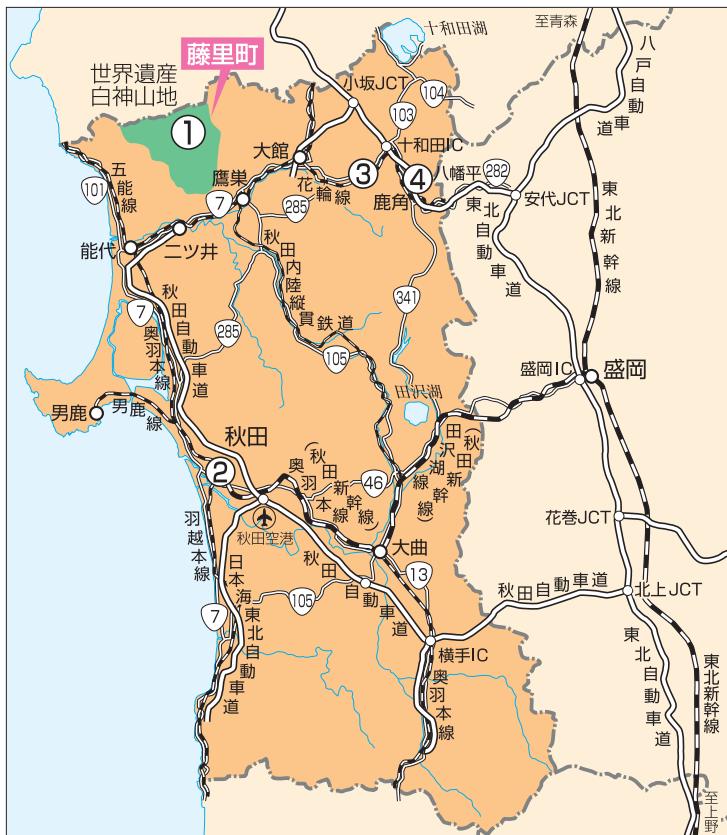
● 笹鹿彪氏による川村文子先生の肖像画と藍綬褒章の記(昭和26年)



● 藍綬褒章の記を横にして、小学校14期1年生を囲んでの文子先生(昭和26年5月)

しい表現に熱中されましたが、ついに未完成で御満足なさらなかつたようでした。(『紫雲』562頁。引用文は誤記誤植を一部訂正。以下も同じ)文子は、笹鹿の指導を受けつつ、雲

以外では絵筆が対象をつかんだと感じるときをもつようになったようです。数年後、そんな絵を文子は皇后陛下に献上しました。ここに記された笹鹿の評と油絵史上のこととは、文子の性格の一端



●旧太良鉱山村付近の太良峡の風景

#### ●秋田県の文子関係の地

- ①誕生から11歳まで居住
- ②11歳から19歳まで居住
- ③父の故郷
- ④夫の故郷

を、文子を知らない私たちに伝えてくれます。また、文子が生きてきた道に、いつも彼方の高みにあった雲の存在とそのイメージをうかがうことができます。

こういう文子を形づくった父母とのかかわりや経験を紹介し、文子を知る手がかりとしてもらいたいと思います。

## 川村文子の故郷と家系・家族

### 地図からみる文子の故郷

まず、上の地図をご覧ください。地図中の①は、文子(旧姓武田文子)が誕生から11歳までいた地です。秋田県山本郡太良鉱山村(現、藤里町)で、世界遺産白神山地の南東、太良峡を少し下ったところにあった主に鉛を産出した鉱山の村です。

地図の②は、文子が11歳から19歳の9月に上京するまで住んだ地です。南秋田郡東根子屋町(明治22年<1889>市制施行とともに秋田市)といい、秋田駅から秋田城の南側につづく町です。現在の町名は、秋田市中通といいます。江戸時代には、家格の高い武家の屋敷があったところです。明治19年(1886)、この13・14番地に土地家屋を購入した

ということは、明治維新後の武田家が裕福であったことを示しています。また、秋田を代表する名士の多くとご近所になったこともあります。城側には、藩校明徳館と父三祐の学んだ付設の医学館がありました。藩校は戊辰戦争(明治元~2年)のさいの奥羽鎮撫軍九条総督の宿舎になり、その後、県庁や教員養成施設がおかされました。文子の通った師範学校の附属小学校も、尋常師範学科もここにありました。

地図の③は、父三祐の故郷です。北秋田郡十二所町(昭和30年<1955>大館市に合併)といい、ここは、盛岡藩と藩境を接し、戊辰戦争でも戦場となりました。武田氏は、17世紀後半よりこの地に居住し、父三祐より5代前以来ずっと医師としてやってきました。三祐の家は、町の中心から少し離れた米代川に面した中嶋丁にありました。文子の姉金は明治3年(1870)、兄三喜は、その2年あまりのちにここで生まれました。

地図の④は、文子の夫竹治の故郷です。鹿角郡花輪村(現、鹿角市花輪)といい、江戸時代は盛岡藩領でした。秋田藩と境を接するため、南部家御三家の一つ花輪南部(中野)氏が守備の任に当たっていました。明治4年(1871)11月、

秋田県に組み入れられました。竹治の誕生から3ヵ月あまりのことです。夫竹治の祖父は、中野氏の家老でした。

### 家系と家族

父方の武田家は、先ほどもふれましたが、武田三秀 - 三益 - 三省 = 三伯 - 三祐とつづく直系(=は養子)は、いずれも医師でした。三秀以下3代は、京都の古学派伊藤仁斎・東涯・東所に儒学を学び儒医として名を残しています。三益は、十二所守備役の茂木氏の疾病治療に効があったことから、医師として取り立てられ、以来子孫も代々茂木氏の医師の一人でした。三祐の父三伯は、阿仁銀山・三枚鉱山に家族を連れ赴任しており、鉱山医師としての任務も課せられていたことが知られています。

母方をみてみましょう。母清(キヨとも表記)の祖父江幡木鶴は、大館生まれの漢学者で、国学者の平田篤胤とも交流がありました。易学に通じ、当時易学の最高峰といわれた根本通明(明治天皇に易学を進講)をも賛嘆させたといわれていますが、このほか天文学・数理学にも通じていたといいます。母清の外祖父工藤亀五郎(明治8年<1875>没)は、如月庵・東山と号していたことから、

学者であった可能性もありますが、事績は明らかでありません。文子は、母の生前の願いを受けて、昭和6年(1931)に東山の墓を立派に改めました。墓石の戒名は「隆徳院如月庵東山紫雲居士」とあります。この「紫雲」は、紫雲を好んだという文子の思いを反映して加えたものか、「紫雲」の戒名が先にあったか明らかにできませんが、この墓誌改作のときと、文子が女学院で「紫雲」を使い始めたこととは密接な関係があると思われます(『川村学園70年のあゆみ』166頁「紫雲」参照)。

父三祐のことについて話をもどします。武田三祐(天保8~大正3(1837~1914))は、秋田藩校付設の医学館に学び、18歳で本科治療試験に及第しました。そして医術開業の免許を得、翌年には産科医術試験にも及第しました。医学館の事務職勤務のあと、22歳で、准藩医として1年間、北海道増毛にあった秋田藩の北方警衛の陣屋に勤務したのち十二所にもどりました。戊辰戦争には、茂木氏に従い出陣し、官軍の鎮撫使のもとで軍事御用係を勤めました。その後の明治維新・廃藩置県とつづく変革のなかで、武田家は医師で生計の道があったことと、代々の蓄財と運用で生活の維持に困難はなかったようです。

三祐は、太良鉱山村に医師として単身赴任した明治6年(1873)以来、日々の記録をもとに内容別の綴りを作っています。理性的な合理性をもつと評される文子の資質は、父にさかのほるものなのです。中心は日記ですが、これは32年間のうち31冊が現存しています。ほかに「音信及薬価記載」1冊、「資産貨殖簿」1冊、「毎月会計統計表」3冊、「学資金及諸費」1冊、「徳在積善」と記した貸金入金記録1冊が現存しています(川村学園蔵)。「徳在積善」(人の器は善い行いを重ねることによって磨かれる。または先祖の善行は子孫に幸福をもたらすの意味で用いているか)は、日記の表紙にもみえ、三祐の生活信条であったようです。貸金での利殖も行っていた三祐の自戒であったのです。生活は質素を保ちながら病院建設や災害被災へ多くの寄付を行っていたことも、この信条と結びつ

きます。

三祐は、明治24年(1891)、「秋田社取締員トナル」と記していますが、秋田社は、秋田改良社(平賀銀行の前身)のことと思われます。東京に出た文子に下宿先の谷田部順子が、「お父上は大金持ちだから百円二百円の金はいつでもくださいさるでしょうからもっと着物を揃えたらどうか」といったのも、父の仕事を知っていたからです。順子に着物を借りることのあった文子は、父の生活信条をいうにいえず言葉を濁したと、父への手紙に記しています。ただし、このことを前文にして、結婚のことが動き出していたときでしたから、挨拶まわり、写真などに必要な紋付をはじめとする入用の着物を低姿勢に依頼しています。この父の質素の精神は、後年、実践目標の一つとして女学校に受け継がれ、現在にいたっています。

文子の兄弟は、同母姉の金と同母兄の三喜、異母弟の三郎です。姉の金は、病院長夫人でした。兄の三喜は、秋田中学校から東京の成城学校に編入して卒業し、陸軍士官学校をへて陸軍軍人となりました。還暦の父から家督を譲られたのは24歳のときです。日露戦争に近衛師団騎兵大尉として従軍しましたが、中国の地で病没しました。31歳でした。

文子が12歳のとき、父母は離婚し、5ヵ月後に父は黒沢千代と再婚しました。文子の思いは不明ですが、父母の人生と自分の人生とを混同することなく、後に掲げた手紙にみると、繼母への礼を失うことはありませんでした。また文子の父への手紙には、15歳あまり年下の異母弟の三郎をかわいがる気持ちがよくうかがえます。

## 父の敷いた道

### 太良鉱山村の日々

文子は、秋田県山本郡太良鉱山村で、父武田三祐・母清の次女として、明治8年(1875)11月20日に誕生しました。父38歳、母32歳のときでした。父は、この日の日記に「廿日〔20日〕午後十一時お清安産 次女文子誕生」と記しています。

す。家族は、父三祐、母清のほか、祖父三伯、祖母常、姉金、兄三喜、叔父夫婦です。ほかに家族の一員として男子2名(一人は養子と記す)がいたようですが、いずれも20歳と20歳前に武田家を離れています。どのような立場の人であったかは不明です。一番幼かった文子は、多くの人に見守られ11歳までこの地で過ごしたのです。

文子が誕生した年の村の鉱山従業員は546人で、従業員以外の老人妻子を加えれば、相当数の人口が一ヵ所にまとまつた大きな集落でした。文子誕生の30年ほど前の村の絵図によれば、支配人の居宅が集落のほぼ中央部に柵に囲まれてあり、その正面と西側に精鍊などの生産部門、東側に108段の石段のある山神社がありました。この神社は今から30年ほど前に解体され、石段も道路造成のため下部三分の一は失われています。神社は土地の守り神で、毎月1日・15日に神事がありました。鉱山では仏を忌む風習があり、冠婚葬祭はみな神道の儀式によったといいます。三祐の父の葬儀も神式でした。幼い文子の神についての原体験が、この石段の上から眺める夕日と、祖母・母から聞く、見えないけれども天地間に存在するものへの畏敬だった可能性もあるのではないかでしょうか。母は毎日お日様を長い時間礼拝した人といいます(後述)。後年、新



●14歳ごろの文子(右)と兄の三喜(中)、姉の金(左)(明治22年ごろ)

築されたコンクリートの新校舎の屋上から、東の鬼子母神の森にのぼる朝日を見て、「感謝の歌」を詠んだという原点は、ここであったかもしれません。最初の雲の思い出の地でもあるでしょう。

神社の南東に、閉山後最後の卒業生を出した小学校がありました。昭和33年(1958)の大水害のあと鉱山が閉山となり、数年後には住む人のいなくなつた村は、林業関係者だけが立ち入る土地となり、植林地となった小学校跡は、森林に覆い尽くされてしまっています。

「極く幼年の頃の或晩のことござい

ました。母から早く寝るやうにせきたてられるのを待つていたとして、一生懸命に人形の着物を作りました。やがて其人形の着物が面白く出来あがりました時の、母のよろこびは私以上であります」(川村女学院の機関誌『とこしへ』第5号)。太良での思い出の一ここまでです。母のいくつしみのまなざしと、母に心をゆだねられる幼時の温かい思い出が伝わってきます。

### 学歴と職歴

父三祐は、十二所の私塾で学んだの

ち、16歳で秋田の医学館に入りました。次男でしたから、医師として別に一家を立てるため、医学の実力をつけて就職に必要な人脈づくりにも心を碎いたことが、「武田家系図」に三祐が記した記録からうかがわれます。そのかいがあって、准藩医として増毛に派遣されたのですが、帰郷後まもなく兄が亡くなり、家を継ぐことになりました。文久2年(1862)のことです。やがて藩が消滅して藩医の道が夢に終わったとき、三祐は、家産を運用することと子供たちの教育と将来に夢を託す生き方を選択したのです。

ここで、文子の学歴と職歴を整理してみてみますと、次のとおりです。

#### [太良鉱山村時代]

明治14年(1881) 10月 (5歳)

#### [秋田市東根小屋町時代]

明治20年(1887) 1月 (11歳)

明治22年(1889) 3月 (13歳)

明治24年(1891) 4月 (15歳)

明治27年(1894) 3月 (18歳)

3月26日付小学校本科正教員免許取得

4月 (18歳) 土崎小学校に赴任

7月 (18歳) 保戸野尋常小学校に異動

明治28年(1895) 11月 (19歳)

#### [上京後]

明治28年(1895) 9月 (19歳)

明治29年(1896) 4月 (20歳)

明治30年(1897) 3月 (21歳)

太良小学校入学(初等小学科)

秋田尋常師範学校附属小学校へ転校し高等科2年級へ編入

高等科卒業

南秋田郡長撰挙生として秋田尋常師範学校入学。家を離れ寄宿舎生活

卒業(同級生9人の首席)

休職許可 (以上、秋田県公文書館蔵書類による)

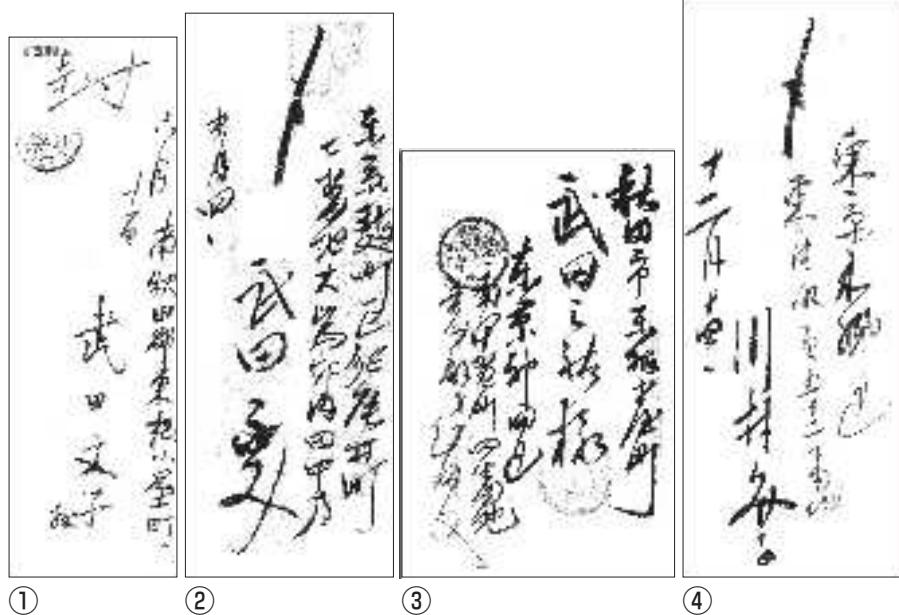
明治女学校へ

明治女学校普通科卒業。同級生15人

国文学会卒業

藤里町によれば、太良に学校ができたのは明治14年(1881)で、74名の生徒がいたといいます。文子入学の年です。しかし、姉兄が明治10年・12年に太良学校へ入学していること(武田氏系図)、三祐が明治11年に「太良校修理費献金願」を記し12年学校へ10円を献納したこと、三祐が明治12~14年学務委員で「学務委員中之日記」があることなどからみて、太良の学校は、記録より4年前にすでに開設されていたのです。その推進役が三祐であったことは明らかです。何らかの事情で公的記録が残されていないのでしょうか。

三祐を太良に残し、4ヵ月ばかり先に秋田に転居した文子への教育は、手紙を通じて行われました。右に掲げた手紙の①など文子の手紙は2通現存して



①文子の父への封書と葉書

①太良鉱山の父へ(11歳)

②上京翌日の便り(19歳)

③谷田部一家とともに転居の報告(20歳)

④新婚最初の便り(22歳)

います。同時期の兄(14歳)の手紙もあり、中学校受験のために毎日3カ所の塾をかけもちしていること、人との交際を父の教えのようにさらに大事にすることが記されていて、文子への教育も類推できます。

三祐が、娘二人を師範学校に進ませたのは、最高の教育を受けさせるためでした。姉は、同業の医師の妻として家庭に入らせましたが、文子には伴侶の選択の幅を広げさせようと考えたようです。銀行に関係していたから、政財界が念頭にあったのでしょうか。三祐は、地元の新聞だけでなく、東京から新聞・雑誌を取り寄せていました。鹿鳴館の慈善バザーや大日本婦人衛生会の役員のように、皇族・華族以下政財界など上流階級の夫人たちが、夫とは別にさまざまな役割を果たすことや、女性の社会進出が伝えられていた時代です。こういう新時代に対応できる娘としての期待が、教員生活をわずかで切り上げ上京に踏み切った文子の後押しをすることになりました。文子が「休職の上ゆる——上京致したる方がよかりけりと今更口惜く存申候」というように、この性急な上京は事後処理に3カ月ほどかかりことになりました。これは、後年、学校経営に当たって思い立ったことを次々実現させていった文子の行動力が、最初に確認されるできごとです。

前ページの手紙の②は、兄に付き添われて上京した文子が、数カ月下宿することになった家からの封書です。「大島邸内田中方」とある大島<sup>おおしま</sup>は、父三祐の故郷十二所(地図の③)で明治維新後廢藩まで郷長であった秋田藩士大島久徴の息子久直のことです。久直は、このとき日清戦争に第六旅団長として出征中で、田中も同郷人でしょう。大島は、帰国後男爵となり家政も拡大したことから、転居することになりました。文子が上京してから数カ月後のことです。このとき、文子父子は、軍人の家から離れ、教育者谷田部梅吉の家に世話をすることを選びました。

手紙の③の、「谷田部方」とある谷田部は、十二所で父三祐が8歳から学んだ私塾の先生の孫梅吉です。秋田県初

の理学士で、東京物理講習所(のち東京理科大学)創立者の一人として所長を勤めて以来、教員・役人として種々の激務をこなし、このとき39歳で京都商業校長でした。妹の順子は東京女子高等師範学校教授で、兄の留守宅を預かっていました。翌明治30年(1897)、年頭の三祐への挨拶状には、「ふみ子様にも変らせ給ふ事なく御勉学あらせられ居候間決して御案事被下間敷候」と伝えています。

文子の教育と夢に父三祐の夢と人脈が大きくかかわっていたのです。

## 上京後の文子

### 明治女学校と結婚前の日々

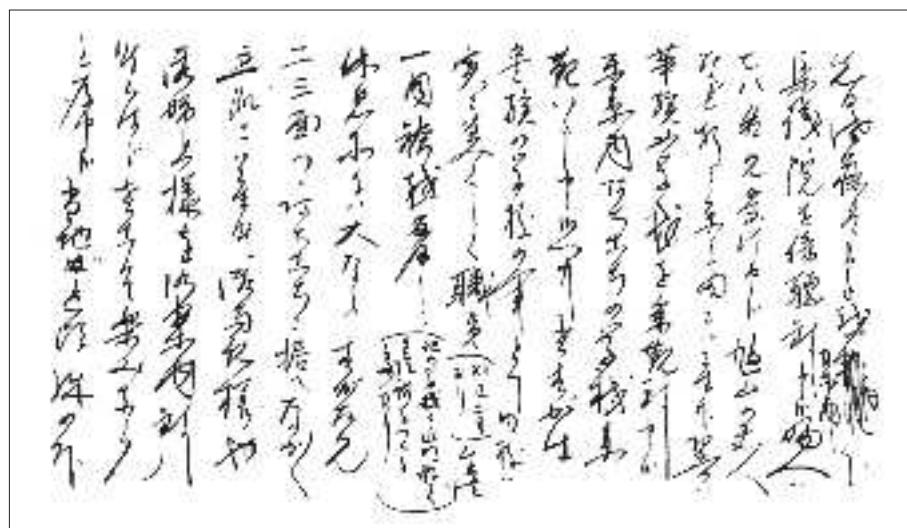
文子は上京後10日ほどで、紹介の青柳氏(秋田出身。同志社を卒業し9月から女学校の新任英語教師)を介して巖本善治校長に会い、明治女学校(学校は現在の千代田区六番町にあった)に通学を始めました。退職のことの決着がつくまで待てという父三祐の制止をふりきつてのことでしたから、事情を話しがつくりまでは「殊別生」、つまり特別聴講生のような立場でした。しかし、通学1週間後の次の手紙の内容からは、他の生徒と変わらない学校生活がうかがわれます。

私の修むる処の学科ハ、英学(読本・文章・会話等)、漢学・和学文章等にて、英学教師ハ外国人もあり、漢学にハ池田蘆洲、和学にハ

大和田建樹先生にて、追々女礼も修学し、裁縫も内〔家〕なり学校なりに於てかなりの練習致さん心掛に御座候。前申上候三学科共に自修する処多くして、先生にハ只質問位にとまり候故、誠にいそがわしく、学校に行くも帰るもわき見する暇もなき有様に御座候。

通学を始めて4カ月後、女学校の校舎が類焼するという災難に遭遇しましたが、10日あまり後に焼け残った校舎で授業は再開され、文子は4月に卒業となりました。上京からわずか7カ月後に卒業となったのは、文子が師範学校を卒業していて学力能力ともに申し分なかったからでしょう。卒業後、文子は高等科に進まず、国文学会という詳細の不明な、学則にはみえない会に1年間所属しています。これは、このころすでに川村竹治との出会いがあり、将来を考えようになっていたためと思われます。しかし教科書より、実際の社会の動向に关心があったという理由のほうが大きいのではないかとみられます。そのことは次にあげる明治女学校卒業後の文子の手紙(下の図)にうかがうことができます。

先日佐藤そよ子を案内して集議院〔衆議院〕を傍聴致し申候。婦人ハ七、八名見受け申候。鳩山の夫人など折々参る由ニ御座候。翌日ハ華族女学校を参観致し申候。東京内あちこちの学校参観いたし申候へ共、さすがは貴族の学校の事とて、同校ハ実ニ美くしく、職員(知



●文子21歳のときの父への手紙(部分)(明治30年3月)

己三名あり)・生徒一同袴を着し(他の学校も近頃教員生徒袴をつくる処あり)、休息所にハ大なるすがた見二三面つゝあちこちニ据へ、なか～立派ニ御座候。御両親様や御姉上様を御案内致し候らば、さこそ樂みならんと存申候。〔鳩山の夫人は當時衆議院議長だった鳩山和夫の夫人春子。共立女子職業学校創立〕

この文面からは、政治・社会の動向に关心をもつ一家であること、のちの文子の学校経営につながる关心があったこと、文子が父の人脈以外の人脈をつくりていたことなどを読みとることができます。のち川村女学院では、1期の5年生が社会見学の一環として、卒業前に開会中の貴族院を見学し、以後おそらく開戦前まで恒例行事となっていたのも、この傍聴が発端となっているのでしょうか。文子が、5期生の某女に、社会的に活躍する人の伴侶となるにふさわしい見識と教養をもつ人物を育てるのが女学校創立の目的と語ったといいますが、社会のさまざまな動向に目を向けていた文子の日常がうかがえる手紙です。

## 障害を乗り越えての結婚

この手紙の前半には、川村竹治との結婚に関する初めての会合がもたれたことが記されています。武田家の家督を譲られ当主となった兄三喜が、川村父子と媒酌人を招待し、文子の下宿先の谷田部順子も同席し、秋田の父三祐一家の写真も披露されたといいます。この結婚を当初父三祐は強く反対していたと伝えられています。三祐と竹治の祖父・父が戊辰戦争で敵味方となっていたこと、三祐の故郷が戦火により多大の被害をこうむったことがその理由と推察できます。しかし、この反対について書かれたはずの手紙類はすべて破棄され(約1カ月間の手紙がない)、明治29年(1896)の日記ものちに修正されて一部だけが2年後の日記と合冊されています。ただ入籍に使用した文子の戸籍が文子単独の戸籍になっていることだけが、父の最初の反対の意志の強さを今に伝えています。父のこの性急な行動は、竹治・文

子のまわりの多くの人びとの援護によって、やがて撤回されることになりました。

川村竹治は、文子より4歳年上です。川村家は、明治2年(1869)、藩から離れ生業自由とされました。生活はしだいに困窮の度を増しました。竹治について友人は、「色の青い小さな子供であった。よく破れ袴をはいて大きな本をかゝえて歩ひて居たっけが、学校の成績は外の人と比べると丸切り別物だった」(『花輪青年』)といいます。小学校卒業後は、教員手伝いとして働くとともに英語・漢学の勉強をしましたが、一家は、将来の見込みの立たない生活でしたから、竹治の将来に希望を託し上京しました。明治21年(1888)、竹治16歳のときでした。その後の苦労を「阿父さん〔竹治の父〕は区役処〔所〕の前に代書に出るし、妹さん達は夜の目も寝ずに製本の内職をやるし、Kサン〔川村竹治〕も学校の余暇に翻訳をやったり私立学校〔郁文館中学校〕の先生をやったり、一家総掛りで奮闘生活をやったものさ、大学を出た時に丁度行き合せたが、大きな卒業証書を押し戴いて阿父さんの喜び様といったら恐らくKサンが大臣になってアノ時程喜ぶまい」(『花輪青年』)と友人はいいます。また、この間、父俊治とともに私塾(興文塾。興文学舎とも)を開き英語・漢文・数学を教えていたという。後年の学校設立(川村学院中学校。男子校)(『川村学園70年のあゆみ』62・161頁参照)の萌芽は、若年の竹治にもあったのです。それゆえ後年の文子の学校経営にとって、理解のある得がたい協力者であったのです。

## 結婚とその後

竹治が東京帝国大学を卒業した3日後の明治30年(1897)7月13日、文子の父三祐が上京して結婚の式が行われました。文子が、川村家に入ったのは、4カ月あまりとの11月末で、竹治の文官高等試験受験のことです。前に掲げた手紙の④は、さらに2週間後のもので、川村姓の最初の手紙になります。竹治の母は、このときすでに亡くなっていましたので、竹治の父俊治と二人の妹との同居生活でした。竹治は、試験に合



川村竹治・文子夫妻(明治33年4月)

格しキャリア官僚の道を歩み始めますが、地方へ出るまでの3年間は、妹二人の結婚や父俊治の湯治などで家計は苦しく、年末の慰労金で息をつくという状況でした。

竹治は、通信省のキャリアとして多度津(香川県)・長崎・横浜・神戸・大阪の郵便局長を勤め、この間、イタリアでの万国郵便會議に委員としての出席もありました。36歳で内務省に移ってからは、台湾総督府内務局長・和歌山県知事・香川県知事・青森県知事・内務省警保局長を歴任しました。50歳で貴族院議員に任命され、新憲法発布まで25年勤続で表彰を受けました。51歳で南満州鉄道株式会社(満鉄)の社長になり、翌年関東大震災に遭遇しました。56歳で台湾総督、60歳で犬養毅内閣の司法大臣に任命されましたが、五・一五事件のため辞任しました。

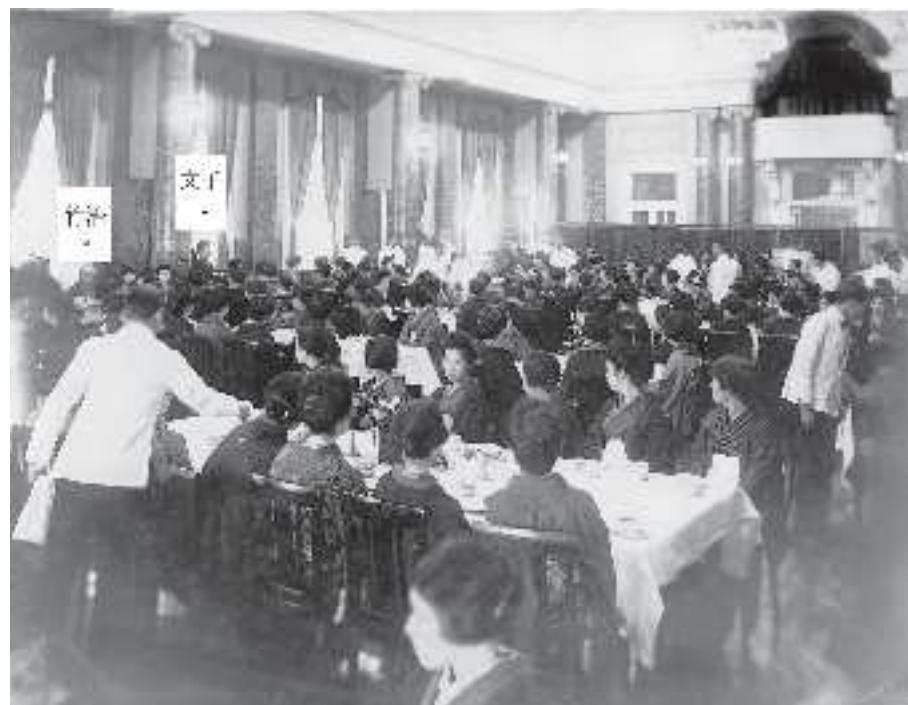
文子は、この間、二男四女を育てながら、官僚・政治家の伴侶としてのさまざまな活動も行うのですが、ここで二つの例を紹介しましょう。

一つは、台湾総督夫人として行った「台湾お茶の会」です。これは竹治が推進しようとしていた台湾の工業化政策を理解してもらい、資金調達に役立てようとしたもので、政財界人の夫人1200人に案内状を送付したといいます。次ページの写真は当日の会場の様子です。

もう一つは、郵便局長夫人・知事夫人の公務、日本赤十字社篤志看護婦人会の支会幹事・支会長の仕事です。下の図は、その委嘱状です。篤志看護婦人会は、皇族妃を総裁とする華族や政財界人の夫人たちの組織で、奉仕活動もありましたが、看護婦養成の普及のための活動を行いました。医師の娘である文子にとって身近な活動といえるでしょう。篤志会での経験が、女学校創立後、社会奉仕を重視する面に生かされたといえます(『川村学園70年のあゆみ』173頁「奉仕」参照)。また健康に対する施策も、幼少時病人に接する機会のあった文子ならではのものでしょう(同書164頁「健康手帳」後半参照)。

このようにみてくると、文子の人生に父が大きくかかわっていたことが察せられます、表の活動を内からさえた存在が実母でした。

母は信仰の篤い人でございまして、毎日御日様を長い時間礼拝いたしました。或時、私も同じやうにいたしませうと申しましたところが、お前の代りに自分がつとめて居ることであるから、多忙であるお前はそれに及ばぬと申されました。それに対して、私がこれから後時節がまいりまして、出来るやうになりますたら必ずいたしますと申しました時の母の喜ばれた顔が今に忘れられません。……年取ってからの母にとりましては、私と共に居ること、それが何よりの喜びであったやうでございます。お話しをしあってもよし、



●政財界人の夫人等を招待した文子主宰の「台湾お茶の会」(日本工業俱楽部にて、昭和4年3月8日)

だまつて居てもよし、一所に居ることが喜びであったやうに思ひます。  
(『とこしへ』第5号)

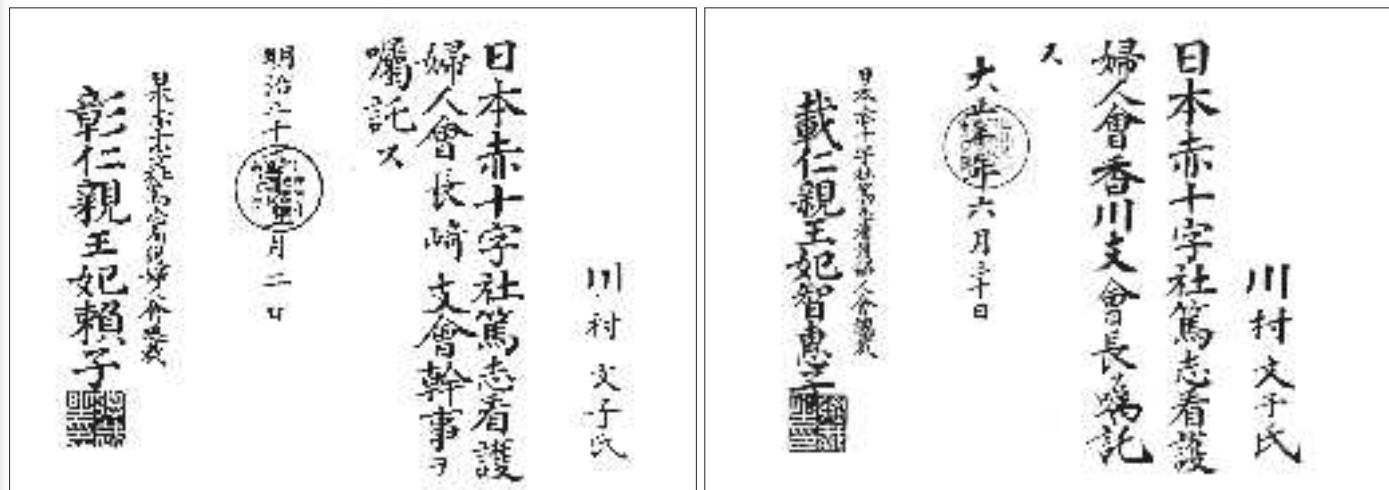
母の喜びだけでなく、母の存在がじつは娘の心の平安のもとだったことを感じさせる文です。晩年の母は、目白の川村邸に同居し、大正10年(1921)に亡くなりました。父の死から7年後、川村女学院創立の3年前でした。

文子は、関東大震災の惨状を前にして、強く生きる女性を育てる教育機関の設立の必要性を強く感じ実行に移したのですが、当時夫は要職にあり、8歳から25歳の6人の子の母でもありました。そのなかで新しい世界に踏み出したのは特別のことではなく、それまでと変わ

らない信念の実現であったことが汲み取れる次の言葉で終えこととします。

私が東北の秋田県に生を受けてから、五十歳の時川村学園を創立するまでの間には、さまざまの人生経験を持っております。その間いつも失わなかったものは、真実を求め、理想を立て、生き甲斐のある道を歩もうとする強い信念であります。(『紫雲』147頁)

(『こころ一川村文子の生涯と建学の精神』(平成23年4月)第1章を一部加筆・修正)



●長崎郵便局長夫人としての委嘱状(左)と香川県知事夫人としての委嘱状(右)

# 川村女学院の出発

Nishikawa Makoto  
西川 誠

大正13年(1924)3月5日、川村女学院の設置が認可されました。創立者川村文子は、関東大震災の惨状を目の当たりにし、帝都の復興、国運の発展のためには、女性が女性本来の使命に目ざめて動き出す必要があると考え、女性の自覚を高めるために、また以前からの教育界に尽くしたいとの願望もあり、川村女学院を創設しました。

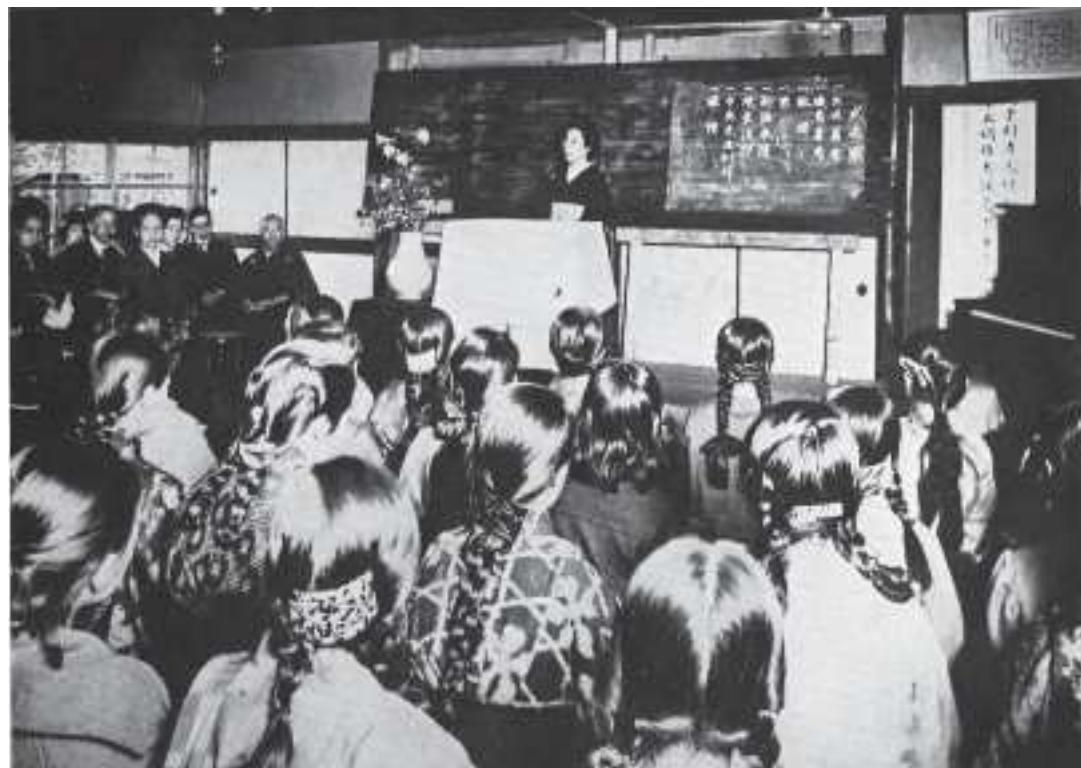
ここでは、川村女学院開学当時の、川村文子の考え方を紹介していきたいと思います。

まずは、文子が女学校創設の必要性を感じた、当時の女子教育はどのような状況であったのかを確かめてみます。関東大震災という直接のきっかけがあったにしても、文子が私財をなげうってまで女子教育に乗り出したのには、当時の女子教育に対してやむにやまれぬ使命感があったと思われます。その使命感・危機感を理解するためには、大正後期にいたる、近代日本女子教育の状況を知っておく必要があるでしょう。

次に文子の女子教育への理想につい



●川村女学院開院日の仮校舎(大正13年4月12日)



●仮校舎で行われた開院記念式での院長挨拶(大正13年4月12日)

て考え、その理想がどのような形で実現していったか、川村女学院のカリキュラムを検討していこうと思います。文子の理想の一つは、ここで詳しく述べるようにな、良妻賢母でした。しかし、それを実現するための教育方法であったカリキュラムを検討してみると、良妻賢母の具体的な内容は、わたしたちが想像するものと少し異なっています。文子の課題は、現在のわたしたちが、あらためて考えなければならぬ課題にまで深まっていく可能性があります。

良き妻、賢い母となる女性を育てる、これは古めかしいかもしれません。ところが川村女学院が設立されたときに、当時の新聞は次のように述べています。「かわった特色で生まれた二つの女学校〔川村女学院と桜蔭女学校〕」(『朝日新聞』大正13年〈1924〉3月24日。史料引用は読みやすくするために、漢字や仮名遣いをあらためてあります。以下同じ)、「開校の暁は文化学院や自由学園と共に毛色の変った面白い学校として注意を惹くであろう」(『読売新聞』大正13年3月7日)。良妻賢母が普通の価値観であった当時の人びとに、良妻賢母の学校をつくるといつても、「かわった特色」とはいわれないでしょう。川村女学院は何かかわったことをやっていきそうな学校ととらえられました。このワクワク感は、いったいどこから出てきたのでしょうか。

## 近代日本の女子教育 大正期までの概観

### 良妻賢母

明治中期(1890年代)に、政府の女子に対する教育方針は、良妻賢母主義となりました。良い妻であり、賢明な母であることをめざすことは、古いかもしれませんが、悪いことではありません。そういう将来像をもっている人もいるかもしれません。江戸時代の武士の世界では、女子は藩校に入ることが許されていなかったことを考えれば、良妻賢母となるように教育が準備されたことは、女性にとって状況が改善されたといえるでしょう。しかし、喜んでばかりはいられない落とし穴があります。それは制度設

計を検討すると、くっきりと浮かび上がります。

明治5年(1872)8月、学制が公布されました。ほぼ同時に出された「被仰出書」(政府の趣旨説明)のなかで、「邑に不学の戸〔家〕なく家に不学の人なからしめん〔ないようにする〕」と述べるように、学制は国民全員に教育を与えることを目標としていました。男も女も、区別なく教育することがめざされました。欧米諸国に負けない国づくりをするためには、国民みんなの知的レベルアップが必要と考えられ、義務教育制度の確立が図られたのです。しかしあまりに理想的すぎました。一定の水準を満たす学校をつくり維持する費用については深く考えられていませんでしたし、教える内容も外国の直訳的なものが多かったです。そこで明治12年(1879)9月には、教育令が出され、当時の日本の実情に合わせた教育がめざされました。そして明治19年(1886)には、たとえば小学校令というように、学校ごとの法令が出され(一括して諸学校令と呼ばれます)、近代日本の学校制度の基本が確立することになりました。

学制では、師範学校(先生になるための学校)なども挙げられていますが、基本的には、小学校→中学校→大学校という順で学ぶ、単線的な構造でした。ところが諸学校令では、男子は尋常小学校→高等小学校→尋常中学校→高等中学校→帝国大学が主要な学びの系統となり、女子は尋常小学校→高等小学校→高等女学校が主要な学びの系統となりました。違いは明瞭です。女子は、男子の尋常中学校と対応する「高等」女学校で教育は終了するという設計なのです。つまり、当時の女子は基本設計上では大学には進学できません。勉強を続けたければ、師範学校か、たとえば医者になるための東京女子医学専門学校(現、東京女子医科大学)のような専門学校に進むしかなかったのです。法律上大学と認められた大学に女子大生が生まれたのは、大正2年(1913)、東北帝国大学に3人の女子学生の入学が認められたときのことでした。

教える内容も、男子と女子の差が生

じるようになりました。日本の実情にあった教育となると、江戸時代の武士を中心とする男尊女卑の考え方に入り込んでいます。男と女では教える内容に違いがあるが当然という考え方です。また社会の要望への配慮も必要となりました。こうして明治19年(1886)には、高等小学校で、女子のみ「裁縫」という科目が設けられるようになりました。

高等女学校については、当初は中学校令のなかで規定されていたにすぎなかったのですが、明治28年(1895)に高等女学校規程が設けられ、明治32年(1899)に高等女学校令がようやく定められました。法令が整備されるなかで、教える教科内容に、「家事」と「裁縫」が加えられます。当然何かの科目を犠牲にしないと、これらの科目を教える時間は出てきません。男子の中學に比べ、外國語は必修ではなくなり、理数系の時間数が削減されます。さらにいえば、「家事」「裁縫」においても、修身(道徳)的・しつけ的要素が加味されていたといいます。少し時代は下りますが、明治43年(1910)に文部大臣菊池大麓は、高等女学校は「良妻賢母を作るが目的にて、もちろん家政科に重きを置けり」と明言しています。

つまり良妻賢母となるよう、家政科が重視され、同程度であったはずの男子の中学校と同程度の授業は受けられなかったのです。

良妻賢母という考え方があつてもいいでしょう。しかしそうでない生き方を選び、学問に励もうという女性にとって、その道は限りなく困難となるように設計されていたのです。

明治後期には、加えて、天皇の国民の統治・支配と、父の家族への慈愛とを同一視する家族国家觀が強調されるようになり、女性は夫に従い家を守るものととらえられ、また民法では家の年長男子である戸主の権限が強く認められ、武家に特有であった男尊女卑の考え方が社会一般で強調されるようになりました。良妻賢母とは、男に従う良妻賢母であったのです。

## 女子教育への期待の高まり

明治後半から、そして大正になって、日本にも民主主義という考え方が重視されるようになってきます。東京帝国大学教授吉野作造は、大正5年(1916)に、君主国である日本にも民主主義の理念は採用することができることを力説した「民本主義」を発表しました。自由と平等という価値観が称揚されるようになります。当然男尊女卑の考え方への批判もたかまります。明治44年(1911)平塚(らいちょう)らいてうが創刊した『青鞆』(せいとう)は、創刊の辞で「元始女性は太陽であった」と、女性解放を高らかに謳っています。

らいてうは、女子教育については、大正2年(1913)4月の「世の婦人たちに」という論説で、男子の生活から独立する「高等な精神教育」と、経済上の独立を達成するための「職業教育」を女性のための必要な教育と論じています。

ところで、20世紀に入って、日本では都市化と産業化がいっそう進展しました。明治37年(1904)から大正2年(1913)

の10年間に、東京市(現在の千代田区・中央区・港区・文京区・台東区と新宿区・江東区の一部)に隣接する郡部町村は2.4倍近く人口がふえました。とくに大久保町・渋谷町を含む豊多摩郡では3倍増となりました。そして川村女学院の創設された目的は、北豊島郡高田町にあり、東京市に隣接する郡部町村の一つでした。また産業別有業者人口では、明治10年(1877)には全体の73%を占めた第一次産業(農林水産業)が、大正9年(1920)には55%に低下していました。

つまり、都市が発達し、俸給生活者(サラリーマン)や労働者が増加したのです。その結果、俸給生活者を中心に、子女に高度な教育を受けようという気運が高まり、高等女学校への進学熱が高まりました。大正2年(1913)に全国の高等女学校数は213、生徒数は6万8000人でしたが、大正15年(1926)には学校数は663と3倍に、生徒数は29万9000人と4倍に増加しています。

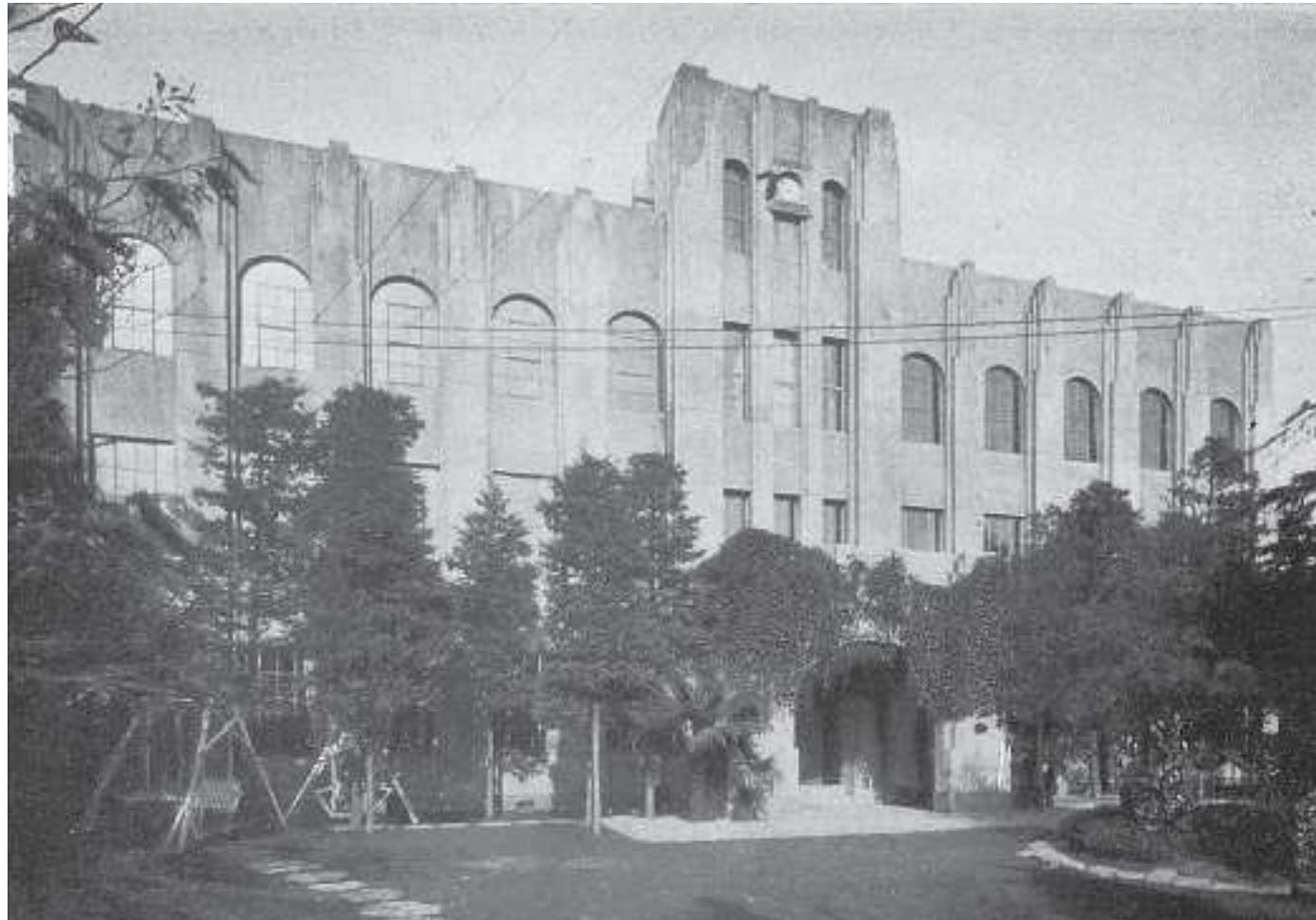
こうした状況に対して、政府は大正6年(1917)から8年にかけて臨時教育会議を設置し検討を加えましたが、女子教育に関しては、高等女学校の上に高等科の設置を決めただけで女子大学の開設は時期尚早と認めず、教育の理念には「婦徳」をかかげ依然良妻賢母主義を堅持したのでした。

大正期は、新しい男女平等観が登場する一方、男尊女卑と結びついた良妻賢母主義も堅持されていました。女子の高等教育熱が高まる一方、政府は大きな対応をとっていませんでした。こうしたなかで、川村文子は女子教育に船出したのです。

## 川村文子の理想

### 震災の衝撃

川村文子は、川村女学院の設立にどのような抱負をもっていたのでしょうか。文子自身の言葉を読んでみましょう。なお川村女学院は、まず大正13年(1924)



●大正14年(1925)落成の川村女学院本校舎

3月に川村女学院本科が、ついで同年12月に高等女学科が設置されています。高等女学科は、先に述べた高等女学校令に基づく学校で、本科は各種学校という分類に所属します。また今日のカルチャースクールと類似する目白婦人学院が翌大正14年に開設されました。残念ながら翌大正15年に廃止されています。ついで昭和2年(1927)に幼稚園、昭和4年に高等女学校の上位に当たる高等専攻科、昭和7年に初等部(小学部)が設置されています。

設立に踏み出した直接の理由を、文子は「過ぎし十年の回顧」(『川村女学院十年史』)で次のように述べています。

当時我が国の方々が大震災から受けました衝動は、随分に大きなものであったと思いますが、私もまたその一人でございました。本当に真剣にならなければ、帝都の復興はおろか、国運の発展は到底期し難いと、心から思いました。そして私はこれは男子だけがしっかりしたのでは駄目である、女性がしっかりと女性の本来の使命に目醒めて雄々しく動き出す事が、最も大切なことであり、最も根本的なことであると痛感いたしましたのでございます。

「女性の自覚」という事に、前途の光明を見出でて、周囲を眺めたときに、平生からの考——教育界に尽したいという考——を是非とも実現しなければならないと深く決意したのでございます。

関東大震災で東京は灰燼に帰しました。東京の復興、日本の再出発を考えたときに、女性も本来の使命に目ざめる、つまり「女性の自覚」をもつ必要がある、そのために女子教育を行う、これが文子の危機感・使命感であったのです。

## 女性の自覚

では「女性の本来の使命」とは何でしょうか。「女性の本来の使命に目醒め」という「女性の自覚」とはどんなものなのでしょう。いくつか文子の発言を読んでみましょう。まずは冒頭でふれた、『朝日新聞』の記事から。

古い言葉ですが、やはり良妻賢



●女学院1期1年生の夏の制服(大正13年夏)



●本科実務科1期5年生のタイプライター実習(昭和3年度)



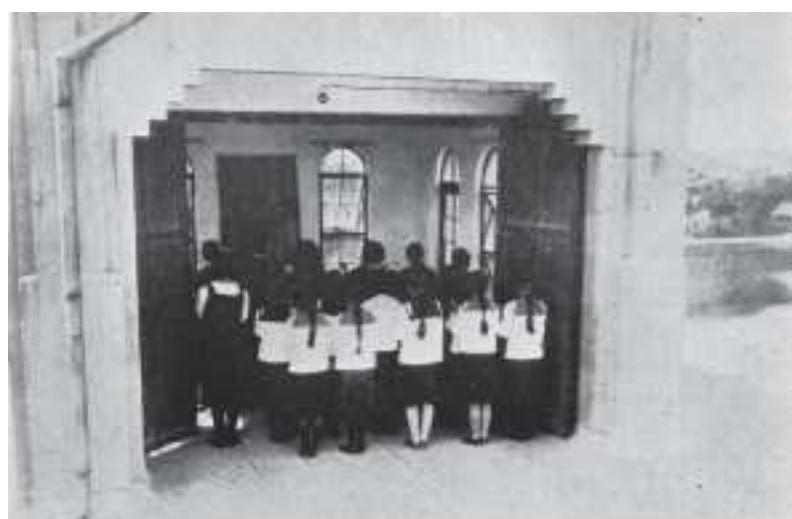
●本科割烹科1期5年生の割烹室での実習(昭和3年度)



●本科裁縫科2期5年生の裁縫授業(昭和4年度)



●本科保母科1期5年生の幼稚園遊戲実習(昭和3年秋)



●本校舎屋上に設けられた神棚(大正14年)

母を養成するのが主眼で、学校を出ていはずれは家庭の主婦となった場合に普通の学問のほか何か一つの専門の実務……お裁縫とかお料理とか、又商家に嫁いだ方はタイプライターとか簿記をつけたりができるようにしてあげたいというので、学科課程も教授時数も普通の女学校と余程違つて居ります。それで修業年限四箇年中三年間に一通りの普通教育を終わり、第四学年は裁縫、割烹、保母〔保母、保育士のこと〕、実務の四科に分けそれぞれその道の専門家を先生に御願いすることになって居ります。

大正14年(1925)の第2回入学式の訓話では、文子は次のように述べます(『川村女学院十年史』)。

そうして、何のために学問をするかと申しますと、それは社会の人として、家庭の人として、有為な人となるためでございます。(中略)

なおここに申し上げておかねばなりません事は、この学校におきましては、祖先崇拜という事を最も大切なことといたして居りますので、屋上に神棚を設け、ここに天照皇あまたけすめ  
おおかみ  
おみかみ大神〔天照大神のこと〕を御祭りいたして居ります事でございます。申すまでもございませんが、我が日本帝国は君民一体の国柄でございまして、皇室の御祖先はとりもなおさず我々臣民の祖先でございますから、この意味において天照皇大神を拝むのでございます。

おなじ年の開院記念式では、文子は次の謝辞を述べます(『同上』)。

昨年暮れに新たに文部省認可の高等女学校を併立いたしまして、本院の特色ある本科とともに、本院の教育趣旨たる我が國女子固有の美德を涵養し、あわせて現代に適応せる女子をつくる事を努力致して居ります。

「女性の自覚」とは、具体的には良妻賢母となることに目ざめることのようです。また臣民の祖先としての皇祖神という捉え方から、文子が家族国家觀に基づいていることがわかります。だから「我

が国女子固有の美德」というのも、教育勅語にある、忠や孝といったような儒教的徳目を指しているのでしょうか。とすれば、先に述べた伝統的な男尊女卑の染みついた良妻賢母になろうとすることが、「女性の自覚」なのでしょう。

いや、そんな女性が、商家に嫁いだからといって、タイプライターや帳簿付けをするでしょうか。現在でいえば、エクセルで在庫管理やワードで文書作成を行い、家業に積極的に参加する技能を獲得しようとするでしょうか。しかし文子は、そのような女性となれといっています。「社会の人として……有為な人」「現代に適応せる女子」と述べているのです。

昭和5年(1930)、文子は、東伏見宮周子妃殿下の質問に奉答書(回答書)を提出しました。そこで文子は、当時の教育の現状を批判して、自らの理想を述べています(『同上』)。

維新以来教育は「智育に偏した傾き」があり、そこで「情操方面的教育」が重んじられつつあるが、「最も閑却せられて居るのは意志の教育」である。「形式的整美」を求め「個性を閑却し実用をうとん」じている。「各人の立場を自覚せしむるという大切な点が欠ける」。「平等的自由を求める」方向ばかりに赴いている。また「教育が非常に外国風で」「我が皇國風が忘れられている」。

そこで女子教育にあたっての注

意点は、「大日本国民たることの徹底的自覚」・「女性の尊さにめざめしめること」・「勤労の尊さを体認」することである。震災の経験から女子教育を志し、「校則等の問題」「新しき試み」で苦労したが、根本方針を次のようにして努力している。

「德育」を重んじ、「生徒の個性に注意」し、「感謝の心」を養うことには努力している。そこで「かしこいやこの世まもりて とこしへにみいつもあいも 限りあらじな」という唱歌を作り、朝礼で歌っている〔現在の「感謝の歌〕〕。

「女性の尊さ、女性の使命に対するしっかりした自覚をもつところに正しき男女平等の尊さの現れる」、「日本婦人として目覚めてこそ、そこに世界人としての婦人の眞の姿の現れうる」と信じている。こうした良妻賢母の教えを徹底している。

形式主義画一主義への反省に鑑み、「生活に即した教育」をめざし、制度上も具体化に努めている。本科は、普通の女学校の課程に加え保母・実務・割烹・裁縫のうちの一つの技能修得をめざしている。

個性を尊重し各自が自らの存在を追求しようという意識をしっかりとつくり自覚をもつことの大切さが述べられています。「女性の自覚」とは、性差を認識して、女性という個性をもって誕生した自分という存在を感じ、個性を十

全に伸ばしていこうという意思をもつことということになるでしょうか。したがって德育の中心は、神道色が強いのですが、自らを生み出した大いなる存在(この時点では太陽神アマテラス)に感謝するということになります。そして教育方針は、「女性の自覚」「感謝の心」をはぐくみ、形式主義に陥らず、女性の個性の伸張をめざすことになりました。

つまり良妻賢母といいながら、個々人の能力を自らが追求する女性としての良妻賢母なのです。

## 目白婦人学院

こうした文子の理想をよく表したものに、ほぼ同時に開学した、働く女性や結婚した女性を対象にした目白婦人学院があります。その創立趣旨は次のように説明されています(『川村学園70年のあゆみ』)。

「日本は五大国の一つ」となったが、「唯一取り残されているのは日本婦人の地位の問題」である。「婦人が社会的に醒めて活舞台にも出ねばならぬ時機」である。このままでは「日本の国家的地位をも損傷」する。そこで生まれたのが本学院である。「本学院は欧米婦人地位の向上した経緯をたどりつづ一般日本婦人に最も欠けて居る法制、経済等その他万般社会問題を正解するに必要な精神科学の攻究を主眼」とする。その一方、「新時代の婦人は泰西〔ヨーロッパ〕の書籍」を読むだけでなく、「欧洲人に接する機会」も多くなるであろうから、「英語科をも附設」する。

「女性の自覚」をもつことは、第一次世界大戦の戦勝国である日本の社会の一員としての女性であることも自覚する必要があり、したがって社会科学や語学の知識・技能も必要とされます。良妻賢母であっても、ウチに籠もる女性では「新時代の婦人」とはなれないのです。

東京府に提出した願書では、将来の日本人の母である婦人が「封建時代」のままでいることは「痛嘆に堪えざるところ」であり、時代に適合した、「入りて家庭の母姉としても出でて社会の婦人とし



●目白婦人学院(夜学)本科の卒業記念(大正15年3月)

「でも良く時潮を正解」しようとする子女に「万般の社会学的知識を授くるを以って目的とす」と、より明瞭に言い切っています。

文子の理想

文子の理想をまとめれば次のようになるでしょう。

日本は、五大国(英米日仏伊)の一つとなつたが、その一方で震災に見舞われ、復興・再出発を図らねばならない。女性も、女性が女性である尊さを認識し(女性の自覚)、自己の探求に動き出す必要がある。女性という性差に注目すれば良妻賢母をめざすことであり、社会のなかの存在であることには着目すれば五大国にふさわしい女性の社会的地位の実現をめざすことである。

したがって文子の良妻賢母は、男女の差を認めることに由来しますが、家や夫に盲従することを内容とはしません。おののの個性を重視した意思のある存在でなければならぬのです。家庭を含めた実社会に自立していく婦人がめざされるのです。

都市の中流の誕生と女子高等教育熱の高まりという状況のなかで、社会的にも自立しうる技能をもち良妻賢母をめざすことは、そうした階層に受け入れられる考え方であったでしょう。実際、文子が東京府(現、東京都)に提出した設立願の「設立ノ目的」には、女子高等熱の高まりへの対応と、家庭の主婦としても社会において独立しうる存在としても適応する知識技能を与えることを目的とする述べています。

こうした文子の理想は、女性の存在を考え直そうという大正の思潮の影響も受けているでしょう。これらの点から、伝統的な良妻賢母主義からは「毛色の変わった」学校ととらえられたのです。

## 特色あるカリキュラム

## カリキュラムの特徴

理想を実現するには、手段や方法が必要です。文子はどのような方法を探ろうとしたのでしょうか。先の『朝日新聞』の引用で、文子は「学科課程も教授時

(男客內) 表程課科學女等高

## ●本科と高等女学科のカリキュラム(大正14年度「入学案内及学則摘要」から)

数も普通の女学校と余程違つて居ります」と述べています。カリキュラムにかなり工夫が凝らされていたのです。そのため、同じく東伏見宮周子妃への説明で、「校則等の問題」と「新しき試み」で苦労

したと述べたように、文部省(現、文部科学省)・東京府(東京都)の認可に努力が必要でした。ではどのような内容であったのでしょうか。

上に掲げた2つの表は、大正14年



●高等女学科1期5年生と稲葉三郎先生の英語授業(昭和3年度)

(1925)度の、川村女学院本科と高等女学科の課程表(カリキュラム表)です。注意してほしいのは、本科は法令上は系統的教育からはずれる各種学校であり、高等女学科が高等女学校に当たることです。したがって、高等女学科のほうが、文部省の正規の教育ルートに乗っていて、そのぶん規制が厳しいはずです。

第四学年まで見くらべてみましょう。本科のほうが、英語(英文学)・歴史地理・自然科学の時間数が多く、国語・裁縫が少ないことがわかります。あるいは本科は第四学年までに普通の高等女学校を終えるとありますから、そのための工夫とも推測できますが、国語などの授業数が少ないので、この推測は誤りでしょう。ではどのような理由によるのでしょうか。

一つ史料があります。大正15年(1926)に川村女学校が課程変更を申請した、国立公文書館にある文部省宛の書類です。そこに関係資料があり、高等女学科設立の経緯がわかります。大正13年(1924)11月、川村女学院の申請段階では、英語は各年3時間、裁縫は各年4時間でした。それが翌年1月の再申請では、英語を5時間にし裁縫を3時間に減らしていました。文部省は、裁縫科の時数を旧申請のままとすること、随意科

は30時間を超えるので、課程表から削除せよと指導しています。その指導を受けての変更が前ページの表ですが、裁縫は減らしたままであり、時間数を示さず随意科を載せてています。したがって、川村女学院は、そのように文部省と交渉して認可を得たと考えられます。

つまり、全国的な統一した規制を受ける高等女学科でも、川村女学院は裁縫よりも英語を重視し、随意科を課程表に載せようとしたのです。

これほどに英語にこだわったのは、先に述べたように、文子が、五大国の一員として国際社会に乗り出した日本を強調したことを考え合わせれば、新しい時代の女性として、必須の教養ととらえていたからと考えていいのではないでしょうか。

自然科学は、「(主トシテ家庭応用力説)」と書かれており、家庭生活を科学的に運営することが、新時代の良妻賢母に必要であるととらえていたと考えられます。また随意科の設置は、情操教育と個性の尊重ということを実現しようとしたのでしょうか。

文子と川村女学院もこの点を協調しています。大正15年度の入学案内では、次のように述べています。

入学案内

本科は、第五学年に四科に分かれるが「自由にその個性を発達」させるためであり、「随意科制度」とあわせ「効果を大」とするようにしてある。高等女学科は、「英語の時間が多く」、「随意科として希望学科を学習しうる設備」がある。

#### 入学志願に就て

「殊に本科は尤も英語、自然学科及随意科に特色を有し普通の高等女学校より以上の程度の教育を施します」

カリキュラムにおいても、型にはまつた良妻賢母主義ではないのです。

#### 本科と高等女学科

ところで、今紹介した入学案内のなかで、気になる点があります。高等女学校令の学校でない本科のほうが、「普通の高等女学校より以上の程度の教育を施します」と述べている点です。そして学費は、本科のほうが高いのです。

同じ敷地に、文部省が認可した高校と、高校相当の専門学校があって、とくに資格がとれるわけではない専門学校のほうが授業料が高いとして、どちらの学校が好まれるでしょうか。

学校をつくる側からすれば、高等女学校のほうが規制が厳しいのでつくりに

くい。だから、川村女学院はつくりやすい各種学校をとりあえずはつくったとも考えられます。ところがその半年後に高等女学校をつくることができて、しかもそのあと各種学校については廃止せずに、「程度」が高いと断言しています。つまり本科を大切にしているのです。

とすれば、文子は、より自由度の高い学校をつくりたかったと考えるのが妥当でしょう。だから本科は、英語・歴史地理・自然科学を重視し、バリエーションある随意科目を設置しているのです。

文子は川村女学院設立に当たって、皇國觀・家族國家觀に基づく德育を重視し、良妻賢母を目的としていました。しかしその内容を検討すると、明治期の男尊女卑型の良妻賢母とはいえない面が多くあります。

文子は、五大国日本の日本、世界のなかの日本ということに関心があり、そうした社会の変化に対応しうる、社会的な女性、また家庭の経営を行える女性であることが、女性の尊さを理解した、「女性の自覚」をもった女性と考えました。したがって、女子教育にさいしては、社会的教養の涵養、自由な探求心の養成、生徒の個性の伸張という点が、内容として強調されることとなります。そのような教育でなければ、「女性の自覚」は育成できなかったのです。

こうした川村女学院のあり方は、都市近郊中流階級の意向に適合的な良妻賢母といえるかもしれません。しかしそう概括するには、かなり個性的であるように思われます。

最後に、昭和4年(1929)5月30日の『読売新聞』に掲載された探訪記事を掲げましょう。「やまとばたらき」とは「日本体操」とも書き、東京帝国大学教授筑克彦が天孫降臨神話を取り入れて考案した体操です。その一方で学校の入り口には「上がったり下がたり」の不思議な運動器具があり、女学生が楽しそうに使っています。

「感謝の心」を核にして、「女性の自覚」をはぐくむために必要な女性の教養には、地平線はないのでしょうか。やがて「女性の自覚」は「自覚ある女性」とも表現され



④昭和4年(1929)5月30日付『読売新聞』に掲載された探訪記事

るようになり、「感謝の心」をもって社会に貢献する態度は「社会への奉仕」として示されることになっていくのです。

(『ここ一川村文子の生涯と建学の精神』(平成23年4月)第2章を一部加筆・修正)



第

# 2

章

# 川村学園女子大学 の 誕生

---

大勢の人の情熱の  
結晶として

# 大学の発足と今日

Kumagai Sonoko

熊谷園子

時が満ちて、川村学園に創立者の悲願であった「大学」が開設されたのは、昭和63年(1988)、世の中が「平成」の年号に変わる前年です。川村学園女子大学の歴史は、ほぼ「平成」の歴史と並行しているといつていいでしょう。

開設当初は、「文学部」の一学部だけでしたが、時が経るにしたがって「教育学部」「人間文化学部」(平成23年「生活

創造学部」に改称)の三学部体制になり、さらに大学院(人文科学研究科 博士課程前期・後期)も併せもつ文科系総合大学に発展し、川村学園女子大学は、我孫子市を中心とした社会に開かれた高等教育・研究の場と認知されてきました。

ここでは、大学が産声を上げる前夜から、発足当初の「大学」の様子を伝え、本学の今日の発展を跡づけてみたいと思います。

準をすべて網羅する高度な知的存在を社会に出現させるのですから、それはおのずと困難な作業となることは想像ができるでしょう。今思えば、その現場というのは、たとえてみれば原作から映画をつくる撮影現場に似ているかもしれません。

まず、原作(創立の理念)の脚本化(カリキュラム等の整備)。次に俳優たち(研究者群)のラインアップ。そしてロケ地(大学キャンパス)の選定と確保。さらにセットの立ち上げ(建物の建設)。そして何よりも大事な観客動員(学生募集)の算段……等々。しかもそれらすべての内容が文部省(現、文部科学省)の審査にパスしなければならない点では、映画制作の苦労とはまた違うところかもしれません。総監督に当たられたのは、4代目学園長・理事長の川村澄子(初代学長。現、名誉学園長)で、そのもとで実際的指揮をふるわれたのは学園の事務局長・川村正澄(現、学長・学園長)でした。

原作からつくられたシナリオとして、



●大学設立に献身された川村正澄現学長・学園長(平成25年9月)

## 準備室 (学園事務局大学設立準備室)

### 総監督とメインキャストたち

大学を設立するというようなきわめて特異な場面に遭遇することはなかなかないことだと思います。昭和も終わりを迎えるころのある日、川村学園では大学設立のための「準備室」が設置される運びとなりました。学園の歴史は古く、その「創立の理念」はしっかりとしたものですが、そこから今日の高等教育の基



●川村学園女子大学竣工式時の川村澄子初代学長によるテープカット(昭和63年3月27日)



●開学当時の大学正面(昭和63年)

英語に堪能な国際的感覚をそなえた女性の育成、人類の文化的活動の変遷を学び、世界史的な視野のなかで日本人としての自覚を高めること、また、複雑な社会構造、人間関係の本質を正しく理解できる人材育成ということから、学部は「文学部」となり、学科はそれぞれ「英語英文学科」(現、国際英語学科)「史学科」「心理学科」の3つに決められました。ロケ地の選定、セットを立ち上げることも大変なことですが、俳優たちのラインアップ、これが一番大変で大切なことでした。世の中で何が一番貴重かといえば、やはりきちんとした人脈をもつ

ているかどうかなのです。それまでにも川村学園には短期大学があり、そこには専門の教員たちがそろっておりましたので、その助けははずいぶんと借りることができました。実際、「英語英文学科」は、短期大学の「英文科」から、「心理学科」は同じく短期大学の「生活学科」の心理コースから人材の多くを集めることができました。ただそれに加えて、4年制大学設立に要請される中枢の教授陣は、4年制大学経験者であるばかりでなく、その専門領域ごとの学会の重鎮的存在でなければならなかったので、そうした人材は八方に手を尽くして探さなければなりませんでした。

偉い先生を探すこと自体はできることではなかったかもしれません。しかし、それと一緒に、この「原作」を理解して、愛情をもって「新しい大学」を育てていこうとする殊勝な心がけの教授陣をそろえることは困難なことです。そして、メインキャストの存在は、大学の今後の命にかかるような大事なことは、まさしく映画と同じです。「英語英文学科」や「心理学科」のように、学園内にもともと基礎力のある学科については人選にも多少余裕がありましたが、もっとも困難を極めたのが「史学科」でした。



●伊東好次郎先生の授業風景(平成3年5月)

そして「史学科」は、この新設の「文学部」というシナリオ、すなわち、日本の文化・伝統の正しい理解による国家の歴史観を身につけることを中心に人類の歴史への関心、そして平和な世界を築くことという熱意の中核でもありましたので、学園も必死でした。

そのとき、頼りになったのは、川村澄子の義兄、川村大膳だいせんの存在でした。大膳は関西学院大学で「西洋史」を担当していた研究者で、戦後アメリカの対日支援として開設されたフルブライト奨学制度によって、ハーバード大学で学んだ歴史学者でした。大膳は、澄子の特命を受けて、関東在住の歴史学者のなかから選りすぐりで、なお「川村学園女子大学」の理念を本気で実現しようしてくれる研究者を集めてくれました。西洋史・中村英勝(お茶の水女子大学名誉教授)、東洋史・佐伯有一(東京大学名誉教授)、日本史・尾藤正英(東京大学名誉教授)、東西関係史・松井透(東京大学名誉教授)といふ、歴史学会を代表する錚々たるメンバーのラインアップでした。女子大学で唯一の、歴史学全般を網羅することのできる「史学科」の誕生です。

「心理学科」には、短期大学の関係から臨床心理学分野の人材を得たほか、社会心理学・島田一男(聖心女子大学教授)、発達心理学・三宅和夫(北海道大学名誉教授)、実験心理学・岡本栄一(日本女子大学教授)らを迎えて女子大では

稀有な4分野にわたる総合的な心理学科を立ち上げました。

また、女子大になくてはならない学科として「英語英文学科」は、やはり短期大学のスタッフの一部に、日本の英文学会をリードする人材、すなわち、近代英米詩・伊東好次郎(青山学院大学名誉教授)、中世文学・都留久夫(横浜国立大学教授)、アメリカ文学・岡鈴雄(玉川大学教授)に加わってもらい、大学らしいスケールで出発しました。

こうして、川村学園女子大学は、晴れて3つの学科を擁する「文学部」の教授陣の準備を整えたのでした。この教授陣の最初の仕事は、図書の選定でした。大学設置基準により、開学前に1万冊と

いう膨大な書籍を整備しなければならず、さまざまな先生方に協力いただきながらも、短期間に選別してその冊数にいたるのは「準備室」には重いものでした。そのとき、史学科教授の尾藤正英が自ら準備室に足を運び、図書館関係の中心としてまとめ役を買って出て、本は冊数がそろえばよいのではなく、本の内容・質が良い学生を育てるのだという信念のもと、辞書類や資料集、研究書のリスト作成に携わってくれました。尾藤の迅速で、粘り強い選択力によって開学時に向けて相応の本をそろえることができたと同時に、その姿勢はその後の川村学園女子大学の図書館の充実ぶりにつながっていったといえます。

### 裏方たちの苦労

一方、事務部門担当のほうでは、文部省に提出する書類の作成や、種々の規定や学則の作成にてんやわんや。行き詰まってどうにも困ると、これもまた短期大学の事務部に電話。しまいには、問い合わせはてんでんばらばらにしないで、まとめてきてくださいと、苦情をいわれる始末。それでも頼る相手があるだけれど救われたことだったでしょう。

文部省への大学設置認可申請の書類は、本学の教育理念および社会から必要とされる趣旨、カリキュラム、教員組織、校地校舎等施設、図書・機器備品等設備についてなど多岐にわたっています



●開学当時の図書館風景(昭和63年)

した。また、大学設置認可と同時進行で教職課程の認定申請も行っていました。教員免許状を1期生から取得できるようにするために、こちらも同様にカリキュラム、教員組織、校地校舎等施設、図書・機器備品等設備について要求を満たさなければなりませんでした。さらに申請のさい、ロケ地である我孫子市を中心に、JR常磐線沿線の柏市・松戸市・取手市からの本学開設の必要性の願いも必要で、各市長をお訪ねしたところ、どちらからも女子大学設置を希望する声が多く、申請書類として要望書を快くいただくことができました。そういうながら2年目を迎えた「準備室」では、文部省からの連絡・指示等への対応、ヒアリング対策、想定問答集の作成や実地調査の対応に入っていました。文部省の認可の如何がわかるのはその年の暮れまで待たなければなりませんでしたが、一抹の不安を抱きながらも開設に向けての作業は着々と進んでいきました。

肝心かなめの学内規程の作成もその一つでした。管理運営部分の規程のほかに、教学面・学生対応面についての規程等、いまだできていない組織についての規定ですから、これもイマジネーションの戦いです。さらに入試要項、学生便覧、講義要綱の作成など、まだ見ぬ未来の学生を思い描きながら作っていました。また、開学後の事務組織運営の準備も並行して行っていました。それはコンピュータの導入によるかたちで行われました。

今から思えば、当たり前のことのようですが、20年以上前、コンピュータシステムの整備は斬新なことだったのです。当時は、人の手による転記→読み合わせ→転記→読み合わせといった事務作業が当たり前でした。しかし、時代を横目でにらみながら、一連の業務を一括管理運用できるようにし、人手は对学生業務へ集中させようという意識で、みな慣れないシステムの開発に取り組んでいきました。

一方、川村学園女子大学の開設を待つ地域では、町を挙げて大学最寄りの常磐線「天王台駅」に中距離電車の停車

をJRに申請していました。天王台駅は、もともとNECの通勤利用者が数千名規模で需要としてはあったわけですが、JRの規則で一つの事業所のために電車を停車させることはできなかったそうです。そこでも本学の開学がしきりと待たれていたのです。NECでは当時、茨城県在住の社員は、取手駅で下車し利根川の橋を歩いて渡って通勤していたのです。天王台駅は我孫子駅の分室的な存在であり、駅長も配置されていなかったそうですが、本学開学の実現とともに、中距離電車の停車により駅長の配置が予定されていました。また、我孫子市では天王台駅北口から本学へ向けた路線バスの運行をバス事業者に働きかけてくださいました。

すべての準備を整えながら、誰もかも無事に文部省の「認可」が下りるのを今か今かと待ちわびていました。万が一にも保留になれば、キャンパス・建物・教職員・新システムのすべてが宙に浮いてしまいます。年の瀬も押し迫ったある日、「認可」の朗報が知らされるや否や、そのときを固唾をのんで見つめて凍りついていた現場がいっせいに安堵で緩み、色めき立ったのを覚えています。大勢の人を巻き込みながら「夢」が完成する場面に立ち会った瞬間のことです。

「準備室」の2年間は、わからないことだらけのなかで誰が何をするのか、現場はいつも新たな緊張と騒乱のうちに明けては暮れていきましたが、試行錯誤と一喜一憂に繰り返す日々のなか、どんなときもスタッフの気持ちを一つにまとめてきたものは、学園長川村澄子の温かい人柄と熱意への信頼だったのです。

## 大学の運営

### キャンパス内外の環境

私が明けて初めての仕事は入学試験でした。初年度は、東京・豊島区の目白にある川村中学校・高等学校の校舎を借りて実施いたしました。受験生側はもちろんのことですが、入学試験を実施する大学側も本学教員・職員の初めての共同作業で、これも何とか首尾よく乗り越えましたが、これが机上で

の計画と現場での実際との食い違いを調整していく作業の始まりでした。当時は戦後のベビーブーム2世が大学就学の年に当たり、新設大学でも学生募集には苦労がなく、各学科とも結構な倍率を出すことができたことはありがたいことでした。

4月の入学式は、目白の大講堂で行われたことは、今日と変わりません(48・49ページ参照)。翌日からのガイダンスを含む新学期の諸々の準備は、新品の我孫子キャンパスで行われました。開学当時、校舎は1号館から7号館までで、とくに4号館と7号館は現在の三分の二の大きさしかなく、それぞれに現在増設されている南側ブロックはありませんでした。けれどもこの開学当初の1号館から7号館の校舎配置は空から見下ろすと、じつは川村学園校章の「三羽の鶴」をイメージしたデザインとなっていました。その後、新たに「教育学部」「人間文化学部」が増設されるにともなって、現在で15号館までにふえています。

校地内は緑豊かな自然であふれ、野ウサギ、タヌキ、カモ、キジ、ザリガニ、ヘビなどが見られました。6月ごろ、夕方5時限目になると、カエルの合唱で授業妨害を受けたものでした。また東京では見られない野鳥もいました。キジが校舎の窓ガラスに激突したことでもありました。そのときは手賀沼のほとりにある有名な山階鳥類研究所に連絡をしたら、亡骸を引き取りにきてくださいました。そのおりに研究員の方がキジの特性について話してくださったことによると、キジは身体に対して翼面積が小さくて、飛行機にたとえるとジェット機と同じだそうで、直線を速く飛ぶことが得意な反面、ハトなどと違い急旋回や急上昇は苦手とのこと。窓ガラスに気づいた時点では手遅れとなってしまうということです。野生のものたちは、大学が建設される前からの住人ですから、まさしく人間と自然との共生の難しさを実感しましたが、今日でもすべての野生の住人はキャンパスの中に生息しており、大学が植えた新しい樹木の間に新しい居場所をみつけて、私たちの眼と耳を楽しませてくれています。大小合わせて1万





●開学当時の大学全景

①1号館 管理棟

1階 学務室 事務部  
2階 学長室 会議室 など

②2号館 図書・厚生棟

1階 食堂 軽食喫茶室  
2階 図書館

③3号館 大講義室

④4号館 教室棟

⑤5号館 特別教室棟

LL教室 情報処理室 中講義室 など

⑥6号館 体育館

⑦7号館 研究棟

⑧グラウンド



●今も校地内のグラウンドのまわりに広がる緑豊かな自然(平成25年10月)



●石川宏氏の詩  
「植樹の記」が刻  
まれた石碑

本近い樹木は、後援会(当時の本学園在校生の保護者)の寄付によるものです。その由来を忘れないように、本学園教師で、詩人の石川宏が詠った詩を石に彫り、「植樹の記」として、7号館脇の樹木の間に立てています。また、キャンパスの中ばかりでなく、大学を取りまく環境の一部である手賀沼のほとりには数多くの野鳥が生息し、前述の山階鳥類研究所や鳥の博物館といった世界的にもユニークな施設があります。

学園が大学設立に選んだ我孫子市は、水と緑にあふれた自然豊かなところであるばかりでなく、日本史的視野においても大変由緒あるところです。我孫子市

は縄文時代からの歴史に刻まれた街で、  
すいじんやまと  
水神山古墳・日立精機2号墳をはじめとする古墳群や奈良時代の相馬郡衙正倉  
あと  
跡、平将門ゆかりの旧跡などが点在しています。江戸時代には、水戸道中の宿場町また利根川水運の川岸としておおいに賑わったところです(付録の「我孫子市の史跡・名所案内」参照)。

明治中ごろ、常磐線に停車場ができ、我孫子市は東京都心からほどよい距離のベッドタウンとして、また別荘地として多くの文化人から愛されました。日本民俗学の父と称えられる柳田国男は我孫子市の兄のもとに滞在していましたし、柔道の創始者嘉納治五郎はこの地に別

荘をもちました。嘉納は、甥で民芸運動をはじめた柳宗悦を呼び寄せ、柳のもとにはイギリス人の陶芸家バーナード・リーチが窯を開きました。さらに、柳は白樺派の同人たちに呼びかけ、小説の神様と呼ばれた志賀直哉や武者小路実篤などが移り住み、大正年間の我孫子は、濃厚な文化の薫りに包まれていました。我孫子市が「北の鎌倉」と呼ばれたゆえんです。

志賀直哉の『暗夜行路』をはじめとする代表作の多くは、手賀沼のほとりの小さな書斎で執筆されたといい、この書斎は現在も保存されています。また、国際ジャーナリストとして活躍した杉本

楚人冠の本邸、西洋史研究者で親子2代東京(帝国)大学教授となった村川堅固・堅太郎の別荘は、志賀の書斎とともに市の文化財として一般に公開され、川村の学生もよく見学に訪れる場所となっています(付録の「我孫子市の史跡・名所案内」参照)。

このようなキャンパスを取りまく豊かな自然と高度に文化的な環境にあって、キャンパス内側も学問の薫りが高く渦まいていました。前に述べたように、どの学科もそれぞれの分野で日本を代表するような教授陣が集められていましたし、また伝統のある大学で長期にわたって教鞭をとつてこられた経験から、おののが大学について非常にはっきりとした信念をもっていました。学問の薫りは、教師と学生の間で起こるばかりではありません。新しい大学では、それはまず長老格の先生と若手教員の間で生じました。新設大学の場合、すべての教員は文部省による業績審査を受けているのですが、それを上回って学内では長老方の厳しい目がありました。担当授業に対する業績ばかりでなく、専門領域に対する取り組みが充分であるか絶えず無言のうちに問われていたので、若手はみんな本気で勉強を重ねました。

また、学生はまだ1年生しかいなかつたのでさびしいはずでしたが、みな新しい大学作りに燃えていて、授業が終わっても遅くまでよく話し合いをしましたし、委員会も夢中なあまりよく熱い議論になり、さびしいと思う暇はありませんでした。先生方はそれぞれの前任校が違い、また経験も違うので、誰しもそのままの意見が通るわけではありませんでした。けれども学を愛し、学生を愛することに退け劣るものはいませんでした。若手は、毎日のホットなやり取りのなかで、大学というものの理想を身体で学び取っていったといえます。そして研究の姿勢や大学運営についてばかりではなく、日常においても品のよい外見や物腰などから、学問が人格をつくり上げるに違いないと思い致し、将来の自分たちのモデルにしたいという憧れが呼び覚まされ、若手の教員は、尊敬に値する先生方と一緒に仕事のできる歓びを感じ



●初期の学友会メンバー(平成2年)

たのでした。

## 学友会

開学後すぐに大学は、学生自治組織としての学友会の立ち上げ準備に取り組みました。教員で組織する「学生委員会」の初代委員長は、「史学科」の教授松井透で、まず学生有志を募り、仮の執行部を組織するところまで教員側が手を貸したかたちとなりました。松井は、東京大学で教えていたこと、またその世代の研究者は「学園紛争」を経験していることもあり、川村学園女子大学にこれらても、ここ女子大生を「東大生」と認識していて、学生の自治意識を何よりも大切に扱っていました。あるときなど、学生とお昼をはさんで話し合いをしていましたが、午後のチャイムが鳴り、几帳面な女子大生たちは、さっさと授業に戻ってしまったのですが、それを「学生たちは話し合いの席を蹴った」と誤解して、かなり深刻に受け取っていたのが印象的でした。彼に育てられた初代学生執行部は、自分たちの考える自治組織とは何かといった定義づけから考えることを学び、学友会全体像を考えながら、課外活動連合会、学園祭実行委員会、体育祭実行委員会、選挙管理委員会といった下部組織を決めていきました。学友会費の代理徴収に関しても条件等を詰めていきました。執行部は、それを行うに当たっての各組織の規程作成、

またそれを学生全体へ説明するところまで、大変苦労しながらやりぬくことができたのです。これは、学生自身の意思決定を何よりも尊重する松井委員長の存在が大きかったと思います。何ごとも丁寧な、正当な基礎作りが大切であることの例が示されているといえます。

課外活動連合会も、先輩がいないので、すべて同級生の同好の士が集まって行い、それぞれやりたいスポーツや文化活動ごとにまとまっていましたが、高校までの先生の管理下の部活しか経験のない学生たちにとって、それは試練の場であったと思われます。しかし、そのときできたスポーツ系のテニス部、バスケットボール部、バレー部、ゴルフ部、文化活動系の考古学研究会、ESS、ZWEI DIMENSIONALE(漫画研究会)、華道同好会、名所研究会、イタリア言語研究会などのほとんどは、今日の学友会のサークルやクラブの活動の基礎となっています。

学生数がまだ少ないながら、2年目に初めて学園祭が開催できました。にぎやかに盛り上げるために、職員も模擬店団体として参加し、餅つき実演販売を行ったりしました。餅米を炊き、実際に白と杵でつきあげ、きな粉、大根おろし、磯辺巻きなどを作ったりした結果、はりきりすぎて学生の模擬店よりも売り上げをあげてしまって慌てたのを覚えていま



●にぎわう学生食堂(平成3年)

新しいキャンパスライフの悩みといえば、学生食堂でした。最初に営業を請け負った業者は、学生利用者数が少なく、夏休み・春休み等の休暇が長くて採算が合わないとの理由から学年進行途中で撤退を申し入れてきたり、学生のほうからも、温かい食事だが待ち時間がかかりすぎ、行列ができるて昼休みに食べ終われないという苦情もあり、大学としては頭を抱えてしまうということがありました。そのとき救いの手を差し伸べてくれたのが当時の学園の後援会長新川有一で、悪条件を覚悟でその関連会社である「まるしん亭」を以って引き受けくれ、メニューも工夫してくれるなど改善が行われ、今まで学食を切り盛りしてくれています。

このように、学生・教員・職員相互の協力と活動によって組み立てられたキャンパスライフは、机上で考えたシミュレーションどおりにはなかなかいかず、おたがい誰に聞いたらよいかわからないながらも何とかやっていかれたのは、以上のような川村にかかる人びとの誠意と情熱に負うところが多かったことを知りました。そして、短大卒業生たちで構成される事務職員および学生研究室の教務補助たちの献身的な働きも無視できない大きな要因だったと思います。この学生研究室内の教務補助システムは、早期コンピュータ導入とあいまって本学オリジナルといえます。コンピュータのほ

うはすぐ追い越せ追い抜けて今では当たり前になってしましましたが、教務補助制度はいまだ他に追従を許していません。大学が発足して20年以上たち、今では教務補助には本大学の卒業生がその任務に就いています。彼女たちは、教員と事務と学生の三者を結ぶ要として活躍し、平成21年(2009)に行われた外部団体による第三者評価においても、本学のすぐれた点として高く評価されています。

## 今日の大学

### その後の発展

文学部一学部でスタートした大学は、その後平成3年(1991)に教育学部を、そして平成12年(2000)には人間文化学部を増設し、三学部体制に拡充・安定させ、その間、平成11年(1999)に大学院(人文科学研究科 修士課程)を開設し、その大学院も平成16年(2004)には博士課程を増設して、川村学園女子大学は教育力ばかりでなく、研究力や実社会に知力を注ぐことのできる女子教育の場としての環境を整えてきました。研究所としても女性学研究所、比較文化研究センター、国際日本学研究所、子ども学研究所、心理相談センターを併設し、教員間、また学生と教員間の研究活動を柔軟かつ活発化させるよう環境の整備を行っています。

本大学の教育研究組織は巻末の付録に掲げてありますので、ご覧ください。人間文化学部は平成23年(2011)に生活創造学部に改称し、女子大学らしいカラーを打ち出すようにしました。

また、大学の隣接地には平成18年(2006)に川村学園女子大学附属保育園を設置し、0歳児からの保育を実践して地域の働く女性のために貢献しています。保育園の存在は、大学の女性教職員の産後の完全職場復帰への意欲を高めました。このことは、おそらく川村文子のもともと理想としたことではないでしょうか。

### 第三者評価を受けて

ところで、わが国では平成14年(2002)の中央教育審議会の答申を受けて、大学、すなわち国公立、私立の区別なく、また短期大学、4年制大学の区別なく、すべての大学は7年ごとに外部からの評価を受けることになりました。考え方の基本は、教育のレベルを「世界のコモン・スタンダードにコミットし、それと連携できる力量を高める」ことで、そのためには「国内外における通用力」をもちうるような、第三者による大学評価を受けなければならぬということになったのです。一言でいうと、大学の質保証ということができます。

川村学園女子大学は、平成21年(2009)度に、「日本高等教育評価機構」による第三者評価を受けました。この評価の第一回目が、「建学の精神・大学の基本理念及び使用・目的」の検証です。つまり、この大学がどのような目的をもって創られ、その目的に適ったカリキュラムを擁しているかという検証です。そこに端を発して、学生サービスや、教員のレベル、事務管理体制の準正さ、財務、社会との連携や責務などを細かく調べられます。100ページにわたる報告書とともに、「機構」から派遣されたチームの2泊3日にわたる本学視察・評価を受けました。その結果、平成22年度評価を受けた大学のうち、保留になった大学、条件付きでパスした大学も多々あるなかで、本学は何の条件もなく評価をクリアいたしました。

そのなかでとくに評価されたことは、先ほどふれた「教務補助制度」の他に、女子大として「建学の精神」とマッチしたカリキュラムが展開されていること、学生の地域ボランティア活動や教員の社会的貢献が充分なされていること、教員と事務組織の調和的コラボレーションについてでした。大学では、教員と事務組織はその機能的運営の両輪として、相補的なものです。平成21年度の第三者評価では、その調和もきちんと評価され、本大学は充分な「品質保証」がなされたわけです。外部評価は7年おきですが、大学としての自己評価は毎年行い、それは今回の外部評価とともに、すべての人がインターネットで閲覧することができます。

このようにして発展してきた川村学園女子大学ですが、大学創設時期のバブルの時代から長期にわたるデフレ・少子化時代のなかで、今後はいっそうの努力と研鑽を要すると自覚しています。しかし、けっして失ってはいけないものは「自信」でしょう。

大学発足当時からのことを綴りながら思うことは、どんなときも最後にものをいうのは、やはり人間の情熱と温かい「心」なのだということです。本学園の建学の精神のモットーは、「感謝の心」を基盤とした「自覚ある女性」を育てることです。まさに「人づくり」以外のなにものでもありません。発足25年を節目として、われわれは原点に立ち返り、自信をもって新たなる世代の教育に情熱を注ぎたいと思っています。

(『こころ—川村文子の生涯と建学の精神』(平成23年4月)第4章を一部加筆・修正)



●西川誠(文学部長)



●山本由美子(教育学部長)



●吉武民樹(生活創造学部長)



●梅村恵子(大学院研究科長)



●川崎恵里子(図書館長)

●職員の方々(左から、山上徹也(学生支援副部長)、坂口武洋(学生支援部長)、渡邊光洋(事務部長)、渡邊登代治(事務副部長))





○入学式で式辞を述べる川村澄子学長  
(昭和63年4月5日)



○入学式での川村澄子学長と役職の先生たち  
(右より奥田真丈副学長、尾形利雄文学部長、  
伊東好次郎英語英文学科長、中村英勝史学科長、  
福屋武人心理学科長、竹端瞭一般教育主任、石川宏図書館長)



○入学式での第1期生

## 式　　辞

ほころび始めた桜花にふりそ、ぐ春の光は私どもに確実な季節の足取りを感じさせます。今日のよき日、こゝに希望溢る、第一期生をお迎えして川村学園女子大学の入学式を挙行いたしますことはこの上なく慶ばしく、本大学開学までの厳しかった課程を顧みますとき、まことに感慨無量なものがございます。

新入生の皆様は先に高等学校に於いて豊かな教養と知識を修得され、いまこの式に臨んでおられます。これも偏に皆様方の撓みない努力と精進の結果によることは勿論でございますが、その背景には、皆様方をこゝまで成長させてくださつたご両親はじめ、ご家庭の方々のご慈愛によるものであつたことをまずもつて心に銘記しておいていたゞきたいと思います。

さて新入生の皆様、本日から皆様方の新しい学生生活が始まるのでございますが、新入生の半数以上は川村高等学校以外より入学されました方々でもいらっしゃいますので、この際学園の建学の精神について一言述べておきたいと存じます。

本学園は大正十三年四月、川村女学院としてこの目白の地に呱々の声をあげました。爾来六十数年今日まで、「感謝」と「女性の自覚」を建学の精神として継承してまいりました。

その「感謝」とは、万物に対する愛の心であり私どもの日常生活に欠くことの出来ない精神的土壤でございます。「女性の自覚」とは、女性としての円満なる人間性の涵養かんようとそれに伴う責任ある行動をもつことでございます。この精神は人間形成の根幹であり、あたかも車の車輪のごとく女性としての基本的姿勢であると存じます。学園は貫してこの精神を探求し如何なる環境におかれましても、それを克服し得る豊かな知性と教養を身につけ、聰明にして心身ともにすこやかな女性を育成することを目標として、この学園が創設されたのでございます。この建学の精神を「三羽の鶴」をもつて図案化いたしましたのが、只今皆様方にお渡しいたしました校章でございます。鶴は長寿でめでたい鳥とされ、その高潔さ崇高さそして悠々と空を飛ぶ美しい姿は、女性がもたなければならぬ愛の心や平和、豊かさを表徴しております。また鶴を三羽といたしましたのは、「三」という数字が古今東西基本の数であり、学園にあっては学生を中心に戸籍員とご両親を意味し、その三者の調和するところに学園の発展が生まれるという創立者の願いがこめられてゐるのでございます。どうか新入生の皆様、今後四年間専門教科の履修に情熱を傾けると同時に、教学の指針を通して人格の陶冶とうげいにも努力していただきたいと思います。

また新入生の皆様は、川村学園女子大学の一期生としての誇りと自信をもつて、今後の学生生活を充実させていたゞきたいと存じます。

本大学にお迎えした諸先生は、それぞれ学界の泰斗であられ權威者でございます。

どうかその聲咳けいがいに接し深遠なる学理を十分修得され、自ら進んだ学問の道をあくまで真剣に探究していただきたいと願つております。

本学の将来は、皆様方の自覚と双肩にかかる、つていると申しましても過言ではないと存じます。

本日は公私ともご多忙のなか、ご来賓並びにご父兄多数のご光來を賜り、記念すべき入学式を迎へ、共々に大学の門出をお祝い下さいましてまことに有りがとうございました。

終りに臨み、ご臨席いたゞきました皆様方の益々のご健祥をお祈り申し上げ式辭といったします。

昭和六十三年四月五日

川村学園女子大学長

川村　澄子



●卒業式で式辞を述べる川村澄子学長  
(平成4年3月20日)



●学位記を授与する川村澄子学長



●卒業式での第1期生

## 式 辞

「春」という言葉に集約される季節の足取りがいま私どもに希望と喜びを語りかけてまいります今日この頃、本日ここに文部大臣鳩山邦夫先生はじめご来賓並びにご父兄多数のご臨席を賜り、川村学園女子大学一期生の卒業式を迎えたことは誠に慶ばしく、まずもつて卒業生皆様の四年間のたゆまざる研鑽と精進に対しまして心からお祝い申し上げます。

またご父兄の皆様におかれましても、長年のご希望がかなえられ、いま学園を巢立つてゆかれますお子様の晴れやかなお姿を眼の前にされ、感慨一入のものがおりのことと拝察いたします。

思えば昭和六十三年、学園の将来とその発展を期して一抹の不安をいただきながら、川村学園女子大学文学部を開學いたしましたが、教職員の方々の並々ならぬご指導とご支援によりまして今日、この晴れの日を迎えることが出来、まことに感慨無量なものがございます。ここに改めてご協力賜りました諸先生に深甚なる感謝を捧げたいと存じます。

さて卒業生の皆様、皆様方はこの四年間、夫々の学問の領域に於いて、充分に専門的知識と深遠なる学理に接してこられたと思います。その向学心と真摯な態度は今後もなお持ち続けて、これから的生活の信条としていただきたいと念願しております。そしてそれと同時にこの四年間一人の人間として、また女性として大きく成長なさいましたことに、私どもは意を強くしております。とは言え、皆様を受け入れる現実の社会は極めて厳しく、安易な気持では同世代の人と互して活躍してはいかれません。

ゲーテは「人間は努力する間は迷うものだ」と述べております。どうか皆様は、あらゆることに努力され、時として迷うこととも、それは誠実な若者の証しであり弛まぬ努力を続ける勇気をお持ちいただきたいと思います。

今日の激動を極める世界情勢のもとでは、すべてを地球的規模に於いて考える広い視野をもたねばならないことは、すでに皆様もご承知のことと存じます。この混沌を深める現代に於いて皆様方に求められていることは、冷静に自己の立場をみつめ世界の中で悩み苦しむ人達の痛みを痛みとして受けとめることの出来る心を大切にはぐくんで行くことだと思います。そして更に、心豊かな女性として社会に大いに貢献していただきたいと存じます。学園の教育指針でもござります「自覚ある女性」も「感謝の心」も、みなこのことと軌を一にしているのでございます。

明日からは新しい人生を歩まれる卒業生の皆様は、この川村学園女子大学の一期生として先輩もいない中、模索を続けながら立派に学友会を組織したり、学園祭等の諸活動を実施する等、何事にも挑戦し開拓してこられました。そこで培われた自信と誇りを忘れず、前向きに更に輝かしく充実した人生を進みますよう祈つてやみません。

ご父兄の皆様、永年にわたり学園にお寄せいただきましご援助、ご尽力に対しまして衷心より篤く御礼申し上げます。

終りに臨み、ご光賜わりました皆様方、並びに卒業生の前途のご多幸とご健勝をお祈り申し上げ本日の式辞といたします。

平成四年三月二十日

川村学園女子大学長

川村 澄子

## 原点・回帰

Kawamura Masazumi  
川村正澄

1903年(明治36)、エジンバラ市内の公園に、文字盤の針は約1メートル超、時針1本の時計が誕生した。私たちが現在、花時計と呼んでいるものの第1号である。当時イギリスではじゅうたん花壇が普及し、加えて、イギリス庭園には日時計が見慣れた光景であったことが、この地でそれを誕生させることとなったのではなかろうか。日本では昭和32年(1957)、神戸市に直径が6メートル、15度に傾斜させた国内最初の花時計が産声を上げた。

本学においては開学4年目の平成3年(1991)6月、水と緑の田園文化都市・我孫子に、時針の長さが1.27メートル、分針の長さが1.74メートル、12、3、6、9の文字をシルバーに輝かせた小さな花時計が完成した。それは正門すぐ左にあって、時を報せ、季節の顔を覗かせる笑顔の門番といったところであろうか。

「感謝の心」「社会への奉仕」「自覚ある女性」という学園の教育理念を大学教育に取り入れた本学の教育方針は、広く社会に受け入れられ、これまでに、「人間性と品性」をベース

として「豊かな教養」を備えた多数の卒業生を送り出してきた。この間、川村澄子前学長のもと教育学部増設、大学院の設置および人間文化学部増設、その大学院においては博士後期課程を開設するなど、教育研究の充実向上を図り、それらに伴う施設設備の充実拡張とも合わせ、常に時代のニーズ・社会のニーズに鑑みた発展をとげてきた。大学教育を取り巻く環境は未曾有の厳しい局面を迎へ、本学においても今後、変えていかなければならないこと、変えてはならないこと等の見極めが非常に大事であり、その重責を深く受けとめている。

エジンバラの花時計は100年の時を越え、今もその地で活躍し続け、神戸においては平成7年(1995)、阪神淡路大震災後に一時停止はしたが「よみがえれ神戸! がんばれ神戸っ子!」と書かれたプレートをつけて、見事な復活をとげた。本学の花時計は、今現在、その姿を見ることはできない。しかし、来春にはまた、生彩に富んだその姿を私たちの前に現してくれるであろう。

在学生、卒業生をはじめとする本学園に關係する皆様に、大学の「今」をお伝えするために創刊された学内紙『花時計』、今後も、新たに始動する花時計とともに、一步一步「季節の時報」を知らせていきたいものである。

(『花時計』第22号、平成19年7月)



○川村学園女子大学の正門左にある花時計(平成25年5月)

# バーナード・リーチと柳宗悦

Nakamura Kyoko  
中村恭子

I have seen a vision of the marriage of East and West.  
Far off down the Halls of Time I heard a childlike voice.

How long? How long?

Bernard Leach (1887-1979)

この意味深いことばを刻んだリーチの記念碑は、手賀沼を背に、我孫子市中央公民館東側に立っている。しかし、正確なリーチゆかりの地は、そこから見上げる北側台地の緑深い一角を占める旧柳邸であるが、現在は村山邸に変わり居住中なので、記念碑は手賀沼のほとりにそれと向きあって立てられた。我孫子をすみかとしたのは、柔道の祖と仰がれる嘉納治五郎が嚆矢で、柳宗悦の叔父にあたる。大正3年(1914)、宗悦・兼子夫妻が嘉納別荘の向い側に移り住み、その縁で、翌年には志賀直哉、その翌年には武者小路実篤とリーチが加わった。我孫子は白樺派エリートの拠点となり、文化創造の一中心地となつたのであった。リーチは柳邸に寄寓し、邸内の築山のような古墳の地形を利用して本窯を築き、大正8年(1919)に仕事場が焼失するまでの3年間、「我孫子時代」と呼ばれる初期の名作を生み出した。日中、土を捏ね、ろくろをまわした後の、白樺派のエリートたちと集う夜のサロンでの語らいは、どんなに楽しい刺激に溢るものであつたろう。晩年、リーチは「それは人生におけるなんとすばらしい時期だったことか!」と回想している。

バーナード・リーチは香港に生まれるや母と死別、京都の祖父母のもとで幼時を過ごし、10歳で帰国後ロンドン美術学校に学んだイギリス人芸術家である。ラフカディオ・ハーンの著書に感動し、再来日を夢見ていた時に、留学中の彫刻家高村光太郎と出会った。高村に助言を求めるに、リーチが日本語を知らないので心配しながらも名高い彫刻家の父に紹介してくれた。念願かなつたリーチは明治42年(1909)に来日、日本語を学びながら上野でエッチングを教え、イギリスから婚約者を呼び寄せて新居を構えた。リーチは友人富本憲吉と版画の合同展を開くが、これがきっかけになって陶芸に心を奪われてゆく。明治44年(1911)、六代目尾形乾山に師事して基礎から製陶法を学んだ。一方、その頃柳宗悦と知り合い、柳が編集する雑誌『白樺』同人に仲間入りしたリーチは、若い文化人たちと交流を楽しんだ。柳は当時キリスト教神秘主義を研究していたので、リーチはエックハルト、十字架のヨハネ等について語り、リーチはブレイクやホイットマンのような英米の神秘主義的詩人について語った。二人は共通の興味に結ばれ、親交を深めた。柳はブレイクやホイットマンの研究を進め、ブレイクの研究書はリーチに献げられている。我孫子の柳邸の一角に窯を築くよ

うに誘つたのは、このような実り豊かな交流と友情があつたからである。

柳宗悦はキリスト教神秘主義研究、心靈主義研究などを遍歴し、東洋や日本の神秘主義思想に回帰した。芸術と宗教が深く編み成されている世界に憧れていた彼の歩みは、宗教→芸術→民衆と進み、それらが重層を成して彼の思想を形成している。神秘的ビジョン／視覚的啓示から直感的美的発見と創造へ力点が移り、やがて、無名の陶工の作品のたくまぬ美に魅せられて、柳は民芸運動を創始した。柳によれば、芸術家の生み出す作品は仏教の説く「自力」の作品で、無名の職人が伝統的手法によって生み出す作品は「他力」のもたらす作品である。彼は「他力」による作品は成仏した物であり、その域に達しない芸術家の「自力」の作品より優れないと考えた。これは彼の仏教の浄土教の信仰に基づいた信念に他ならない。こうして、民芸と念佛信仰は、柳によって、ぴたりと重ね合わされた。その是非は大いに論議の余地があると思われるが、彼が昭和11年(1936)に設立した駒場の日本民芸館は、学生時代の私に日本の民芸の美のみならず朝鮮のそれを教えてくれた懐かしい場所である。朝鮮の民家で使われていた御飯茶碗の存在感に魅せられて以来、私は朝鮮の古陶磁器のファンである。

大正9年(1920)にリーチは陶芸家浜田庄司を伴い帰国、東洋式窯を築いて、イギリスでいったん途絶えた製陶法をよみがえらせ、東西の精神と伝統的手法の融合した境地を表す名作を世に送り、弟子を養成した。それは「東と西の結婚」が生んだ子であった。浜田は帰国し、益子を拠点に秀作を生み出し、リーチとの交流は終生続いた。戦後、来日したリーチは諸国の窯を巡って、そこに伝えられている伝統的陶芸の手法を学んでいる。リーチの作品にはイギリス人が愛する小動物をモチーフにしたものが多い。一筆書きのような線画がデッサン力の確かさを垣間見せてくれる。彼の作品はイギリス、日本はいうまでもなく世界中で愛蔵され、博物館、美術館などのショウケースに収められた物から、バブに展示される物まで、各地に点在している。晩年のリーチがもっとも好んだイメージは、記念碑に刻まれた巡礼者の姿であったといわれる。世界をひょうひょうと遍歴し続けた求道者リーチにとって、日本の伝統的巡礼者のイメージは印象的なシンボルであったと思われる。リーチの後年の回想録は『東と西を超えて』と題されている。

天神坂と呼ばれる住宅地の石畳の急な坂道を登っていくと、大正レトロ調の洋館の緑屋根が木立に見え隠れする旧柳邸にさしかかる。有名な声楽家柳兼子の居住中は、この辺りで彼女の声とピアノが聞こえたであろうか。椎の3本の巨木に因んで「三樹莊」と呼ばれた柳邸を訪れた水原秋桜子の一句がある。

三樹莊の 椎の実が降る 坂陥し

(『櫻』第7号、平成9年12月)

# 大学の教育を考える

Motoki Ken

元木 健

川村学園女子大学が、創設25年を迎えました。90年という歴史を有する川村学園のなかではもっとも遅れて設立され、ずっと新設の機関とされてきた本学が、今年すでに四半世紀という節目を経たということは真に喜びに堪えません。しかも、当初は文学部の一学部で発足しながら、今や三学部と大学院一研究科を擁する文系の女子 総合大学に発展したことを考えると感無量であります。



●優しく話しかける元木先生(平成25年9月)

私も高く評価しているところです。しかしながら、じつは今の日本では、大学のみならず小・中・高等学校をとおし、「教育」そのもののいかんが強く問われているのではないか。日本の「教育」という機能に対する、人びとの根本的な問い合わせです。すなわち、この近年の学校における、生徒間の「いじめ」、教師による「体罰」などの重大な人権侵害によって、きわめて深刻な不幸な事態が生じ、しかもそれを隠蔽し適切な措置を講じてこなかったとして、学校や教育行政機関に対して非難が集中し、それがやがて「教育はいかにあるべきか」、さらに「そもそも教育とは何か」という根本的な問いに発展してきているようにと思われます。

## 教育の根底にあるもの

第二次世界大戦後、東京大学に教育学部を新設するための中心的な役割を果たし、その後長く日本教育学会の会長として日本の教育学をリードした海後宗臣ときおみは、この「教育」について「人間にに対する愛から発し、対象となる人間を価値あるように成長させる社会機能である」と定義しています。このことについて私は、教育とはまずその根底に人間同士の愛と信頼があつて初めて成り立つ機能なのである、と解釈しています。今の日本の教育病理現象に対する人びとの学校や教育行政機関に対する非難の背景には、この「愛と信頼」という教育のもつとも根本的なものへの要望・要請があるのではないか。大学での教育も、教員の教授(ティーチング)の技術を高めるという努力だけでなく、その根源に学生に対する深い愛情が求められているものと考えます。さらに、それは教育の次元の問題だけでなく、今の日本の社会全体、国や地方での政治や行政においても、同様に(教育のようにすべてとは言わないまでも)求められているのではないかと思います。

## 建学の精神と アイデンティティ

### 教育とは何か

本学を含め今日の日本の大学をめぐる状況はきわめて厳しいといえます。各大学はその存続をかけて改革に努力を重ねています。今、私なりにその改革の方向を要約してみると、大学が学問の府としてだけではなく、人材養成の機関としての役割を十分に果たすこと、そのため大学の教育の機能いわば「教育力」を高めること、そして各大学が目標となる人材養成の独自性、すなわちその大学独自の教育理念を確立すること、つまり教育機関としての大学のアイデンティティを明確に示すことにある、といってよいでしょう。

この大学の改革の方向については、

そしてこのことは、じつは国内の問題だけではありません。今、私が非常に憂慮しているのは、最近の日本を取り巻く国際情勢です。第二次世界大戦後、世界の平和と人権を守るために機関として国際連合が設立され、教育・科学・文化の分野を担当する専門機関としてユネスコが設けられましたが、そのユネスコ憲章の前文の冒頭には、「戦争は人の心の中で生じるものであるから、人の心の中に平和の砦を築かなければならぬ」とあります。この「心の中に平和の砦を築く」ということについて、ユネスコの精神に基づく国際的な平和教育の運動においては、もし国民の一人ひとりが、一方的に相手の国を100パーセント悪いと決めつけるのではなく、たとえわずかでも、相手の国の立場、相手の國の人びとの言い分を聞いてみようという気持ちをもったならば、世界は救われる、と説いています。

### 「感謝の心」とは

そこで翻って、わが川村学園のことを考えてみると、本学園の建学の精神である「感謝の心」に行き着きます。この「感謝」とは、神や大自然に対する感謝、それは同時に大きな愛の心を意味しているものと思います。しかし、その大きな愛の心に少しでも近づくには、私たちの日々の生活のなかでの感謝の気持ち、その表現としての「有難う」という言葉から始まるのではないか。それは、相手の人の心を和らげ、安らかな心情を醸し出す言葉であるとともに、自分にとっても同様の作用を齎し、さらには相手の人にに対する思いやりの気持ち、相手の立場を考え、相手の立場に立って物を理解しようとする人間の善なる性の覚醒へと繋がっていきます。そして、それら日常の働きが積み重ねられることによって、やがて大きな愛の心へと昇華していくものと考えます。学園の創設者は、あの思想統制の厳しい第二次世界

大戦中も、「自由の精神」「平和の心」などという言葉を臆せずに使っておられた方だと伺っています。私は、感謝の心とは「愛と信頼」であると解釈しています。そして、これこそわが川村学園、そして川村学園女子大学の誇るべきアイデンティティ(存在証明)であると考えています。

## 大学教育の改善について

現在各地で進められている大学教育の改善への動きのなかで、教育学の立場からみて興味ある二つの試みについて取り上げてみたいと思います。一つは大学の教育力の向上に関して行われている問答型の授業であり、一つは大学の人材養成の一環として強調されているキャリア教育です。

### 問答型の授業

問答型の授業の淵源を辿ると、古代ギリシャのソクラテスの「対話」に行き着きます。ソクラテスは、師匠の役割は弟子に知識を教えることではなく、弟子が自ら真理を生み出す手助けをすることであるとしました。その方法は助産術とも呼ばれ、プラトンはそれを『対話編』という書物に遺しています。下って17世紀にコメニウス(チェコの教育思想家)は、自然主義・事物主義の立場から、「直感から概念」への理論(子どもが自ら知識を獲得する教育方法)を提唱し、『大教授学』という著書を刊行しています。コメニウスは、今日の視聴覚教育の祖でもあります。さらに、18世紀末から19世紀初頭にかけペスタロッチ(スイスの教育者)は、ルソーの教育思想の影響のもとに、直感から概念への過程を「観察—印象—表現」の理論として精緻化し、『ゲルトルート教授法』(のちに、開発教授法あるいは問答法と呼ばれる)などの著書を遺して、「近代教育の父」といわれています。なお、これら一連の教育方法論の根底にあるのは、「探究」という概念であると考えます。コンセプト

さて、上述の理論の系譜を受けて、今日の大学教育の改善にもっとも参考になると思われる近年の事例は、1950



○大学教育の改善について講演する元木先生(11号館中講義室にて、平成25年9月)

年代末から60年代前半に展開されたアメリカの新カリキュラム運動(科学主義教育)でしょう。これは、当時のアメリカの教育課程の全面的改定運動でしたが、従来の学校の教科を「ディシプリン」(学問)と呼ぶとともに、その学習の目的をディシプリンの構造の獲得にあるとしました。また、その構造の獲得に当たっては、児童・生徒自らが探究・発見の道を辿る「発見学習」「探究学習」という教育方法を採用しました。この新カリキュラム運動は、のちに失敗であったとも評されますが、それは、周到に準備された教材・教具のセットの利用などの努力にもかかわらず、結局子どもたちに難しそう、教師たちがこなしきれなかったということでした。しかし私は、この「発見学習」「探究学習」は、むしろ現在の日本の大学の授業に導入するのに最

適な方法であると考えています。それは、対象が中・高校生ではなく大学生であるというのではなく、大学の教師は、学問の探究を行う研究者であるという理由からです。大学の先生であるからこそ、その方法を展開できると思うのです。

### キャリア教育

1971年、当時アメリカ連邦教育局長官であったマーランドは、「キャリア・エデュケーション」という新しい教育政策を提唱し、以後30余年にわたり連邦教育局が先導してこの政策の実現に取り組みました。このキャリア教育とは、マーランドによれば「初等・中等・高等・成人教育の諸段階で、それぞれの発達段階に応じてキャリアを選択し、その後の生活のなかで進歩するように準備する組織的・総合的教育である」と定義

されています。そして、その背景には60年代後半から続くアメリカ社会の混乱——ベトナム戦争の長期化と反戦運動、広範な学園紛争と教育の荒廃、そして生産力の低下と失業者の増大、が挙げられます。すなわち、キャリア・エデュケーションは、当時のアメリカ社会再建に向けての抜本的な教育改革をめざしたものであり、また、ユネスコの生涯教育のアメリカ版ともいわれる総合的・統合的な教育政策です。このキャリア・エデュケーションは、「職業教育」と対比して論じられることが多いのですが、その場合、欧米では、職業教育は主として中等教育段階を対象とし、その修了者がつく職業のための教育という意味が強く、それに対し高等教育段階の教育は「専門教育」と呼ばれるのが普通です。キャリア・エデュケーションは、この職業教育・専門教育の区別をなくし、生涯教育のシステムとして捉えているところに特徴があります。

なお私は、キャリア・エデュケーションの中核となる概念は、「自己概念」(自己の客観的認知像)の確立・深化にあると考えています。すなわち、この社会のなかで自他との関係において自己を客観的に認識し、その認識を高めていくこと。言い換えると、自分とは何で、どういう特性を有し、この社会でいかなる役割を果たせる存在であるか、ということを常に問いかけられ、それを深化させていくことです。そして、その過程のなかで、社会におけるさまざまな職業(仕事)の存在を知るとともに、それに対応する自己の適性を自覚し、その段階に応じて必要な知識や技術の習得のための学習を行うのです。

今、日本では、長引く就職難と就業後のミスマッチなどの社会問題に対応して、もっと大学で直接職業に結びついた教育をすべきであるという論議もなされています。しかし、この論理をあまり強調しすぎると、大学に文学部や理学部は不要ということにもなりかねません。そのためには、大学での人材養成の意味、教養と職業(専門職を含む)の関係、各学部・学科の特性、主専攻・副専攻の在り方などについて明確にする必要が

あります。そのうえで学生一人ひとりのキャリア・デザイン(人生の設計)と、それに基づく適切な科目的選択を最大限に支援するのが、大学当局や教師の役割であることを確認することです。

最後に、上述のことと関連し、欧米の教育の伝統の根底にある思想として「一人ひとりを見る」「一人ひとりに応じた教育」という考え方方が存在することを述べておきたいと存じます。そして私は、そのことが日本の教育の在り方と決定的に異なる点であると思ってきました。しかし、川村学園女子大学に赴任して、その私の受け取り方を大きく改めなければならないと気づいたのです。

まず、発足時の本学の校舎には、他の大学のような大人数を収容する教室がありませんでした。当時は、大学といえばマスプロと思われていた時代に、徹底した少人数の講義や演習が行われ、また卒業論文の作成に当たって、学生一人ひとりに対するじつにきめ細やかな指導がなされていました。そして、やがて私はこれこそ川村学園の教育の伝統であることを

理解したのです。その一つの事例として、前理事長・学園長の川村澄子先生が、自白の幼稚園から短期大学まで、一人ひとりの幼児・生徒・学生の顔と名前を憶えていらっしゃるのを見て驚嘆したことと挙げられます。また後に、学園の創設者川村文子先生の生涯にわたる教育実践への探究と遺された業績を知るに及んで、これまで私が取り組んできた教育学の研究上の知見と一致することが多いことを、何よりも嬉しく存じました。先に私は、教育の根底を「愛と信頼」にあるとし、それは川村学園の建学の理念と結びつくものであると申しました。その具体的な表現として、この「一人ひとりの教育」があると考えるのでした。そして、それが私の大学退職後も高齢の今日まで理事として学園に居させていただいている理由でもあります。

大学の創立25周年そして学園の90周年を迎える川村学園そして川村学園女子大学が、その建学の精神に基づき今後さらに充実・発展することを、心から祈っております。

(平成25年5月記〈前半〉と同年9月の講演要旨〈後半〉)



# 一般教育を担当して

Ichikawa Hiraku  
市川比良久

平成4年(1992)4月、開学まもない川村学園女子大学の一般教育の担当教授として、我孫子キャンパスにまいりました。

すでに一般教育主任として竹端瞭一教授が活動されており、また当時お元気だった武田良一教授をはじめ田中一郎・斎藤幸子・谷林眞理子・小山久美子の諸先生、また人文担当の石川宏・中村恭子両教授と安藤隆弘・倉澤正昭両先生、自然担当の松谷天星丸教授と二上政夫先生、それに体育の森田玲子先生らにお会いしました。和やかな雰囲気の中で温かく迎えてくださったのが思い出されます。

私は、それまで約30年間、東京都立大学(現、首都大学東京)の理学部教授として、微生物を材料に分子生物学を専攻し、研究・教育活動を行ってきました。

本学の我孫子キャンパスにおいて、一般教育科目としての「生物学」をどのように充実してゆけばよいかという課題に取り組むことになりました。

平成4・5・6年度は「生物学」と「人体の科学」の2科目を担当しました。「生物学」は生物体を構成する生体物質の種類・役割を説明し、植物と動物の違い、さらに呼吸のしくみについて、一方「人体の科学」はホルモンの種類とその作用機作、および神経系や免疫応答、さらに生殖や遺伝情報の役割についてでした。

平成7年(1995)度から、これらの科目に「生物と環境」が加わり3科目を担当することになりました。「生物と環境」では、レイチェル・カースンの『沈黙の春』を紹介し、また生物とストレスの関係などを説明しました。この年から6年間、一般教育主任の責務を負うことになりました。

平成8年(1996)度からは、「生物学」の内容をさらに充実して「生命の科学」を開講することになりました。この科目はヒトの誕生とその進化を始め、細胞の出現とその発展などが取り上げられました。また総合講座として「自然と人間」がスタートしました。

このように生物や人間に関連した科目が次々に開講できたのは、一つには学園の一般教育に対するサポートと理解が深いためであり、一つには私自身研鑽を惜しまず努力したためと自負しています。

平成4年から平成12年(2000)までの9年間を一般教育担当教員として、その後の2年間は共通教育科目担当教員として情報教育学科に所属し、また同時に図書館長として大学に在籍できましたのは、私にとって誠に幸いありました。

最後に少し長くなりますが、本学図書館報『櫻』第11号(平成13年12月)に綴りました「目から鱗(うろこ)が落ちて」という一文を掲載させていただきます。

ある事をきっかけとして、急にものごとの真相や本質

がわかるようになることを諺で「目から鱗が落ちる」といいます。

私の場合、とくに印象的だったのは、30年前に一つの解答を求めていた時でした。多様な生物がそれぞれそのような仕組みで生きているのだ



●市川先生(平成7年)

ろうかという疑問をかかえ、文献をあさり模索を続けた末にレーニンジャー博士の名著『生化学』に出会ったのです。細胞の基本的なはたらき(呼吸、代謝、エネルギー生成機構等々)が分子レベルで明確に説明されました。生物の全体像がはっきりと見えてきたのです。あらゆる生物が人を含めて共通のメカニズムを使って生きていることが理解されました。まさに目から鱗が落ちる思いでした。縁遠いと思っていたバクテリアが身近な存在に感じられたのです。

20世紀に入り、科学技術の進歩が著しく米国で多種類の化学合成物質が大量に生産されるようになりました。あるものは私たちの生活に利用されましたが、他方害虫をやっつけるためにDDTなどの合成殺虫剤などが幅広く使われ、とうとう生態系を脅かすようになりました。1962年、レイチェル・カースンは『沈黙の春』を発表しました。昆虫を殺す物質ならば当然他の生物にも害を与えるはずではないか、何故事前によく調べてから使用しなかったのかと抗議したのです。彼女の警鐘によって、環境問題に多くの人びとの関心が集まるようになったことはご存知の方も多いと思います。

このごろ、人命を軽んずるような悲惨な事件がよく発生するよう思えてなりません。私は、いのちの仕組みを少しでも理解すれば人間と人間の互いを見る目が変わってくるのではないかと思います。すなわち、これは人間そのものをよく知ることにつながると思うのです。そして、人間と他の生物とのつながり、親しみにも通ずるのではないかでしょうか。

情報化社会のなかで、情報の収集・交換・利用は欠かせないものであります。その一方で自己の真実に向かい合い、内なる充実をはかることも考える必要があります。人間の営みのすばらしさに共感しつつ、幅広い教養を身につけるよう心がけたいものです。

終わりに、立派な設備、多数の蔵書をそろえた本学の図書館を大いに活用し、目から鱗をどしどしださるように願っています。

(平成25年5月記)

# 川村学園女子大学図書館の変遷



●開学時の図書館(2階)  
(昭和63年4月)



●開学当時の図書館閲覧室(昭和63年)

●8号館に移ったころの図書館閲覧室(平成3年)



川村学園女子大学は、開学以来より充実した大学をめざし、学部を増やしてきました。それに従い校舎も増設され、設備の改善を図ってきました。図書館も蔵書の増加にともない、二度の移転をしています。

昭和63年(1988)4月、開学と同時に図書館も開館しました。場所は、現在の「学生支援オフィス」がある2号館の2階フロアで、そのとき1階は学生食堂になっていました。階段を上がってドアを開けると、正面にカウンターと事務室があり、閲覧室と開架書架が左右に分かれてありました。そして現在その場所は、第1中講義室と第2中講義室になっています。

開館当初の図書館員は2名、座席数170席、蔵書1万3000冊。すべて開架で、蔵書検索のための目録はカード目録だ

けです。コンピュータは、管理用1台と貸出・返却用1台の2台だけでした。学生用のコンピュータはこの時点ではまだ1台もありませんでした。視聴覚コーナーもありましたが、ビデオデッキが16台とカセットデッキが2台だけでした。現在はDVDやブルーレイなど合わせて27台ありますから、今とはずいぶん違っていました。

開学から3年後の平成3年(1991)、教育学部が設置されたのと同時に、図書館は8号館へと移りました。現在のカフェクレインや売店があるフロアです。その移転では、手作業で図書を2号館2階から8号館1階へと運びました。アルバイトの男子学生も逃走するほど大変な作業でした。

そのうえもっと大変なことに、図書館の運用形態も変わりました。8号館の図書館では、ほとんどの図書を閉架書庫に入れることになったのです。そのころには蔵書も3万5000冊に増え、図書館員も4名になっていました。ただ閉架書庫になったため、利用者からの「図書請求」に応じて、館員が書庫に図書を探しに行かなくてはならなくなつたのです。これはかなり大変な作業となりました。8号館には8年間、図書館がありました。



● 11号館の図書館棟「黄鶴館」(平成25年10月)



● 図書館棟3階の閲覧室(平成11年10月)

したが、その間に蔵書も12万冊に増え、ビデオデッキも21台になっていました。

そして、開学からちょうど11年目にあたる平成11年(1999)に、現在の11号館に念願の図書館棟「黄鶴館」<sup>こうかく</sup>が竣工されました。この名前は、当時の学園長川村澄子が、李白の詩「黄鶴樓」からの引用で命名されたものです。黄鶴楼の襖絵に描かれていた金色の鶴が笛の音に合わせて大空に舞い上がったという故事にちなんで、学生たちが学問を終え、志高く飛翔してほしいという願いが込め



● 図書館棟2階のマルチメディア室  
(平成12年10月)

られています。

新しい図書館は、入館者も毎年増えています。年間来館者数が8万4000人、1日の入館者数が、一時は500人を超すほどになりました。

また、我孫子市の市民図書館と提携して、我孫子市民の方にも大学の蔵書が利用できるように、地域開放をいたしました。同時に、東葛地区の5つの大学が、相互協力を前提とした「東葛地区大学図書館コンソーシアム」を立ち上げました。今では利用者も増加して加盟大学数も7大学に増えています。

そして、忘れてはならない出来事として、平成23年(2011)3月11日の「東日本大震災」があります。図書館では、書架にあった13万冊の図書のうち8割の本が落下してしまいました。図書館員も途方に暮れる惨状でしたが、いち早く駆けつけてくれ教職員の方々、ボランティアで集まってくれた学部生や大学院生の協力のおかげで復旧作業を進められ、

やっと5月の連休明けに開館することができました。

初代の図書館長石川宏が、図書館報『櫻』の創刊号に次のように書いています。「大学に於ける図書館の機能は、単に書物を閲覧する場を提供するというだけではなく、図書に関するあらゆる情報を迅速且つ適確に伝達する使命を帯びております。」

現在の図書館の蔵書数は、約23万冊になり、開学当初の20倍となっています。また、開学当初は1台もなかった、学生が自由に利用できる端末の数も20倍になりました。電子ジャーナルなどのデータベースも導入されて、ますます充実しています。

黄鶴館は高度情報化社会に対応した大学に相応しい図書館として、現在も学生たちに親しまれ、大いに利用されています。



●東日本大震災によって落下した書架の本(平成23年3月)

## 読書論

Ishikawa Hiroshi  
石川 宏

かつては、多くの哲学者や文人たちには、自己の経験にもとづいて読書はいかにあるべきかを述べている。ある人は「人生は短く読む本が多い今日、良書の選択が大事である。良書の選択については、先ず古典的名著を読むべきである」と説き、またある人は「時間と空間を超えて、なんの束縛もなく偉人に接し得られるのは読書である」と語り、更には「読書はいわば一つの精神的技術であり、各人の気質に従って個別化されねばならない」と書いている。そして更に読書の注意として、「ゆっくり読む、繰り返して読む」「心をむなしくして、その書物のなかに没入する」「自分の根本信念なり思想によってその書物と対峙すること」「批評精神を忘れないこと」などを列挙する人もいる。そのいずれもが人生を豊かにする一つの手段として読書を取り上げている。

ところで今日1年間に出版される新刊は約3万点を超え、発行部数は10数億冊、その他雑誌や個人誌等を併せると国民1人当たり約40冊を読む計算になる。私たちのまわりには書物は溢れているのに、実際「読もうという書物」が見当たらぬ。いわゆる「豊かさのなかの不幸」が現実なのだ。そして読



●図書館カウンター越しに石川館長(右から2人目)と図書館員(平成3年11月)

書離れは、ラジオ・テレビによってますます増幅されて「本は読まぬがテレビは見る」という活字離れの現象をかもし出している。この傾向は更に拍車がかけられていくことは目に見える。せめて「読書する」という気持ちだけは忘れてはならない。中国の文学者、林語堂は「眞の読書法とは何か、答は簡単である。氣分がむけば書を手にとって、これを読む。ただそれだけのこと。読書を心から楽しむには、どこまでも気のむくまでなければならない」と。私たちは少なくともこの姿勢を取り戻さなければなるまい。

(『櫻』第4号、平成7年6月)

# 本の楽しみ

Bito Masahide  
尾藤正英

文学部が発足してまもなく、2年目ぐらいであったろうか、5月に新入生のために蓼科で行われるオリエンテーション・キャンプの計画の中に、学生が希望する本をめぐって、感想や批評を語り合う会を、夕食後にいくつかのグループに分かれて、教員と学生とで開くことが、そのころは例年の行事になっていた。その年に学生たちの方から提出された希望書目のなかに、『モンテ・クリスト伯』があって、参加する教員数人の間で、どれを担当するかを話しあったとき、私はそれを選んだ。原作はいうまでもなく、19世紀半ばに、A・デュマが書いたフランス大衆文学の名作であるから、日本史が専門の私などが出る幕ではないのであるが、何しろこの小説には10代の私が感激して読んだなつかしい想い出があるし、主人公エドモン・ダンテスが幽閉されたシャトー・ディフ(イフ城という島)には、1971年にヨーロッパ滞在中、マルセイユから観光用の小舟で渡ったこともある(さすがに西洋史の先生方でも、実在のシャトー・ディフはご存じなかった)ほど、熱をあげていたので、早速それに飛びついたのである。原作はかなり大部で、現在の岩波文庫本では、7冊で、1冊が500円以上もするから、学生がそれを読んでいるとは思われず、せいぜいダイジェスト版の知識であろうが、それでも構わない。私がかつて読んだのは、岩波文庫と同じ山内義雄訳で、ただしこの文庫本が出るより以前、昭和2年から3年にかけて出版された新潮社の世界文学全集に収められた2冊本(下巻は大宅壮一訳)で、昭和初期のいわゆる円本である。そのなつかしい全訳本を、たまたまそのころ荻窪の古本屋で安く売っていたの入手していたこともある。

この小説に私が感銘を受けたのは、後から考えてみると、西洋人の復讐とは、こんなに徹底したものか、という発見に要約されるようである。日本人も復讐の物語は好きで、だから忠臣蔵に根強い人気があるのだろうと思うが、ダンテスが自分を欺いた友人たちに対して加える復讐は、残酷といってよいほどきびしいもので、その痛快さにこの小説の魅力があるのであるが、少年時代の私は、その面白さを通じて、日本人とは異なる西洋人の心にふれていったようであり、そのことが私自身の西洋に対する理解の出発点となっていたように思われる。

そのような個人的な経験も含めて、学生たちと語り合うことを楽しみにしていたのであったが、実際に夜の読書会に行ってみると、集まった数人の学生の誰もダイジェストさえ読んでおらず、この本を提案した学生本人は、キャンプに欠席しているという有様で、がっかりして雑談をしただけで解散する始末となった。その後味も悪かったが、それ以上に損失を感じられたのは、キャンプへ行く前に、準備としてこの小説の2冊本を読み始めたら、途中で止められなくなってしまった二、三



●尾藤ゼミ(平成9年6月)

日の間かなりの時間を、それに使ってしまったことであった。

ここからが実は本題なのであるが、読み始めると面白くて止められなくなってしまう本というのは、本がいくらかでも好きな人なら、誰にでもいくつかはあるのではないか。たまたま前記の読書会が、そのきっかけになっただけで、別に学生が悪いことをしたと言いたいわけでもなく、『モンテ・クリスト伯』の世界に、いわばのめりこんでしまった私自身の方が問題なのである。損失といえば、その通りで、研究論文を書くべき時間を無駄にしたことになるのだが、いくら研究者だからといって論文のことばかり考えていられるものではない。単調な研究生活のなかで、時に脱線することも許されてよいであろう。脱線の方法もさまざまであろうが、私のように趣味の乏しい者にとっては、昔なつかしい愛読書の世界に没入することは、それを初めて読んだ少年時代や青年時代の想い出がよみがえってくることも含めて、大きな楽しみである。イギリスでは、ディケンズの『クリスマス・キャロル』や『二都物語』などがあるし、日本の小説なら、やはり夏目漱石の『吾輩は猫である』『三四郎』『それから』などを挙げたい。漱石が好きだという学生に、どの作品と聞くと、『こころ』とこたえられることが多いが、私には不思議でならない。『こころ』や『道草』は、重厚な傑作ではあるが、その作品の描いている世界に共感するためには、かなりの人生経験を必要とするようと思われるからである。私自身、『それから』などの世界には自然に入って行けるが、『こころ』ではそうはいかない。第一、話が暗すぎる。

まあ、どれを愛読書にするかは、個人の好みであるから、どうでもよいことで、ともかく仕事や勉強に疲れたり、人間関係のうえで悲しくて辛いことがあったときに、その本を読んでいると、何となく悩みを忘れて、元気が出てくるような本(小説には限らない)をいくつか持つことができたのは、私自身としては幸せであった。現実だけがすべてであるような人生は、何となく寂しい。現実を離れ、現実のなかの自己反省するためには、自己ではない自己が生きる夢の世界が必要であり、本を読み、愛読書にめぐり会うことによって、私たちはその夢の世界を自己のものとすることができるのではないか。

(『櫻』第7号、平成9年12月)

# 今、問われる女子大学の役割とは

## 川村学園女子大学の設立時をふりかえって

公益財団法人人文教協会常務理事  
Toyoda Saburo

豊田三郎

——川村学園女子大学創立25周年にあたり、大学設立当時のお話からお聞かせいただけませんでしょうか。

まず、大学創立25周年おめでとうございます。川村学園女子大学が認可された昭和62年(1987)当時は、第二次ベビーブームの影響で18歳人口は平成4年(1992)の205万人を頂点とし、その後は急激な下降線をたどり、120万人台の人口で推移し、いわゆる「18歳人口氷河期時代」を迎えることとなりました。

当時文部省は、基本的には大学の新增設は認めないと厳しい方針のもと、認可申請が厳格に行われていたように記憶しています。このようななかでの大学新設であり、当時の理事長・学長であった川村澄子先生、事務局長の川村正澄先生らのご苦労は大変なものがあったと思います。

——当時の大学設置認可基準は、現在よりハードルが高かつたと聞きますが。

そうですね。近年は認可申請の条件が緩和され、当時と比較するとだいぶ変わりましたね。具体的には、審査期間の短縮(20カ月→8カ月)、校地基準面積の緩和(校舎面積の6倍→3倍)、校地・校舎の自己所有要件の緩和(すべて借用可)、設置

経費の財源要件の見直し(有価証券による保有可)等につづぎと規制緩和が図られ、抑制方針であった大学の新增設は、規制緩和の観点から撤廃されました。

——千葉県我孫子市という地域に設立したことについて、お伺いしたいのですが。

当時は、工業(場)等抑制法(国土庁)という法律がありまして、首都圏および近畿圏の一部の区域内にある大学等は教室の新增設に制限がかかり、新たな計画を持つ大学は郊外に移転せざるをえない状況となりました。

中央大学が八王子市に、青山学院大学の一部が神奈川県厚木市に移転するなど、同様に本学の大学設置も豊島区目白のキャンパスでは大学の新設は認められず、校地を郊外に求めざるをえない状況でした。

また、我孫子市の地に選定されたのは、当時の千葉県知事や我孫子市長、柏市長、松戸市長など地元自治体から大学の誘致に向けた強い要請があったと聞いております。そのような経緯をふまえ、地域からの社会的要請を受け入れ、この場所に決定されたのではないでしょうか。



●開学当時の詳細を語り、今後の提言をしてくださる豊田三郎氏(平成25年3月)

**——そのように大学設置の厳しい時代に、川村学園が4年制の大学を設置できたのは、どのようなところが評価されたのでしょうか。**

当時の大学新增設は2年審査で、申請する大学は大変であったと思います。1年目は大学設置の必要性があるか否かの審査で「不可」でなければ、2年目においてカリキュラム内容や教員の資格審査、校舎等の実地審査等をへて「認可」ということになるわけです。

本学の1年目の審査では、その設置計画の妥当性について大学からは理事長の川村澄子先生ら出席のもと審議会でヒヤリングが行われ、とくに創立者川村文子先生の建学の精神である「感謝の心」「自覚ある女性」「社会への奉仕」が設置計画の趣旨にどのように反映されているか。また帰国子女の受け入れに積極的に対応するとあるが、その具体策。学生確保の見通し(付属高校との関係)、地元自治体からの社会的要請等が議論されたように記憶しております。

**——川村学園女子大学が設立されたのはバブル景気の最中でしたが、その後、バブルがはじけて女性の就職が厳しくなりました。このような時代に4年制の女子大学が社会に果たす役割については、どのようなお考えをお持ちですか。**

少子化の影響や世相を反映した“共学志向”が高まるなかで、女子教育や女性論にかかる理念をどのように希求するかは、やはり女子大学である本学の強みであると考えます。

今日、女性の労働環境は、男女雇用機会均等法の制定や男女共同参画社会の促進等でポジティブアクションが実施され、就業機会の拡大や女性管理職への登用など時代の潮流となっていました。また、今回政府は「若者・女性活躍推進フォーラム(2013)」のなかで、成長戦略の中核として「女性」を位置づけ、女性のなかに眠る高い能力を十二分に開花させ、その力を發揮していくことが、我が国の経済社会や地域経済の再生・活性化に大きく貢献するとの提言が出されるなど、まさに女子大学の出番です。今後はその提言の実現に向けた政府からの諸施策をタイミングにキャッチし教育研究の場に反映させることこそが女子大学たる使命と考えます。

**——今後は、この大学をどのように発展させていくのがよいと思われますか。**

大学新增設の抑制方針は撤廃されたものの、すべての大学

で大学教育での質的保証に向けて、問題意識と危機感を共有し、教育力や授業力を高めて欲しい旨、中央教育審議会から答申がありました。

本学も学生確保による経営の安定化を図るとともに、本学の特色を生かした女子教育を展開し社会に貢献できる人材養成に努めるべきと考えます。当面は現有の規模を基軸に校地校舎等の規制緩和(借用可)を受け、利便性と学生確保に期待できる目白キャンパスでの教育・研究活動の展開、そして併設校との接続強化を図り、「高・大連携」の推進により優秀な内部進学者を確保する方策の検討が必要と考えます。また、女性の社会進出を後押しするためにも、国家資格などの資格付与ができる特色ある女子大学に変わることを期待します。

(聞き手=梅村恵子、平成25年3月4日)





第

# 3

章

# 学部・学科 の あゆみ

活力あふれる  
我孫子キャンパス

## 大学は文学部から スタートした

### 一学部での発足

昭和63年(1988)4月6日、東京都豊島区目白の学園本部講堂で厳肅なかにも和やかな入学式を前日に終えた新入生252名が、初めて我孫子キャンパスに登校しました。英語英文学科100名、史学科50名、心理学科60名の一学部三学科210名定員という小規模な大学の発足です。プロムナードに植えられた櫻の並木は、かほそいながら芽吹きの若葉を茂らせて新入生を迎えるました。このとき、日本はバブル景気のまつた中にあり、また、戦後生まれの団塊の世代の子供たち、“団塊ジュニア”が大学進学を控えた時期です。東京の近郊に設立された名門川村学園の大学は受験生の期待も高く、第1期の新入生は、川村の内部生が三分の一ほど、それ以外は関東一円、遠く東北・北陸・東海地方などから高い倍率の入学試験を突破した学生たちでした。

英語英文学科と心理学科には川村短期大学から移籍した教員が数名おり、川村学園の学風や学生気質を熟知していたので、その運営方針を主軸にしながら、そこに史学科教員のもつ他大学の教育理念を組み込むかたちで、教務・学生課職員に加え各学科の助手(現、教務補助)が学生の勉学はもちろん、課外活動、学外生活のサポートを行う体制が整えられました。三学科ともそれぞれの特色を生かしながら、入学時の入門・概説的講義から、専門性の高い特殊講義や演習をこなし、卒業論文を書き上げて卒業にいたるという課程の基本は、現在まで変わっていません。各学科共通して外国语の修得を課し、卒業論文ないし卒業研究を必修とするこのカリキュラムは、現在ではやや古典的な履修スタイルになっている感もありますが、この基本方針は文学部のみならず、全学の修学モデルとなり、川村学園女子大学の特色であると、対外的に謳うようになっています。

### 三学部体制のなかで

創立の翌年、年号は平成と改元され、1期生の卒業式のころは、“バブル崩壊”的の声が聞こえはじめ、のちに“失われた20年”と呼ばれる大不況に足を踏み込みはじめます。さらに追い打ちをかけるように、平成7年(1995)1月、阪神淡路大震災が起こり、同年3月には地下鉄サリン事件が世間を騒がせます。幸い両事件で当大学に直接の被害はありませんでしたが、ボランティア活動、寄付の呼びかけなど、学生と教職員

が一体となって参加しました。

この間、大学では単学部大学のデメリットを解消し、新たな需要を喚起するために、平成3年(1991)に教育学部が、平成12年(2000)に人間文化学部が増設されます。しかし、不況と同時期に訪れた“少子化”傾向のなかで、文学部の体制に搖らぎが生じはじめました。三学部とも“文系”教養主体の学部であることから、学部・学科の特質がみにくくなつたためです。この対策のために、教務委員会、入試委員会を中心に、各学科のディプロマ・ポリシー、カリキュラム・ポリシー、アドミッション・ポリシーを明確にすることと、逆に各学科のもつ各種資格の取得を全学に開くことなどの改革が行われ、文学部でも学芸員、司書・司書教諭、小学校教員、日本語教師などの資格取得が可能になりました。文学部の学生にとって、従来からある教員資格に加えて、これら他学部の資格を取得することは時間的にも能力的にも難しいことはありますが、それでも挑戦する学生は大勢います。この資格を生かして社会に出ていく学生は残念ながら少数派ですが、資格にチャレンジしたこと、その資格を得たということは、彼女たちに確固とした自信と拠りどころを与えていくようです。

### 時代の波を越えて——大震災と “原発”事故

平成13年(2001)にアメリカ同時多発テロ、平成15年(2003)にイラク戦争、平成25年(2013)のシリア危機などアメリカとイスラム圏との対立が続き、平成19年(2007)にはリーマンショックに続く世界金融危機。また、韓国・中国・東南アジアのめざましい台頭をよそに、日本経済の沈滞は続き、若者が閉塞していく社会のなかで、“就職氷河期”と呼ばれる現象が収まる気配はありません。

このようななかで、平成23年(2011)3月11日がきました。大震災・津波に続く福島第一原子力発電所事故は、本大学にも計り知れない影響をもたらしました。学生・教職員など本学関係者に直接の被害がなかったことは何よりでしたが、ご家族・親戚・知人などで被害にあわれた方はおり、大学では、目白での卒業式を急遽中止し、我孫子の地での学位授与のみ行いました。卒業生は平服で参加、なかにはそのまま被災地に向かう者もおりました。被災地の悲惨さに比べればものの数ではありませんが、大学でも、図書館の書架が倒壊、

図書が床に散乱し、教員の研究室内の書物や機材が落下したり、建物にひび割れやゆがみが生じたりといった被害はありました。しかし、本学にとってもっとも甚大な被害は、“原発”事故による風評被害にあるでしょう。我孫子市が、福島県と同じJR常磐線沿線にあり、ホットスポットが取りざたされたこともあってか、平成24年(2012)度の受験生は大幅に落ち込みました。

このような暗いニュースのなかで、震災当日、たまたま構内にいた学生や教職員のとった冷静な行動や、学内被害の後片付けに率先して働く学生たちの姿、またボランティアとして活動した卒業生の消息など、この震災がもたらしたプラスの側面があったことは、今後の大学の運営に大きな資産となることでしょう。



●心理学科の大熊保彦ゼミ(平成18年6月)



●能楽師に能面をつけてもらう史学科の学生(平成25年6月)

# 国際英語学科

Department of English

## 英語でものを考え、 プレゼン力を養う

### 門出——希望と不安を抱きながら

昭和63年(1988)4月5日に、大学の文学部の第1回入学式が行われました。昭和最後の年でした。瀬戸大橋が開通するなど、日本はバブル景気の残照のなかにいました。大学は我孫子で文学部だけの開設でした。芝生にはウサギがとびはね、夏の夕方には周囲の田からのカエルの合唱で授業が中断、また裏庭には雛のつがいが巣を作るなど、じ

つのどかな風景のなかでの門出でした。

英語英文学科では1組と2組あわせて120名の新入生を迎えるました。教員も学生も希望と不安を抱きながらの門出でしたが、5月の蓼科山荘で実施されたオリエンテーション・キャンプで、散策、体育館でのドッジボール、読書会をおして教員と学生は親しくなり気持ちが一つになりました。学科は英米文学、

英語学、英語教育、ネイティヴ教員による英会話などバランスのとれた授業を用意しました。伊東好次郎科長を筆頭に、教授には都留久夫、岡鈴雄、黒川樟枝、助教授には田中淑子、羽鳥百合子、フランシス・ボーシャ、講師にはラリー・ハンソン、熊谷園子、武田正實と専任教員は10名、そして多くの非常勤講師と教員構成も充実していました。開学当初は、さまざまな大学から着任した先生方の間で必ずしも学科構想が一致していたわけではありません。しかし、昼休みや授業後の談笑、科会などをとおして英語英文学科の方向性が徐々に決まっていきました。また、学生と教員の連絡を円滑にしてくれたのは、短大で助手をしていた松原知代子と短大的家政科を卒業したばかりの高橋三輪の2名の助手で、松原はその後講師となり、その代わりに第3期卒業生の松山聖子が入りました。

### 国際英語学科への道

バブル景気の崩壊から始まる経済不況のなかで、英語英文学科の卒業生も就職をめぐって悪戦苦闘していくことになります。

英語英文学科は創立以来10年間は定員以上の学生を確保し続けました。これは、伊東、岡、都留歴代三科長の尽力によるところが大きいと思われます。平成元年(1989)にオックスフォード研修が始まり、平成7年(1995)には川村英文学会を立ち上げました。「ニューズレター」と『川村英文学』を毎年発行、9月には大会を開き、学外から招聘した講演者の話や卒業生の体験談を聞くというユニークな学会です。また学生によるスピーチ・コンテストが学園祭の恒例のイベントとなりました。幸いなことにカリキュラムもあまり変えずにきましたが、創立から10年の間に、教員の世代交代が進みました。伊東、都留、岡が定年退職、武田(正實)、ハンソン、ボーシャ、コリン・トムズ、松原が転職しました。この間、筑波大学大学院博士課程から菱田信彦が、また短大英文科や一般教養課



●蓼科(霧ヶ峰)での  
第1回 オリエンテー  
ション・キャンプ  
(昭和63年5月)



●開学当時の英語英文学科の学生研究室に集う先生たち



●ボーシャ先生とゼミの学生たち(平成10年6月)



●スピーチ・コンテスト(3号館にて、平成13年10月)



●語学研修のニュージーランドのオークランド大学での授業風景(平成25年3月)

程の解体にともなって、一般教養課程から齋藤幸子、谷林眞理子、佐藤浩子、短大から武田良一、田中一郎、東田敏夫、鈴木賢司、手塚裕子、観光文化学科から長島一比古、小山久美子が移籍し、そしてネイティヴの先生もゲイ・ブランカー、ウィリアム・キスチャックへと交代されました。助手(教務補助)も短大英文科卒の青田美奈子、その後、英語英文学科第7期生の上田(旧加藤)あさ子へと交代しました。

しかし、平成11年(1999)の99名の新入生を境に100名の定員を維持するのがしだいに困難になってきました。厳しい世界不況のもと、日本が国際経済のなかで生き残る手段として、英語教育の見直しを迫られたのに加えて、少子化が進んだことに原因の過半はあったでしょう。学科としてはこの問題に真剣に取り組み、平成13年(2001)にニュージーランドのオークランド大学での4週間の語学研修、さらに将来を見据えて平成14年(2002)に「児童英語指導員養成コース」を導入しました。さらに平成16年(2004)に科名を国際英語学科と変更し、定員は1クラス編成の70名として、あわせて大幅なカリキュラム改訂を断行しました。国際社会のなかで「役立つ英語を教える」ことが基本方針です。まず「使える英語」の育成を考慮して1、2年生の英会話を“English in Action”と変更しました。1クラス10数名の編成で週2回ネイティヴの教員による「耳から聞いて話す」を徹底しました。2月～3月にかけて行うニュージーランド研修は“English in Action”を補強するかたちとなりました。

1年生の“English in Action”では、英文を暗誦し、そのプレゼン力と発音の美しさを競うレシテーション・コンテストを実施、2年生では自分で選んだテーマを英語で口頭発表させました。学生に圧力をかけるのではなく心配されましたが、おおむね学生には好評であり、彼らは英語の習得を楽しむようになり、英語力に自信をつけていきました。ところが英語で語る内容がないとか、海外

研修で日本のことや文化を英語で説明できないという問題が起きました。2年生の演習を国際文化演習、言語学演習、国際コミュニケーション演習の3コースに分けて、学生はまんべんなく履修するように改訂しました。とくに、諸外国の社会・経済、さらに文化・習慣を習得し、国際社会を舞台に英語を駆使する意味を自覚してもらうための選択科目を増やしました。また、副専攻やクロスオーバー学習をとおして、日本について知識を深めるように指導しました。平成12～17年(2000～2005)まで科長を務めた黒川は、科名変更やカリキュラム改訂で苦労しましたが、学生生活の充実にも気を配りました。1年生のためのオリエンテーションでは、在学生による歓迎スピーチが英語で行われ、2年生には全員で観劇鑑賞を、3年生の夏休みはゼミ合宿を行うようになりました。

## 英語教育の未来へ向けて

小泉(純一郎)政権(平成13～18年)以降の自民党政権は安定せず、平成18～21年の3年間に安倍(晋三)、福田(康夫)、麻生(太郎)と首相が代わり、その後を引き継いだ民主党・社会民主党・国民新党の連立政権の鳩山(由起夫)、菅(直人)、野田(佳彦)内閣も短命に終わりました。さらに弱体化した日本を東日本大震災が平成23年(2011)3月11日に襲い、地震と津波の被害を受けた福島第一原子力発電所の炉心が溶解し、日本を絶望と不安のなかに陥れました。

平成18年(2006)に初めて1年生600名の定員を確保できなくなった大学では、「女子大学とは何か、その任務は何なのか」を問い合わせる必要が生じてきました。国際英語学科も例外ではなく、まず取り組んだのは、学生の英語力の客観化と、その力が学外および海外でも通用することを証明することでした。就職のさいのエントリーシートにTOEICスコアの記入を義務づける会社が多くなるにともない、1年生から年2回春と秋に学生全員にTOEICテストを実施、追跡調査を始めました。そのために習



● 熊谷園子先生(前列中央)を囲んで、羽鳥百合子先生(左)、田中淑子先生(右)、英語英文学科第1期生(平成6年3月)



● ユニバーサル・スタジオ・ジャパン(大阪)にて、熊谷ゼミの学生とエンターテイナー(平成15年9月)

熟度別の「キャリア・イングリッシュ」のクラスを設け、学生たちは就職に向かって頑張りました。また、国際英語学科というからには長期に留学できる制度がほしいという在学生や高校生からの要望に応えて、「インターナショナル・プログラム」が開設され、留学資格テストIELTSに備えました。平成19年(2007)にはイギリス南東部のチチェスター・カレッジに半年、そして平成23年(2011)には当大学と学術交流協定を締結し、成績優秀な学生が1名、交換留学生として留学できるようになりました。留学した学生は海外の同年代の若者と交流して、日本を外から見るばかりでなく、自立の精神を養い、帰国してEIAのク

ラスを補助するなど、学科に活気をもたらしました。しかし残念なことに、3年生の秋から始まる就職活動や保護者の負担がネックになり、留学実施は年々難しくなっています。

学科の学生全員が英語でのものを考え、それをプレゼンできる力を養うという目標を達成させるため、平成19年から学園祭で1年生にはレシテーション・コンテストの成果を、2年生にはパーフォマンスの成果を発表してもらうことになりました。なかには我孫子市国際交流協会主催のスピーチ・コンテストに参加し優勝する学生も現れました。3年生はゼミで発表力を養い、4年生は9月に卒論のレジュメの口頭発表を大教室で行い



● ブランカー先生とイングリッシュサロンで(平成23年11月)



● 授業終了後、キスチャック先生と(平成24年5月)



● 合同ゼミ合宿(三浦海岸・MAHOLLOVA MINDS  
本館前にて、平成21年9月)

ました。これはさらに発展し、平成25年(2013)2月には各ゼミから卒論をプレゼンするまでになりました。

また、学科の担う全学の1、2年生の学生が履修する共通教育の英語に関しても改革を行いました。さまざまな入試方法で入学してくる学生を学科別に教えるのではなく、能力に応じてクラス編成をし、同じ曜日、同じ時間に一斉に授業を行い、テキストや授業方法に公正を期しました。

平成19年(2007)には開学当初からの羽鳥が、平成21年(2009)には鈴木が転職し、平成22年(2010)に齋藤が日本文化学科に移籍しました。平成17年～23年まで科長を務めた田中がやり残したことは、平成23年(2011)から始まった小学校の英語授業の必須にあわせて、国際英語学科の学生に対して小学校教諭の免許取得への道を探ることでしたが、これも幸い平成25年(2013)に実現させることができました。国際英語学科はグローバル社会での有効なツールである英語を扱うゆえに、もろに時代の変化を受け、その対応を迫られてきました。しかし、どんなときも学科は、学生の様子をよく観察し、悩みがあるようなら、それを聞き、勉強に行き詰っているようなら、最適な方法で導くという教員たちの情熱、そして英語を使って社会で活躍したいという学生の向上心に支えられていました。平成16年(2004)の抜本的なカリキュラム改訂から10年経った今、国際的に活躍する卒業生がしだいに増え、国際英語学科という科名にふさわしい学生を育ててきた実績とともに、今後の学生たちの一層の活躍に期待したいと思います。

## 研究余滴

Kurokawa Kusue  
黒川樟枝

去る5月の連休明けに、中世研究の国際会議に出席するため渡米した。毎年5月の第1週に、ミシガン州カラマズーのウェスタン・ミシガン大学で開催されるこの会議は、今後の中世研究の動向を知る上でも重要な場と考えられている。第33回目の今回、開かれたセッションは総数532に及び、2000人を超える研究者が世界中から集まつた。

平成8年(1996)の夏、慶應義塾で開催された「狐ルナル」の国際コロキアムに出席するため、知人のイレーヌ・ブロック女史が来日した。その折りにホテルで彼女と話したことが、今回の会議における研究発表の骨子となったのである。イレーヌは中世教会のクワイヤ席下部に刻まれた彫刻(ミゼリコード)の研究者である。ニューヨーク市立大学を定年退職した後、パリの閑静なアパートに居を移して、今はセーヌ川の支流オワーズ川流域に散在する未調査のミゼリコードの製作年代を特定し、カタログを作成する仕事に没頭している。

イレーヌとの歓談は、悪賢い狐ルナルのミゼリコードの解読から、中世の彫刻に描出されたコスチュームの象徴性に及んだ。無論、服飾は時を映す鏡であるから、ミゼリコードの製作年代を特定する上で、重要な手掛かりとなるはずである。一方、さらに興味深いことは、服飾がその時代の社会的・道徳的な価値観をも示していることである。

今回のカラマズーの会議では、

中世美術における服飾の図像について、特に帽子(頭飾り)と袖を中心に、3人の発表者が、それぞれの専門分野から発言することにした。イレーヌは、フランス東部サヴォア県のミゼリコードに残る予言者の帽子の象徴性を、聖書の出来事を絵で表した15世紀フランスの『貧者の書』と関連させて論じた。聖トマス大学(米)のミシェルは、袖にこめられた社会的道義的な意味を、服飾史の立場から論じた。そして私は、同じ15世紀にイングランドで爆発的に流行した婦人用の頭飾りエナン(hennin)、別称「悪魔の被りもの」が表す罪の問題を、当時の文学・美術の両面から論じた。司会は、フランス北西のルーアン大学で中世音楽の図像学を講ずるフレデリックが担当した。帽子も袖も服装のほんの一部に過ぎないが、しかし、その意味の問い合わせを通して、中世の人々の思考の核心に迫ることができるのである。

学際的な研究を目指したこのセッションは、前評判も上々で、発表当日は立ち見が出るほどの盛会であった。

(『櫻』第8号、平成10年9月)



●黒川先生(中列左から3人目)を囲んで、新入生オリエンテーション(上野・東天紅にて、平成17年4月)



## つながる絆

Tanaka Yoshiko  
田中淑子

平成23年(2011)3月に退職した私にとって、最後の卒業式が従来通り行えなかったことは残念である。3月11日の東日本大震災で、21日の卒業式は中止となり、当日、構内の各学科教室で学位記授与のみがひそやかに行われた。翌日の帝国ホテルでの卒業パーティも中止になった。彼らは今どうしているのだろうとふと思うが、フェイスブックなどを通して元気に頑張っている様子を知って安心するとともに、21世紀型絆のあり方に驚いてもいる。

短大時代を含めると私は、36年間の教職期間がある。短大英文科ではじめて教えた学生は今や52歳、その彼女たちに36年ぶりに会った。当時勉強していた単語の意味がびっしりと書き込まれた Cleanth Brook 編集の *The Scope of Fiction* を持参していた。この本に出会って読書が楽しくなったという。今やその範囲は日本文学にまで及び、昨年は宮尾登美子の『伽羅の香』の舞台となった池田山の訪問に誘われ、帰りに桜見物をした。

大学の23年間に出会った学生からもゼミで読んだブロンテ姉妹やオースティンの作品が映画化されると感想を書いてくる。文学が彼女たちの生活を豊かにしているのを知るのは大変嬉しい。年賀状には結婚、出産、お受験、転勤が記され、貿易会社で部長に昇進したとか、中学で学年主任なったとか誇らしげに書いてくることもある。また、私が授業中に何気なく言ったことが支えに

なったというお礼のメールをもらったことがある。それは、私の留学中の失敗談らしく、ダメを出されても勇気を奮って進むと道が開けるとか言ったようだ。

また、Virginia Woolf の *A Room of One's Own* を読んだ学生が自立を目指して、東北大学大学院博士課程で博士号を取得、台湾・中山医科大学応用外国語学科で准教授になった。彼女が橋渡しとなって川村学園女子大学と姉妹校になった。今年の3月には「絶対結婚しないと思っていた人」との結婚、つまりゼミで読んだ Austen の *Pride & Prejudice* を地で行くからと結婚式に招かれた。このように大学で学んだ本を通して絆がつながっていることは教師冥利に尽きる。また、体調を崩して退職した私をいまだに気遣ってくれる優しい卒業生もいる。退職後の無聊を慰めてくれるのは、予想もしなかった彼女たちの心遣いや便りを通してつながる絆だと感謝している。

(平成25年5月記)



●学位記授与式での田中先生(平成20年3月)



# 史学科

Department of History

## 錚々たる教授を迎えて誕生、歴史体験をとおして学ぶ

### 史学科での学び

『あしたづ』創刊号(平成6年3月)のなかで、史学科初代学科長中村英勝は、史学科での学びについて、以下のように述べています。

「大学生活には、講義や演習などの授業のほか、クラブ活動、各種見学会や鑑賞会など、さまざまな面があるが、やはり最も意味があるのは、卒業論文の作成だと思われる。大学の学部での勉強の締めくくりとして、自分でテーマを選び、そのテーマについての研究文献や史料を集め、それらを分析・総合して、自分の論文にまとめあげるということは、高校以下の勉学とは異なった、大学での学生生活の最も重要な仕事であるということは、いうまでもないことがある。人間が生きている間には、就職とか、仕事の上でとか、あるいは結婚とか、家庭内の出来事とか、育児とか、次々にさまざまな問題につき当たることになるだろう。それらの諸問題を解決するためには、それぞれについてできるだけ正確な情報をなるべく多く集めて、それらを分析したり、周囲の人々の意見を聞いたりして、いくつかの進路や解決策、解決のための選択肢が複数ある場合が多いわけであるが、それらの間の優劣を判断して、選択し決定するわけである。人間には選択の自由があるが、自由意志で選択したからには、その結果について責任を負わなければならぬ。これは、一般の個人が自分のことについて選択し決定する場合でも、国家の指導者や企業の経営者がそれぞれの進路について選択する場合でも、基本的には同じである。」

史学科では、開学以来、卒業論文に

対する姿勢は変わっていません。卒業論文の作成は学びの集大成であり、努力できることの証しであり、人生の糧となるものであり、思い出なのです。

そして、この卒業論文作成には、読書の習慣が欠かせません。史学科では、学生に対して、入学以前の段階から、機会あるごとに、読書の道しるべとなるものを提供してきました。史学科2代学科長佐伯有一は、「私という一個人の人のいわば“青春”の読書歴の中に、およそ歴史を考え、その説明論理を発見し、あわよくば歴史を書いてみる境涯に身をすり寄せてゆくように自身をつき動かした何かがあったかも知れないとふり返ってみた。すると、いくつかの時期の節々で、どうやらそれと思い当る書物たちが点々とみえて来るように思えて来た」と『あしたづ』第2号(平成7年3月)のなかで述べています。



●文学部史学科の機関誌  
『あしたづ』創刊号(平成6年3月)の表紙

### 教員の顔ぶれ

開学時の史学科は、日本史(尾藤正英・梅村恵子)、東洋史(佐伯有一・山本由美子)、西洋史(中村英勝・松井透)に教育史(尾形利雄)、地理(生井澤幸子)の教授ならびに助教授・講師8名と助手(奥田環)の計9名から構成されていました。非常勤の教員は4名でした。

大学設立にあたっては、短期大学から多くの人材を集めることができた英語英文学科や心理学科とは異なり、ゼロからの出発となった史学科の教員の人選は困難を極めたといいます。幸いにも川村澄子の義兄である川村大膳の尽力により、中枢の教授陣として専門領域ごとの学会の重鎮的存在であり、かつ愛



●学生に講義をする尾藤正英先生(平成3年4月)

●蓼科山荘でのオリエンテーション・キャンプ(平成2年5月)



●梅村・生井澤・山本先生(右より5人目から左へ)を囲んでの第1期生の謝恩会(平成4年3月)



●笠間での新入生オリエンテーション(左より梅村・金澤・西川先生)(平成13年4月)



●栃木での新入生オリエンテーション(平成24年4月)



●斎藤直子先生(右端)による古文書学の授業風景(平成20年6月)

情をもって新しい大学を育していくことに情熱を注ぐことのできる教員を招聘することができたのです。それは尾藤正英(東京大学名誉教授)、佐伯有一(東京大学名誉教授)、中村英勝(お茶の水女子大学名誉教授)、松井透(東京大学名誉教授)の4名で、いずれも歴史学会を代表する錚々たるメンバーでした。ここに私立の女子大学としては唯一、の歴

史学の全領域を網羅する完璧な史学科の誕生をみることになったのです。

この体制は、平成4年(1992)度まで続くことになります。それ以降は、順次、退職と新しい教員の採用により、メンバーは変化してきました。日本史は平成10年(1998)に尾形利雄が退職して西川誠(日本近代史)が着任し、翌11年には尾藤正英が退職しました。一方、ア

ジア史では、佐伯有一が在職中の平成8年(1996)に亡くなられ、平成11年に、中国史の帆刈浩之を迎えるました。その後、帆刈の退職にともない、平成22年(2010)には高津純也(中国史)が着任し、続いて平成25年(2013)には、山本由美子の教育学部幼児教育学科への所属替えによって、高橋亮介(古代地中海史)が着任しました。西洋史では、中村



●学園祭の史学科展示コーナーにて(平成11年10月)



●史学科卒業論文発表会の光景(平成24年1月)



●学生が作った我孫子散策のイラストをプリントしたタオル(平成24年7月)

英勝の退職にともない、平成5年(1993)に堀越宏一(フランス史)が着任しましたが、3年間の在職の後、他大学に移ることになり、代わって金尾健美(フランス史)が平成8年(1996)に着任しました。平成13年(2001)には、金澤周作(イギリス史)を助手として迎え、翌14年に松井透は退職し、後任として金澤は講師に昇進しました。その後、平成21年(2009)に、金澤は他大学に移り、西洋史は先の金尾に加えて湯浅弘(西洋思想史)が兼担することになりました。

開学期に史学科の基礎を築いた佐伯・松井・中村・尾藤の4教授は、すでに鬼籍に入られました。

卒業後は、恩師に会える機会は少なくなるでしょうが、そんなとき、書店の歴史や学術文庫のコーナーを眺めてみてください。きっと懐かしい名前に出合えることだと思います。史学科は、そのよう

な教授陣を誇りにしています。

### 学生たちのすがた

開学後しばらくは、川村高校からの進学者数が目立ちましたが、その後は関東地方からの外部出身者が多くを占めるようになりました。歴史が好きになった理由としては、歴史好きの父母や祖父母の影響があったから、あるいは、中学や高校の歴史の授業が楽しかったからというのが目立ちますが、本やテレビ、漫画の影響も少なくありません。歴史学は大学で初めて習う科目とは異なり、好きな歴史の時代や分野が入学当初から明確です。加えて、史学科に在籍することで、高校時代には歴史について語り合う機会に必ずしも恵まれなかつた学生でも、遠慮なく趣味の歴史が語れる環境に4年間浸れることになります。歴史考古学研究会に所属して研究発表

をしたり、発掘に出かけたりして歴史三昧のくらしを送ることもできるのです。

その後、大学院に進学して研究者になり、本学あるいは他大学で非常勤講師をしている人や博士号を取得した人(東京大学・京都大学・首都大学東京など)もいます。中学や高校の教壇に立って歴史や地理を教えている人や博物館で学芸員として活躍している人も少なくありません。また、少女漫画の世界で有名になった人や声優として名をなした人もいます。ただ、全体的にみれば、一般企業、とくにサービス業関係に就職した卒業生が多いですが、いずれにしても大学時代に鍛えた卒業論文作成パワーは、社会で活躍するようになってからも発揮されているのです。

### 歴史体験をとおして

史学科では、単に文献を読みこなす



●オペラ鑑賞を楽しむ学生たち(平成24年7月)



●能楽師に装束をつけてもらう学生(平成25年6月)



●梅村ゼミの京都へのゼミ旅行(平成5年9月)



●高津ゼミの神戸へのゼミ旅行(平成24年9月)



●西川ゼミの能登へのゼミ旅行(平成17年9月)

だけではなく、開学当初から歴史を体験することに力を注いできました。博物館の常設展や特別展の見学から始まったこの催しは、しだいにその世界を広げ、歌舞伎・文楽・能・オペラ・歴史を題材とした映画などの鑑賞の機会を学生に提供してきました。また、女性文化史の授業では、宝生流の能楽師を招いて、講義・実演をしていただくことが

恒例となっています。我孫子の歴史探訪、城下町川越巡検、佐原巡検など日帰りの見学会も実施されていますが、最大のイベントは卒業論文の中間発表を兼ねて行われるゼミ旅行です。2泊3日で、京都・奈良、松阪・伊勢、大阪・神戸、広島・山口、金沢・能登、福岡・長崎、函館、長野などに出かけ、中間発表という重い課題に怯えつつも、歴

史を体験することの喜びにたっぷりと浸るのです。史学科の同窓会誌である『あしたづ』には各ゼミの旅行記が掲載されていて、これがまた、楽しいのです。

専門領域と周辺領域とを同時に深めていく史学科にあって、こうした体験が可能になるようなシステムをいち早くつくりあげてきた教員の努力は特記すべきことでありましょう。

## マンキーパッドの態度

Matsui Toru  
松井 透

樹が好きである。ケンジントン公園のすずかけの樹、シテ島のマロニエ<sup>ゴルモハル</sup>、シャンテニケタンの火炎樹……。世界のいろいろな土地を、そこに生えていた樹の姿とともに思い出す。ハワイでは、光り輝く太平洋をバックにして雄大に枝を広げる一本の樹が、眼に浮かんでくる。

観光客の喧騒を離れて人影も見ない海辺や山陰がオアフ島にもたくさん残っている。ひとつ静かなところへピクニックに行きませんかと、ある日、ハワイ大学の友人やその夫人们にさそわれた。ハワイ大学で2カ月ほど講義やゼミを担当していたときのことである。その日、昼、われわれは見渡すかぎりの海へ向かって、皆でハンバーガーの包みを開いた。その高台の一角にその樹はあった。名前を聞くとマンキーパッドだという。

だが見るほどに見事な枝振りをほめようとしたら、途端にことばに詰まった。「枝振り」にピッタリの英語がないのである。すぐ思いつくのは「シェイブ」だが、それではどうもしっくりこない。シェイブはつまり方形とか円形とかいうときの形のことで、輪郭の中にはまりこんで動きがない。

ところが日本語の「枝振り」には動きの感覚がある。もちろん樹がやたらに動きまわるのではないけれども、そこには動きに向かう雰囲気がある。動き出すとすればこう動くに違いないという身振りのバランスがある。長年の風雪に耐えて少しづつ成長し、その静かな動きの結果がいまそこにあるという、ゆったりした動感が秘められている。とすると、その「枝振り」を英語で何とあらわせばいいのだろうか？

一人の友人にこう問いかけると、まっ先に夫人们が話に



●招聘したインド史教授と語る松井先生(平成3年10月)

のってきた。女性が入ると議論は自由に飛躍して東西文化比較論もとびだし、行き交う会話は活気に満ちて、とうとう食事しながら2時間近い討議となった。でも、にぎやかな笑い声とともに最初の話に結論がで、それはプランチング・アティュードというがよろしい、と衆議一決した。

プランチということばを動詞に使って「枝を広げる態度」ということになる。少し薬がきき過ぎてこれでいいのかなあと疑問が残るが、まずシェイブよりはよさそうだ……、と何度も自分にいい聞かせた。そしてここを立ち去ることになったとき、ただじっと聞いていた態度のいいマンキーパッドの樹に、心の中で「ごめん、ごめん」と別れを告げた。

広報第1号のために何かを考え、学園の櫻や桜の並木を思い浮かべたとき、昔出会った枝振りのいい樹の記憶が鮮やかによみがえってきた。あと20年も経てば学園の樹々もかなりの大樹になっているであろう。そのころはプランチング・アティュードのいい並木の下を、三々五々、楽しそうに語りあう学生諸君が幾組幾組も過ぎて行くであろう。そして教室はきっと、リスニング・アティュードのいい聴講者がいっぱいであるにちがいない。多少祈りも込めてそう考えた……。さて、皆さんこの点どう思われますか。

(『KAWAMURA CAMPUS』Vol.1、平成4年)



## アジアの文学を読もう

Saeki Yuichi  
佐伯有一

もう何年も前のこと、フランス国家科学研究中心の依頼で講演したあと、もっともフランスらしい農村を見たいといってみて、一寸気がさして、ゾラの小説のイメージが唯一の手掛けりだともつけ加えた。その主任研究員はほっとしたように顔を輝かせて、いやそれで充分ですよといって笑ったのを今も鮮明に覚えている。考えてみれば、私自身中国史の研究にのめり込んだ誘因の一つは、彼の魯迅の文学を読みふけたことでもあった。そこで本学の山本由美子先生と協力して、意識的にアジア諸民族の現代文学作品、それも邦訳本から蒐集することを思い立った。それは、見事に、日本におけるアジア研究者人口の蓄積の度合の違いを示していて、

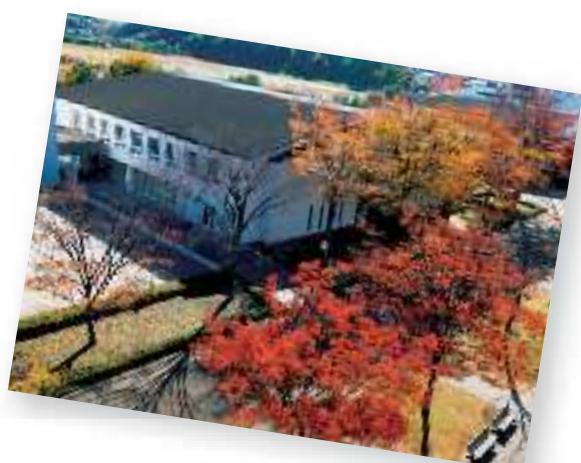


●佐伯先生を囲んでのゼミの懇親会(平成7年3月)

中国の現代文学の邦訳本が段突の質量という様相を呈している。

人民共和国成立以前の20世紀前半については、『中国現代文学選集』全20冊(平凡社)、いわゆる文化大革命の荒波にもまれた人々が中国歴史始まって以来の時代を劃するような豊かで多様な花々を咲かせつつある作品群として、『現代中国文学選集』別冊共13冊(徳間書店)、『新しい中国文学』全6巻(早稲田大学出版部)などがある。さらに、『韓国の現代文学』全6巻(柏書房)、『現代アラブ小説全集』全10冊(河出書房新社)も揃えることが出来ている。そして特筆すべきこととして、勁草書房の『東南アジアブックス』シリーズの継続出版がある。金沢を本拠地とするデパート「大和」の経営者井村氏の肝入りの井村文化事業社がこのプロジェクトを支えている。このシリーズは、日本の出版史上記憶されてよい快挙で、お陰で東南アジア諸国の現代文学作品の邦訳本を継続して開架に供することが出来ている。これまでにフィリピン7冊、インドネシア13冊、タイ30冊、ミャンマー(ビルマ)16冊、マレーシア5冊、シンガポール3冊のそれぞれ現代文学作品が学生諸君のさしのべる手を待っている。これらの作品群には、最近目立つこととして国際映画祭のグランプリを席捲しつつあるアジアのすぐれた映画の原作も多く含まれているのである。今、書店の店頭を飾り、その作家もテレビの「徹子の部屋」に2回連続出演するというフィーバーをまきおこしている『ワイルド・スワン』上・下2冊は、すぐれた作品であるが、それは中国の近現代史のあくまで一断面を描いてみせたものというべきで、他の多くの作品群は、さらに多様で異なった世界を切り拓いてみせてくれているのである。

(『櫻』第2号、平成6年7月)



# 心理学科

Department of Psychology

## 「心って何だろう？」から始まり、高度な知識と技能の修得をめざす

### 心理学科の変遷

心理学は、人間の活動のすべてを研究します。そのため、学問分野が広く、理系・文系にわたって広がっています。具体的な学科編制は、実験心理学・社会心理学・発達心理学・臨床心理学の4領域からなっています。

心理学科は、開学の昭和63年(1988)より、福屋武人が初代心理学科長として、大学や学科の創設に励みました。その後、平成5年(1993)に岡本榮一が学科長となり、その仕事を引き継ぎ、学科の基盤をつくりました。平成10年(1998)から浅井義弘が学科長に就任、学科の2領域編制や大学院の創設、心理相談センターの創設など、さまざまな改革が行われました。平成21年(2009)からは、松井洋が学科長となり学科の2領域編制を再統合しました。

本学科は、教授3名(福屋武人、岡

本榮一、三宅和夫)、助教授3名(川崎惠里子、秦野悦子、浅井義弘)、講師2名(松井洋、中野目善則)、助手4名(山本博信、松原由枝、鶴沼秀行、戸澤純子)、非常勤講師11名(大村政男、玉井充、大山正、大久保治男、井上博士、本木下道子、早川克巳)の体制で始まりました。現在は、教授8名(松井洋、鶴沼秀行、川崎惠里子、橋本(北原)靖子、蓮見元子、松原由枝、簗下成子、渡邊昭彦)、講師1名(桂留以)、助教1名(佐藤哲康)、非常勤講師14名(齋理津子、阿部義信、生駒忍、石井隆之、市村美帆、岡林誠士、川田明彦、熊谷俊紀、佐藤親次、菅沼憲治、高木真理子、中里弘、福井嗣泰、生越由夏)となっています。

開学当時は、学科、1コース制であり、定員60名、入学者が72名でした。基礎的心理学への興味とともに、臨床心理学への学生の認知、関心が広まるに

つれて、平成14年(2002)4月入学生より、従来の基礎的心理学を中心とした専攻とともに、臨床心理学を専門に1年次から学習を積み上げるかたちを整えるために、心理学領域・臨床心理学専攻の2専攻によって構成することとなり、平成17年(2005)4月入学生より、心理学領域が心理学コース、臨床心理学専攻が臨床心理学コースとそれぞれ呼称が変更されました。開学から7年間の運用の結果、1年次に心理学コース、臨床心理学コースに分けるよりも、まず幅広くじっくりと心理学を基礎から学んで、その後社会で活躍したり、大学院受験に臨むために、平成22年(2010)4月入学者より、心理学科は入学時1専攻に戻しました。

心理学科の幅広い領域は専任教員も非常勤教員とともに特徴的な学問活動、教育手法を駆使し、個性的な性格を帶びています。同様に、各教員のゼミに参加する学生たちも個性的な性格をもっており、多種多様な学生がそろっている印象です。また、ゼミのなかでの助け合い、支え合いも多く、卒業論文作成時は、終盤になると毎年風物詩のようにゼミの単位を超えて協力しあう様子が見てとれ、ほほえましいことです。



●三宅和夫先生の授業風景  
(平成2年6月)

## 実験心理学領域

実験心理学領域では、知覚・認知、記憶、学習、思考・言語、感情など人間の心の基礎的機能に関するメカニズムを追求し、実験的方法によって行動を理解する能力を育成することを目的としています。

そのため、川崎恵里子・鶴沼秀行が担当する実験心理学領域を学ぶ学生は、コンピュータ・プログラムを自ら組んでCRT上に画像を提示し、被験者の反応を自動記録し、採取した実験データを統計解析して、人間がどのような刺激に対して、どのように反応するのかを実験的に証明しようとします。まさに理系の情報工学の学生たちと同じような授業風景が垣間みられます。また、田中裕が担当する生理心理の分野で、脳波を受ける体験や嘘発見機を使用してみるなどの医療分野との境界領域に属する研究調査も実施します。

## 社会心理学領域

社会心理学領域では、社会や文化という観点から、社会構造・人間関係・個人特性などの本質についての正しい理解を図り、社会的活動を行う能力を育成します。

そのため、松井洋と桂瑠以が担当する社会心理分野では、質問紙を用いて、多くの学生のアンケート調査により、社会的実験を行い、人は集団のなかでどのような判断をして動くのかなどを研究します。ネット社会が若者に与える影響や、携帯電話への依存傾向と社会的態度などを調査するような研究がみられます。



●川崎恵里子先生(左奥)  
の授業風景(平成5年7月)



●中村真先生の授業風景  
(平成15年6月)



●松井洋先生の授業風景  
(平成20年10月)



●蓮見元子先生の授業風景(平成25年5月)



●渡邊昭彦先生の授業風景(平成21年6月)



●簗下研究室での「能面テスト」(平成23年5月)



●校外授業における福祉まつりの援助(平成24年5月)



●音楽療法を取り入れた授業(平成24年11月)

## 発達心理学領域

発達心理学領域では、人間の出生時よりの心理的発達についての学習を通じて発達のメカニズムの理解と発達援助を適切に行う能力を育成します。そのため、蓮見元子と北原靖子が担当するゼミでは、地域の祭りに参加し、参加しながら調査を行ったり、援助した結果を討論したりします。また祭りの企画から参加するなどの活動も行うなど活発な地域参加・地域援助を行っています(福祉まつり、子どもまつり、かっぱまつり

など)。また、地域の保育園などにもボランティア参加などをしながら援助しつつ調査を行うなど、実践で学ぶかたちをとっています。

## 臨床心理学領域

臨床心理学領域では、多様な社会生活から起こる人間の問題解決に役立つ知識と技能の修得を図り、実社会で活用することのできる能力を育成します。そのため、松原由枝と渡邊昭彦と簗下成子が担当する臨床心理分野では、さ

まざまな心理療法を体験したり、芸術療法を実施しあったりして自己分析に役立てたり、調査研究を臨床的に進めたりしています。授業のなかで音楽療法を実際に展開します。音楽療法では、近隣の住民でもあるプロのピアニストとタッグを組み、即興の作曲を取り入れた新しい療法を教員と大学院生とが共に開発しました。その療法を授業のなかで展開し、実際に参加者として体験してみるという試みを行っています。また、病院実習として、精神科単科の病院・

精神科クリニック・自立支援施設などの見学を行っています。さらに、非常勤講師の方も参加して、矯正施設の見学を実施していました。

こうした目的を達成するために、通常の講義のほか、演習・特殊講義等の理論的研究および各種の測定・テスト・療法などの方法・技術に関する豊富な科目を設けています。

### 課外研修——カナダ研修旅行

課外研修としては、平成4年(1992)度夏、東急観光の主催によるカナダ研修旅行を実施し、福屋武人と浅井義弘の引率により、1年から4年までの学生26名が参加しました。この研修旅行では、バンクーバー近郊の精神障害者のための施設や University of British Columbia の心理学研究室など、各所を訪問しました。訪問の先々でカナダの人びとの歓待を受け、また研修旅行最終日には、さよならパーティなども催され、充実した9日間の研修に幕を閉じることができました。

このように、心理学科では、多領域にわたる心理学の各分野で高度の知識と技能が修得できるように構成されてい

ます。

心理学科の特色は、こうした幅の広い学問領域でありながら、各領域の学問分野が縦横無尽に関係しあい、協力しあえるところにあります。そういった心理学の良い点、さまざまな領域のことをできるだけ充分に学習・習得するために、基礎実験では、2年次に、毎週、各領域ごとにまんべんなく心理学実験を実施させ、隔週で実験レポートを提出させています。実験レポートは心理学研究として形式にのっとって書くように指導されており、この経験が卒業論文を作成する基礎作りとなります。結果的に、心理学科の学生は、コンピュータを自在に操り、長文のレポートを作成する文章力がつき、プレゼン能力がついていくという現代社会で活躍する成人として期待される能力を自然に習得することができます。このことは就職活動に非常に役立つており、卒業してから即戦力として

期待できる人材を育てています。

心理学科開設後初めての卒業論文の題目をあげると、「大学生の性に関わる不安について」「書齋に関する心理学的研究」「短期記憶について」「他者の複雑な感情理解(うれし泣き)について」「出生順位における各児の性格特性の研究」「異常性愛」に関する社会的態度に関する研究。以上のテーマは、現在の卒業論文テーマとほぼ変わりません。時代は移っても心理学に関する主要テーマと大学生の興味はあまり変化せず、人間の心理に関する川村学園女子大学心理学科の学生の探求には終りがないと思えました。



●コンピュータを用いての授業  
(平成24年12月)



●福屋武人・浅井義弘先生の引率によるカナダ研修旅行(バンクーバーにて、平成4年8月)

# 校風は、優しさ・気配り・素直

Asai Yoshihiro  
浅井義弘

川村学園女子大学には、優しさ・気配り・素直さを持ち合わせている学生が多いと思います。自分はさておき、周りのこと、相手のことを思いやることを優先できる心を持っています。

今は先生と学生の距離があると言われている時代ですが、それでも川村では、分け隔てなく、気兼ねなく、学生が教職員と語り合えています。本音をぶつけ合って、論争をすることも厭わず、人と人としての交流がありました。そういった交流の中で生きる力を身につけていけたと思います。やや昔のことになりますが、当時は、体育館で学生と共にドッヂボール、登山等も試みました。学園祭で、教員も心理テストコーナーなどの出店をして、かなり積極的に学生との交流を深めていました。

川村学園には、幼稚園から始まり、小中高、大学と一貫校の良さがあります。川村高校出身者を中心に、学園の踊りである「感謝の舞」が踊れたり、学園歌が歌えたりと、その中にある学園の理念が本当の意味で理解できている学生が多いようです。このように学生と教職員全員で川村学園の風土のようなものを覚えています。

一貫校とは言つても、大学から、中には大学院から入学してくる学生もいますが、そういった外部からの学生たちも自然と、この川村学園の風土を感じ吸収し、自分のものとすることができます。実際に、卒業した後も大学に勉強しにきたり、教員や職員にアドバイスを受けにきたり、私的な相談もあわせて、何かとつながりを絶たずに縁を大事にしていてくれています。そういった先輩たちの姿をみて、在学生も母校に対して愛着を持ち、校風を体現してくれている印象があります。

最後に、個人的な話ではありますが、私の退職を知って開学当時の学生たちが、最後の講義に駆けつけて参加してくれました。在学中の素直さは、卒業してもずっと変わらず、何年経っても母校のことを憶えていてくれました。その変わらない素直さ、親しみをもっててくれる様子をみると感慨無量です。



●浅井先生(平成25年6月)

(平成25年3月記)



## トルコの図書館今昔

Matsui Hiroshi  
松井 洋

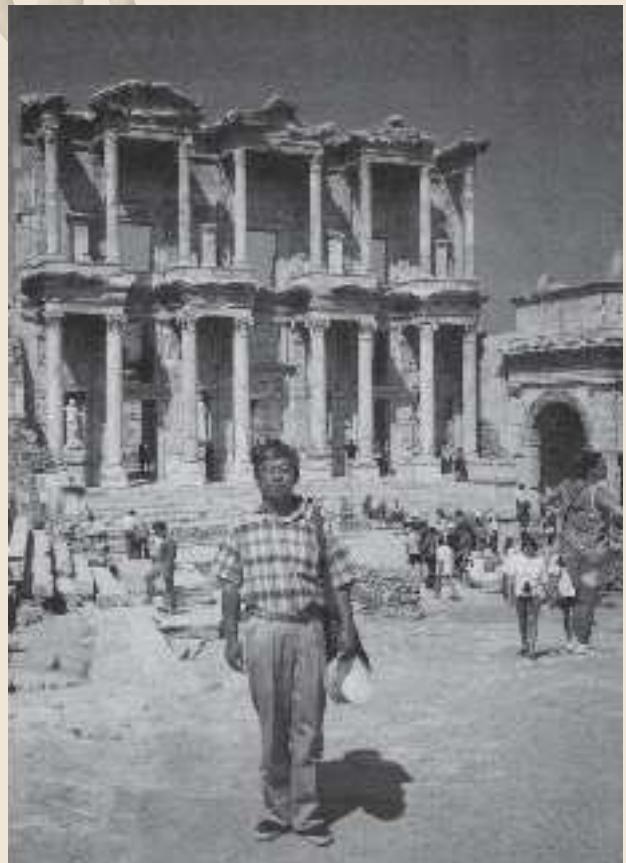
イスタンブールから西へ、マルマラ海沿いの田舎道を若い学生のガイドが中古の小型車をF1のように飛ばすこと5時間、ガリポリ半島先端近く達してやっと恐怖から開放される。そこからダーダネルス海峡をフェリーでヨーロッパからアジアへひとまたぎするとチャナッカレに着く。チャナッカレは日本ではほとんど知る人のいない小さな静かな港町で、すぐそばにあのトロイの遺跡がある。ちなみに、エーゲ海沿いに南下するとペルガモンの遺跡があり、ここには古代世界ではアレキサンドリアの図書館に次ぐ20万巻の蔵書を誇ったという図書館の跡がある。さらに南下するとエフェソスの遺跡があり、ここには美しい大理石の彫刻に覆われたセルシウス図書館がある。これらの図書館を見ると、2000年も前の人々も図書館をその文化の象徴と考えていたことがわかる。

私と東洋大学の中里(至正)教授〔現、名誉教授〕がこの小さな町を訪れたのは、中・高校生の国際比較調査をするためである。調査といってもそこに至る苦労は国によって違い、アメリカはいかにも民主主義の國らしく、大学の研究委員会、父母会、校長、本人同意を得なければならず、中国や韓国はコネ社会で、共同研究者から友人、またその友人と頼んでいつの間にか調査ができる。日本もコネ社会だが民主的なところもあり、アジア的で、欧米的でもある。トルコでは日本総領事、県の教育長、大学長など偉い人に話をつける必要があり、きわめてお役所的に事を進める必要がある。

共同研究をしたチャナッカレ大学には1年前に日本語学科ができ、そこで旧知の近藤幸子氏が講師をしている。彼女の協力があったのでこの未知の国で調査ができたわけである。大学を訪ねた際、図書館を見せてほしいと頼んだところ、小さな図書館しか無かった。特に日本語関係の図書は書架

1つ分ほどで、それも近藤氏らの個人的なものに頼っていた。ペルガモンやエフェソスの図書館の壯麗さと比べて少し寂しいものであった。しかし、日本語学科の学生の純朴さと熱心さや、近藤氏と学生の家族のように親密な交流は、日本人が忘れてしまったものを思い出させる。トルコの人情は隣の国のギリシャでは感じられないもので、トルコ人と日本人はそのルーツが同じというのもよくわかる(トルコ民族は中央アジア遊牧民という)。やはり人間の研究をする時には、まず人間が生活する現場に行ってみることが大切だと改めて感じたしだいである。

(『櫻』第3号、平成6年12月)



●エフェソス遺跡のセルシウス図書館の前に立つ松井先生(平成6年)

# 日本文化学科

Department of Japanese Culture

## 特色ある切り口で 日本文化を見直す

●日本文化学科の学位授与式(前列中央、左から10人目に川端香男里先生)(平成20年3月)



### 教育理念

日本のすぐれた文化を現代の学際的視点から総合的に見直し、国際化の進展に見合う知識の修得と実践力の養成を目的として、日本文化学科は平成12年(2000)に人間文化学部に創設されました。本学科が文学部ではなく、新設された人間文化学部に配されたことについて、川端香男里(当時学部長、平成15年〈2003〉より副学長)は、広報誌『花時計』(第8号、平成12年7月)のなかで、「総合的・学際的な知識の視点に立って柔軟な考え方で具体的な個々の問題の解決に当たる」能力の育成にその教育目標があると述べています。さらに川端は、「ジェンダー学を共通の立脚点とし、具体的に日本文化、観光文化、生活文化の三つの切り口で」学科の特色を出すこの試みは、「関東の女子大ではなされたことはありません」と、その抱負を語っています。

こうして「日本文化学科」は、21世紀の新しい日本文化研究をめざし、国際的視野のもとに人間学、ジェンダー学を

ふまえて日本文化を総合的に学んでいくために、「日本文学・日本語」「芸能・芸術・文化財保護」「国際比較研究」の3つの柱を立てました。学科創設当初から、本学所属の教員の専門分野が文学・考古学・宗教学・民俗学・芸術など人文科学領域にまたがることから、クロスオーバー科目として全学に開放し、さらに全学に副専攻制度が導入された平成16年(2004)度からは、「日本語教員養成」も副専攻として全学の学生の取得可能な資格科目としました。学科の独自性を強調するあまり、全学的交流の少ない本学のカリキュラム構成の見直しを図り、本学を“人文系教養”女子大学に特化したいと考えた、川

端(当時の副学長)の意欲あふれる取り組みが、日本文化学科のカリキュラムにもっとも明快に現れました。

### カリキュラムの特色と教授陣

第一の柱「日本文学・日本語」には、中古・中世文学の今関敏子、漢文学のみじかわ翠川文子と日本語学・日本語教員養成担当の竹端瞭一、第二の柱「芸能・芸



●今関敏子ゼミ(平成15年6月)



●酒井正子ゼミ(平成15年6月)



●倉智恒夫ゼミ(平成15年6月)

「藝術・文化財保護」には考古学・文化財保護の河原純之、琉球芸能・日本民俗学の酒井正子と日本美術史担当の倉澤正昭、第三の柱「国際比較研究」にはロシア文学・比較文化の川端香男里、フランス文学・比較文化の倉智恒夫、宗教学・民俗学の中村恭子、と学科創設時には重厚な教授・助教授陣が配されました。

しかし、初代学科長を務めた中村恭子は学科開設の翌年、不慮の病に倒れ、宗教学・民俗学は観光学科から移籍した野村文子が担当することになりました。学科完成年度の翌年から、翠川・河原・倉知・竹端・倉澤が相次いで現職を離れました。そこで、平成17年(2005)川村短期大学閉校にともない、安川里香子(近現代文学・漢文担当)が本学科に移籍し、平成18年(2006)には竹端の定年退職により長崎靖子(日本語学・日本語教員養成)が担当者として採用されました。さらに、平成21年(2009)には川端・野村の定年退職にともない、熊谷園子(イギリス文学、現副学長)、斎藤幸子(アメリカ文学・比較文学、現学科長)が国際英語学科から本学科に移籍し、平成25年(2013)に山名順子(日本近代文学)が採用されて、本学科の理念を受け継いでいます。

### ユニークな実技科目の充実

本学科の特色は、なんといっても伝統芸能の実技指導にあるでしょう。単なる知識の獲得にとどまらず、身体技



●国語科教育法の模擬授業(平成20年10月)

●小澤宗誠先生の指導を受ける「茶道」(平成25年6月)

法の面からも日本文化を体得して、総合的に日本文化研究の特質に迫っていくために、ユニークな実技科目を設けています。「茶道」「華道」「日本舞踊」「書道」「日本画」「香道」という日本文化の核となる芸道を、日本有数のその道の専門家から直接指導を受け、それが卒業の単位になるという、全国の大学にも稀な試みとなっています。



「茶道」には裏千家今日庵名誉教授永井宗圭、次に小澤宗誠、「華道」には青山御流家元園基信、「日本舞踊」には西川流宗家家元西川扇藏と西川祐子、「書道」は野村ひかり、次いで橋本匡朗を非常勤講師として迎え、ほとんど初心者ばかりの学生に懇切・丁寧な指導を行い、学生が日本文化の特質を会得できるように工夫されています。また、「日本画」は荻原延元<sup>のぶもと</sup>が担当し、実技科目を卒業制作として選択できるようになっていましたが、児童学科新設にともない、荻原が移籍したため、平成21年(2009)以降は「日本画」を卒業制作として選択できなくなり、「香道」も翠川の定年退職以降は閉講となっています。

近年は、本学科では能・歌舞伎・文楽鑑賞や美術館・博物館見学に積極的に学生を引率して日本文化を目で見、耳で聞き、体で実感させ、また、知識として定着させるために漢字能力検定、日本文学検定等の検定料の支援など実技科目の向上に努めています。

### 文学部への配置換え

平成22年(2010)、本学科は、人間文化学部から文学部への配置換えが行われました。少子化による大学全入時代に直面した平成21年度、本学科は突然の入学者の激減にさらされました。これ以前から、日本文化学科の特色の一つである日本語教員育成や国際比較研究の領域は、副専攻制度や共通教育科目への開放によって、学科の独自性が薄



●千葉県茂原市で和凧づくり体験(平成14年4月)



●園基信先生の指導を受ける「華道」(平成25年9月)



●学園祭(鶴雅祭)での西川祐子先生と日本文化学科の藤娘たち(平成24年10月)

●橋本匡朗先生が指導する「書道」(平成25年6月)



●荻原延元先生が指導する「日本画」(平成24年5月)



●茨城県牛久市シャトー・カミヤにて新入生オリエンテーション(平成20年4月)

められる傾向があったことに加え、本学科で授与される学位が人間文化学部に属すことから、“文学”ではなく“社会科学”であることへの違和感は、学科教員の間でも問題視されていました。加えて、この年に実施された大学認証評価においてもこの学位の問題が指摘されたことを受けて、本学科を文学部へ移籍することが本格的に検討されました。こうして、平成22年、日本文化学科の文学部への移籍と本学科の学位変更が実施され、カリキュラムの見直しも行われました。

### 将来展望——“クール・ジャパン”への期待

本学科は、日本文化の基礎となる国文学・日本語の特色を生かし、これを深く理解しつつ正しく使用する能力を育成し、国際社会に生きる日本人としての自覚と誇りを養うことを教育目標とすることに変わりはありません。しかし、平成25年度末に4名の教員が定年退職となり、創設時からの教員は一人もいなくなる事態を迎えます。転属・新採用が予定されている教員は、本学の教育理念を再認識したうえでさらなる高みをめざしています。

まず、学生には本学の特色の一つである日本語教員資格はもとより国語科教員資格の取得をすすめ、資格を生かした社会貢献のできる女性を育てるよう取り組みます。また、他大学にはない本学科の実技科目に関しては、単年度の履修ではなく、継続的に実技習得が可能でかつなんらかの資格が得られるように、カリキュラムの改訂をめざしているところです。

現代の日本が世界に発信する“クール・ジャパン”こそ、日本の伝統文化への理解と応用から誕生した新たな文化であることを実感し、それに感應し参加していくことこそ日本文化学科に求められる役割だと考えています。

# 利根川の夕映え

Nakamura Kyoko  
中村恭子

我孫子キャンパスに赴任して間もない頃、私は学会出張のため常磐線で水戸へ向かった。天王台駅を通過後、緑に囲まれた川村学園女子大学とNECの白い建物の眼下に拡がる眺望を初めて楽しんだのも束の間、列車はたちまち河川敷を過ぎ、利根川にさしかかった。この時私は、利根川がキャンパスに予想外に近いのに驚き、私たちが利根川の川筋文化地帯とでもいうべき所にいることを実感したのであった。

明治20年に布佐〔我孫子市東方〕に移り住んだ柳田国男は、縁側から川を行き交う高瀬舟の白帆が見えたと記している。鉄道開通以前には、利根川の物産は利根川＝荒川ルートで江戸、後には東京、横浜にまで輸送されていた。一大消費地をバックに、かつて繁栄した利根川の水運業に携わった人々は川沿いに住んでいたと思われるが、そのような集落の一つが近くにあることを知ったのは、その後暫くしてからで

あった。

NECの裏手の堤防上の道を川下に向かって行くと、突然、「取手市」の道標に驚かされる。現在の利根川の南側は千葉県、北側は茨城県と信じている人には理解し難い「取手市小堀」の百戸余りの集落が、右手に現れる。北側に堤防を背負い、三方を古利根沼に囲まれた半月型の地域がそれである。古利根沼とは、改修工事以前の蛇行した利根川の残された部分で、NEC敷地内の池や堤などにも古利根の姿を留めている。改修工事によって小堀の村の大半は川底に沈み、残りが我孫子市側の飛び地となった。当時の住民の多くは舟を足としていたので、行政側が提案した架橋を断ったが、間もなく陸上運送業に転じ、舟は処分されたので、現在に到るまで取手市は住民の足の便として渡し船を運行している。

ある秋晴れの日、小堀からの帰途、私はこの船に乗ってみた。ミシシッピやガンジスの雄大さには及ばないが、川面に映える夕日は、車窓から見下ろす眺めとは異なる利根川の夕景色を美しく染め上げて妙であった。

(『櫻』創刊号、平成2年12月)



冬の夕方、小堀に着いた渡し船(平成26年1月)

## 私の留学生活

陳沛瑜(チン・ハイユ)

私は今、台湾の国立政治大学大学院日本研究科で勉強をしています。日本研究科に決めたのも、川村学園女子大学での留学生活の影響があったからです。

川村学園女子大学に留学することは、人生初めての一人での海外生活であり、貴重な経験でもありました。もう4年もすぎましたが、その4ヶ月間は、今顧みてもすばらしい思い出ばかり頭の中に浮かびます。

知人が一人もいないところで、自由に使えない外国語で生活を送ることに、最初はすごく緊張しました。しかし、到着した日に初めて会った寮母さんが温かい晩ごはんを作ってくれて、涙が溢れるくらい感動しました。

学期が始まると、先生方も学生さんたちもすごく親切にしてくれました。比較文学の齋藤幸子先生のゼミにも参加させていただき、そこで世界における「赤頭巾ちゃん」童話の変容や各種パロディを学んだり、日本語で報告したりして、楽しく勉強しました。そして酒井正子先生の日本文化の授業や今関敏子先生の日本文学の授業も履修させていただき、日本の昔ながらの文化や和歌にふれ、一層それらを認識することができました。なお、長崎靖子先生の日本語語学の授業も履修させていただきました。少々難しかったですが、大変勉

強になりました。

授業のほか、台湾の大学ではあまり体験できない茶道部と剣道部に入って、みんなと一緒に稽古しました。お茶室に入ったら、自然に心が穏やかになります。一期一会の心をこめてたてたお茶が一番おいしいと思います。そして、剣道については、



●陳沛瑜さん(平成25年10月)

「るろうに剣心」という動画以外、剣道に関する知識や技術を何も知らなかった私に、剣道部の先輩たちが熱心に教えてくれたり、練習に付き合ってくれたりして、本当に感謝の気持ちでいっぱいです。充実した日々を過ごしました。そのほかに歌舞伎や能楽の劇場も拝見しました。これらを、自分の目で確実に味わうなんて楽しくて仕方がありませんでした。休みの日には、江戸博物館、皇居、明治神宮、上野動物園、ディズニーランド、名古屋、大阪まで遊びに行きました。

私には、4ヶ月間でたくさんの友達ができ、日本の文化についてもっと知ることができ、豊かな留学生活を送りました。これは多くの先生方や学生さんのお陰です。

(平成25年10月記)



## 新たな大学教育の道を開く

### 設立の経緯

平成3年(1991)4月、川村学園女子大学に教育学部が新設され、すでに設立されていた文学部と合わせて二学部六学科になりました。

川村学園女子大学に「教育学部」への道を開いたのは、副学長奥田眞丈です。奥田は長年、文部省(現、文部科学省)初等中等局で活躍し、わが国の教育政策や将来の方向性によって、また UNESCO の国際会議に出席するなど世界的視野から、本大学の将来を見通して「教育学部の設立」に尽力しました。

当時の教育界の動向をみると、昭和60年(1985)臨時教育審議会が開始され、その答申が年次を追って提出されました。この審議会では、21世紀に向けた教育のあり方がテーマであり、いくつもの教育改革が提言されました。第一は、社会の情報化に対する教育の情報化への対応でした。科学技術の急激な進歩に対して、学校教育の新たなカリキュラムが求められていました。第二は、学習機会の生涯学習体系への移行でした。これからの中の学習は、学校教育の基盤のうえに各人の責任において自由に選択でき、生涯を通じて行われるべきものであるという提言でした。第三に、初等中等教育の充実と改善について、とくに就学前教育の振興についての提言でした。

これを受けて、平成元年改訂「幼稚園教育要領」(平成2年度実施)では、それまでの集団的一斉保育から、幼児の主体的な活動を重視した「自由保育」への転換が図られました。このような教育改革が活発化するなかで、本大学に「情報教育学科」「社会教育学科」「幼児教育学科」という学科構成による教育学部が誕生したことは、わが国における新たな大学教育の出発点に呼応したといえます。

### 設立期の学部の体制

初代の教育学部長には鈴木隆雄が就任しました。鈴木は、東京農業大学学長、大学設置審議会委員などを歴任し、本学教育学部長として適任の先生でした。鈴木は情報教育学科の所属で、学科行事などにも出席しました。鈴木は優しい人柄で、若い人たちにもいろいろなところで声をかけました。当時の新入生のオリエンテーションは蓼科山荘でやっていましたが、鈴木も同行し、そのような機会にご自身の



●鈴木隆雄先生(平成3年)

研究についても話をしてくれました。鈴木は、ウサギの食糞(coprophagy)の発見者であり、京都大学で学位を受けられました。設立時の学科長は、古藤泰弘(情報教育学科)、北村浩一郎(社会教育学科)、塚脇澄子(幼児教育学科)でした。

平成7年(1995)から元木健(社会教育学科)が学部長に就任、この年度から3人の学科長が交代し、情報教育学科安田浩、社会教育学科加納正己、幼児教育学科中澤和子で新たな教育学部体制がスタートしました。元木は、前大阪大学人間科学部教授で、専門は社会教育学、技術教育学、産業教育学など幅広く、また文部省社会教育審議会委員、大阪府同和対策審議委員などを歴任しており、このような経験から新しい教育学部をリードしていました。元木は、大学院人文科学研究科心理学専攻と生涯学習学専修士課程の設立にも尽力しました。

平成10年(1998)度からは、それまで図書館長であった岡本包治(社会教育学科)が教育学部長に就任しました。岡本は、昭和55年(1980)に設立された日本生涯学習学会で初代会長を歴任し、学会の第一人者として活躍するほか、文部省社会教育審議会委員、生涯学習クリエイティブ・アドバイザーなどもしていました。岡本は『生涯学習講座』全6巻(平成元年)、『生涯学習のまちづくりシリーズ』全8巻(平成元年)、『現代生涯学習全集』全12巻(平成5年)など多くの専門書籍を編纂し、日本の生涯学習の発展に貢献しました。また岡本は入試委員長として、大学入試の改革、とくに平成13年(2001)度から本学でスタートした「大学入試センター試験」の実施に向けて尽

力しました。しかし、岡本は病気のため平成12年(2000)急逝されました。

平成20年(2008)度情報コミュニケーション学科にかわって、児童教育学科が開設され、幼稚園から大学院まですべての教職課程を包括する教育学部となりました。

教育学部長の就任では、平成13年(2001)度から北村浩一郎(社会教育学科)、平成19年(2007)度から岡村豊(社会教育学科)、平成21年(2009)度から浅井義弘(幼児教育学科)、平成25年(2013)度から山本由美子(幼児教育学科)が就任し、現在にいたっています。



●附属保育園の誕生会にて音楽演奏を行う  
幼児教育学科の学生たち(平成23年12月)



●「我孫子楽校フェスティバル」でアンモナイトのレプリカ制作をする社会教育学科の学生(平成20年9月)

# 幼児教育学科

Department of Childhood Education

## バラエティーに富んだ 学習から学ぶ

### 学科創設の歴史

平成3年(1991)、教育学部が開設され、幼児教育学科は、豊島区東長崎にあった短期大学保育科を4年制大学に移行して発足しました。その理由の一つに、時代の流れによって、幼稚園教

諭1級免許(現、1種免許)を取得することが望まれるようになってきたということがありました。加えて、充実したカリキュラムに基づいた密度の濃い教育の実施と、子どもを理解できる人材の育成が目的でした。



●学部創設4年目、全員揃った幼児教育学科教職員のメンバー(平成7年11月)



●現在の幼児教育学科の教職員メンバー(平成25年6月)

初年度の専任教員の構成は、教授(塚脇澄子、田中博正、角尾和子)、助教授(小松省三、柳澤安雄)、講師(近藤光江、尾見敦子)であり、新入生は40名定員のところ48名が入学し、2クラスの小規模編成で開設されました。

その後、平成4年(1992)に、助教授(菊池明子)、講師(小林由利子)、助手(野尻祐子)が、平成5年(1993)には、教授(中澤和子)と講師(栗原泰子)が加わり、幼児教育学科の最初の専任教員メンバーが揃い、体制が整いました。

当時、幼児教育者の養成校は、短期大学あるいは専門学校が主流であり、4年制大学の卒業生は、就職にも敬遠されがちでした。それにもかかわらず、第1期生の一般入試(国語、英語、社会の3教科受験)は、20倍という高倍率でした。入学生の約半数は、川村高校からの進学生が占めていましたが、他高校出身生と合わせて新しい「川村らしさ」が生まれ、和やかな雰囲気が醸成されました。

本学科では開設時、幼稚園教諭免許の取得が卒業要件として義務づけられていました。これによって、全員が幼稚園教諭をめざすという希望と信念を有した学生たちと、優れた教育を志す教員とが、たがいに育て合い、今日の学科の基礎がつくれました。

平成16年(2004)以降、当初の教師陣のメンバーもしだいに入れ替わり、平成25年(2013)には、柳澤安雄(現学科長)、森田玲子、内海崎貴子、近藤光江、草のぶ信和世、箕輪潤子、近藤千草、菅井洋子、竹内啓、藤川志つ子、手塚崇子(助教)、藤田愛子(教務補助)の12名体制となっています。

### オリエンテーション・キャンプ

開学当初は、5月中旬に本学の蓼科の施設で、2泊3日のオリエンテーション・キャンプが、教員、学生たちの親睦も兼ね、「4年間の学生生活を無事終え、自らの目標を達成する」という目的意識をもって行われました。まだ残雪のある車山への登山をはじめ、夜には、

●第2期生のオリエンテーション・キャンプにて(平成4年5月)



●船橋市立「アンデルセン公園」にて、新入生オリエンテーション(平成25年4月)



●第1期生のアフリカ民族音楽のワークショップ(平成3年11月)

キャンプファイア、花火大会、肝試などを楽しみました。

しかし、その後、宿泊をともなうオリエンテーション・キャンプに対しては、さまざまな意見が出され、やがて、現行の日帰りの内容に変わってきました。近年は、船橋市立「アンデルセン公園」に先輩学生が引率の補佐として同行し、親睦をはかることが定着しています。

### 保育士養成施設の設置と体験学習

平成13年(2001)より、保育士養成機関としての認定を千葉県より受け、保育士の資格取得が可能となり、定員が60名に増員されました。施設面では、保育士養成校に必要な設置条件を満たした「乳児保育室」と「ピアノ練習室」の2つの特別教室が14号館に設置されました。

た。「乳児保育室」には、25台のベビーベッドと50体の乳児の疑似人形が備えられ、「ピアノ練習室」には40台ほどのエレピアンに代わって、100台のクラビノーヴァが備えられました。

幼保連動のカリキュラムの実現は、より確かな理論に基づいた保育の知識を学び、豊かな実践力を身につけるという学科の目的を果たすため、きわめて有意義でした。学年ごとに、段階を追って立てられたカリキュラムに沿って学ぶとともに、幼稚園教諭免許取得には2回、保育士資格には保育所2回、施設に1回、合計5回の実習を実践することで、現代の女性にふさわしい「子どもに寄り添える・共感できる」幼稚園教諭と保育士をめざす学生のニーズに十分応えられるようになったのです。

### 体験学習

宿泊をともなう集団行動の経験を重視する意見により、平成8年(1996)度入学生より「体験学習」(専門選択[半期])が開始されました。当初は受講生の任意参加で、長野県北佐久郡春日温泉で2泊3日においての集中授業が行われました。これは、「すべて自分たちで計画した行程に沿ってさまざまなことを体験し、成し遂げる大切さを感受する」を目的に、当時の塚脇澄子学科長と菊池明子助教授の指導で数年間続けられました。これが基となり、平成14年(2002)度入学生より「幼児教育体験学習」に科目名を変更し、花壇造り、さつまいもの栽培と焼き芋、鯉の燻製造りなどの体験をとおして、多くを学びました。

さらに、平成22年(2010)度入学生か



●「体験学習」の元となった第1期生の実習花壇(平成5年6月)

らは、本学科のすべての学生に多様な経験をしてもらいたいという考え方から、「幼児教育体験学習」では、「体験から学ぶコミュニケーション能力」の獲得を目的的に、「多様なひと・もの・ことに出会う」をテーマとし、年間をとおしたプログラムが、内海崎貴子・箕輪潤子を中心に作成され、1年次の専門必修科目として位置づけられました。たとえば、米作り、飯盒炊爨までを一貫して行い、まとめに、しめ縄作りをします。ほかに外部講師による講演を聞くなど、バラエティーに富んだ体験内容が立案され、本学科教員と1年生全員がかかわる独特的の科目となっています。

### 学園祭と授業活動の発展

初めての学園祭(鶴雅祭)では、学科開設1年目に「縁日大好き娘」と称して、おでん屋、駄菓子屋、ヨーヨー釣りなど、まるでお祭り騒ぎのような楽しい一日を過ごしました。学科開設2年目には、1・2期生有志が集まり、先生方のアドバイスを受けながら、「赤ずきんちゃん」の人形劇を演じました。

平成12年(2000)度第12回学園祭に催された「ウォークラリー」(4号館を利用)では、的場ゲーム、ボーリング、人形劇などを楽しみました。平成13年(2001)度には、実技系の各分野の授業の成果として『かわむらこども劇場』と称し、「3匹のこぶた」「夜だけ魔法使い」の2作品のオペレッタ、ハンドベルによ



●泥だらけになってバケツ田んぼをつくる(体験学習)(平成24年5月)



●学園祭でのオペレッタ「3匹のこぶた」(平成11年10月)



●学園祭でのオペレッタ「11匹のネコ」(平成24年10月)



●クリスマス・コンサートでモーツアルト作曲「アレルヤ・ヘ長調」をうたう(平成14年12月)



●ボランティア団体「ONE」による実習ガイダンス(平成19年7月)

るアニメソングメドレー、人形劇「パン坊や」、ストーリーテリング「3枚のおふだ」が公演されました。

平成15年(2003)度以降は、これらを引き継いで「スイミー」「白雪姫」「竹取物語」などが公演されました。これをきっかけに、我孫子市の「にこにコランド」での開業式では招待公演を行い、また地域の幼稚園などからの講演依頼に応えて、子どもたちとの交流も盛んに行われるようになりました。

また、音楽教科の集大成としては平成14年(2002)に「クリスマス・コンサート」を開催し、モーツアルト作曲：「アレル

ヤ・ヘ長調」を演奏するまでに上達したこと、協調することによって生まれる力の大きさを知る道しました。

### 附属保育園との連携

平成18年(2006)に附属保育園が開園されました。本学科では、2年次からの本実習のための予備実習として、平成20年(2008)より、1年次の夏休みにボランティアというかたちで、秋の運動会のお手伝いをし、子どもの様子や、保育園での日常について、学んでいます。

平成21年(2009)より、保育園の「お誕生会」「クリスマス会」にオペレッタ、ハ

ンドベルの演奏などを公演しています。このような機会をとおして、どのようにしたら子どもたちが喜ぶかを考えたり、幼児に直接触れたりしています。こうした強力な連携ができるのも、本学科のすばらしい利点です。

### ボランティア活動「ONE」

平成19年(2007)に当時の4年生がボランティア団体である「ONE」を結成しました。その目的は、実習経験を後輩に伝えることでした。また、学園祭では、「楽しい遊び広場」と称し、平成20年(2008)から「ハロウィーン」「ちびっこ動物園」「おかしのくに」など毎年テーマを変えて行っています。また、学外のさまざまな催しにも参加するなど、子どもに対する気づきを実体験のなかから学ぶ活動をしています。

### 多彩な卒業研究と卒業生

平成17年(2005)に、「卒業論文」に実技系の内容への取り組みが認められ、名称も「卒業研究」に変更されました。本学科では早速、ピアノの演奏、素話、オペレッタ、絵本制作、ダンスなどのパフォーマンスが卒業研究のテーマに選択され、発表されるようになりました。その後、卒業研究が、論文、副論文または報告書の形式で提出できるようになりました。最近では、実技系で挑戦する学生もふえ、内容も高度なものが多くなりました。また、幼稚園、保育園などの実地研究を行うなど、研究方法に対する意識変化も生じ、深く考える習慣が身につきました。子どもの情感に訴える多彩なテーマがみられるようになりました。

卒業生の就職率は、学科開設以来、ほぼ100パーセントを維持しています。過去の卒業生のなかには、すでに幼稚園園長、教頭、主任などの要職に就いた人もおり、ときには学生の実習先の園として後輩の指導に当たることもあります。こうしたとき、同じ志をもつ人と人とのかかわりが、学科の現在と未来を繋ぐ、重要な要素となっていることを実感せざるを得ません。

# 創設25年によせて

Tsukawaki Sumiko  
塚脇澄子

大学も早や25年もたったのかと思うと、感慨もひとしおである。

創設時の学内はどこを見ても真新しく、気分は爽快、学生数は少なく、学内はがらがら、静かなものであった。

幼児教育学科は、第1回生を迎え、入学式後さっそくいろいろな行事がたてつづけに始まった。5月、新緑も美しい“蓼科山荘”へ、親睦・研修を兼ね、心理学科と共に宿泊を伴った小旅行に出発。新宿に集合し、バスでの移動、車内では、まだなれぬ級友たちとの意見交換会など和気あいあいのうちに山荘に到着、その後はそれぞれ学科ごとのスケジュール、夜は学科を越えての親睦会、教員も加わり楽しいひとときを過ごすことができた。翌日はバスで清里高原へ、名物の「ソフトクリーム」を食べながら、自然の雄大さ、都会と違う空気や、木々の美しさを満喫し、ガラス美術館などの見学を行い帰路に……。この旅行は単なる旅行ではなく、卒業後「幼児のための指導者になるためには」を常に考えながら、その時々の行動や自然とのふれあい方、子どもと共にいる時はどのようにすることが大切なのか？しなければならないのか？などを考えながらの実体験であったと思う。

日常の授業は、高校までとは違い、まさに専門科目が多いため、おどろき半分、楽しさ半分で学生は生き生きと授業を受けていたようである。その授業の中での一つに、現場では子どもたちと花を植えたり、種をまいたり、また「さつまいも」の苗を植えたりと、“土”と関わることがあるため、その実習も必要と考え、学内に畠を作っていただき、グループでチューリップを植えたり、秋には「やきいも」を作り、学内の皆



●塚脇先生(左)と小倉幼稚園の園児たち(平成13年10月)

さんにさしあげたりと、貴重な体験ができたことは、さすが幼児教育学科として、自慢のできる一つであろう。このような経験は、現場で大いに役立ててほしい。

時代は流れ、当初「幼稚園教諭」免許のみの取得であったが、「保育士」資格も必要であろうと考え、その手続きをはじめ、難関であった実習園(所)の確保など、先生方の多くの協力を得て実現できたことは大きな一歩であったと思っている。

現在、社会では待機児童、幼児教育とは等々の話題が山積している。これらの問題をいろいろ解決していくのには、指導者の育成が重要になってくるであろう。幼児教育の指導者は、子どもの目線に立って子どもと共に歩み、考え、実践できる健康で明るいことが望まれるのではないか？という原点にかえり、ますます内容の充実をはかり、歴史を刻んできた川村学園女子大学幼児教育学科は、今後学園教職員、学生、卒業生、旧教員、力を合わせ更なる発展をしていくことであろう。またそれを願いつつ……。

(平成25年5月記)



## 幼児教育学科の思い出

Komatsu Shozo  
小松省三

開学当初は、文学部三学科のみであったが、その後、教育学部三学科ができ、幼児教育学科はその三学科の中の一学科であった。

定員も40名で、とても家族的な雰囲気の学科であった。開設当初から人気があり、数年後は定員を60名としたが、それでも間に合わせ、数年後80名とし、その後100名としたり、今では80名に落ち着いている。

また、開設当初は、幼児一種のみであったが、その後保育士の資格も取れるようになり、実習等も増えていった。

幼児教育学科の思い出の中で一番印象に残っているのは、オリエンテーション・キャンプである。中でも蓼科山荘でのオリ・キャンが一番強く残っている。それは、車山への登山であった。頂上の空気のすがすがしさや遠くの山々の景色の美しかったことなどたくさん思い出として残っている。また、自然の美しさだけではなく、登山や下山の際に学生たちと交わした会話なども楽しいものであった。おかげで、学生と教

員との距離も縮まり、名前と顔が一致するようになった。また、山荘の体育館や教室で行われた、ゲームの数々や自己紹介などもとても楽しく印象に残っている。

少人数の学科ではあったが、少しも淋しくなく、授業もゼミナールを和気あいあいとしていたように思う。楽しい思い出の多い大学生活であった。

(平成25年5月記)



●小松先生と第3期生の学生たち(蓼科の牧場にて、平成5年5月)

## 中澤和子先生のこと

Nishimura Kazuko  
西村和子

川村学園女子大学創立25周年ということで、ことさら過ぎゆく月日の速さを感じるこの頃ですが、大学は相変わらず広々として気持ちよく季節の花々を咲かせて、年老いた私を迎えてくれます。今思えば、25年前の創立記念式典には、新聞や学術雑誌でお名前のみを伺っていた先生方がずらりと並んでいらっしゃるのを、まぶしく拝見したものでした。のちに幼児教育学科長になられた中澤和子先生もその中の一人でした。先生のご著書『幼児の数と量の教育』を幼児教育学科の授業で使わせていただきました。

先生のご著書は、先生が某幼稚園にご奉職の折、園児とその母親をつぶさに観察して著されたもの、と伺っています。タイトル通り「幼児の数と量の認識の過程、とその課程を通しての保育者の園児とのかかわり方」を数々の実例に即して書かれた貴重な一冊です。

母親としての十数年の育児でも、数十年に及ぶ附属幼稚園長としての園児との関わりにも、私が気づくことのできなかつた幼児の思考過程について、先生のご著書を通して学び、先生の洞察眼の鋭さと確かに驚かされています。

学生たちに「いずれの学問でも、極める事により、その人の知性と情操を豊かにするものだ」ということをわかってもらいたい、そして、このような先生が母校の教授であられたことを誇りに持ってもらいたい、と思い、今もご著書を使わせていただいています。



●西村先生(平成20年6月)

(平成25年9月記)

# 児童教育学科

Department of Child Education

## 「川村らしさ」を備えた教員の養成をめざして

### 学科の設置

川村学園の創立者である川村文子は、秋田県尋常師範学校を卒業後、土崎尋常高等小学校と保戸野尋常高等小学校で教職に従事し、教育者としての経歴をスタートさせました。文子の教育者としてのルーツにつながる、小学校教員養成を目的とする児童教育学科は、平成20年(2008)4月に、坂口早苗(現、本学社会教育学科長)を学科長として発足した、本学でもっとも新しい学科です。

教育に対する広い知識と視野、そして熱意をもつとともに、「感謝の心」と豊かな感性という「川村らしさ」を備えた小学校教員の養成をめざして設置されました。

### 小学校教員養成をめぐる時代背景

教員養成は、戦後教育改革以後、「開放制」の原則が導入され、旧師範学校を母体とした教員養成系の大学・学部だけでなく、一般大学でも教員養成課程の設置が認められるようになりましたが、

小学校教員の養成にかぎっては、「教員養成を主たる目的とする学科等でなければならない」と規定され、中学校や高等学校教員の教職課程と比べ、手厚い指導体制が求められてきました。さらに、国は、戦後のベビーブームや1980年代後半以降の少子化など、時代の変化に合わせて、教員養成課程の入学定員の増減を図り教員の需給調整を行ってきたため、長い間、私立大学での小学校教員養成が抑制される状況が続いてきました。

しかし、文部科学省は、団塊の世代の退職などを背景に、平成18年(2006)度入試から教員養成課程の入学定員抑制を撤廃することを決定し、これ以降、多くの私立大学が小学校教員養成に参入するようになっています。文部科学省の調べでは、平成10年(1998)度時点で40校であった小学校教員養成課程



●旧児童教育学科学生研究室にて(平成20年8月)



●児童教育学科の教員と学生たち(平成22年3月)

を設置している私立大学が、平成21年(2009)度時点では144校と、3倍強に増加しています。大学全入時代にあって、入学定員確保が大きな課題となっているなかで、多くの私立大学が小学校教員養成課程を積極的に設置していることがうかがえます。

本学の児童教育学科も、こうした小学校教員養成課程をめぐる時代の流れに敏感に対応し、平成20年(2008)4月に、その第一歩を踏み出しました。

### 教員の構成

児童教育学科設置以前から本学の専任であった教員10名(岡村豊、坂口早苗、

たけのり  
本村猛能、渡辺光洋、西村和子、柳澤  
安雄、上橋菜穂子、蓮見元子、荻原延元、  
田中美智に加え、新たに3名の新任教員(松原一義、<sup>こうじ</sup>福士顕士、猪瀬義明)を採用し、計13名の専任教員と、本学他学科所属の兼任教員8名および非常勤講師9名の教員構成でスタートしました。その後、平成23年(2011)3月には本村猛能(情報教育)が退職しました。また、同年には、柳澤安雄(音楽)が幼児教育学科長として所属替えになるにともない、幼児教育学科の尾見敦子(音楽)が児童教育学科の所属として着任しています。さらに、平成24年(2012)3月には岡村豊(教育行財政)と上橋菜穂子(児童文学・国際理解)が、平成25年(2013)3月には松原一義(国語科教育法)が専任教員を退き、特任教授となりました。こうした変動にともない、平成24年度には斎藤慶子(日本教育史)が、平成25年度には馬上美知(教育思想)が、新たに専任教員として着任しています。

### カリキュラムの充実

平成18年(2006)7月の中央教育審議会答申「今後の教員養成・免許制度の在り方」以降、いつの時代にも求められる教員の資質能力として、実践的指導力が強く求められるようになりました。本学児童教育学科でも、地域と連携しながら、小学校教員としての実践的指導力を磨いていくことを重視したカリキュラムを、「教育の探求」「子どもの心と体」「芸術と表現」「子どもの環境」の四つの柱から編成し、教員養成を行っています。

平成23年(2011)度に学科設置4年目の完成年度を迎える、平成24年度以降のカリキュラムについて、①教員採用試験対策科目の充実、②「教育実習」の履修年次変更、③音楽実技の充実と情報教育科目の取扱いの3つの点から見直しを行い、さらなる充実を図りました。

### 川村小学校との交流

本学科では、平成20年(2008)度の学科設置から平成23年(2011)度入学者まで、3年生後期に川村小学校で行わ



●松原一義先生(前列右から4人目)を囲んで(平成25年1月)



●教員採用試験直前、原田耕平先生による数学特訓(平成24年5月)



●福士顕士先生の理科の授業風景(平成25年10月)



●小学校での授業参観(平成24年5月)



●小学校での教育実習(平成24年10月)



●小学校運動会へのボランティア参加(平成24年10月)



●学園祭での創作劇(平成22年10月)

れる1週間の観察実習と、4年生前期あるいは後期に公立小学校で行われる3週間の実習を合計した4週間の「教育実習」を行ってきました。しかし、おもに4年生の5月下旬から6月下旬にかけて行われる「教育実習」は、毎年7月中旬に実施される教員採用試験の直前であり、「教育実習」と教員採用試験勉強との両立に苦慮する学生が多いことから、平成24年(2012)度入学生からは、「教育実習」を3年次後期に移行し、原則、我孫子市の公立小学校での4週間実習へと変更しました。

この変更により、川村小学校での1週間の教育実習は行われなくなりましたが、「教育インターンシップ」の授業や川村小学校運動会などへのボランティア参加により、教育活動における川村小学校との交流は、川村学園の強い絆のもと、続いている。川村学園の建学の精神が、教育内容においてとくに色濃く反映されている小学校との交流は、「感謝の心」と豊かな感性という「川村らしさ」を備えた小学校教員の養成をめざす本学科にとって大きな意味をもっています。

## 地域との連携

本学は、平成19年(2007)に、人材育成と住みよい街づくりの発展に向けて相互協力する内容の協定を、我孫子市との間で締結し、我孫子市立小中学校での学習補助を行う大学生ボランティアの派遣を正式な制度として発足させました。児童教育学科が設置される前年に制度化された、こうした我孫子市教育委員会との連携は、学習支援ボランティアなどでの経験を重ねることで、学生が学校現場を知り、教職の具体的なイメージをもつことを重視する本学科にとって非常に意義深いものです。とくに、児童教育学科の専門科目としておかれている「教育インターンシップ」は、我孫子市でのボランティア活動終了後に小中学校長から渡される「証明書」によって単位認定されており、その成果はきわめて大きいといえます。また、千葉県が教職希望者に対して行っている教員養成プログラム「ちば！教職たまごプロジェクト」では、毎年3年次の学生が週1回参加することを奨励しており、積極的に地域の小学校との交流を深めています。

さらに、毎年6月に、我孫子特別支

援学校の初等部1年の児童が、「初めての遠足」先として本学を訪れており、大学の知的資材や施設を開放することによっても、大学と地域との積極的な交流を進めています。

## OGとの交流——卒業生オフィスの設置

平成25年(2013)4月から、卒業生オフィスを設置しました。これは、月1回、大学の教員と卒業生とが集う交流会です。在学生にとってはOGの学校での経験談や教員採用の勉強の仕方を聞くことのできる貴重な場として、卒業生にとっては学校での悩みや不安などを忌憚なく相談できる場としての機能を果たしています。とくに、在学生にとって、教員が話をするよりも、非常に身近な先輩が語る体験談のほうが、はるかに迫力があり、小学校教員になることへの目的意識を高めています。

## 学園祭と研究授業会

児童教育学科では毎年1年生が、小学生の誰もが知る物語に、登場人物やダンスなどのオリジナリティーを加え、



●研究授業会(平成25年1月)



●研究授業会(平成25年1月)



●卒業論文発表会(平成25年1月)



●教員採用試験対策講座(平成25年9月)

公演しています。舞台装置・小道具・模擬店準備などの準備は、教員として求められる学級経営力にも結びつくものであり、毎年、すべての学生が積極的にかかわっています。学習支援ボランティアなどで交流のある我孫子第2小学校や第3小学校などの地域の小学校に招待状を配付し、毎年たくさんの子どもたちが学園祭に訪れています。

また、「学習指導案の作成や検討、授業の実践を通して、学年を問わず互いに高め合い、学習指導力の向上を目指そう! そして、学科としてつながりを強めよう!」という目的を掲げ、4年生主催による「研究授業会」が、卒業論文提出後の1月に行われています。学生が主体となって授業の場を設け、自らの研鑽を積む姿こそ、誕生から5年の児童教育学科の教育の成果の証しといえます。

### 卒業論文と卒業生の進路状況

卒業論文は、大学の中核をなすものであり、その大学の研究・教育水準を大きく反映しているものです。児童教育学科では、平成25年(2013)度現在、1期生、2期生が提出した卒業論文は、

総計27編ですが、そのいずれもが独創性と進取性にあふれる研究であり、これらは本学科にとってかけがえのない貴重な財産といえます。

卒業生は、平成25年(2013)3月時点で、1期生14名、2期生13名、併せて27名全員が「小学校教諭1種免許状」を取得し、うち8名(平成24年3月卒業生5名、平成25年3月卒業生3名)が現在、千葉県と東京都の公立小学校や県立特別支援学校の教諭として教壇に立っています。

平成25年3月に卒業した2期生は、教員採用試験受験者10名中7名が一次試験を突破し、そのうち3名が合格を果たしました(千葉県2名、東京都1名)。合格を果たした人も、公立小学校の常勤講師として採用され、低学年の担任を任せられ、この夏の教員採用試験に再度挑戦しました。

### 今後の展望

本学児童教育学科をはじめとして、小学校教員養成課程をもつ多くの私立大学では、「教科専門」や「教職専門」を担うスタッフ数、開講科目のバリエーションなどにおいて、

ヨンなどの点において国立大学の教員養成系大学・学部には遠く及ばない「小さめな教育組織」で、教員の養成を行うことを求められています。「小さめな教育組織」で、安定的に教員養成教育を提供し、なおかつ実績をあげていくことは、とても難しいことです。

しかし、本学科教員は、「教科に関する科目」や「教職に関する科目」において、量的には国立大学の教員養成系大学・学部に遠く及ばないものの、授業内容の水準や担当者の取り組みの意識などの点で遜色はないと自負しています。また、「小さめな教育組織」であるがゆえに、小学校教員養成に向けての大学教員間の合意形成が容易であり、学生に対しても一人ひとりの状況に応じたきめ細かな指導が可能であるという大きなメリットもあります。小規模であるがゆえのメリットを最大限に生かして、幅広い教養と実践的指導力を備えたカリキュラムと指導を展開することが、教員採用数の変動に左右されない安定的な教員養成教育の提供に資するのであり、今後の児童教育学科の道程を開く課題といえます。

# 児童教育学科の発足

Okamura Yutaka  
岡村 豊

平成19年(2007)4月、翌年4月に発足する児童教育学科の専任教員として本学にまいりました。設置の実務は、山下庶務部長と学科長予定の坂口(早苗)教授が取りまとめの実質的な中心となって進められていて、私は教育学部長として必要に応じ適切な協力をする立場にありました。私の印象では、悩ましい問題も生じはしたもの、大局的には、ことは順調に進み、児童教育学科は無事発足の運びになったと思っています。

構想の段階から係っていたわけではないので、どのような意図と将来見通しのもとで児童教育学科が設置されたかを正確に伝えることができる立場にはありませんが、設置の責任を担った教育学部長としては、小学校教員の供給の不足が予測されている状況下で、我が国の社会の発展と向上に女子教育の推進を通じて貢献することを旨として実績を積み重ねてきた本学が、この時点でできるもっとも相応しい活動であるということと、教育学部に柱をつくるということが、児童教育学科の設置の眼目であると考えていました。

将来見通しについては、学生確保の難しさの実態を考えれば、子ども学科のような構想もありえたと思いますが、児

童教育学科には小学校教員の養成という性格が明確であるという利点もあり、決まった以上この利点を生かす道を進むべきと考えました。

児童教育学科は予想していた以上に実績が出始めていると聞いて

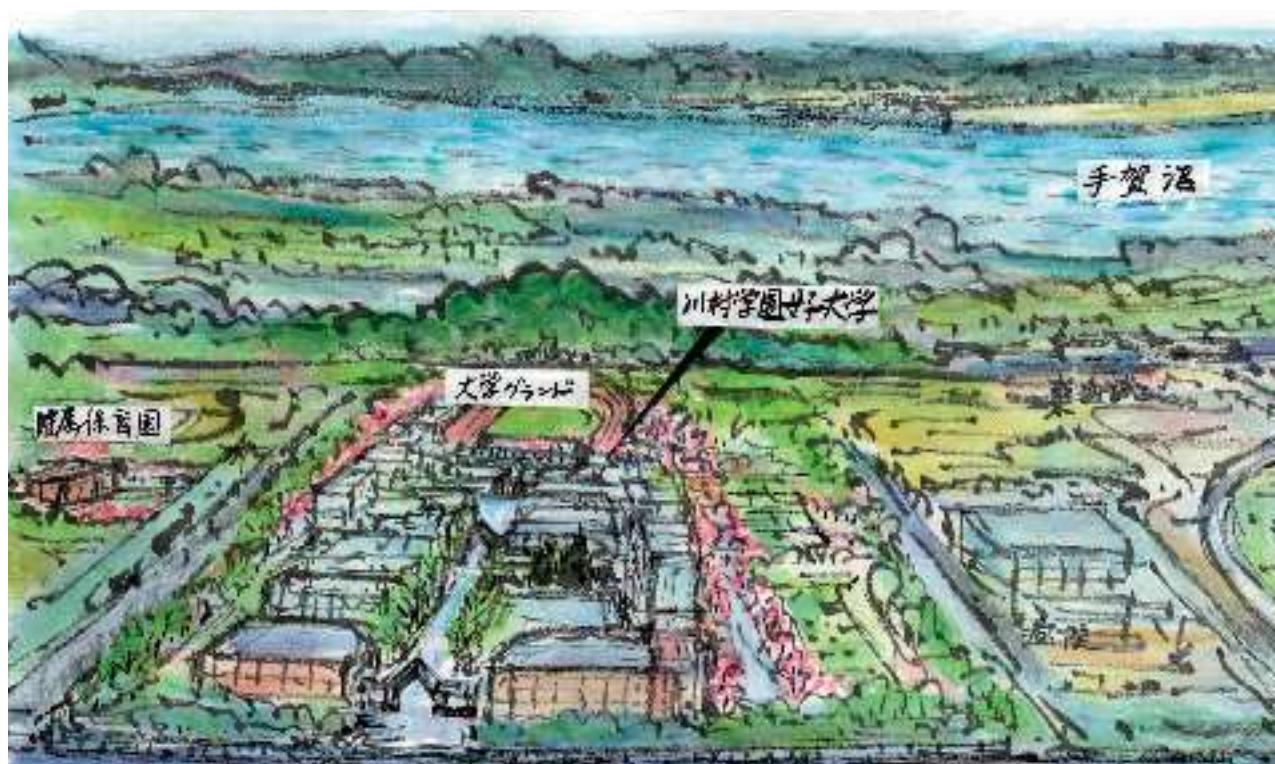


●岡村先生(平成20年8月)

います。これは、学生・教員の努力に負うところが大ですが、早い段階から学生たちを教育現場に馴染ませてきた学科の努力を忘れるわけにはいきません。なお、その効果のほどは定かではありませんが、第1回・第2回の児童教育学科の学生は授業で必ず最前列に陣取っていました。第3回は若干崩れているという噂を聞きますが、先生方ですらなかなかできないこのような思い切りの良い、恰好いい行動は、効果を云々することなく、ぜひ維持してほしいものです。

いつの日か、児童教育学科が、大学を支える柱の一つとなることを願っています。

(平成25年5月記)



## 伸び代のある学生たち

Uehashi Nahoko  
上橋菜穂子

「あ、そうか！」

ゼミが終わったとき、ある学生が、ふいに声を上げた。

「先生、物事って、奥に別のものが重なって在るんだね。ほら、パソコンの画面に表示されている文書に下線があって、そこクリックすると、その説明が表示されるでしょ？ それでもって、その説明にもまた下線が引かれている部分があったりして、そこをクリックすると、さらにまた、その説明がある……。そんなふうに、奥に行くに従って、どんどん広くなっていくんだね！」

マウスをクリックする仕草をしながら、そう話していた彼女の目の輝きが、いまも忘れられない。文化人類学の文献を読みこむ中で、ひとつひとつの事象について縦横無尽に話が発展する経験をした興奮が、まだ冷めやらぬ様子で話していた彼女は、その後、何かの説明をするときには必ず、ひとつふたつ、それに関連して調べてきたことを付け加えてくれて、俄然、ゼミが活気づいたものだ。

彼女は、教育実習に出たときにも、堂々たる模擬授業をしてみせてくれた。豊かな広がりをもった、聞いていて思わずひきこまれる授業だった。

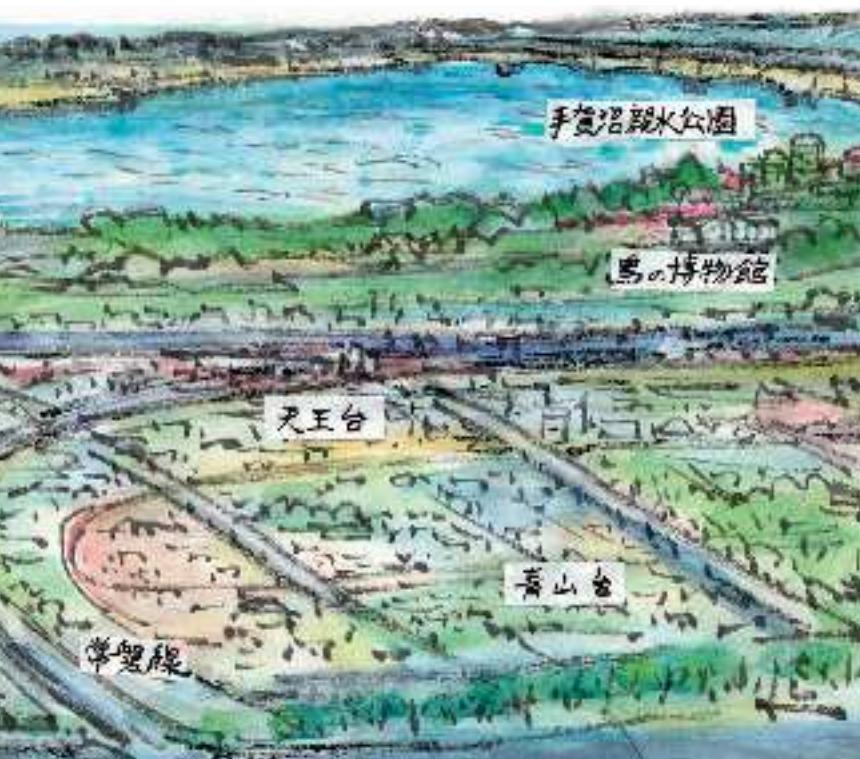


●上橋先生の授業風景(平成24年9月)

ゆとり教育を受けた世代の学生が抱えている問題は、知識が少ないとことだけではない。教科書にマーカーで線を引いて覚える作業を主とする授業を受けてきた彼らは、物事が多彩な広がりをもっていることに気づいていないことが多いのだ。

しかし、川村の学生は素直で、知識を得たい、人の役に立ちたいという気持ちをちゃんともっている。だから、導火線に火がつけば驚くほど伸びる。川村から巣立った学生たちは、やがて、次の世代の子どもたちの導火線に火を灯し、美しい花火を夜空に開かせていくに違いない。

(平成25年6月記)



●荻原延元画

# 社会教育学科

Department of Social Education

## 「みんなの学び」と 「みんなの幸せ」

### 学科の創設期

社会教育学科は、「広範囲にわたる社会教育を総合的に学習、研究、実践し、社会教育の発展・充実・活性化を目指すとともに、社会の高度化・多様化・情報化などの変化に対応できる社会教育指導者の育成と、明るい家庭や社会の創造に役立つ心身ともに健全な女性の育成」(平成3年度履修案内より)を目標として、平成3年(1991)に創設されました。創設時(平成6年)は、教授7名(岡本包治<sup>かねじ</sup>、加藤雅晴、加納正己、北村浩一郎、杉溪一言<sup>すぎたにきよとき</sup>、元木健、山川岩之助)、助教授2名(斎藤哲郎<sup>さいとうてつろう</sup>、坂口早苗)、講師2名(望月厚志、柳原葉子)、助手1名(高見和至)の教員11名と、教務補助1名(加藤万里子)という構成でした。

当時のカリキュラムは、社会教育に関する専門科目が多様に配置され、博物館学芸員、図書館司書、社会教育主事(任用)の資格が取得できるように構成されていました。あわせて、中学校および高等学校の教員免許の取得が可能でした。

社会教育学科の学生は、学科の方針によりボランティア活動や地域での活動に積極的に参加し、社交性にすぐれ、活発で明るかったという印象が強く残っています。また、学内においても、学友会や学園祭などの主要な大学行事の委員を務め、体育祭(スポーツディ)では連続して優勝するなど、学内のリーダー的存在であったといえます。

### カリキュラムの変遷と 福祉教育の導入

平成8年(1996)、これまでの取得可能な資格に加えて、新たに司書教諭、社会福祉主事(任用)に関する科目が加わりました。また、社会福祉士の国家試験受験資格を得るために養成機関に進学する条件となる、基礎科目を履修できるようになりました。

平成11年(1999)には、学科の専門科目を「健康・福祉・スポーツ・カウンセリング領域」「生涯学習・生涯発達領域」「社会教育施設・学芸員・司書・司書教諭領域」の3つの領域に分け、受験生や新入生にわかりやすいカリキュラム・チャートを作成しました。

なお、平成9年(1997)には教授として末松弘行、平成10年(1998)には同じく教授として田中博正、平成11年(1999)には講師として上橋菜穂子、助手として藤原昌樹、平成12年(2000)には教授として二上政夫、森田玲子が着任しました。

平成14年(2002)、社会教育学科は大きなカリキュラムの改正を行いました。これまでにも福祉に関する資格あるいは科目を履修することができましたが、平



● 福祉教育授業として行われた車いすバスケ(平成16年7月)

成14年度からは社会福祉士・精神保健福祉士の国家試験受験資格が修得できるようになったのです。さらに、産業カウンセラー、ゲートボール3級審判員、生涯学習インストラクターといった資格の取得を支援する科目も加わりました。

当時の履修案内には、「『学び』と『福祉』」のわかる社会教育専門職員、社会福祉や健康教育活動に貢献できる人材および企業や地域社会において多種多様な学習活動を援助できる人材の養成のための専門科目を広範囲にわたり配置」すると記されています。

また、このような「『学び』と『福祉』」という学科の方針をよりわかりやすくするために、「『みんなの学び』(生涯学習)と『みんなの幸せ』(福祉)」というキャッチフレーズが考えられ、以降の社会教育学科を象徴することばになりました。

社会教育学科は、これまでにも実習や演習のような実践的な授業を多く取り入れてきましたが、平成14年(2002)度からは1クラスの履修者を原則20名以下に制限し、グループ別や個別の指導をより丁寧に行うことを行いました。

福祉教育の本格的導入により、学科専門科目の3領域は、「生涯学習プランニングコース」「生涯学習・情報支援コース」「共生社会、健康・福祉支援コース」の3つのコースに変更されました。このカリキュラムの改正は、社会教育学科にとって大きな転換点であったといえます。なお、平成14年(2002)には講師として山下博司が加わります。

## 時代の要請にそって

福祉教育の導入により、福祉を志すボランタリーでホスピタリティにあふれた学生の入学が増え、社会教育学科の学生の気質も少しづつ変化がみられました。

平成20年(2008)には、情報コミュニケーション学科の発展的解消により、一部の科目が社会教育学科に組み入れられ、情報処理技術者(初級システムアドミニストレータ)とCGクリエータの資格取得が可能になりました。また、カリ



● 藤田節子先生による図書情報検索演習の授業(平成20年11月)



● 「手賀の丘少年自然の家」で採用試験学習合宿(平成25年9月)



● 我孫子市民フェスタ  
2013「女子力で“あびご”  
を盛り上げちゃいます」  
(平成25年11月)

キュラム・チャートは、「生涯学習支援に関する科目」「健康・福祉支援に関する科目」「情報に関する科目」の3つに再編されました。しかし、情報に関する科目は、平成22年(2010)には社会教育学科の科目からはずれ、カリキュラムは「生

涯学習に関する科目」「福祉・健康に関する科目」の2領域で構成されることになりました。

平成23年(2011)、社会教育学科は再び大きなカリキュラムの改正を行います。平成14年(2002)からスタートさせ

た福祉の資格科目(社会福祉主事の科目は除く)をカリキュラムからはずし(精神保健福祉士関連の科目は、平成21年度で終了)、「生涯学習支援に関する科目」と「教職支援に関する科目」の2領域に分類しました。とりわけ公務員と教員の養成に力を入れた構成になっており、各種採用試験対策に特化した科目(「生涯学習特講Ⅰ・Ⅱ」)なども取り入れられています。また、各教員が「寺子屋」という自主授業を設け、採用試験合格に向けて支援しています。

さらに、これまで以上に実習や実践演習の科目(「生涯学習実習」「レクリエーション実習」「教育調査実習」など)が整

えられていることも特徴として挙げられ、地域の生涯学習センター、公民館、図書館、博物館などと連携した教育活動を行うことで、企画力や実践力を養っています。

なお、平成16年(2004)には藤田節子(助教授)、平成17年(2005)には梅澤嘉一郎(教授)、松原征男(助教授)、平成18年(2006)には西川将巳(教授)、朝比奈朋子(講師)、平成19年(2007)には岡村豊(教授)、平成23年(2011)には山口善久(教授)が着任しました。

平成25年(2013)現在、教職員9名(教授は坂口早苗、西川将巳、藤田節子、二上政夫、矢野重典、山口善久の6名、

准教授は朝比奈朋子、藤原昌樹の2名、教務補助は宮越祐子)という構成です。

## オリエンテーション・キャンプと学生の交流

入学後、学生たちが交友を深める機会としては、まず、オリエンテーション・キャンプが挙げられます。創設当時は蓼科山荘(宿泊をともなう)を利用していましたが、日帰りで実施することになってからは、博物館、美術館、図書館などの社会教育施設の見学と食事という学科の特性を生かした内容で行われています。オリエンテーション・キャンプを大学生活の思い出の一つに挙げる人



● 斎藤哲郎先生の「寺子屋」授業(平成24年4月)



● 新入生歓迎ピザ・パーティー(平成22年4月)



● 余暇生活論の絵手紙の授業(平成24年11月)

も多いのではないでしょうか。

また、近年、学生たちの企画による流しそうめん大会、ピザ・パーティー、クリスマス・パーティーなどが定期的に開催され、同学年だけではなく異学年との交流もさかんに行われているのも社会教育学科の特徴の一つです。

こうした交流により、普段から上級生が下級生の履修や悩みなどの相談にのったり、あるいは就職活動のアドバイスをしたり、という姿が見受けられます。

### 幅広い分野で活躍する卒業生

社会教育学科は、創設以来20年あまりにわたり、1000名を超える卒業生を輩出してきました。社会教育あるいは生涯学習といった幅広い分野の学習を特徴とする本学科の卒業生は、大学教員、小・中・高校の教員、各種公務員、各種社会教育施設の専門職員、青少年教育施設の指導系職員、法人や会社・企業の職員など、実に幅広い分野に就職をしています。

これからも社会教育学科で学んだことを活かして、ますます活躍されることを願っています。



●レクリエーション実習でのシーカヤック(平成20年9月)



●レクリエーション実習でのキャンプ風景(平成18年9月)



●オリエンテーション・キャンプでの楽しい食事(平成18年4月)



●流しそうめん大会  
(平成20年7月)

## 若ものとボランティア活動

Okamoto Kaneji  
岡本包治

阪神・淡路大震災の年は「ボランティア元年」とも言われる。われわれ日本人がボランティア活動に目ざめさせられた年だったのである。また、被災地に参集したボランティアの中できわ立って活躍したのは若ものたちであった。平成7年(1995)2月から3月にかけて行われた調査では避難所で活躍したボランティアの70%以上が若ものたちだったのである(兵庫県「阪神・淡路大震災におけるボランティア活動に関する調査」より)。

長髪を真赤に染めた青年たちが必死の形相で働きまわっていた姿がテレビに映し出されたこともご記憶であろう。卒業記念旅行で外国に行く予定であった女子大生たちが、旅行を止めて阪神でボランティア活動をしたケースも報ぜられたはずである。いずれも若ものを高く評価したい活動であった。

ところで、現代の若ものたちのボランティア活動には、大人が口にする「世のため」「人のため」というような使命感や構えは少ないようである。むしろ自分の心にフィットすることが起因となって活動する場合が多い。ボランティア活動の「わざ

とらしさ」から  
若ものたちは  
卒業している  
のである。

また若ものたちは、さまざまな種類のボランティア活動を「気楽に」行う。高齢者施設の訪問をしたその足で野外キャンプ場で子どもを指導し、そしてさらに地域の古の語る民話のまとめ集を作製するのである(山形県教委「Y・Yボランティア活動事例集」平成7年10月刊)。「ボランティアだぞ」という構えがない。すばらしいことである。

さらに、若ものたちは学校の先生に引率されての「指導されたボランティア」は好まない。自分たちで主体的に活動を選択し、仲間づくりを楽しみながらのボランティア活動が多い。楽しみとボランティア活動の同居である。

(『櫻』第6号、平成8年12月)



●岡本先生とゼミの学生(平成10年7月)

## 充実した歳月を思う

Kitamura Koichiro  
北村浩一郎

平成3年(1991)4月に本学の教育学部が増設され、その際、私も専任教員として勤めることになり、平成21年(2009)3月に定年を迎えるまでお世話になった。今その間のことが走馬灯のようにいろいろと頭に浮かんでくる。

とくに印象に残っているのは、ユニークなそして元気な多くの学生に出会ったということである。もちろん、頭脳明晰で勉学の得意な学生も多くいたが、運動能力に優れ、学内のスポーツデイの際は別人のように目を輝かせる学生、部活や対外試合の時にがをしても、また骨折してもなお続けた闘志あふれる学生等々のことが、鮮明に思い出される。

そして、私が接した学生の多くは、とても思いやりがあり、素直で明るくしかもマナーを身に付けていて、その就職先の上司からもしばしば「指導が行き届いている」と褒められたものである。このようなすばらしい学生が育つというのは、本学の伝統であり、スクールカラーではないかと思われる。

また、優れた教授陣が多かったということも強い印象として残っている。私が最初に所属した社会教育学科だけをみ



●オリエンテーション・キャンプにて学生たちと食事をする北村先生(平成18年4月)

ても、それぞれの学会の重鎮といわれる岡本包治、元木健、杉溪一言、末松弘行といった人たちが教授としておられ、日常の会話の中でも学ぶことが多かった。

その他、思い出がたくさんあってとてもここに書き尽くすことはできない。ただ、今振り返ってみて、本学に勤めていた18年間は、私の人生の中でもっとも充実し、楽しい時であったように思う。川村学園、同僚、学生の皆さんに心から深謝するしだいである。

(平成25年5月記)

## ジョンの魂

Nishikawa Masami  
西川将巳

あの日のことは、今でも思い出す。

1980年(昭和55)12月9日の夕方。友人の家に向かう途中で、成城の住宅路を歩いていた時だった。前から友人の兄がこちらに向かって歩いてきた。「おい、知ってるか。ジョン・レノンが死んだぞ。」一瞬、頭が真っ白になり立ち止まつた。混乱して何を言われているのかよくわからなかったのである。

私とジョンとの出会いは、小学校高学年の頃だ。当時から、音楽はとても好きだったのだが、ヴァイオリンを習っていたこともあり、それまで聴いていたのは、もっぱらクラシック系の音楽だった。が、音楽好きの友人の家に遊びに行った時に、友人が、「姉貴のレコードだよ」と言って聴かせてくれた音楽がある。ビートルズの音楽も、そんな中のひとつであった。だから、私は、ビートルズ世代ではない。友人の兄や姉たちの世代がビートルズを聴いて育った世代である。事実、1970年(昭和45)、私が小学校5年生の時に、ビートルズは解散してしまった。その時も、その友人から聞いて、あのRock'n Rollはもう聴けないのかと、ひどくがっかりしたことを覚えている。その翌年、ビートルズ最後のアルバム「Let It Be」の輸入盤を街で見つけ、買った(当時でも、輸入盤の方が安かった)。自分の小遣いを貯めて買った初めてのLPレコードだった。輸入盤なので、角のところが、三角に切り取られ、少し残念だったが、黒のバックに4人のメンバーが、長髪、髭姿でやけにかっこよく写っているそのジャケットは、その音楽同様、少し背伸びをした私の大のお気に入りだった。解散のきっかけになったのが、ヨーコ・オノとの結婚のせいなどという話を聞くにつけ、同じ日本人でありながら、ヨーコなるその日本人女性をやけに恨めしく思ったものである。まだ子供だったのだろう。実際に、ジョンの魂に本当に触れたのは、その後のことである。

ビートルズを脱退する前後からの、ジョンのメッセージに

は、いつも驚かされたが、当時、エキセントリックに扱われた「ベッド・イン」や「MBE勲章の返還騒動」の眞の意味が理解できたのは、中学生になってからだったように思う。「ベッド・イ



●「Let It Be」輸入盤ジャケット(昭和46年購入)

ン」というのは、ジョンとヨーコの世界平和への希求、ラブ・アンド・ピースの思想に基づく、非暴力を通じてのハンガー・ストライキであり、決してマスコミが騒ぎ立てたような意味合いのものではなかったのだということ。MBE勲章を返還したのは、英國のビアフラ紛争への介入やベトナム戦争での米国支持に対する断固とした抗議声明であったということを。男女平等を訴え、主夫(ハウス・ハズバンド)という、当時では聞かないような選択をしたのも彼である。多感な青年期、次々と出されるジョンのメッセージに強く影響を受けて育った。であるから、いわば私たちの世代は、ビートルズの世代ではなく、レノン世代とでも言えようか。彼が訴えた世界平和へのメッセージは、ビートルズ世代のみならず、私たちの世代にも、強く心に刻まれているのである。

ジョンが凶弾に倒れて、10年以上経った後も、ジョンの魂は私たちに訴えかける。湾岸戦争の時期、なんとあの「Imagine」が放送を自粛されたのである。一体、いかなることか。戦争だからこそ、平和を訴えねばならないのではないか。放送自粛ということ自体が、逆にジョンの平和希求へのメッセージを、私たちにあらためて確認させてくれた。

昨今の極東の不安定な情勢、ジョンが心から愛した妻の故郷近隣の情勢を見て、もし彼が生きていたならば、どんなメッセージを出したであろうか。きっとジョンならまた歌ったに違いない、「Give Peace A Chance」と。

(『櫻』第16号、平成19年1月。一部略)

# 情報コミュニケーション学科 (情報教育学科)

Department of Information and Communication Sciences

## 時代の先端をいく 施設と設備のなかで

### 情報教育学科の新設と経緯

平成3年(1991)教育学部の一つの学科として情報教育学科が設立されました。この設立については、情報教育学科の構想と設立に尽力した当時の副学長奥田眞丈の力と情報教育学科のカリキュラムの構成に尽力した初代の学科長古藤泰弘の力によるものです。当時の教育界の動向をみると、昭和60年(1985)臨時教育審議会が開始され、教育が新しい方向に動き出した時代でした。この審議会の答申では、21世紀に向けた教育のあり方がテーマであり、いくつかの教育改革が提言されました。その一つが、社会の情報化に対応した「教育の情報化」のあり方についての提言であり、科学技術の急激な進歩に対して、学校教育の新たなカリキュラムの構築が要請されました。

本学教育学部の情報教育学科設立については、古藤が本学の研究紀要第3巻第1号(平成2年)に紹介しています。情報教育学科の教育目標が「社会の情報化に対応できる豊かな情報教養と教育についてのすぐれた情報技術を身につけ、進展する社会にあって主体的に活躍できる有能で健全な人材(女性)の育成を目指す」のように設定されています。この教育目標に基づいてカリキュラム編成が行われました。情報教育の内容を大きく①情報教養に関する内容、②情報技術に関する内容に区別され、「情報教養」については「情報に関する科学的知識・理解」「情報社会の経済的・社会的・文化的特質や体制に関する知識・理解」など4項目、「情報技術」については「情報機器の特質に応じた操作技能」「情報機器の利活用に必要な知

識と技能」など4項目が挙げられています。

情報教育学科のカリキュラム編成にもいくつかの特徴がありますが、その一つは、情報教育という場合の「情報」の意味を2つの視点からとらえ、コンピュータによる「形式的情報」の処理技術よりも「意味的情報」に、より重点をおい

て授業科目を編成する方式がとられたことです。これは大学教育における新しい情報教育のフレームワークであり、日本で最初の文系大学における情報教育学科の誕生となりました。専門科目は、必修専門教育科目(12科目)、選択専門教育科目(29科目)、関連専門教育科目(24科目)が設置されましたが、どれもが特徴がある科目でした。必修専門科目では「情報教育論」「教育ハードウェア概説」「教育ソフトウェア概説」「情報社会論」など、選択専門教育科目では「教育工学」「学習行動論」「教育システム設計」「データ通信概説」「パターン認識」「情報処理演習I~IV」などがありました。学生数は、120名2クラス編成で、クラスごとの授業がなされました。



●学科創設当時の教職員と学生(蓼科オリエンテーションにて、平成4年5月)



●映像処理室にて、第2期生の学生たち(平成4年5月)

## 施設と設備

大学正門を入って、しばらく進むと左側に8号館2階建ての校舎があります。この8号館の2階のフロアが情報教育学科の専門教育施設として整備されました。第1情報処理室(コンピュータ演習室60名定員、コンピュータ70台、VTR、OHP設置)、第2情報処理室(講義室60名定員、コンピュータ40台、VTR、OHP設置)、第3情報処理室(小演習室20名定員、コンピュータ20台、パソコン通信の設置)、映像処理室(講義室70名、VTR、映写機など各種映像提示装置の設置)のような教室のほか、映像編集室、中央管理室、学生研究室がありました。3つの情報処理室には、最新のコンピュータが設置され、文系女子大学としてはユニークな情報教育が進められました。一方、映像処理室(講義室)には、伝統的な視聴覚教材・教具である紙芝居、OHP、スライド・プロジェクター、映写機、さらにわが国で開発されたシート式磁気録音機(個別学習機器)、アナライザー(集団反応分析装置)などがあり、学生にとって教育機器の構造や機能を学ぶだけでなく、視聴覚教育、教育工学の発展の教育思想を学ぶことができるすばらしい学習環境でした。

## 専修コースの設置

平成8年(1996)度より情報教育学科では、新しいカリキュラムがスタートしました。これは、高度情報通信社会が要請する情報活用能力を備えた女性の育成をめざしてカリキュラムを改訂したからです。この情報活用能力とは、とくにネットワーク環境の構築と利用、マルチメディア・コンピュータの利用に対応できる能力です。そのため新しいカリキュラムには、「専修制度」(3専修)と「少人数制教育」を導入しました。専修コースは、以下のとおりです。

- ①情報システム専修：情報システムの構築、応用ソフトの活用、システムの管理と運用など、コンピュータ技術の習得を目標とし、システム・アドミニス



●第1情報処理室にて(平成8年10月)



●体育祭、校庭でのひととき(平成12年10月)



●コンピュータの授業を終えて(平成15年6月)



●第2情報処理室にて古藤先生を囲んで(平成8年10月)

トレーラのようなシステム技術者の育成をめざしました。

②情報コミュニケーション専修：マルチメディア・コンピュータを利用して文字・音声・映像情報を処理・加工・表現する技術の習得を目標とし、メディアを活用できる技術者の育成をめざしました。

③人間・社会情報専修：人間の心理や行動の特性の分析、社会情報の収集、管理、活用など、情報化社会に生きる人間の心理や教育について学び、それを応用できる人材の育成をめざしました。

新しいカリキュラムにともない、施設は一部変更されました。第2情報処理室は、少人数制に対応して30人が演習できる2a室と40人が演習できる2b室とに分割されました。情報2a室は、情報コミュニケーション専修での演習・実習ができるように設計されました。また、映像処理室は、人間・社会情報専修の講義や演習ができる多目的教室になりました。

### 情報コミュニケーション学科への名称変更とカリキュラム改訂

平成14年(2002)度から「情報コミュニケーション学科」と名称変更を行い、カリキュラムを改訂しました。これは情報化社会の急速な変化に対応するととも

に、教育を広くコミュニケーションとしてとらえ、新しい時代のニーズに対応したからです。

カリキュラムの改訂では、専修制度に代わり科目群方式を導入しました。これは、学生の独創的な科目履修を可能にするためのカリキュラム編成を行ったからです。学生は、各科目群から自由に科目を選択することができ、学生個々に特徴ある情報活用能力や情報技術の習得ができるようになりました。1年次生には「必修科目群」として「対人コミュニケーション基礎」「メディアコミュニケーション基礎」「情報科学基礎」をおき、2年次から、3つの専門科目群として「ヒューマン・コミュニケーション関連科目群」「メディア・コミュニケーション関連科目群」「コミュニケーション・システム関連科目群」を設置して、自由な科目選択ができるよう配慮しました。また3つの科目群の学習を支援するために「コンピュータ演習科目群」を設置しました。

「ヒューマン・コミュニケーション関連科目群」は、情報社会

における人間の心理や人間関係、教育、文化に関する科目群です。情報社会における人間行動や人間関係の特性を分析したり、流行・ファッション・ブームなどのコミュニケーションと文化について追究しました。

「メディア・コミュニケーション関連科目群」は、携帯電話、デジタルカメラ、インターネットなどパーソナルメディアの利用に関する科目、テレビ、ラジオ、新聞、雑誌などマスメディアに関する科目、さらにマルチメディア・コンピュータを利用した音声・映像・アニメなどの編集や制作を行う科目がありました。

「コミュニケーション・システム関連科目群」は、情報ネットワーク社会の基盤となるデータベースやネットワーク・システムの設計・開発に関する科目です。実用的なメディア・コミュニケーション能力を身につけるために、最新のコンピュータを利用してデータベース設計やネットワーク構築を行いました。

「コンピュータ演習科目群」は基礎から応用までコンピュータ利用に関する豊富な選択科目が用意されています。コンピュータ技術を習得することによって、3つの関連科目群の学習を実践的・効率的に進めることができました。

新カリキュラムの趣旨から教室名称も一部変更され、第1情報処理室、第2情報処理室2A および第2情報処理



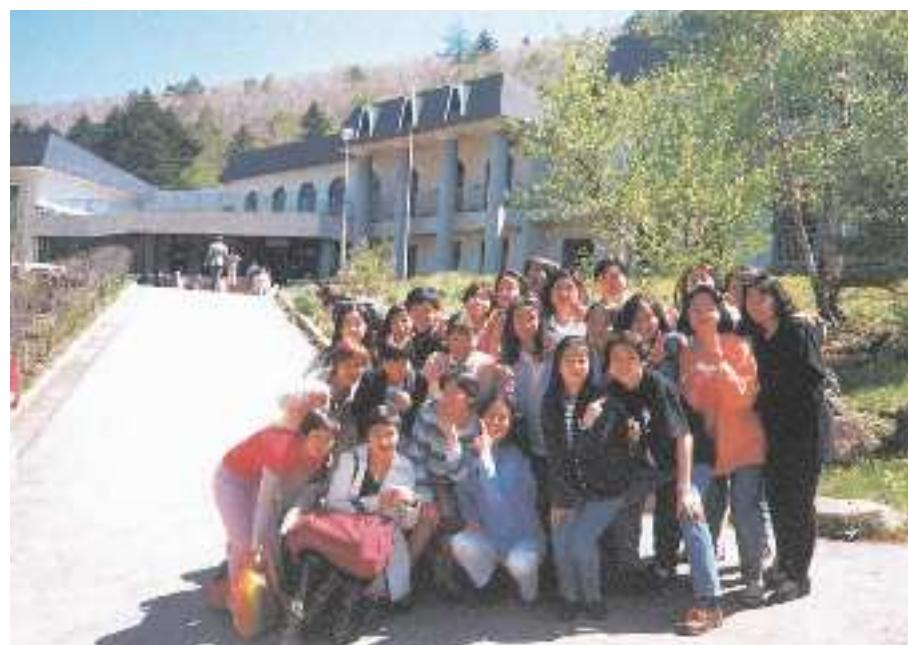
●第3情報処理室にて(平成16年6月)

室2B、第3情報処理室、第4情報処理室(新設)、情報メディア室(前、映像処理室)となり、平成23年(2011)度まで継続されました。第1情報処理室では、情報リテラシーの基礎的実習を行いました。具体的にはWordとExcelの基礎的な技術習得のための実習を行いました。第2情報処理2A室では、ワークステーションタイプのPCを導入し、Adobe社のPhotoshopやIllustratorを使用したグラフィック系の実習を行いました。第2情報処理2B室にもワークステーションタイプのPCを導入し、数値処理や統計処理の実習・演習を行いました。第3情報処理室では、学生の自習ができる環境を整えると同時に、学生の個別質問に対応するようにしました。第4情報処理室ではApple社のMacintoshを導入し、主に動画・アニメーションなどの実習・演習を行いました。

### 学科長と20年間の教育

情報教育学科が新設された平成3～6年度は古藤泰弘、平成8年度～10年度は安田浩、平成11～12年度は篠田功、平成13～16年度は原田耕平、平成17～18年度は本郷健、平成19年度は本村猛能<sup>たけのり</sup>、平成20～23年度は原田耕平が学科長を務めました(20年度募集停止)。また平成16年度には比較文化専攻大学院を設置し、情報教育関係科目を原田・本郷・本村が担当しました。

20年間にわたり情報教育学科および情報コミュニケーション学科で教鞭をとられた先生方に感謝いたします。とくに本学科では、多くの非常勤の先生方にも協力してもらいました。コンピュータ演習授業には、若い専門技術者の方々に入ってもらい、個別対応によって各学生のコンピュータ・スキルを確実にしてもらいました。また学生研究室で学科運営と学生指導に取り組んだスタッフの方々には、学生一人ひとりとコミュニケーションをとり、熱心に対応してもらいました。本学科が20年間の教育を継続できましたのは多くの方々のご協力によるものです。



●オリエンテーション・キャンプ、蓼科山荘前にて(平成6年5月)



●キャンパス内のベンチでくつろぐ学生たち(平成10年5月)



●学園祭を楽しむ学生たち(平成19年10月)

## 情報教育学科の誕生

Koto Yasubiro  
古藤泰弘

現在、情報教育学科がないのは残念ですが、教育学部が誕生した平成3年(1991)当時は情報教育学科の応募者は多く「花形」学科でした。

私が、情報教育学科の創設に関わったのは、当時、副学長でした奥田眞丈先生からお声をかけていただいたのが契機です。平成元年(1989)4月にさかのぼります。当時の手帳に4月8日(土)と記載しています。新宿でお会いした時、大学の「情報教育学科」のカリキュラムを考えてほしいと依頼されました。それが始まりです。

「情報教育」という用語は、昭和61年(1986)に誕生したばかりで、当時の文部省は、昭和62年(1987)にその内容(4つの柱)を発表していました。だが、そのまま大学教育のカリキュラムに適用するには無理がありました。当時、国立大学の教育学部に「ゼロ免」コースとして教育情報コースや情報科コースあるいは情報教育コースが誕生していました。これらをまず参考にしました。これに加えて外国の事例を調べてみました。その上で私のこれまでの主張(論)をベースに、情報教育学科の目標を次のように定めたのです。

「社会の情報化に対応できる豊かな情報教養と教育についてのすぐれた情報技術を身につけ、進展する社会にあって主体的に活躍できる有能で健全な人材(女性)の育成を目指す」と。これに基づいてカリキュラム編成を行ったのでした。約1年余を要しました。

その間に、多くの若手やベテランの研究者に会って科目担当の打診を行いました。これも一苦労でした。自白の川村学園本部(和風の旧建物)に何度も歩を運びました。

情報教育学科長の命を受けたので、平成2年(1990)10月、文部省から大学設置の認可の報を受けた時は、新しい時代の大学にふさわしいフロンティナーになると決意し、平成3年(1991)4月の開学を迎えたのです。

情報教育学科のカリキュラム開発とその経緯については、『川村学園女子大学研究紀要』第3巻第1号(平成4年)に寄稿していますので、参照していただければ幸甚です。

(平成25年5月記)



● 教室で講義する古藤先生(平成3年5月)

## 美しいキャンパスを ふり返って

Aoki Michibiko  
青木道彦

私は東京都に社会科教員の採用がなかった昭和33年(1958)に八丈島の都立高校で初めて教壇に立ち、次の勤務先まで7年間英語を担当しました。次の2校では歴史担当となりました。一時予備校で世界史を教えていました。

平成3年(1991)川村学園で教育学部が創設された時、こちらに採用してもらい、情報教育学科勤務を命じられ、歴史と英語を担当しました。情報教育学科では、クラス担任、3年生・4年生のゼミも担当しました。私のゼミ生だった卒業生が何名か、川村学園の職員として勤務しています。

平成12年(2000)に文学部史学科に移籍し、ここでも歴史と英語を担当しましたが、歴史科目では自著『エリザベスI世』(講談社現代新書)も教科書として使用いたしました。平成17年(2005)に定年退職してからは、通信制大学で歴史概説を平成25年(2013)まで担当しました。今は二度目のエリザベス伝『エリザベスI世と側近たち』(山川出版社)を執筆しています。

川村学園での大学の仕事で一緒にして、忘れ得ぬ思い出



● 青木先生を囲んで(平成7年1月)

に残っておりますのが、若桑みどり先生です。新入生のための「基礎ゼミ」という科目について、何回かご相談したのですが、その折に学生にきわめてきびしくはあるのですが、学生に少しでも役に立とうとする先生の姿勢に強い感銘をうけました。定年でご退職後、まもなく急逝されたのがまことに残念でなりません。

私はもともと高校教員でありましたので、川村高校の先生方の何人かとは親しくさせていただき、今でも時折、音楽会に一緒にしたりしています。

川村学園の美しいキャンパスをおたずねして、新しい教育の姿を見させていただければと思っています。

(平成25年5月記)

## 教育の本質の場

Motomura Takenori  
本村猛能

情報教育学科での20年間の教員生活は、今考えてみるとあっという間でした。

平成3年(1991)4月、川村学園女子大学教育学部に情報教育学科が設置され、その発足当時助手として着任いたしました。当初、古藤先生、原田先生、青木先生はじめ、8名の教員等で構成され、新入生は120名以上と大所帯、初めての経験の連続ではありましたが、「さあ、スタートするぞ」という活気ある毎日でした。

学科の発足当初から、教員と学生の親睦を図るさまざまな行事があったことを記憶しています。例えば、行事としてオリエンテーション・キャンプです。当時は、学園の蓼科山荘へ学生と共に2泊3日教員全員で実施しました。アルプスの麓の学園の山荘で、新入生に対して、今後の学生生活やカリキュラムの意味、あるいは授業の構成などを教授する一方、交流を兼ねてスポーツ大会や山荘近くの散策、美術館やワイナリーでのバーベキュー等々忘れられない経験をしました。また学園祭でも、情報教育関係の展示やコンピュータを活用したデジタルフォトシールの来訪者への提供など、学科として取り組んでいました。

本学科は、平成14年(2002)情報コミュニケーション学科に変更されましたが、情報化社会のただ中でもあり、コンピュータや種々のメディアが教育の中に浸透しつつある時代でした。そこで、これらのメディアをどのように教育に活用するのか、あるいは情報の光と影や社会での情報との付き合い方、一方教育をめざす学生に対しては、児童・生徒に対する情報についての適切な指導方法などを重要な使命と考え歩んでいきました。

とくに後者の教育については、現在の高校での情報教育

はじめ、小学校から高校の情報教育の目標や体系的カリキュラムに話題提供され、最も大切な課題の一つとして学会でも活発に取り組まれています。これらの経験は、本学から異動した現在もすべてが生きており、また当時の先生方とはさまざまな形で共同研究なども行っております。

本当に川村学園女子大学は、さまざまな経験と教育の本質を教えていただいた感謝の場です。

(平成25年5月記)



●本村先生(前列中央)と教職員・学生(蓼科オリエンテーションにて、平成4年5月)

## 新時代の「人間文化」を 創造する

### はじまりは人間文化学部から

川村学園女子大学が開学して12年経過した平成12年(2000)4月に、約3年間の準備期間をへて人間文化学部設置認可を受け、本学3番目の学部として人間文化学部が新設されました。グローバル化、環境問題、男女共同参画社会の実現という21世紀の日本が直面する諸問題に対して、新しい発想と考え方、多面的な視点・見方、さまざまな分野の知恵を集め、「人間文化」を新たな、多面的な方向から切り込んでいこうとする総合的学部としてスタートしました。

人間社会についての総合的な専門知識と広い視野をもち、めまぐるしく変化する人間社会に主体性をもって積極的に対応し、豊かな社会・家庭生活を構築しうるリーダーとなる次世代の担い手となる女性を育成するためです。すなわち、本学の建学の精神である「自覚ある女性」に従って、21世紀の豊かな未来を築く担い手となる女性の育成をめざし、女性が自立できる能力を培い、応用のきく基礎的な知識・教養を重視し、生活や仕事と直結した実学的カリキュラムが組まれました。

### 切り口は「日本・観光・生活」、 キーワードは「人間・ジェンダー・文化」

人間文化学部必修科目として、「人間学」「ジェンダー学」「情報処理」を配し、新たな問題に取り組むための視点と自立のためのスキルをベースとして、本学部はデザインされました。本学部新設の当時は、日本文化学科、観光文化学科、生活環境学科の三学科構成でスタートしました。日本文化学科では、日本を主体としながらも、日本文化を世界に発信する課題を担い、また観光文化学科では、学際的な観光学を学びながら観光関連産業での活躍する人材を輩出してきました。生活環境学科では、人間の生活とこれを取り巻く生活環境を消費生活・社会環境・生活文化という側面からとらえていました。いずれの学科も従来の学問では把握しきれない現代日本社会のニーズに呼応する、新時代の「人間文化」創造の担い手となる女性を育成してきました。

### さらなる変化を重ねて

生活環境学科は平成16年(2004)度に「生活文化学科」へと



●人間文化学部の懇親会(かじ池亭にて、平成14年5月)

名称を変え、栄養士養成課程へと様変わりし、栄養士資格取得による実学中心の学科へと生まれ変わりました。それにともない、学部共通の必修科目を廃止する大幅なカリキュラム改正が行われました。また、生活文化学科は我孫子キャンパスに新校舎14号館が完成するまでの平成16年(2004)度から平成20年(2008)度までの間、目白キャンパスへと移転となりました。

さらに平成23年(2011)4月には人間文化学部は「生活創造学部」に改称され、それにともない日本文化学科は文学部へ移り、学位の分野が「社会学」の生活文化学科と観光文化学科の二学科編成となりました。女性が生活者として、ゆとりある豊かな社会生活に創造的にかかわり、衣食住+観光(余暇)を柱とした人間らしい生活の実現を担っていく人材を養成しています。



● 食品加工の実験・実習——ロールパンを製造する(平成24年11月)



● 長野県軽井沢を訪れた観光文化学科の豊川ゼミ(平成16年9月)



● アメリカ・グランドキャニオンを訪れた観光文化学科の西岡ゼミ(平成19年9月)

# 生活文化学科 (生活環境学科)

Department of Human Life and Culture

## 社会に貢献する 栄養士を育成する

### 生活環境学科からスタート

生活環境学科は、人間文化学部の一つの学科として平成12年(2000)4月にスタートしました。スタート時の専任教員は12名、川村学園女子大学あるいは川村短期大学からの出身者に加え、実社会での豊富な経験を備えた者、他大学で研鑽を積んだ者など、人間を取り巻く消費生活、社会環境、生活文化などの生活を取り巻く環境を、多面的・多角的に、しかも学際的にアプローチするにふさわしい多種多様なバックグラウンドを有した教員たちが集まりました。

### 「地球規模で考え、身边に実践」を合言葉に

当時の学科長であった早川克巳(故人)が考案した合言葉、「地球規模で考え、身边に実践」はまさしく生活環境学科の意気込みを表現したものでした。生活環境学科では、ますます複雑化する現代日本社会に、主体的に積極的に立ち向かい、まさに21世紀の社会生活・文化の担い手となるべく、知恵と力を備えた女性を育成することを主眼としたカリキュラムが組まれました。

主要科目として、消費生活系では、「生活商品学」(宮本一子)、「消費者保護論」(富田昌志)、「消費者問題論」(富田昌志)、「消費者教育論」(早川克巳)などが、また社会環境系では、「地球環境問題論」(早川克巳)、「社会福祉論」(梅澤嘉一郎)、「消費者関連法」(宮本一子)、「家庭法律学」(入江博邦)、「家族関係学」(柚木理子)、「集団心理学」(高良聖)などが、さらに生活文化系では、「生活環境論」(亀田光昭)、「生活文化論」(富田昌志)、「健康生活論」(坂口武洋)、

「超域文化論」(若桑みどり)、「生活美学」(若桑みどり)などが開講され、社会・生活・環境問題という現代的課題へ鋭くアプローチするための興味深い科目が配されました。

### 文化力と社会力を結集して

生活環境学科に集った教員たちは、まさしく自分たちが学科の歴史をつくっ



●早川克巳先生(前列右から3人目)らを囲んでの食事会(銀座のカーブ・エスコフィエにて、平成19年3月)

ているという意識のもと、誕生したばかりの学科の運営に携わりました。各教員のそれまでの多様で豊富な経験や知見を持ち寄り、ゼミをどのようにするのか、卒業論文をどのように書いてもらうのか、その指導体制はどのようにするのか、何もかも一つずつ決めていきました。初めは戸惑いながら、しかししだいに議論が白熱し、会議が長時間に及

ぶこともあり、いつのまにか「議論の生活環境」と呼ばれるようになっていました。

いうまでもなく卒業論文は大学生活4年間の集大成です。4年生の夏休み前に中間発表会を開催し、学生の発表に対して、ゼミ担当以外の教員からも積極的なアドバイスを受けるなど、学生も教員もより良い卒論完成をめざして力を傾けていました。卒業論文が完成すると、学生一人に対して全教員が立ち会う口頭試問があり、論文の合否判定を行い、最後に卒業論文発表会が行われました。

きわめて少人数でスタートした学科でしたが、教員は学生の利益を第一に考え、一人ひとりの学生と向き合ってきました。学生にとってはときにはハードル

の高い要求もあったかもしれません。しかし、学生たちはゼミの内外で切磋琢磨し、協力し合い、少人数制の恩恵を十二分に受け、厳しい雇用環境のなか、たくましく実社会へと羽ばたいていきました。

### 生活環境学科から生活文化学科へ

WHO(世界保健機構)では、健康を

「身体」「精神」「社会」からとらえています。食生活はこれらの健康のために不可欠です。「栄養」はもちろんですが、「おいしさ」「美しさ」「楽しさ」といった「食の喜び」も大切です。また、「食」を取り巻く環境問題や消費問題も重要です。平成16年(2004)、生活環境学科がめざした「地球規模で考え、身近に実践する」という理念をさらに具現化するため、社会学士の称号をもつ栄養士の養成をめざすことになりました。栄養士の資格科目だけではなく、アート・芸術領域、学科の出発点である環境を含した生活領域の科目も十分に用意し、生活環境学科の教員に短期大学生活学科の教員が加わり、「生活文化学科」として新たな出発をしました。

### 目白キャンパスから 我孫子キャンパスへ

当初は目白キャンパスで授業が行われ、1学年だけが所属していました。そのため、先輩たちをとおして伝わる学び方や学生生活の過ごし方などの良き伝統が継承されにくいのではないかと不安を感じました。しかし、その心配が杞憂であることはすぐにわかりました。目白キャンパスには川村短期大学最後の栄養士課程の学生が残っていて、1年間校舎を共用することになっていました。この短期大学生活学科の2年生が、栄養士課程の先輩としてだけではなく、短期大学が培ってきた「感謝のこころ」や「社会への奉仕」の精神を学生生活をとおして伝えてくれました。このことは目白キャンパスの大学生にとって本当に心強く、また勉強の進め方や図書室の活用の仕方などについて、よくアドバイスを受けていました。

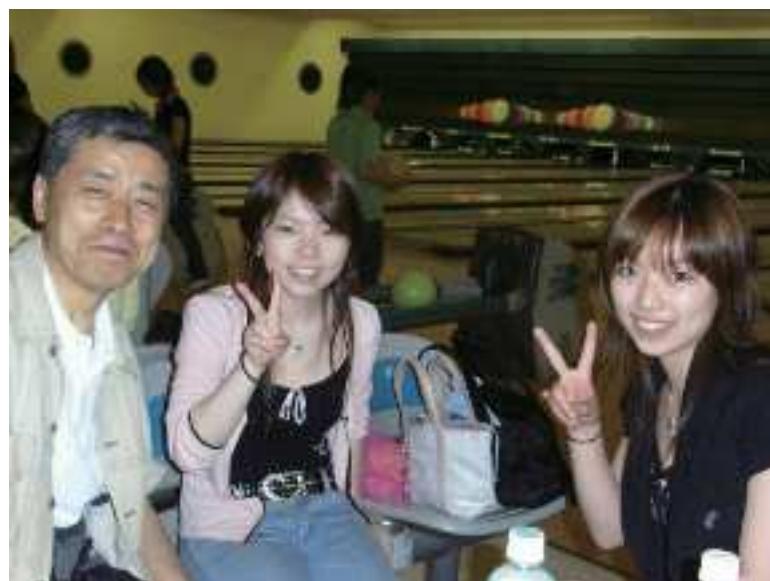
平成19年(2007)4月、目白の旧短期大学の校舎から、駅の反対側にある旧川村短期大学英文科校舎に仮住まいをすることになりました。この校舎は都心にあって緑深く、タヌキが遊びにくる静かな住宅街にあり、小さなながらも自由闊達な雰囲気に包まれていました。しかし、仮校舎ということでさまざまな不便



●新学期オリエンテーションでの桜の植樹(平成13年4月)



●学園祭、アジア子どもと女性のためのバザー(平成15年10月)



●スポーツディーでのボーリング大会(池袋プランズ・ウィックにて、平成16年6月)

が生じ、少しでも学生が生活しやすいように教職員が内装に手を加えたり、卒業論文研究が行いやすいように実習室を開放したり、全員指導体制で夏休みや春休みも対応しました。

平成20年(2008)、最新の実験・実習設備をもつ校舎が我孫子キャンパスに完成し、新入生を迎えることになりました。しかし、目白キャンパスにも学生が在籍していたので、教員はJR常磐線天王台駅とJR山の手線目白駅を行き来する、目の回るような忙しい日々を送っていました。

平成22年(2010)4月、生活文化学科の全学年が我孫子キャンパスに揃うことになりました。この目白キャンパスから我孫子キャンパスへの移転は、途中で仮校舎にいたこともあって合計2回の引っ越しをへています。大きな機器類は専門業者によって引っ越しが行われました。

しかし実験や実習に使う試験管やビーカー、調理器具や茶わんなどの細々としたものは、生活文化学科の教職員や我孫子キャンパス・川村学園の職員の協力で荷づくりが行われました。まさに大学だけではなく、学園全体の支援のもとで荷づくりが進み、また学生たちも手伝ってくれたおかげで、無事に移転することができました。

平成23年(2011)3月11日に起きた東日本大震災のとき、キャンパス内に生活文化学科の学生が居合わせました。学生たちは率先して帰宅できない学生や教職員、併設の保育園の園児のために、少ない食材を工夫して当日の夕食と翌日の朝食を調えてくれました。これは日ごろの生活文化学科の教育の成果がいかんなく発揮された事例であり、関東大震災を契機として川村文子が創設した川村学園の歴史をふまえた誇らしいことだったと思います。

## 社会性豊かな栄養士の育成をめざして

わが国は世界に冠たる長寿国です。いかに健康な人生を過ごすかということを考えいくと、栄養だけに特化するこ



●学園祭(目白キャンパス第6校舎にて、平成18年11月)



●ハロウィーン・パーティー(目白キャンパス第8校舎にて、平成19年11月)

となく、食空間の創造や生活環境、社会情勢をも視野に入れ、「健康な人生」という命題に多面的にアプローチできる力が必要となります。4年間の学びを通して、この力を身につけた本学の栄養士は、社会のニーズに十分に応えられるものだと思います。そのような栄養士を社会に輩出することで社会に貢献していくことが、生活文化学科の使命であると考えています。

現在、栄養士として活躍している卒業生は約80名であり、病院や幼稚園や

保育園、高齢者の施設などで働いています。また、3年生で受験できるフードスペシャリストの合格率が2年連続して90%以上であり、これは食品関係の企業で品質管理や商品開発、商品企画や販売促進などで活躍する先輩たちの影響もあるのではないかと思います。さらに医療秘書実務士の資格も取得することができることから、栄養士の資格をもつ医療秘書実務士として、医療機関でも活躍しています。



●初めての調理実習——野菜の切り方と文化鍋を使った炊飯方法を学ぶ(平成25年4月)



●食品衛生学の実験——合成着色料の確認試験をする(平成25年4月)



●フードコーディネート論の学外授業  
(ザ・クロストホテル柏にて、平成25年1月)

## 学科創設のころ

Tomita Masashi  
富田昌志

新しいことを立ち上げるときには、ある種のカオスとそれを整序する大きなエネルギーが働くものだ。それは生活環境学科(現、生活文化学科)の創設当初にも当てはまる。

ジャーナリスト出身の早川克巳学科長をはじめ、法学の入江博邦、西洋美術史の若桑みどり、環境科学の亀田光昭など、論客揃いの多彩な教授陣を擁する教員団12人は、平均すれば決して若くはなかったけれど、学科の空気は熱気にあふれ、生気がみなぎっていた。

本来の業務である授業以外に、学科を具体的にどのようにつくり上げていくのか、どこに重点を置き、どんな学生を育していくのか、学科が具現すべき理念とは何かなど、連日、夜遅くまで議論を重ね、学科を紹介するパンフレットなどに反映させていった。

ワーキンググループを必要とするテーマのときには、役割を自覚した誰彼が手を挙げて自主的にグループができ、たたき台が示された。だから、学科会も時間を調整しながら、頻繁に開かれた。

その一方で、夏の暑気払い、冬の忘年会、学年末の打ち上げ会など、折にふれて教員同士で飲食を共にすることも多かった。そうした機会の本音の語らいが、教員間の関係がタコツボ化するのを防いでくれたように思う。立ち上げの大変さも面白さも存分に味わいながらのスタートだった。



●桜の植樹をする富田先生(右から2人目)。右端は坂口先生、中央は宮本先生、左手前は柚木先生、左奥は若桑先生)(平成13年4月)

新しい学科での学びのかたちをつくろうと教員も張り切っていたが、学生たちも教員の期待に応え、はつらつと伸びやかに育っていってくれた。たとえば卒業論文審査は、主査と二人の副査の指導を受けたあと、全教員の前で一人ひとりが口頭試問を受けるという厳しいものだった。直接指導に当たった主査でさえ心臓がドキドキするほど緊張したのに、学生たちはその試練を見事に乗り越え、たくましく成長していった。そんな学生たちの姿に同志のような共感を覚えたものだ。

個人的な体験をいえば、夏休み直前に早川ゼミ、宮本一子ゼミと合同でゼミ合宿を行うのが恒例であった。江ノ島や横浜など近場での1泊2日の合宿だったが、夜のミーティングだけでなく、学生と一緒に海で遊んだり、花火をしたり、横浜中華街で食事をしたり、楽しい思い出ばかりが残っている。

(平成25年9月記)



## 短期大学から4年制の 生活文化学科へ

Nagayoshi Michiko  
永吉道子

私は、昭和63年(1988)4月から今日までの26年間を川村短期大学と川村学園女子大学の双方の教員を経験する機会に恵まれました。

この間には、急上昇していた短大志向が下向きになり、女子の4年制大学志向が強かったことにより、短期大学の4年制大学への移行が急増しました。川村短期大学においても、創立以来52年にわたり、先輩の先生方が築いてきた短期大学としてのゆるぎない地位と社会への貢献を果たし、平成17年(2005)3月、短期大学の最後の卒業生を万感の思いで送り出しました。時代の流れを受け、短期大学の栄養士養成課程は、4年制大学の栄養士養成課程の認可を受け、平成16年(2004)4月、人間文化学部生活文化学科に組み込まれることになりました。このため平成12年(2000)4月から設置されていた生活環境学科の名称が、生活文化学科に変更されました。前学科長早川克巳教授(故人)のもとに、私共、短期

大学の教員らは温かく迎えていただきました。

新たにスタートした生活文化学科では、これまで生活環境学科を築いてこられた教員たちの人間社会への鋭く、刺激的な視点や見方に大いに触発されました。早川克巳教授は、国内と世界の現状を見据えた、世界の人々の健康に貢献できる栄養士のあり方をご教示いただいたことが、今にして、とても解かるようになりました。

一方、2年制から4年制になり感じたことは、学生が3年次に進級する頃、精神的な成長を実感できることでした。また、卒業論文を書き終え、「4年間で一番頑張ったよ」と言って卒業した学生たちから、先々何が必要になるかを考えながら仕事をしているという便りをもらい、うれしく思っています。

(平成26年1月記)



●永吉先生(平成24年4月)

## 生命の尊厳と健康

Sakaguchi Takehiro  
坂口武洋

ヒト細胞には22対の常染色体と1対の性染色体、合計46本の染色体があり、父親と母親から23本ずつを受け継いで2対で構成されている。この染色体を構成するのはDNAであるが、体細胞当たりで約30億塩基対になる。この染色体DNAでは2万3000種類の遺伝子が解読されている。今日の生命科学は、クローニング、iPS細胞など生命の発生に関わる領域で目覚しく進歩している。

学園の創立者である川村文子先生は自然科学分野にも力を注がれていた。先生は「健康」について、「ヒトの生命は父母、先祖の生命そのものの延長であると共に、永遠の子孫の生命のこもったもの、この貴き生命の自覚があれば健康に注意できる」と述べている(『紫雲』第3章第1節教育方針16)。当時の学院心得第2条に「心身の充実と健康をはかること」が記されている。

また、「生命の尊重」の大切さを、「健康の重んずべきことは何人も知っているが、健康増進の実行が忘られ勝ちなのは、『生命』の尊さに対する自覚がない」とも記されている。

今日のように生命科学が発達している時代でも、人々には自らの健康を「自立」「自己責任」「自らの世話(セルフ・ケア)」

によって努力することが求められている。すなわち、生命尊重・健康優先の意志を決定し、どのように行動変容に結びつけていくかである。健康は保健学や医学だけの問題ではなく、社会的・文化的に成熟してこそ得られるものである。

したがって、幅の広い知識・洞察力と実践力によって生命・健康は衛られる。

自己の利益・快樂のみの追求は、一個人の健康・生命はもちろん、生物全体や地球の破滅を招くことにつながる。自分の健康・生命そして地球は有限であるとの認識や、自然の攝理や畏敬の念から生じる万物への愛情は、健康を育むものであろう。

21世紀の健康観は、各自の身体的状況と社会・文化的価値観との関連の中で、相対的に決定されるべきものと考えられる。健康は「衛生」の字のごとく、「生きることを衛る」ものである。健康は生を支える条件であり、生への認識が明らかではないと、健康についての認識も得がたいものとなろう。



●坂口先生(平成12年9月)

(『花時計』第31号、平成23年12月)

# 観光文化学科

Department of Tourism

## 実体験や地域との連携などをとおして学ぶ

### 観光文化学科の発足

観光文化学科は、平成12年(2000)4月1日、人間文化学部のなかに日本文化学科、生活環境学科とともに発足しました。当学科設置に関してどのように考えていたのか、当時の設置趣旨書からみてみましょう。

まず第一に、これからわが国にとって「観光」がもつ意味を次のように述べています。「観光とは、人々が地域や国を越えて相互に往来することによって、互いに新しい文化を創造する営みである」としています。しかしその一方で、一般に広くその意味が理解されているとはいえず、「観光後進国」の実情にあるともしています。

そして、次のようにも述べています。「そもそも観光の目的や動機というのは文化的な要因が非常に高く、日本においても将来にわたって世界各地の人たちを引きつけるだけのシステムとして『文

化の魅力』を確立していく必要がある」としており、また、「日本は工業立国・貿易立国とともに『文化・観光立国』になるべき」とも述べています。このあたりに、人間文化学部として当学科を設置する基本的な考え方方がうかがえるでしょう。

平成12年(2000)というと、バブル崩壊後、日本の経済はまだ長い不況からは立ち直ってはいなかったものの、経済のサービス化がますます進展し、なかでも観光産業は実際の観光需要の高まりを背景に、大きな期待が寄せられていました。たとえば、日本人の海外旅行者数は年々増加の一途をたどり、その10年前である平成2年(1990)の1100万人から、平成12年には1782万人に達していました。1.62倍です。また国内でも、地域の活性化に観光の役割が強く期待されてきていました。そのような社会情勢のなか、本観光文化学科は発足したわけです。



●マッカボイ先生の授業風景(平成18年6月)

このころ、全国の大学のなかでもしだいに観光関連の学科をつくる動きが出てきてはいましたが、まだまだその数は少なく、本学科が全国で10番目といったあたりでした。

### その後の観光をめぐる状況への対応

当学科が発足した年の翌平成13年(2001)9月11日、米国で同時多発テロが起きました。航空機を使ったテロ事件であっただけに、日本人の海外旅行にとってはきわめて大きな心理的悪影響を与えることになりました。そしてこれをきっかけに、イラク戦争が起こり、さらにイスラム過激派による報復テロが世界各地で起き、なかにはパリ島でのディスコ爆破事件のように明らかに観光客を狙ったものも少なからずあって、日本および世界の観光需要を冷え込ませました。また、口蹄疫やSARS、新型インフルエンザなどの感染症も大きな影響を与えましたし、平成21年(2009)のリーマンショック、そして平成23年(2011)の東日本大震災と、21世紀に入ってからは、観光をめぐる情勢は逆風状況が続いてきました(日本人海外旅行者数は、この十数年横ばい状況で、これまでの最大は平成12年(2000)の1782万人です)。これにともなって、日本の各種観光産業の状況も低迷状況が続いてきました。また、旅行業におけるネット系旅行業の出現など新たな業態の出現によって大きな転機を迎えているものもあります。

こういった状況のもとで、当学科では平成16年(2004)度、一部カリキュラムを改訂しました。既存の観光産業だけをターゲットとしたものではなく、より広い視野での履修体制をとるべく、専門教育科目を増設しました。また、観光英語科目も中身を改訂しました。さらに、国家試験である「旅行業取扱管理者試験」の受験対策としての科目を単位取得科目として設置するなどもしました。

そして、平成23年(2011)度には学部全体のカリキュラム改訂が行われ、学

部名を「人間文化」から「生活創造」に変えましたが、そこでは、これからの日本人の生き方として、衣食住+レジャーさらに衣食住そのものにもレジャー的要素が深くかかわる、という考え方を基にしました。

当学科としては、そのレジャーの代表格である「観光」を人間生活の重要要素としてとらえ、さまざまな角度から考査していくと考え、新たに「観光情報デザイン」「観光とインターネット」「観光心理学」などの科目を設置し、従来の地理学、歴史学、社会学、文化人類学、経済学、経営学などに加え、情報工学、心理学など、より幅広い分野から「観光」という人間行動とそれにともなう社会現象をみていくこととしました。また、観光ビジネス系の科目として、「ブライダル産業論」「テーマパーク論」などを新設しました。英語科目については、観光の仕事において役立つ英語、海外旅行に役立つ英語の両面を意識した科目名・授業内容に改めました。さらに、初年度教育の充実を図るために、基礎ゼミを後期まで延長するようにもしました。



●「旅フェア2009」の会場にて(平成21年5月)

#### フィールドワーク・各種見学会など

当学科にとって、観光地や観光産業の現場を知り、そこから学ぶためのフィールドワークはきわめて重要な役割をもちます。そういった意味から、夏休みあるいは春休みにおけるゼミ旅行・合宿や、各種見学会などを積極的に実施してきました。

各種見学会のなかでは、国内と海外

の観光地情報が一箇所で得られる場として、旅の見本市が春と秋に開催されていますが、それに1年生と2年生を見学させています。日本国内は「旅フェア」、海外は「世界旅行博」(名称が変わることもあります)ですが、このうち、「旅フェア」では当学科学生有志が二度ほど立教・明治・東洋各大学との合同出展をすることもあります。



●「世界旅行博」の会場にて  
(平成24年9月)



●はとバスツアーで浅草を見学(江田ゼミ)(平成17年11月)



●横浜・赤レンガ倉庫を見学(藤井ゼミ)(平成19年7月)



●皇居前にて(江田ゼミ)(平成19年11月)



●ホテル・パシフィック東京で支配人の話を聞く(平成20年2月)



●栃木県益子でのオリエンテーション(平成17年4月)

また、各ゼミでゼミの研究テーマに沿った場所を視察したり、展覧会・美術展の見学、映画・演劇の鑑賞なども行っています。これらはいずれも、授業で学んだ知識を後づける機会としての意味をもっています。

見学という点では、1年生が入学当初に実施されるオリエンテーション・キャンプもその一つです。当学科のオリエンテーション・キャンプは、学科発足の年から8年間続けて栃木県益子町に行って陶芸体験を行いましたが、9年目からは毎年行き先を変えてきています。

学園祭(鶴雅祭)は、当学科にとってイベントの企画・運営を実習するという面もあります。たとえば、例年1年生が出店しているカフェでは、どのような内容のものにするかを学生自身で考え、どのような接客サービスをするか、身をもっての体験の場としています。また、平成19年(2007)から実施している「マンゴー

パラダイス」の出店は、観光経営学を学んでいるゼミにおいて、マンゴー関連の商品企画、店舗設営、販売促進などを実際に経験してみるというものです。

### 地域との連携

地元我孫子市とは、商工観光部門を中心に、さまざまな面で連携事業を行っており、当学科学生を適宜派遣しています。

平成22年(2010)秋、我孫子駅前に我孫子市の観光インフォメーションセンター(愛称アビシルベ)がオープンしましたが、当学科准教授の丹治朋子が、その整備構想段階からかかわったことから、オープン後も運営に当学科が協力してきました。その一つに、我孫子グルメ情報紙の発行があります。これは、市側から「我孫子を訪れた観光客をはじめ、市民にも市内のグルメ情報を伝えたい」と持ちかけられたことがきっかけとなったも

の。編集にあたったのは、当学科の学生3人ほどで、まず当大学の教職員と我孫子市職員に対してアンケートを行い、推薦する店を挙げてもらい、それをもとに各店への調査を行い、その結果を載せた情報紙を計14回発行しました。なお、この情報紙については、平成25年(2013)度より、市内の障害者福祉施設の協力を得ながらバリアフリー関連の情報を追加してリニューアル作業を実施しています。

平成23年(2011)12月に実施した「我孫子駅前イルミネーション」は我孫子駅前商店街との共同事業でした。当学科の学生数名が、それまで毎年続いていたイルミネーションを改善するため、企画段階から参加し、点灯式の司会、受付なども行いました。このほか、我孫子市をはじめとした近隣との連携事業としては、平成19年(2007)度には我孫子市商工会イベント部会の会合に学生5



●ミッキーを囲んでの卒業パーティー(ディズニーアンバサダーホテルにて、平成21年3月)

●学園祭(鶴雅祭)で「マンゴーパラダイス」を出店(平成22年10月)

名が参加して、イベントのあり方について検討しました。

### 他大学との連携

他大学との連携の一つとして、「大学コンソーシアム東葛(平成23年度までは柏)」での活動があります。これは、東葛地域のまちづくりを中心に民産学官の連携交流を進める目的で、13大学と5市が協定を結び、柏市が事務局となって、平成18年(2006)に発足したものです。学生ワークショップや地域学公開講座などに本学の学生・教員も参加しており、当学科がその運営にかかわってきています。

全国の観光学部・学科をもつ大学との交流として、「全国観光学科学生サミット」を平成17年(2005)度から開催しており、杏林大学、阪南大学、立教大学などとフィールドワーク、グループディスカッションなどをを行っています。

## 観光文化学科のゼミ旅行・合宿(宿泊をともなうもの)

年度	ゼミ名
平成 14	豊川ゼミ(ホスピタリティ) 白坂ゼミ(地域研究アジア)  石井ゼミ(地域研究国際関係) 藤井ゼミ(地域研究ヨーロッパ)  江田ゼミ(観光英語)
15	豊川ゼミ(ホスピタリティ) 白坂ゼミ(地域研究アジア)  藤井ゼミ(地域研究ヨーロッパ)  江田ゼミ(観光英語)
16	豊川ゼミ(ホスピタリティ) 白坂ゼミ(地域研究アジア)  藤井ゼミ(地域研究ヨーロッパ) 江田ゼミ(観光コミュニケーション)
17	高山ゼミ(観光社会学) 丹治ゼミ(ホスピタリティ産業論) 豊川ゼミ(地域研究日本) 石井ゼミ(地域研究アジア) 野村ゼミ(地域研究アメリカ) 西岡ゼミ(地域研究アメリカ) 江田ゼミ(観光コミュニケーション)
18	丹治ゼミ(ホスピタリティ産業論) 豊川ゼミ(地域研究日本) 石井ゼミ(地域研究アジア)  江田ゼミ(観光コミュニケーション)
19	高山ゼミ(観光社会学) 丹治ゼミ(ホスピタリティ産業論) 石井ゼミ(地域研究アジア)  西岡ゼミ(地域研究アメリカ) 藤井ゼミ(地域研究ヨーロッパ) 江田ゼミ(観光コミュニケーション)
20	高山ゼミ(観光社会学) 石井ゼミ(地域研究アジア) 藤井ゼミ(地域研究ヨーロッパ) 江田ゼミ(観光コミュニケーション)
21	高山ゼミ(観光社会学) 丹治ゼミ(ホスピタリティ産業論) 石井ゼミ(地域研究アジア) 西岡ゼミ(地域研究アメリカ) 藤井ゼミ(地域研究ヨーロッパ)
22	高山ゼミ(観光社会学) 丹治ゼミ(ホスピタリティ産業論) 石井ゼミ(地域研究アジア) 江田ゼミ(観光コミュニケーション)
23	高山ゼミ(観光社会学) 丹治ゼミ(ホスピタリティ産業論)  豊川ゼミ(地域研究日本) 石井ゼミ(地域研究アジア)
24	丹治ゼミ(ホスピタリティ産業論) 石井ゼミ(地域研究アジア) 江田ゼミ(観光コミュニケーション)
25	高山ゼミ(観光社会学) 丹治ゼミ(ホスピタリティ産業論) 西岡ゼミ(地域研究アメリカ)

	行き先	
	群馬県猿ヶ京温泉 長野県野沢温泉 マレーシア（クアラルンプール、マラッカ） 韓国（ソウル） 千葉県館山 栃木県鬼怒川温泉（東武ワールドスクエア）、日光 ドイツ（ハイデルベルク、ロマンティック街道）、オーストリア（ザルツブルク、ウィーン）	
	岐阜県郡上八幡 群馬県草津温泉 マレーシア（ボルネオ島） 福島県岳温泉 栃木県鬼怒川温泉（東武ワールドスクエア）、日光 スペイン（バルセロナ）、ギリシャ（アテネ、サントリーニ島）、イタリア（ローマ、ナポリ）、ドイツ（ミュンヘン、フランクフルト） 沖縄県首里、宮古島	<span style="color: red;">●</span> イタリア・ポンペイ遺跡にて (藤井ゼミ)(平成16年2月)
	長野県ヴィラデスト、別所温泉、軽井沢 長野県山ノ内町湯田中温泉 マレーシア（クアラルンプール、キャメロンハイランド） 栃木県鬼怒川温泉（東武ワールドスクエア）、日光 フィンランド（ヘルシンキ、サンタクロース村）	
	長野県軽井沢 東京都・フォーシーズンズホテル椿山荘東京に体験宿泊 大阪市（ユニバーサル・スタジオ・ジャパン、海遊館、なんばグランド花月、通天閣） 韓国（ソウル） アメリカ（ニューヨーク、フィラデルフィア） 栃木県鬼怒川温泉（東武ワールドスクエア）、日光 チェコ（布拉ハ、チェスキークロムロフ）、オーストリア（ウィーン）、ハンガリー（ブダペスト）	<span style="color: red;">●</span> 韓国・ソウルにて (石井ゼミ)(平成17年9月)
	大阪市・ホテルザ・リッツカールトン大阪に体験宿泊 神奈川県箱根 中国・上海 インドネシア（バリ島） フランス（ルーアン、モン・サン・ミッシェル、ロワール古城めぐり、パリ）	<span style="color: red;">●</span> オーストリア（ウィーン）・ シェーンブルク宮殿にて (江田ゼミ)(平成18年2月)
	岐阜県高山、白川郷 石川県和倉温泉・加賀屋に体験宿泊 タイ（バンコク、カンチャナブリ） マレーシア（コタキナバル） アメリカ（ラスベガス、グランド・キャニオン） 栃木県鬼怒川温泉（東武ワールドスクエア）、日光 アメリカ（サンフランシスコ、シアトル）	
	愛知県名古屋市 台湾（台北） 栃木県鬼怒川温泉（東武ワールドスクエア）、日光 フランス（パリ、モン・サン・ミッシェル）	<span style="color: red;">●</span> アメリカ・ラスベガスにて (西岡ゼミ)(平成19年9月)
	宮城県仙台市 香川県直島 ハワイ（オアフ島） アメリカ（サンフランシスコ、モントレー、カーメル、ヨセミテ） 栃木県鬼怒川温泉（東武ワールドスクエア）、日光	<span style="color: red;">●</span> 京都・銀閣寺にて (豊川ゼミ)(平成23年8月)
	奈良市 大阪市・ザ・リッツ・カールトン大阪に体験宿泊 香港、マカオ フランス（パリ、ヴェルサイユ、モン・サン・ミッシェル）、ベルギー（ブルージュ、ブリュッセル）	
	青森県青森市（三内丸山遺跡）、弘前市（弘前城）、黒石市（盛美園） 千葉県舞浜・ディズニーランド・パリに体験宿泊 福井県敦賀市 京都市（桂離宮、天龍寺、竜安寺、銀閣寺、壬生寺） 台湾（台北）	
	長野県小布施町 マレーシア（ボルネオ島） グアム 京都市（清水寺、下鴨神社、東映太秦映画村） 宮崎県（高鍋町、綾町、日南海岸） アメリカ（サンフランシスコ、ヨセミテ）	<span style="color: red;">●</span> アメリカ・ヨセミテにて (西岡ゼミ)(平成25年9月)

## 独創性豊かな「知」の 新地平を切り拓く

### 人文科学研究科

*Human Sciences*

人文科学研究科は、現代社会が抱える諸問題に真摯に向かい合い、問題解決能力を備えた指導的役割を果たす人材を育成することを目的として設置された大学院です。本大学院では高度な専門性をもつ職業人の育成や研究者の養成、さらに、意欲ある社会人の再教育を実施する、21世紀型の大学院をめざしています。

本研究科は、平成11年(1999)に、心理学専攻と生涯学習学専攻の2つの修士課程専攻コースでスタートしました。

心理学専攻は学部の心理学科を基礎学科として、心理学の基礎をより専門的に学ぶ「心理行動科学領域」と臨床心理士をめざす「臨床心理学領域」の2領域に分かれています。後者は平成21年(2009)に(財)日本臨床心理士資格認定協会から第1種臨床心理士養成コースの指定を受けています。

生涯学習学専攻は、平成20年(2008)、教育学部の編制替えに併せて、平成23年(2011)に教育学専攻とコース名を変え、

児童教育学科を基礎とする「初等教育学領域」と「生涯学習学領域」の2領域制となりました。急変する社会の変化のなかで深刻化する子どもの教育環境を整えていくために、総合的な視野から時代の要請に応えていける人材を養成します。

平成16年(2004)、博士前期課程に博士後期課程を併せもの比較文化専攻が開設されました。比較文化専攻は、二学部五学科を基礎とし、ユニークな3研究分野を東ね、21世紀の全地球的问题に切り込むことのできる新しい学問体系の構築をめざします。「地域文化研究分野」は、統合的な国際地域研究を、「社会・文化コミュニケーション分野」は、自然と人間の共生、諸地域と世界の共存というグローバル・スタディーズを、「女性学分野」は、ジェンダー学の視点から人文諸科学を統合する新しい超領域的な総合学の構築を図ります。

大学院開設以来、心理学修士185名、教育学修士57名、文学修士9名、文学博士1名を巣立たせ、臨床心理士118名はその資格を生かした職業人として活躍、また、他の専攻修了生も大学講師をはじめ、学校現場や社会教育の現場で活動している者が多くいます。



●「瞑想」をとり入れた療法の体験(心理学専攻のマインドフルネス認知療法の講義)(平成24年10月)

# 心理学専攻

本専攻は、平成11年(1999)度から開設され、当初、臨床心理士会認定の第2種指定大学院としてスタートしました。平成21年(2009)4月1日より第1種指定となり、平成19年(2007)4月1日以降の入学者は、第1種選択措置となりました。本専攻は、開設当時は、「基礎心理学領域」「発達・教育心理学領域」「臨床心理学領域」の3分野から構成されていましたが、平成17年(2005)度により、「心理行動科学領域」「臨床心理学領域」の2分野に再構成されました。高度の知識を習得し、独創性豊かな研究を行うことによって、心理学関係の高度専門職業人の育成および社会人の再教育を本専攻の目的としています。

開設時の教授陣は、教授7名(岡本榮一、浅井義弘、秦野悦子、川崎恵里子、古閑永之助、吉田章宏、松井洋)、助教授2名(鵜沼秀行、松原由枝)、非常勤講師1名(菅沼憲治)の体制で始まりました。

現在は、教授8名(松井洋、松原由枝、川崎恵里子、蓮見元子、鵜沼秀行、渡

邊昭彦、橋本(北原)靖子、簗下成子)、講師1名(桂瑠以)、助教1名(佐藤哲康)、となっています。

「心理行動科学領域」では、知覚・認知という情報入力の方法を解明するとともに、記憶・学習という情報活用の効果などを分析することにより、ヒトの知的メカニズムを科学的に研究します。

「臨床心理学領域」では、こころの健康を適応障害、精神障害等の広い領域で研究し、超高齢化、少子化社会に合わせた心の問題を調べ、援助するため必要な、心理測定・診断・離料・予後ケアなどの理論や技能の修得を教育しています。臨床心理学領域では、それらの知識や技能を実践で生かせることに重きをおいているため、実習を重視します。本学心理相談センターにおける実習と、外部機関(病院、クリニック、学校、教育研究所、適応指導教室、など)における実習を得て、臨床心理士やカウンセラーとしての資質を修得します。

講義の特徴は、臨床心理士、学校心理士、産業カウンセラーなどの資格取得

に十分配慮とともに、専修免許取得による心理学関係領域における学校教員、社会人などの再教育に力をいれたものとなっています。そのため、修了生は、博士課程に進学するもののほかに、修得した専門的知識及び実践技能を基礎として、さまざまな社会活動の場における指導者として活躍するものと期待されます。とくにカウンセリングについては、心身の健康障害の増加を背景として、関連各種の職域において、必要性が高まっています。

大学院修了後は、以下の進路が主なものです。

- ・児童相談所などの各種福祉機関など
- ・病院、精神保健センターなどの医療施設
- ・家庭裁判所
- ・企業の相談室
- ・大学教員
- ・その他、社会福祉法人など

# 教育学専攻

平成11年(1999)、大学院人文科学研究科の一領域として「生涯学習学専攻」が創設されました。

生涯学習学専攻は教育学部社会教育学科を基礎としており、より専門的な教育・研究活動を進めることによって、教育・行政機関、公益団体、民間企業等の教育・人事・労務などの分野の専門職に位置づく人材を養成することをめざしています。

したがって、生涯学習の学理的心理学的側面、学校教育における方法や技術などの実践的な課題に応えるため、社会教育学、教育学、情報ビジネスやメディア研究および医学、心理学、保健学、体育学などの幅広い分野からカリキュラムを編成し、人びとの学習要求に柔軟に対応できる教職員や生涯学習指導者としての能力の育成に力を注いでいます。

また、社会人の入学に配慮し、教員や保健・衛生関係の専門職員等が教育学修士の学位を取得できる機会を提供しています。

平成23年(2011)、生涯学習学専攻は「教育学専攻」に改められ、そのなかに「初等教育学領域」とともに「生涯学習学領域」として位置づけられています。

# 比較文化専攻

「2004年、川村学園女子大学大学院人文科学研究科に新たに比較文化専攻が開設された。この専攻科は地域文化、社会文化コミュニケーション、女性学の三つの分野からなっている。つまりわが大学のほとんどすべての学科から大学院に進学できる道が開かれたことになる。比較文化という名称は、簡単に説明できるものではないし、その議論をし始めれば果てしないことになりかねない。したがって当面は、現在の社会における私たちの生活や思想などは、比較という視点ぬきには客観的に認識しえな

いという事実を見据えて、理解しようと努力するのが重要であると思われる。」(『花時計』第16号、平成16年7月)。

発足当初、比較文化専攻博士課程前期(修士)には女性学専攻2名、社会文化コミュニケーションの表象文化専攻1名が合格しました。また博士課程後期(博士)女性学専攻には一人の女性研究者、池川玲子が入学しました。満州映画の女性監督の研究です。池川はこの研究でみごとな成果をあげ、ジェンダー、表象、コロニアル研究に一石を投ずることとなり、本大学院で最初の博士号を

授与されました。修士号は、これまでに9名が授与されています。担当した指導教官による全力の応援態勢は特記すべきことであつたでしょう。

平成25年(2013)現在、比較文化専攻を担当する教員は21名です。その内訳は、国際英語学科3名、史学科5名、心理学科1名、日本文化学科4名、児童教育学科2名、児童教育学科1名、生活文化学科2名、観光文化学科3名となっています。開設時に尽力された教員は退職されましたが、その後、新たなメンバーを加え、現在にいたっています。

## 若桑みどり先生への想い

*Ikegawa Reiko*  
池川玲子

私は大学院人文科学研究科比較文化専攻博士後期課程第1期生です。

私はとても変則的なコースをへて本学大学院に辿り着きました。他大学を出て、日本近現代女性史を独学はじめたのが30歳のとき、大学院進学時には45歳になっていました。在野研究の経験しかない中年大学院生を受け入れてくださった川村学園には、感謝の言葉しかありません。

大学院ではジェンダー表象史研究の第一人者若桑みどり先生に師事いたしました。さまざまな年代の学生が参加していたゼミでの熱い討論、家事に追われて報告準備を怠ってしまったときの叱咤……。先生の思い出はいずれも忘がたいことばかりです。ソウルの梨花女子大学で開催された第9回国際的学際女性会議(2005年)にご一緒したときには、最前列に陣取って、私の拙い発表を見守ってくださいました。無謀とも思える海外調査にも単独で出かけましたが、そのさいには、副学長の川端香男里先生をはじめとする先生方と連携して最大限の便宜を図ってくださいました。そんな厳しく包容力のあるご指導に背中を押され続けて、無我夢中で、日本で

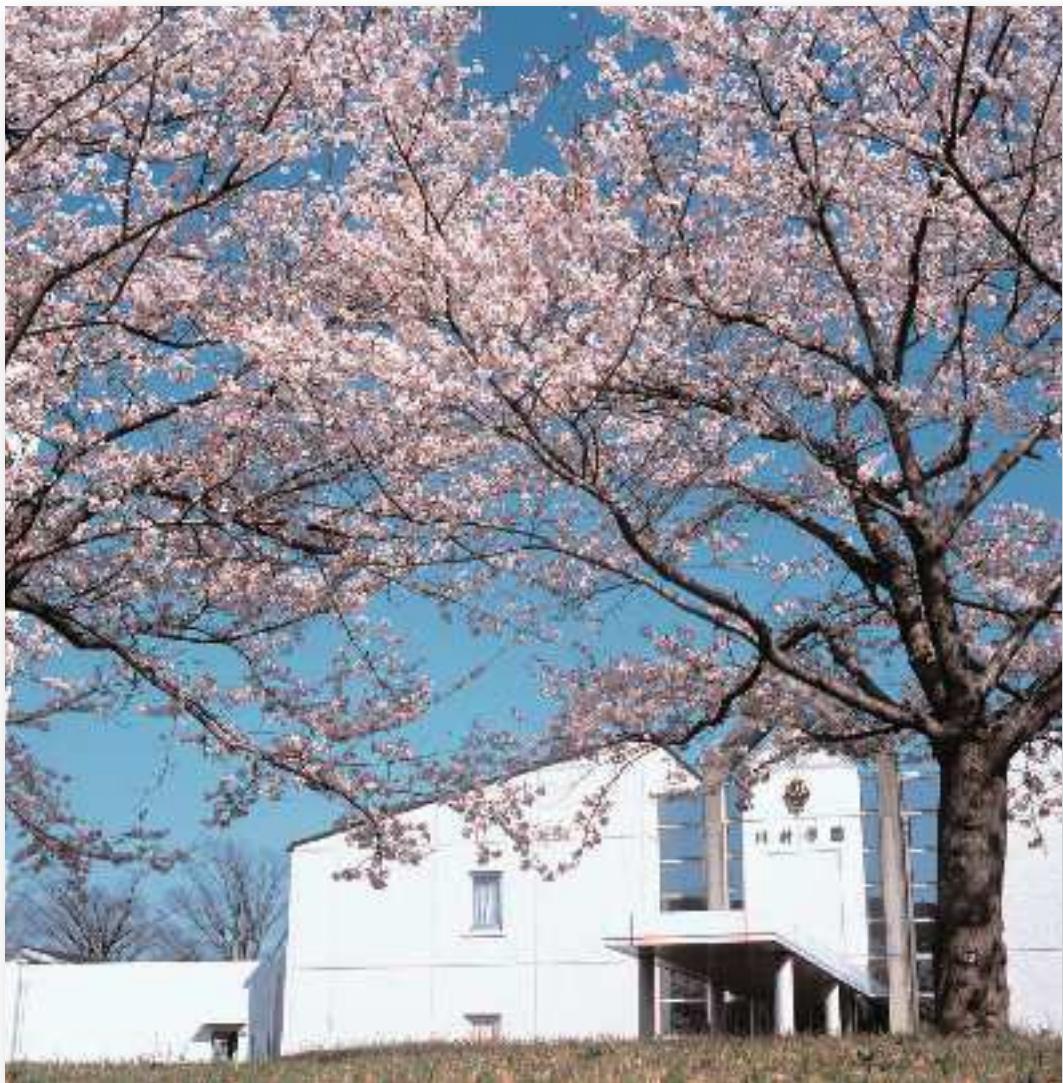
最初の女性映画監督についての博士論文を仕上げ、平成18年(2006)に文学博士の学位を授かりました。

大学院を終えてからもう7年になります。現在はいくつかの大学の非常勤講師を掛け持ちして女性史を教えながら、研究を続けています。今関敏子先生編集の『涙の文化学』(青簡舎、平成21年)には、研究ノートを書かせていただきました。学位論文は、平成23年(2011)に、吉川弘文館から『帝国』の映画監督 坂根田鶴子『開拓の花嫁』・一九四三年・満映』というタイトルで上梓され、思いがけずその年の「女性史青山なを賞」を受賞いたしました。そして先生への報告は、墓参という形になりました。

先日、ご遺族の依頼で、弟子仲間たちとともに先生の書斎を整理することになりました。膨大な書籍とファイル類、その中に、ご自分と弟子の研究テーマに関連するもの以外は一切ない、という徹底ぶりに、雷に打たれたような気持ちでした。

ファイルの一つに、ソウルでの私の報告レジュメが仕舞い込まれていました。余白には、大きく、ただ一言「good!」。懐かしい先生の筆跡でした。この言葉が、これからも研究を続けていくための、私にとっての免許です。ずっと初心者マークをつけたままかもしれません、遠くにかすむ先生の背中を追いかけて、自分なりに進んでいきたいと思っています。

(平成25年10月記)





第

# 4

章

# 学内外 の 活動

“川村”の気風を背負って

# 課外活動

## 明るく、楽しく、一生懸命に

この課外活動では、数多くの部活動のうち、おもなものの紹介します。

### SAセンターとSA

平成20年(2008)、学長より、教務課や学生課などの事務室として使用されていた1号館1階をSAセンターにリニューアルする構想が発表され、教員5名によるワーキンググループが立ち上げられました。学生にとって「誰でも気軽に使える居心地の良い場所」を提供するとともに、希望学生を募ってSA(学生アドバイザー)を任命し、SAがこのセンターで情報提供や交流イベントを実施することにより、学生がより豊かな学生生活を送れるようにという願いによるものでした。

平成20年度後期に、SA希望者を募集したところ全学科から合計40名の応募があり、全員を登録しました。うち6名の学生と観光文化学科准教授丹治朋子がSAセンターのインテリア選定チームを結成しました。インテリアを選ぶコンセプトは、明るい、ちょっとした遊び心、おしゃれ感を演出し、ここにきたら楽しい気持ちになること、一人でも友だちと一緒にでも気軽にこられる居心地の良い場所となるように、「学生の居心地」を

追求した家具選びを行いました。家具選びは、北欧家具店のIKEAや大塚家具などに下見に何回か行き、いろいろと勉強したうえで、購入しました。

SAセンターは、学生の自主性を育てる目的としており、家具選びは、そのことを実践する場となりました。家具の設置も学生たちがアイディアを出しながら、自分たちの手で行いました。

平成21年(2009)4月にオープンし、いろいろな経験をしてもらいたいとの願いから、学部ガイダンスの司会をSAの学生にお願いしました。ガイダンス前に何度も、先生方の名前を間違えないようにと、原稿を読み直し練習していました。最初は緊張していた学生も、最後はアドリブでSAの募集まで行っていました。

また、ガイダンス期間中に新入生に履修相談会を自分たちの空いている時間を利用して午前と午後に行いました。大学の桜の下でお花見をする企画を急遽したこともあります。お花見会は、「友だちづくりのきっかけ」をつくりたいと企画したものでした。桜の木の下で、お弁当を食べながら、楽しく和気あいあいとした雰囲気で過ごすことができました。この企画からバーベキュー会の企画が生まれました。「外で美味しいお肉を食

べたい」だけの目的で企画した会でした。しかし、大勢の学生が参加し、バーベキューを楽しんでくれたことで、SAの学生たちのやる気は、高まり、つぎつぎといろいろな計画を立てるきっかけとなつた出来事でした。それ以降は、茶道部に協力を依頼し、「もっと和を感じよう」と和菓子とお抹茶の立札式によるお茶会を開催。夏まつりや花火大会などで、「一人で浴衣が着られるようになりたい」との思いから、浴衣の着付け教室も行いました。浴衣がなくても参加できるようにと、着付けの先生に浴衣のレンタルをお願いしました。帯の結び方もいろいろと教えていただき、楽しい一時を過ごしました。冬は、華道部によるクリスマス・リース作りなどをを行い、作成したクリスマス・リースは、学生たちが自宅に持ち帰りました。そのほかに一人暮らしの学生のために簡単に作れる料理教室やクリスマス・キャンドル作りなども行いました。

企画によっては、参加者が少なかつたりしましたが、「誰でも気軽に参加できる」をモットーに、各種イベントを企画・運営しています。企画するうえでは、いつ・何を・どのように行うか、どうやって学生の参加を呼びかけるかなどを考えて、



● SAセンター内に展示された美術部の作品(平成25年6月)



●自分たちで作成した『ジャンル本』を手に(平成7年10月)



●ツヴァイディメンションの多様な『ジャンル本』(平成24年10月)

実践していきます。参加人数が少ない企画もありますが、その反省を次回に活かしています。

より多くの経験を学科を問わず、先輩後輩と築いていける機会の一つとしての役割を、SAセンターは担っています。

### ツヴァイディメンション

ツヴァイディメンションは、イラストや小説を書くこと、漫画・ゲームや小説などが大好きな人たちのサークルです。毎週金曜日のお昼休みに、ご飯を食べつつ楽しく活動しています。ツヴァイディメンションは平成元年(1989)に創立しました。初めは同好会でしたが、今では部活にまで昇格しています。

サークルの活動内容としては、主に年

3～4回ほど発行する部誌の原稿作成や製本です。この部誌は新入生向けのものや、部内で配布するものなどさまざまです。今までに200冊を超える部誌が発行されています。

とくに毎年10月に開催される学園祭では、当日に来場された方々に『イラスト本』と呼ばれる冊子、そのほかに『ジャンル本』と呼ばれる冊子を合わせて配布しています。この『イラスト本』は毎年部員たちでテーマを1つ決め、そのテーマに沿ったモノクロイラストや小説を作製します。それを1冊にまとめ、カラーの表紙をつけたものです。そして『ジャンル本』は、職業・歴史・学園・擬人化・ファンタジーやノンジャンルなどの6つのテーマに沿った漫画や小説が各1冊ずつに

まとめられたものです。冊子のほかには、部員が作製したラミネートカードも配布しています。そのほかにも、クイズや塗絵コーナーがあり、部員たちの描いたイラストが展示されています。会場の装飾も、毎年異なるテーマを決め、そのテーマに沿った装飾をしています。とくに教室外の壁の装飾は毎年力を入れて作製しています。

部誌の作製には、学校のコピー機を使い作製するものや、業者に頼んで作製してもらうものがあります。学園祭で配布している部誌は業者に作製してもらっているので、「原稿の締切は厳守」というルールを設けてあります。業者に依頼する場合は自主製作するのと違い時間がかかるため、きちんと学園祭に間に合うように早めに締切を決めておきます。しかし自主製作のときでも、「原稿の締切は厳守」というルールは守るようにしています。いくら自主製作するといっても、原稿が遅れれば他の部員に迷惑がかかるため、このルールを設けました。

そして、不定期に漫画講座を開いています。ここでは漫画の描き方や使うペンの種類などを勉強しています。今まで漫画を描いたことがない初心者も、安心して活動できるように取り組んでいます。なお漫画講座は希望をとり、一定の人数が集まなければ開講していません。

平成25年(2013)現在、私たちツヴァイディメンションは全学年合わせて50名近く在籍しています。学年・学科を問わず気の合う友だちをつくることができるサークルです。

### ハンドベル部

川村学園開学60周年(昭和59年<1984>)を記念して、豊島区東長崎の短大保育科で購入したハンドベルは、平成3年(1991)、大学教育学部開学のおり、幼児教育学科へ移管されました。それにもなってクラブが設立され、熊谷園子を顧問に、近藤光江が指導者として就任しました。最初のメンバーは、幼児教育学科を中心に全学で25名が入部しました。ハンドベル部は、「ベル・ク



●第1回定期演奏会時のハンドベル部の部員たち(左端は指導者の近藤光江先生、1・2期生とともに)  
(平成5年10月)



●学園祭(鶴雅祭)でのハンドベルの演奏(平成17年10月)

「レイン・クワイア」と名称変更して現在では、大学からクラブ活性化の要請を受け、近藤光江が顧問兼指導者を引き受けています。

ハンドベルは、実音より1オクターブ上の響きの音が出ます。素材が銅と錫の合金のため、高く、澄んだ金属性の音質です。また、打点が揃うと倍音が増す性質と、何音もの重音で表された音符によって、莊厳な響きが醸し出されます。このような理由から、一般的に「天使の声」といわれていますが、実際にそれらしい音色を打ち鳴らすことは、至難の業です。さらに、一曲に使用される全音を複数人で分けて演奏するため、協調性が養われる楽器であるともいわれています。一人が欠けると、旋律にも欠落が出現するなど、曲として成立しなくなる難点があります。したがって、部員はおたがいに迷惑をかけないように

団結が不可欠です。誰でも何時でも簡単に演奏できるわけではない楽器を扱えることは、学生時代であるからこそ味わえる醍醐味であり、私たちは、とても恵まれていると思っています。

その成果は、卒業式や入学式をはじめ、さまざまな依頼を受け、多くの機会に披露しています。おそらく、先輩方もそうであったと想像しますが、本番で満足な演奏ができたときの心地良さは、格別のものです。この23年間に公演した会場は、たくさんあります。卒業式・入学式・学園祭はもちろん、我孫子保育園・恵愛保育園、東武船橋店・柏そごう・高島屋・銀座三越などのデパート、柏国立がんセンター、安食の栄町ふれあいプラザ(今まで10年以上続いている)や商工会、取手市・松戸市・成田市の小学校や千葉県民プラザなどの公民館、川村学園同窓会(椿山荘)、都庁な

ど、列挙すると限りがありません。なかでも、前学園長・川村澄子の紹介により、目白のカテドラル教会のクリスマス・コンサートで2度も公演させていただいたことは、特筆に値することでしょう。1回目は、パイプオルガンとのジョイントであり、もう1回は、祭壇の近くで大勢の信者さんを前にしての演奏でした。このとき、出演された先輩方の、大変な緊張とともに大役を達成した後の安堵感と高揚した気分はどのようにであったのか。現役の私たちも、このようなハンドベル部の歴史と名声を受け継いで、多くの場所で良い演奏ができるように心を一つにして努力していきたいと思っています。

### プラスバンド部

プラスバンド部は、平成3年(1991)にウインドアンサンブルとして設立され、現在はプラスバンド部に名称を変更しました。吹奏楽を通じて音楽と親しむとともに、技術の向上をめざし毎週水曜日に部員一同、楽しく活動しています。部員が減少してしまった時期を乗り越え、現在は1年生1人、2年生12人、3年生11人の24人が所属しています。

主な活動内容は学園祭、新入生歓迎コンサート、クリスマス・コンサートなどの学内で行われる演奏会です。そのほかの活動には、毎年6月下旬に千葉県我孫子市内で行われる「元気フェスタ」に団体として参加し、小さいお子さんからご年配の方までが楽しめるような演奏を披露できるように努力しています。演奏後は地域の方と一緒に子供たちのためにバルーンアート・受付のボランティアにも参加するなど、地域の方々と直接コミュニケーションをとれる場として部員にとって大変よい機会です。

夏の長期休暇には、千葉県南房総市にて3泊4日の合宿を行っています。合宿では練習はもちろん、新入部員と先輩部員との親交を深めるため、レクリエーションや花火などをしています。合宿ならではの部員の新しい一面を見て驚いたり、学園祭に向けての話で真剣になったり、花火を見て笑顔になったりと、毎年、大変充実した合宿となっています。



●学園祭(鶴雅祭)でのプラスバンド部の演奏風景(10号館前のステージで、平成22年10月)



●学園祭(鶴雅祭)でのプラスバンド部の演奏(平成23年10月)



●ラクロスの練習風景(平成25年5月)

10月に学内で行われる鶴雅祭は1年間の集大成です。3年生が中心となり、演奏を聴きにきてくださった多くの方に「川村学園女子大学 プラスバンド部」の音楽を楽しんでいただくため、演奏面だけではなく部屋のレイアウトからTシャツのデザイン、パンフレット作成も部員が心をこめて準備します。努力の甲斐もあり、学園祭のアンケートでは多くの方々にお褒めの言葉をいただいて、部員一同、大変感銘を受けています。

練習日も少なく、指導者もいませんが、部員一人ひとりが一生懸命になり協力しながらこれからも私たちなりの音楽をつくりあげていこうと思います。

### ラクロス部

ラクロス部は平成5年(1993)に設立し、平成25年(2013)で20年目となる歴史ある部活です。現在のラクロス部は先輩方が残していった「ラクロスを心から楽しむ」という信念を大切に、ラクロスの技術向上をめざし、週2回楽しみながらも真剣に練習をしています。

校内練習では、すでに卒業された多くの先輩方に指導してもらい、パスキャッチやシュート練習などラクロスの基礎について学びました。また、関東学院大学と恵泉女学園大学との合同練習を3度実施したり、平成23年(2011)に参加した「ラクロス鹿島オープン合宿」で



●ラクロスのラケットを掲げる部員たち(平成25年5月)

は、東北から九州地区まで全国のラクロス部が集まってリーグ戦を行い、大人数での練習や試合を経験しました。初めての経験ばかりでしたが、チームワークの大切さや試合の楽しさを知ることができました。部員のほとんどは運動部に所属することが初めてで、自分にラクロスができるだろうか?と不安を抱えていましたが、練習を重ね試合に出場できることで、自分たちに自信がついたことを実感しています。まだまだ未熟なラクロス部ですが、たくさんの経験を生かし、さらに成長できるように努力していきたいです。

また、私たちは学校内のイベントにも力を入れています。昨年の学園祭では

仮装をして模擬店を出店しました。完売という目標もみごとに達成することができ、とても思い出に残る学園祭になりました。自分たちが楽しむことで、たくさんのお客さんを笑顔にすこができたと感じています。これからもさまざまな場面でラクロス部持ち前の明るさを武器に学校全体を盛り上げていきたいと思っています。

そんなラクロス部のメンバーはとても個性的ですが、おたがいに助け合い、励まし合いながらチームワークを築いています。今では信頼できる大切な仲間となり、ときには食事に行ったり、遠足を企画したりと、とても仲良しです。学年や学科の違う人とかかわることは部

活動の魅力の一つだと感じました。

私たちはこれからも全力でラクロスに取り組み、もっとたくさんの人にラクロスの楽しさを知ってもらえるようにアピールしていきます。

### わく♪ボラたんぽぽ

私たちはボランティア活動をとおして、地域の方々や子どもたち、障害のある方々と交流することを目的として行っています。平成3年(1991)に生涯教育研究会として設立し、平成22年(2010)4月に現わく♪ボラたんぽぽ(生涯教育研究会)に改名しました。現在、4年生2名、3年生7名、1年生2名の計11名がおり、千葉県や茨城県の幅広い地域から通っています。

我孫子市社会福祉協議会や三郷市立北児童館、あびこ農産物直売所などからのボランティアの要請があり、これを週1回のサークルのミーティングで情報を共有します。主に我孫子市のお祭り・イベントなどの出展のお手伝い、子どもを対象にしたイベントやお楽しみ会への参加、バルーンアートの配布を行っています。そのため、小学生や幼児などの子どもとかかわるボランティアを多く行っています。

大きなお祭りに「Enjoy手賀沼!」や「ジャパンバードフェスティバル(JBF)」があり、フードブースでの販売の手伝いをとおして、地域の方とのふれ合う場になっています。また「あびこカッパまつり」では、ステージの進行や竹宵の手伝いなどはもちろん、実行委員に入り、企画・運営も行っています。今年度から「クリスマス会」でも企画の段階から参加しています。代々伝わるバルーンアートは、農産物直売所での「餅つき大会」や「あびこ福祉まつり」、地域のお祭りで無料配布を行っています。子どもが欲しいものを作ってプレゼントしたり、または一緒に作り、地域の方との交流を深めています。ほかにもバルーンを使った装飾を行い、イベントを盛り上げています。

三郷市立北児童館で行われる行事のスタッフとして参加し、他大学や近くの中・高校生とともに準備や運営を行っています。



●バルーンアートを作る(平成24年3月)



●学園祭(鶴雅祭)にて(平成21年10月)



●学園祭(鶴雅祭)での華道部の作品展示(平成24年10月)

●お花を生ける華道部の部員(平成24年10月)

学園祭では食べ物の出展をして、当日やそれまでの段取りを部員と話し合いながら、また学生生活支援や生活文化の教員のアドバイスをもらって決め、行っています。

### 華道部

華道部は、草月流の先生の指導のもと、毎週水曜日正午から午後4時まで、クラブ棟ミーティングルームで活動しています。部員同士の仲が良く、みなで楽しみながら生けています。1時間程度で生けることができるので、サークルの掛け持ちをしている人も多いです。草月流ではテキストが用意されているので、自分のペースで進めていくことができ、お免状を取得することもできます。1年生から始めると師範のお免状を取得することもできます。

また、生け花をとおして、女性としての自覚や自信も身についていきます。「いつでも、どこでも、だれにでも」生けられるというのが草月流です。自由に表現することができるので、みな自分の個性を存分に發揮し、のびのびお花を生けています。大学生になってから始める人も多いので、初心者でも気軽に始められる点も良いところです。通常のお稽古以外にも、創立記念日のときにお花を生けたり、毎月交代で学生支援オフィ

スにお花の展示もしています。

学園祭では、各自の個性あふれる作品のほかに合作も展示しています。個人作品は、それぞれ個性が反映されており、楽しく鑑賞できます。部員全員で力を合わせて作る合作は、迫力もあり制作しがいがあります。年に一度のことなので、花材や花器選びにも力が入ります。12月には毎年恒例のクリスマス・リース作りもします。華道部以外の学生も参加可能なので人気があります。平成25年(2013)6月には、ブライダルをテーマとしたアレンジメントを行いました。

また、花束制作体験も随時行っているので、見学者の方大歓迎です。今以上に部員を増やし、活動的な華道部にしていきたいと思っています。

平成24年(2012)から、我孫子聖仁会病院でのボランティアを始めました。ちょうどクリスマスの時期だったので、クリスマス・ツリーをイメージした作品を展示させていただきました。これからも病院のフロアが華やかになるように、定期的に展示をしていきたいと考えています。

### 茶道部

茶道部は、平成12年(2000)に設立しました。初めは同好会からでしたが、今は部活動として毎年20名以上で活動しています。現在は国際英語学科の佐

藤浩子が顧問となり、月に3回、水曜日に10号館の和室を使用しています。裏千家教授の黒田宗寿先生のご指導のもと稽古に励んでいます。

稽古では季節に合わせたお点前てまえをしています。たとえば、春から秋なら風炉のお点前、冬なら炉のお点前の稽古をしています。

夏休みには毎年集中稽古を行っています。このときに浴衣の着付け方の練習をします。1年生も初めはなかなか上手に着られませんが、先輩たちに教えてもらい最終日には一人で着られるようになります。そして浴衣を着て稽古をします。

学園祭では2、3年生が中心となり、鶴雅祭茶会を開きます。このときは着付けの先生をお呼びして、着物を着つてもらい、お点前やお運びをします。鶴雅祭では毎年テーマを決めて御園棚というお点前をします。これまでのテーマは、月やうさぎなどです。お茶会の間は実際にお客様を相手にお点前をするので、緊張して、慣れない着物でとても大変ですが、日々の稽古の成果を出すことができる所以達成感があります。

2月には初釜を行います。このときも全員が着物を着ます。初釜では卒業する4年生の先輩たちが最後のお点前をして、黒田先生にお濃茶を点ててもらいうちでいただきます。ほかにも部活では、



●浴衣を着ての夏の集中稽古(平成23年8月)



●茶道部の初釜風景  
(平成26年2月)

床に飾るお花や稽古でいただくお菓子も毎回の楽しみになっています。あまり知らない方も多いと思いますが、川村学園女子大学には一年中多くの草花が咲き乱れています。それを摘みにいき、花入れに生けて飾っています。お菓子も季節の花をモチーフにした可愛いものが多いです。

また私たち茶道部は、裏千家関東学生茶道研究会にも所属しているので、他大学のお茶会に招待される機会もあります。他大学の仲間と交流を深め、新しいお点前や、お道具を見るのがとても勉強になります。ほかにも、宗家研修という京都の家元へ見学に行く行事に毎年2年生を中心に参加しています。

茶道部では気軽に作法を身につけることができ、実生活で活かすことができます。また茶道では、おもてなしのこころをとても大事にしています。亭

神として、稽古に励みます。茶道部で身に付けた精神や教養は、これからも役に立つものだと思います。

### 美術部

平成元年(1989)年5月1日にArt.Com.Soulが創設されました。美術好きな仲間が集まり、絵画制作を中心とする活動を積極的に始めました。クラブの顧問は心理学科教授の福屋武人。部員たちの活動は熱心で、その制作活動の成果を秋の鶴雅祭において毎年展示発表してきました。その後平成12年(2000)4月には顧問に美術教育、実技指導の荻原延元が加わりました。この時期の部員数は15名前後で、毎年部長は部員が選び3年生が主に担当しました。平成22年(2010)ころには、学園祭での作品発表がSAセンター内となり、毎回展示装飾も工夫されました。学外での展覧会を開きたいと我孫子の公共施設けやきプラザ2階にて開催しました。

平成23年(2011)5月に名称を「美術部 Art.Com.Soul」に変更、部員たちは新たな美術活動を積極的に始めました。翌平成24年(2012)には我孫子聖仁会病院において、ボランティア活動として展覧会を行い喜ばれました。学内展示も春・秋の2回行い好評を得ました。さらに博物館、美術展見学も活動に加えて鑑賞力を高めました。この年、第9回「鳥と楽しむまち我孫子絵画コンテスト」公募



●我孫子聖仁会病院内に展示された美術部の作品(平成24年12月)



●佐藤マナさんと第9回「鳥と楽しむまち我孫子絵画コンテスト」受賞作品(平成23年8月)

展に出品した部員の佐藤マナが、ワシントンDC近代美術研究賞に選ばれ、1週間の研修旅行招待の副賞を得ました。

### 歴史考古学研究会

歴史考古学研究会の創部は平成元年(1989)で、考古学研究会として設立しました。その当時、大学で考古学を教えていた杉山晋作から発掘について学び、杉山の指導のもと発掘調査に参加しました。その発掘調査で発見された埴輪を学園祭のときに展示できたことは大変うれしいことでした。

私たち歴史考古学研究会は、梅村恵子をはじめとした史学科の先生方の指導・支援のもと、歴史が好きな者たちが集い、楽しく和気あいあいと活動しています。

通常は、毎週火曜日と木曜日の昼休みに集まり、昼食をとりながら、自由に歴史についての語らいや、授業なその意見交換などを中心に談笑しています。また、部員が個人で興味のあることについて個々に調べ、レポートを作成したものを毎月1回集め、それを部誌として発行しています。部誌や普段の活動中の会話をとおして、おたがいの興味関心のあることを知り、個人の視野と知識の幅を広げ、コミュニケーションをとることができます。

また、夏期休業中と春期休業中には、我孫子市教育委員会の協力により、課外活動として例年1週間、我孫子市内か

ら発掘された土器片などを、実際に手にして、土器の接合作業・修復作業など、普段ではできないような貴重な体験をしています。平成25年(2013)春には、さらに、縄文土器の表面の文様の拓本とりや、断面実測の体験もさせてもらい、また、我孫子市にある鳥の博物館と、旧村川別荘で行われていた雛飾りの展示の見学をし、我孫子市の歴史について学びながら、我孫子市に親しむことができまし

た。

学内で行われる鶴雅祭では、部内で一つのテーマを決め、部員全員で協力し合い、テーマについて調べ、まとめあげたものを展示しています。ほかにも、夏期休業の課外活動での体験をまとめたものと、自分たちで実際に接合した土器を我孫子市教育委員会からお借りして、展示をさせていただき、我孫子市の歴史や調べたことについて、来訪された方に説明などを行っています。

これからも、私たち歴史考古学研究会は、サークルでの活動をとおして、より一層歴史に親しみ、また、地域の歴史にも積極的にかかわり、知識の幅と視野をおおいに広めていきたいと思います。



●学園祭で西ノ台古墳出土の埴輪を展示(平成4年10月)



●我孫子市内から発掘された土器片(我孫子市教育委員会内にて、平成23年8月)

# 大学行事

## ここに残る思い出を刻む

### オリエンテーション・キャンプ

開学当初(昭和63年<1988>)、学生と教員との親睦を深めるために、5月のゴールデンウィーク明けから学園の蓼科山荘(長野県)を利用し、2泊3日のオリエンテーション・キャンプが行われていました。各学科の特色を生かした見学先(SUWAガラスの里、北澤美術館、マリー・ローランサン美術館(平成23年9月30日閉館)、白樺リゾートアミーランド、世界の影絵・きり絵・ガラス・オルゴール美術館、蓼科テディベア美術館、諏訪大社などの歴史遺産、長野県・山梨県の文学遺産)や、地元のサントリーワイナリー、勝沼ぶどうの丘でのバーべキュー、山梨名産のほうとうなど、その土地ならではの「ものを食すこと」もかかすことはできません。皆で何かを作ることをとおしてコミュニケーションを図る「蕎麦打ち体験」も行いました。また、山荘ではレクリエーション(バレー、卓球など)を先生方が中心になって企画しました。初めは、緊張して参加していた学生たちも帰るころには、とても仲

良しになっていました。キャンプを終えたころから、授業にもまとまりがあり、学生間の繋がりも強くなった感じることが多くなります。

平成11年(1999)度から学生の経済的負担などを考慮して、4月のガイダンスの1日を利用した日帰りのオリエンテーションを実施しています。バス旅行(群馬県、栃木県、益子・笠間での陶芸体験)や美術館めぐり(三菱一号美術館、東京国立博物館、国立西洋美術館、カッピヌードルミュージアム)、水上バスやはとバスツアーなどを利用した観光体験、飯盒炊爨・バーべキューなどのアウトドア(野外)体験、ホテルでの集中ガイダンスなどを、各学科が学生間の友達作り、



●諏訪湖にて、情報教育学科の古藤泰弘先生を囲んで(平成5年5月)

コミュニケーションを図る重要な企画の一つとしてオリエンテーションを実施しています。オリエンテーションは、学生間の横の繋がりを強め、学科への帰属意識を高めるために、時代に沿ったかたちに変容しながら続けていく企画となっています。

### 行きは「しぶしぶ」、帰りは「るんるん」

情報教育学科では、平成5年(1993)5月18日~20日に恒例の1年次のオリエンテーション・キャンプが実施されました。まずまずの日和に恵まれ、有意義な3日間を過ごすことができました。今年のキャンプのおもな活動は、松本城・開智学校・日本民俗館の見学、バレー大会、そして3回のグループ・ミーティングでした。

出発前は、とても不安であり気乗りがしなかった学生が多くいたようです。入学してまもないで知らない人ばかりだし、バレーは苦手。ミーティングでは司会をやらされるかもしれないし、何を話し合うのかよくわからない……。ところが、クラスメートや先生方とずっと行動をともにしているうちにだんだん楽しくなってき

て、最後には、まだ帰りたくない、もっとみんなといっしょにいたいと思うようになったようです。何よりの収穫は、新しい友だちがたくさんできいろいろと語り合えたことと、遠い存在だった先生方にほのかな親しみがわいたことでしょうか。

(教育学部情報教育学科1年)  
(『KAWAMURA CAMPUS』Vol.3・4、平成6年)



●蓼科山荘前のグラウンドで朝の体操(平成4年5月)



●車山山頂にて(平成4年5月)



●蓼科山荘近くの山林で倒れた白樺を切る(平成7年5月)



●蓼科山荘内の食事風景(平成5年5月)



●栃木県益子町での陶芸体験(平成13年4月)

## 学園祭(鶴雅祭)

開学1年目(昭和63年)には、開催されなかったのですが、翌平成元年(1989)に、初めて開催されました。第1回学園祭から第6回学園祭までは、参加団体や学生数が少なかったため、教職員の方々に協力していただき、模擬店などにも参加してもらいました。また、学園祭を盛り上げるために、「おもちつき大会」なども学生のために企画されました。

参加団体も増えて、順調に開催されるようになっても、教職員の方々の温かい応援は続いています。現在は、近

隣の皆さんに楽しんでいただける「学園祭」になったのではないかと思っています。各学科の趣向を凝らした演劇や企画展示、焼きそば、あげたこ、鳥の照り焼き丼、マンゴードリンク、チュロス、シフォンケーキなどの定番模擬店、各テーマにそったクラブの展示・制作等など、バラエティーに富んだものが「学園祭」に向けて準備されています。

また、忘れてならないのが、特別企画です。第1回目は、「チャック・ウイルソン」を迎えてのトークショーでした。それ以降は、東尾修、松尾貴史、大鶴義

丹、トニータナカ、鶴久政治、高塙禎彦、秋野暢子、安藤優子、木村佳乃、神尾米、藤木直人、細川茂樹、沢村一樹、中村俊介、永井大、小出恵介、アンジャッシュ・まちやまちや、ラバーガール、平岡祐太、佐藤健、ハイキングウォーキング、しづる、大東俊介、はんにゃ、エハラマサヒロ、トレンドイ・エンジェル、桐山漣、ハマカーン、磁石、本郷奏多という多彩な方たちです。本学の学園祭出演後に、大活躍する若手俳優も多く、出演に快く応じてくれる俳優の方も多くなりました。鶴雅祭の自慢の一つです。



①学内中庭でのウィンドアンサンブルの演奏(平成21年10月)

## “鶴雅祭(つるがさい)”の誕生

平成4年(1992)度は川村学園女子大学の創立5周年にあたり、学内でさまざまな充実が図られるなか、学園祭も4回目を迎えました。本年度は、5月に、立候補や各クラスから推薦によって実行委員会が組織され、以後、10月24日・25日の学園祭当日までの約半年間、成功にむけて活動していました。

最初の大仕事に、かねてよりの念願であった、「学園祭愛称の決定」がありました。全学生・教職員対象のアンケートにより「鶴雅祭」と決定。また参加団体については、本年度の特徴である各学科の参加に加え、催物団体の増加があり、最終的

には、参加団体数25、企画数は37(展示11、催物12、模擬店14)にのぼりました。

学園祭当日は、両日とも予想を上回る多くの方々、とくに近隣の皆様がご来観くださいました。24日の大鶴義丹氏講演会、25日の本学教授山川岩之助先生講演会ともに好評で、また、ハンドベル同好会の演奏会ではたび重なるアンコールに応えて、結局全曲目をもう一度演奏し、幼児教育学科の人形劇上演も追加上演をするほどの人気でした。加えて中庭ではウィンドアンサンブルが華やかに吹奏楽を演奏し、グランドや体育館では、バスケット部・テニス部・ラクロス部がそれぞれ招待試合

を行いました。このような催物は、学園祭をいっそう盛り上がらせ、展示や模擬店と並んで、ご来観の方々に、川村学園女子大学に対するご理解を深めていただけたものと考えています。

わずか半年間の活動であり、また至らぬところも多かったとはいえ、今までの学園生活のなかでもっとも充実した、楽しい経験でした。

学園祭実行委員会委員長  
**大森利恵**(文学部史学科3年)  
(『KAWAMURA CAMPUS』Vol.2、平成5年)

●第1回学園祭(鶴雅祭)(平成元年10月)



●ダンス部の公演(平成8年10月)



●フランクフルトの模擬店で(平成16年10月)



●あげたこの模擬店で(平成18年10月)



●「竹取物語」の公演(平成18年10月)



●1号館・2号館のアーチの近くで(平成24年10月)

## 体育祭(スポーツディ)

当初は授業の一環として始められた体育祭でした。1年生・2年生の全員参加で行われました。種目も雨天でもできるように、球技(バレーボール・バスケットボール)、綱引きなどが中心でした。学生対教職員の綱引きは、いつも大いに盛り上りました。

授業の一環だったため、初めはしぶしぶ参加していた学生たちも、しだいに応援に夢中となりました。会場内は、大声援と熱気でいっぱいとなり、楽しい一時を過ごすことができました。また、学科を問わず友人関係が築けるよい機会ともなりました。

現在、体育祭は学友会主催のスポーツディとかたちを変えて、毎年6月の土曜日に行われています。参加賞は、当日のお昼ごはんとジュース、優勝賞品は、ディズニーリゾートのチケットなどです。優勝めざして、チーム力・女子力を生かしてがんばっています。

学友会の学生も、初夏の一日を友だちと楽しく過ごすこと、企画を行うことで実践する力を身につけています。種目は年によって違いますが、誰でも気軽に参加できる競技を学生たちで考えています。過去には、ドッヂボール、大縄跳び、障害物競走、ムカデ競走、縄取りなどが行われてきました。



●綱引き——意地を見せたい教職員チーム(平成3年10月)



●綱引き——若さで頑張る学生チーム(平成6年10月)

## 堂々と、ほのぼのと——綱引き対決

平成4年(1992)10月中旬、台風の到来で9割方諦めていた天候に突然恵まれ、青空のもと第5回川村学園女子大学体育祭が開催されました。本年度は、教育学部の最上級生が2年生となり、これで両学部の1・2年生全員が集うことになりました。さらに晴天にも恵まれてグランドが造られて以来初めて使用したという記念すべき年になりました。また、体育館とグラウ

ンドで競技同時進行というプログラムを組み、画期的な、しかしある意味で大きな課題を抱えた第一歩もありました。

競技全体をとおしてみると、昨年にひき続き教育学部の活躍が目立ち、社会教育学科が2年連続で優勝旗を手にしました。また、綱引きでは優勝チームと、教職員チームとの対決が行われ、教職員チームが優勝チームを抑えて、その堂々たる勇者ぶり

と、ほのぼのとした一面を見ることができました。

二つの会場同時進行の試みも来年に向けての良い問題提起でもあり、一歩ずつ着実に体育祭の地盤を固める新たな一步ができた年だと思っています。

体育祭実行委員会委員長  
大島啓子(文学部史学科)  
(『KAWAMURA CAMPUS』Vol.2、平成5年)



●リレー競技——どちらが速いか(平成6年10月)



●バレーボール——力強いアタック(平成9年6月)



●障害物競争——なかなか思うようには(平成25年6月)



●大縄跳び——リズムを合わせて(平成25年6月)



●競技を終えて(平成25年6月)

# 研修・実習

## かけがえのない貴重な体験

### 海外研修

我孫子に文学部が創設された翌年の平成元年(1989)に、オックスフォード研修(現、イギリス研修)が始まりました。イギリス研修は800年の深い歴史を刻む、英語圏最古の学園都市オックスフォードのレディ・マーガレット・ホール(Lady Margaret Hall)で行われ、8月の3週間の英語研修に毎年10名前後の学生が参加しています。平成13年(2001)にはニュージーランド・オークランド大学での4週間の語学研修を導入しました。ニュージーランド研修は2月から3月にかけて行われ、毎年5名前後の学生が参加していますが、前半2週間の英語研修と後半2週間のインターンシップの組み合わせが学生にとって魅力です。さらに平成23年(2011)にはフランス研修が始まり、短期語学研修プログラムが充実し豊かになりました。フランス研修はモネをはじめ多くの芸術家を魅了したパリ北西の小都市ルーアンのアリアンス・フランスセーズで行われ、8月の3週間のフランス語研修に毎年数名の学生が参加しています。いずれの語学研修も共通教育科目「国際コミュニケーション(イギリス・フランス研修)」として、あるいは「国際英語演習Ⅲ」として2単位が認定されます。

本学は平成19年(2007)に台湾の中山医学大学と、そして平成23年(2011)にイギリスのチチェスター・カレッジと学術交流協定を締結しました。毎年、中山医学大学応用外国語学科から前・後期にそれぞれ1名の交換留学生を日本文化学科に迎えています。平成25年後期には初めて交換留学生を国際英語学科に迎えました。また、平成23年に本学の学生が中山医学大学へ半年間留学し、両校の交流が一層深りました。チチェスター・カレッジには毎年1名の学生が交換留学生として、さらに数名の学生が半



●イギリスのオックスフォードのレディ・マーガレット・ホール(平成24年8月)



●ニュージーランドのカプラン・インターナショナルカレッジのクラスメイトと(平成25年3月)

年または1年間留学しています。留学中に修得した単位は30単位を上限として大学の履修単位に認定し、修業期間を延長せずに4年間で卒業できるのが長期留学プログラムの特徴です。

本学の短期語学研修プログラム、交換留学制度、そして長期留学プログラム

は、外国語のスキルを磨くだけにとどまらず、国際的視野を広げ、外国の文化と社会を肌で感じ、さまざまな国の若者、ホストファミリー、現地の人たちとの交流をとおして国際社会で自立して行動できるグローバル人材育成の一助になっています。



●イギリスのオックスフォードでの英語研修風景(平成24年8月)



●オックスフォード市の街角での研修生(平成24年8月)



●フランスのルーアンのカフェにて、シードルで乾杯する研修生  
(平成23年8月)



●フランスのルーアンのアリアンス・フランセーゼにて校長先生と(平成24年8月)



●台湾・中山医学大学の正門(平成23年5月)



●イギリスのチチェスター・カレッジで授業の合間に(平成24年5月)

## 教育実習(中学校・高等学校)

平成24年(2012)度、教員免許状を取得した卒業生は、開学から数えてのべ2689名に上りました。教員をめざす学生にとって教育実習は、兎にも角にも乗り越えなければならない、もっとも大きな関門です。教職課程の履修開始時から、学生は教育実習を目標に学習を重ねていきます。教育実習は、2~4週間、中学校または高等学校において行われます。実習生は4年間の教職課程での総仕上げとして、現場の先生方の指導を受けながら授業実習、部活動や行事への参加など教員の仕事を実際に体験します。本学の教育実習は学生の出身校=母校で行われますので、実習生は母校の教壇に立つことをとても楽しみにしています。とりわけ、教壇実習(研究授業)は教育実習の総まとめですので、実習生は不安と緊張でいっぱいになります。しかし、これまで本学の実習生はしっかりと、最後まで実習をやりとげてきました。

また、教育実習へ行くための実習事前指導は、平成12年(2000)度まで中澤浩一(故人)が担当していましたが、現在は3名の教職課程の教員が担当しています。事前指導でとくに力を入れているのは、服装とマナーの指導です。実習直前の授業では、実習用の服装、髪型、化粧、持ち物、すべてにチェックが入ります。お世話になる先生方や生徒たちに話すスピーチの内容、登下校時のあいさつの仕方や緊急時対応方法なども確認します。実習校からは、本学実習生の実習への意欲、実習態度、言葉づかいや生徒理解などにおいて、高い評価を得ています。

実習生は、実習期間中、毎日、教材研究と指導案作成に頭を悩ませながら、生徒の「先生！」という呼びかけを支えにがんばります。最終日には、クラスの生徒から花束や寄せ書きを送られ、多くの実習生が涙を流します。教育実習は、学生にとってかけがえのない貴重な経験であるだけでなく、教員としての適性を確認する機会でもあります。実習終了後、改めて教職への思いを強め、夢をかなえた卒業生も多数派出しています。



●川村中学校での社会科の教育実習(平成25年6月)

## 博物館実習

学芸員の養成は、平成3年(1991)4月教育学部の開設とともに、社会教育学科の専門職員養成の一つとして始まりました。同年6月には、教務委員会に「学芸員その他資格付与に関するワーキンググループ」が設けられ、当時の副学長奥田眞丈(教育原理担当)、教務委員長尾藤正英(史学科)、学科長北村浩一郎(社会教育学科)、教務委員斎藤哲郎(社会教育学科)、学芸員担当者二上政夫(博物館学・博物館実習担当)との間で討議が重ねられました。その結果、平成4年度より全学生に学芸員資格科目が開放されることとなり、今日にいたっています。

「博物館実習」は、館務実習のほか、学内実習、学外実習(調査・採集・見学)で構成されています。学内実習では、縄文土器の復元・焼成実習など、また、学外実習では、遺跡・化石の調査、化石の採集、博物館見学が行われ、その内容は、他大学での養成課程と比べて、当時としては、きわめて先進的かつ充実したものとなっていました。

平成6年(1994)度に史学科・社会教

育学科・幼児教育学科・情報教育学科の4学科計52名の学芸員有資格者第一期生を輩出することができました。今日までに、有資格者は優に700名を超え、このうち、約20名の卒業生が学芸員や解説員として、博物館で活躍しています。



●学内実習での縄文土器の復元と焼成(平成9年12月)



●福島県いわき市薬王寺での文化財の見学(平成22年9月)



●千葉県長柄町の横穴群の見学(平成24年9月)

# 研究所・センター

## 建学の精神を生かしながら

### 女性学研究所

川村学園女子大学では、平成12年(2000)4月に人間文化学部開設のさいに、ジェンダー・女性学を学部教育の柱として据えました。それは平成13年(2001)にこの世を去られた中村恭子の長年の念願を実現したものでした。ハーヴァード大学で宗教学を学んだ中村は、国際的にみてもこれからの中村恭子の長年の念願を実現したものでした。ハーヴァード大学で宗教学を学んだ中村は、国際的にみてもこれからの中村恭子の長年の念願を実現したものでした。ハーヴァード大学で宗教学を学んだ中村は、国際的にみてもこれからの中村恭子の長年の念願を実現したものでした。



●女性学研究所主催のシンポジウム(平成16年10月)

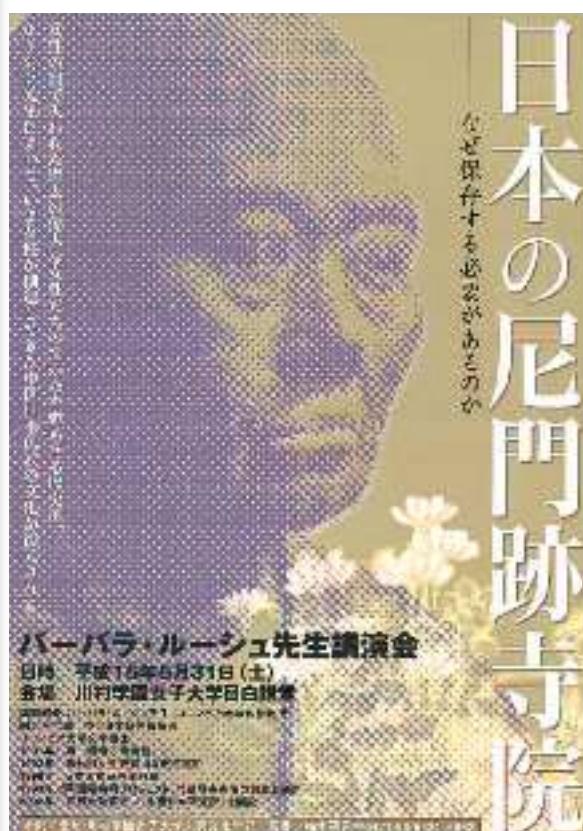
薰陶を受けた女性史、女性学、あるいはジェンダー研究にかかる教員は本学に多数教鞭をとっており、若桑みどり(故人)を中心として、学部・学科の境界を越えて川村学園女子大学に女性学研究所を開設することとなりました。

21世紀は、グローバル・スタンダードとして男女共同参画社会の実現が急務となっています。本研究所は「自覚ある女性の育成」という建学の精神にのっとり、新しい社会、新しい時代に生きる女性の生き方を提案する研究・教育・交流のためのヴァーチャルセンターとして、平成17年(2005)6月に開設されました。平成16年(2004)に我孫子市が「男女共同参画都市宣言」を行い、また本学においても大学院博士前期・後期課程の比較文化研究科のなかに、女性学分野専攻が新設されるなど、本研究所開設のための運気が高まっていました。

国内外の研究者とのシンポジウムなどを開催して

国際的・学際的な知的交流を行い、また我孫子市や千葉県下の男女共同参画事業に協力し、地域に貢献するためにさまざまな活動を行い、本学が女性教育においてすぐれた成果と名声を獲得することを目的として、活動をスタートしました。

本研究所は予算もなく、本学のジェンダー・女性学に関心を寄せる教員ならびに非常勤講師、および大学院生からなる会員から拠出される会費のみにて運営されています。それにもかかわらず、学内・学外にわたる多種多様な活動ができたのも、ひとえに会員の熱意に支えられたものであるといつても過言ではありません。女性学研究所は、ジェンダー・女性学教育科目を副専攻「女性学」として取りまとめたり、また総合講座「女性と社会」をコーディネートし、本学のジェンダー・女性学教育に貢献しています。また、主として学園祭に合わせて内外の研究者を招聘してシンポジウムなどを開催し、また学内で研究会を開催するなど、本学の女性教育に寄与するだけでなく、本学の教員の切磋琢磨の場でもあります。その成果は『川村学園女子大学女性学研究所年報』にまとめられています。



●川村学園女子大学白講堂で行われたバーバラ・ルーシュ先生(コロンビア大学名誉教授)の講演会「日本の尼門跡寺院」(平成15年5月31日)のポスター

# 川村学園女子大学 女性学研究所の紹介

Wakakuwa Midori  
若桑みどり

21世紀は、国際的にも国内的にも、社会においても、家庭においても、女性がかつて歴史に例をみないほどに重要な役割を果しつつ、おおいなる飛躍をとげる時代です。川村学園女子大学女性学研究所(Kawamura Gakuen Woman's University, Center for Gender Studies)は、「自覚ある女性」という建学の精神にのっとり、このような未来の展望にたって、21世紀に生きる女性の新たな生き方を提案する研究・教育機関として、平成14年(2002)5月に開設されました。

研究所の活動内容は以下のとおりです。

(1)国際交流 (2)女性学・ジェンダー学の共同研究 (3)市域市民および女性のための市民講座、講演会などの市民交流 (4)女性学教育科目的立案と提供 (5)上記の活動報告を記録し、広報する「年報」の発刊 (6)情報交換(国内外の女性学研究機関ならびに国、地方自治体との情報交換)。

以上の各部門に専門委員をたて、学内におけるジェンダー女性学関連専攻委員が集まり、たがいに切磋琢磨して学部を超えた共同研究を行い、国際的・国内的な他機関・他大学との交流を深め、研究成果を内外に発表し、市民大学、市民講座、ワークショップなどの啓蒙活動を行って地域に貢献しています。

平成15年(2003)にはコロンビア大学日本中世文化研究所の所長で、国際的に名声の高いバーバラ・ルーシュ先生の「日本の尼門跡寺院」と題する貴重な講演会、韓国の名門女子大学梨花女子大のアジア女性学研究所所長で、女性学科



●女性学研究所主催のシンポジウムで発表する若桑先生(平成16年10月)

の主任、韓国女性省の顧問であるキム・ウンシル博士をお招きして「韓国社会における女性の主流化と21世紀の新しい女性運動」という講演をしていただきました。この二つの講演会はいずれも研究所の機関誌『女性学年報』創刊号、第2号に収録されています。

なおこの機関誌にはメンバーの貴重な論文、研究ノート、活動記録などが掲載され、女性学の研究雑誌として次第に知られ、国会図書館にも収蔵されることになりました。

また教員の研究会は平均3カ月に1回、定期的に開催され、すでに5回の成果をあげました。平成16年(2004)には研究所メンバーによるシンポジウム「良妻賢母の東西比較」を開催しました。これは本学の建学の精神を21世紀の視点において再検証するものでたいへん意義があったと思います。今後とも、大学における研究・教育の活性化のため一層の活動を展開していく予定です。みなさまのご支援をお願いいたします。

(『花時計』第17号、平成16年12月)



## 心理相談センター

心理相談センターは平成15年(2003)度に開設されました。地域に開かれた「こころの相談室」として、また大学院生の実習訓練機関として、実践的な研修教育に努めています。さらに『心理相談センター紀要』を毎年発行し、研究活動にも取り組んでいます。

このように、心理相談センターは「臨床心理学の実践・教育・研究」という3つの機能を併せ持った専門機関として活動を続けています。とりわけ「教育」の機能として、平成21年(2009)度に本学大学院が公益財団法人日本臨床心理士資格認定協会の第一種指定大学院に認定されたことから、教育施設としての機能充実を図るため、平成20年(2008)6月に我孫子キャンパス7号館1階への移転と施設の拡充がなされ、現在にいたっています。面接室が5部屋、箱庭療法室、集団療法室、大小プレイルームを完備し、幅広い相談活動を実施しています。また、地域に根ざした相談活動と、大学院生の実習施設としての機能充実を図るため、月曜日から土曜日まで開設しています。

心理相談センターにおける相談事例としては、発達障害、子育て相談、不登校、人間関係や家族関係の相談など、幼児期から成人期にわたる相談を受け持っています。心理相談センターにはさまざまなタイプの面接室があるため、相談者の年齢や相談内容に合わせた面接室を使い分けながら、よりよい相談活動ができるよう工夫を重ねています。たとえば、幼児期や学童期の子どもの場合、自分の気持ちを適切な言葉で表現することが難しいため、箱庭療法を用いたりプレイセラピーを実施したりと、言葉以外の表現を用いた心理療法を実践すべく、それに見合った面接室を使用しています。また、大プレイルームには観察録画室が隣接していることから、プレイルームでの子どもの様子を観察したり映像を録画することによって、子どもの状態のアセスメントや今後の目標を検討する資料として活用しています。

心理相談センターにおける「教育」の

機能として、本学大学院心理学専攻(臨床心理学領域)の大学院生がこころの専門家をめざして日々実習に励んでいます。心理相談センターは有料の相談施設でもあるため、大学院生といえども一スタッフとして受付で応対したり、教職員が行うカウンセリングに陪席したり、実際に心理検査を行ったり、カウンセラーとして相談担当となったりするなど、心理相談センターに来られる相談者と接することで実践に即した勉強を行っています。紆余曲折をへて来室された相談者に失礼がないよう十分に配慮しなければならないため、社会人としてのマナーをわきまえた応対ができるようにロールプレイを実施するなど、大学院生

同士が切磋琢磨しながら取り組んでいます。

「研究」機能としては、毎年、『心理相談センター紀要』を発行するとともに、学会発表を行うなど積極的に活動を行っています。臨床心理学の実践つまりカウンセリングを科学研究に還元し、さらに研究結果を実践にフィードバックするという営みを通じて、「根拠に基づいた心理臨床」を行うよう努めています。カウンセリング技法および心理療法は日々アップデートされていくため、学会等で最新の知見を広めたり日常的に研究論文をチェックするなどして、相談者に適切なカウンセリングを行えるよう尽力しています。



●大プレイルーム(平成20年6月)



●箱庭療法室(平成20年6月)

## 子ども学研究所

川村学園女子大学子ども学研究所は、平成16年(2004)4月、幼児教育学科の教員を中心に、観光文化学科、国際英語学科の教員の参加も得て設立され、学際的なアプローチから、現代の子どもを取り巻く問題について調査研究しました。また、平成19年(2007)度、学内教育研究奨励の助成を受け、「幼稚園教員養成におけるジェンダー導入カリキュラム」の研究を行ないました。

## 比較文化研究センター

平成10年(1998)4月に当センターが発足しました。所属、専門分野にとらわれない学際的交流の場を設けることが目的でした。活動の中心はシンポジウムの開催で、毎年統一テーマを設けて、「子ども」というテーマではアボリジニの話、「旅」ではムスリムの巡礼、「家族」ではローマの父親など、それぞれの専門分野から話題を提供してもらい、討論を行っています。

## 国際日本学研究所

国際日本学研究所は、日本研究にかかる本学の全教員が自由に参加できる共同研究施設として、平成14年(2002)5月に設立されました。その活動は、コラムに述べられているとおりで、第4回は、平成19年(2007)に本学教授の長崎靖子が「助動詞『です』の評価をめぐって」について講演しました。ここ数年、各学部・学科の再編の影響などにより、一時的に活動を中断しています。

## 国際日本学研究所の活動

Kawabata Kaori  
川端香男里

いま大学は大きな改革のさなかにあり、それが個性輝く大学像を求め、教育研究基盤の強化に鎬を削っています。本学も大学院人文科学研究所の既存の2専攻に加え、比較文化専攻前期・後期博士課程を増設し、小中高に大学、大学院を束ねて欠けるところのない教育研究機関として完成を見たといえます。加えて、こうした教育研究組織を支える重要な基盤として、つぎつぎに研究所が開設されています。現在は心理相談センター、女性学研究所、比較文化研究センター、子ども学研究所、そして国際日本学研究所の5研究組織が付設されています。

国際日本学研究所は、本学にあって日本研究に関わる教員が自由に参加することのできる共同研究施設とともに、世界各国の日本研究機関との間にネットワークを結び、情報交換・研究交流をすすめる拠点となることを目的として設立されました。研究分野として日本語学・日本語教育学、日本文学、日本文化、日本史学の各部門を統合するものですが、最初の事業(第1回)としてカナダ・ケベック州政府国際関係省アジア・パシフィック部参事官の日本研究者リチャード・ルクレール氏を招待して、「日本におけるケベックの存在」と題する講演会を行いました(平成14年〈2002〉)。



●川端先生を囲んで、新入生オリエンテーション(7号館の裏手にて、平成15年4月)

次(第2回)には、千葉大学文学部(現、国際教育開発センター)助教授吉野文氏をお招きして日本語教育に関するワークショップを開催しました(平成15年)。また昨平成16年(第3回)は、本学教授の荻原延元氏による「染色家・鈴田滋人の鍋島木版刷り更紗、日本の伝統工芸の継承」と題する講演会を開催し、学外からの参加者も得て、盛況な会となりました。これら各研究所は自助努力によって運営されるのですが、本学の教育研究のレベル・アップのために地道な研究活動をつづけています。いよいよ厳しさを増す競争的環境の中にあって、これからますます重要な役割を果たしていくものと期待されます。

(『花時計』第18号、平成17年7月)

# 地域貢献・社会貢献

## 大学の使命として

### それぞれの学科で取り組む活動

公開講座や大学施設の開放、あるいは平成19年(2007)に我孫子市と本学との間で締結された、住みよいまちづくりの発展に向けて相互協力する内容の協定など、大学として多くの地域・社会貢献活動を行っていますが、それぞれの学科もボランティア活動や学習支援活動など、地域に貢献する活動を積極的に行ってています。

とりわけ、学科の性格上、地域社会とのかかわりが深い社会教育学科では、設置当初から我孫子市の生涯学習推進を目的とした「あびこ楽校協議会」の学生委員(2名選出、任期は2年)を務め、多くの生涯学習に関する事業にかかわってきました。そのほかにも、鎌ヶ谷市、流山市、野田市が実施した小学生の通学合宿の支援、福祉施設での定期的なボランティア活動、我孫子市が主催する市民活動の催しへの協力、松戸市内の学童クラブへの支援、千葉県夢チャレンジ体験スクールの学生スタッフなど、数々の地域・社会貢献活動を行っています。

また、史学科では、我孫子市内の発掘や出土品の整理、平和記念式典に参加する我孫子市の中学生を支えるボランティアなど、学科の特色を生かした地域・社会貢献活動を行っています。

### 市民講座・公開講座

平成元年(1989)、我孫子市からの呼びかけによって、第1回「我孫子市市民大学開放講座」が開催されました。文学部の教員を中心とする教養教育講座で、各講座に100人以上の受講生を迎えた好評を博しました。

その後、教育学部・生活文化学部の増設にともない、講座の内容も教養講座から健康・子育て・心の悩み・栄養管理など、実用講座へと内容を変え、受



●学童クラブの子どもたちを大学によんでのクリスマス会(平成17年12月)



●流山市の通学合宿事業「めだかの学校」の支援(平成20年10月)

講生の身近な悩みにダイレクトに答えてくれると好評でした。またこの間、高校生向けのサマーカレッジやレディースアカデミーなども試みました。しかし、我孫子市主催の市民大学は、我孫子市の財政難もあり、平成20年(2008)中止となりました。大学独自の

公開講座へと名称も変えました。

平成23年(2011)からは、公開講座の内容を教養講座に戻し、第1回「元気で生き抜くための○得健康講座」、第2回「女性と文化」、第3回「東と西の物語」という共通

テーマのもと、毎回100名内外の受講生が参加しています。受講生からは、「有料でよいので同一講師による連続講座」を望む声や、「古典の名作をゆっくり読んでいいきたい」などの声があり、このような期待にどう答えるか検討しているところです。



●公開講座風景(平成23年10月)

# 大震災から学んだこと

Saito Tetsuro  
斎藤哲郎

平成7年(1995)1月17日と平成23年(2011)3月11日の両日が、もう忘れ去られようとしているのではないか。前者は、「阪神・淡路大震災」、後者は「東日本大震災」の発生日です。これらの大地震によって、大火災、建物の崩壊、交通網の遮断、大津波などから想像を絶するほどの多くの犠牲を強いられました。死者・行方不明者は、淡路阪神大震災が約6400名、東日本大震災が約1万9000名と報じられていますし、古里やたくさんの思い出まで奪われてしまったのです。東日本大震災では、放射能による影響までも負わされています。当大学においても、何らかの被害を受けた学生が10名ほどいましたが、その悲しみはいかばかりかと思うところです。被災された方々には、一日も早く元の生活に戻られるよう心から願わずにはいられません。

私も東北3県を訪ねましたが、最初に被災地を訪れたときにはただそこに立ち尽くすことしかできませんでした。地元の方たちに何と声をかけたらよいか、言葉も出てきませんでした。

平成24年度、岩手放送局と財団法人民間放送教育協会共催「被災地子育て支援事業」として、岩手県釜石市を訪ねました。この事業は、被災地域の子どもたちの心の癒やし、親子の絆づくりに協力しようと計画したもので、親子関係の大切さ、アナウンサーによる朗読・読み聞かせ、アフリカ音楽の生演奏などが披露されました。

ただ、このような事業にどれだけの人が参加してくれるだろうか、これらを行うことによってかえって人びとの心を傷つけるのではないかと心配が先行しましたが、しかしながらそれはまったく無用でした。参加された人たちの明るさや笑顔にむしろ私たちが救われ、帰り際に「私たちは本当に怖い思いをしましたし、財産、肉親や多くの仲間を失いました。今は、周りの人たちや多くの方々の支援や励ましがあったればこそ、前に向かって生きていこうという気持ちになりました。命の大切さ、人の優しさ、何事もない日々の生活がこれほど幸せなことかと身をもって感じています」と語ったあるお母さんの言葉を忘れるることはできません。

阪神・淡路大震災の被災された

方々にお会いしたときにも、「あの地震によってインフラは破壊され、救急車も消防車も来てくれませんでした。命を救ってくれたのはじつは近所の人たちでした。会社、工場などの建物があったときには、そこにいる人たちはただの通行人のようなもので、あいさつを交わすこともほとんどありませんでした。今、瓦礫が片づけられ平地になって私たちは初めて気がつきました。建物の壁がなくなっこによって人と人の壁もなくなり、知らない人とも自然にあいさつをするようになったのです。命の大切さは無論ですが、地域の人間関係の大切さを改めて感じています。これからは積極的に地域とかかわりをもつていこうと本気で思っています」と、語っておられました。

今回の震災によって私たちは自然災害の怖さを思い知らされました。人びとの優しさや絆の大切さをも学ぶことができました。本大学においても、自ら手を上げボランティア活動に参加した学生、日程がとれず夜行バスで現地に赴いた学生がたくさんいることを、とても誇りに思っています。

私たちは自然を破壊しながらこれまで歩んできたといつても過言ではありません。経済性や効率性を優先するあまり、今の社会が人間性を犠牲にして成り立っていることも事実です。これが、私たちが求めてきた本当の幸せだったのでしょうか。今回の震災から、私たちは多くのことを学びましたが、学生の皆さんには、日々を大切に生きていってほしいし、もっと地域社会に目を向け、地域の方々や社会の本物とふれてほしいと願っています。「学習」とは、与えられるものではなく自らが求めていくものです。私自身、方向性を見失わないように学び続けていきたいと考えています。

(平成25年5月記)



●大津波が襲った宮城県南三陸町志津川にて(平成23年8月)

## 我孫子聖仁会病院との交流

平成24年(2012)6月隣接する我孫子聖仁会病院に、緩和ケア病棟が開設されたのを契機に交流が始まりました。交流を始めるにあたって、課外活動団体(クラブ・同好会など)に「元気を分けてください」と呼びかけたところ、ハンドベル・演劇・美術・華道・写真・ハンドメイド・ダンスのクラブ・サークルが応じてくれました。交流は、患者の皆さんの身体的・心的状態を考える必要性から、我孫子聖仁会病院と綿密な打合せをしながら、公演・展示・実演とクラブ・サークルの特色を生かした内容で実施しています。ハンドベル部の演奏や演劇部の朗読劇には、ベッドに寝たままや車いすのまま会場に来て楽しんでいただき、なかには涙される場面もみられました。美術部・写真同好会・華道部の展示作品は、車いすのままご家族と見てくださる方もいました。この交流を永く継続して、多くの学生が参加し、貴重な体験をおして、成長できるように取り組んでいます。



●我孫子聖仁会病院でのハンドベルの演奏(平成24年12月)



●病院内に展示された写真同好会の写真(平成24年12月)



●病院での演劇部の朗読(平成25年3月)

# 川村学園女子大学附属保育園

## 大学との連携をとおして

附属保育園は、平成18年(2006)4月に開園し、平成25年(2013)で8年目を迎えます。開園当初から教育面での指導に大学の協力を得て、体操教室、造形教室、英会話教室、茶道教室を特別課外活動として取り組んでいます。ゼミの学生も一緒に園児の指導に参加し、親しまれています。

学生たちは保育園の行事にも参加し、誕生会ではオペレッタ、クリスマスにはオペレッタやハンドベルの演奏もあり、0歳児や、1歳児の小さな園児まで身を乗り出して聞き入るほどに楽しんでいます。秋の運動会では園児の誘導や衣装付けの補助、用具の準備係りを担当し、保育士の補助として大活躍しています。

また、実習生の受け入れでは、幼児教育学科の保育園実習、生活文化学科の保育園給食の実習、心理学科の実習など、各学科に場の提供を行っています。幼児教育学科の保育実習では、1年生の授業を進めるうえで、理論では学べない、子どもたちの行動や実習生の働きかけの反応、保育者の対応の仕方を見て学んでいく保育現場での“学び”にポイントをおくことで、保育に対するイメージが明確になり、2年生での本実習が有意義に進められていると思います。

実習を受け入れるにあたっては、担当教授との情報交換・連携を十分図り進めてきました。その結果、学生の実習に対する姿勢の変化がみられ、指導評価も高くなってきています。これからも保育園と大学の役割を明確にし附属のメリットを最大限生かし、全職員で後輩保育士の育成に取り組んでいきたいと思います。



●運動会で一生懸命走る園児たち(平成24年10月)



●運動会でバルーンのまわりでパフォーマンスを見せ園児たち(平成24年10月)



第

5

章

# 卒業生からの の メッセージ

生き生きと輝いて

# 一書との出会いが転機に

Sugawara Junko  
(平成8年文学部英語英文学科卒業) 菅原淳子

私は、英語英文学科(現、国際英語学科)の5期生ですから、草創期の卒業生といえるでしょう。卒業後、新図書館の設立、大学院の創設など、母校が躍進するさまを非常にうれしく拝見してきました。その歴史を築いてこられた先生方、職員の方々に敬意を表したいと思います。

現在、私は、台湾中部にある中山医学大学応用外国語学科に勤務しています。英語と日本語を同時に学ぶというユニークな学科で、毎日元気な学生たちと楽しく過ごしています。本学と川村学園女子大学は平成19年(2007)11月に学術交流協定を締結いたしました。多くのお力添えをいただいた母校に深謝しています。今後も、両校の交流のあり方

を考えつつ、学生たちが結ぶ一つひとつ小さな絆が、日本と台湾、あるいは、国際社会において何かしら意味があることを願っています。

私の原点は、川村学園女子大学で過ごした4年間になります。当時の私は、とくに勉強熱心な学生ではありませんでした。鶴雅祭や謝恩会などパーティーやイベントが大好きで、クラスの友人とショッピングやカラオケを楽しんだり、オックスフォードの語学研修に参加したり、学生生活を満喫していました。ところが、3年生のとき、授業で女性の自立を説いた*A Room of One's Own*を読み、学問に目覚めたのです。そして、この一書との出会いが、進路を決定するうえでの転機となりました。



●台湾の墾丁(Ken Ting)の南門にて家族と

日本、台湾、留学したイギリスで、多くのの方々との出会いがありました。そのなかで、川村学園の理念の一つである「感謝の心」に国境はないと感じています。卒業してから、もう何年もたちますが、川村学園女子大学の先生方、職員の方々には今でもたいへんお世話になっています。私にとって川村学園女子大学は、私を生み、育ててくれる「お母さん」のような存在、まさに「母校」です。

# 母親としても研究者としても輝いていたい

Kikuchi(Abe) Yuriko  
(平成5年文学部史学科卒業) 菊池(旧阿部)百里子

初めて我孫子校舎を訪れたのは、高校3年の秋でした。正門から長く伸びるアプローチの両側には広々と芝生がひろがり、真っ白い校舎にはまだ新築の香りが残っていました。平成元年(1989)に史学科2期生として入学したころ、学生は3学科2学年のみ、JR天王台駅とを結ぶバスは1時間に3台程度。4時過ぎには校内に人気もなくなり、薄暗くなるまで大学にいると怖しささえ感じたものです。

しかし大学生活は、考古学研究会の活動、発掘調査の参加、博物館でのアルバイト、オックスフォードでのホームステイ、来日外国人研究者の案内、そして卒業論文など大変充実したものでした。そしてこの経験は、のちの大学院進学、中国やベトナムへの留学に生かされ、今の私の研究活動の礎となつて

います。

今、私はベトナムをフィールドとして、海のシルクロードをとおした交流について考古学的に研究しています。江戸時代の初め、多くの日本人商人や迫害されたキリスト教徒はベトナムの地へわたり、日本町もつくられました。鎖国により帰国できなくなった日本人の墓も残されています。近年北部ベトナムで実施した考古学調査では、日本の伊万里焼の茶碗や寛永通寶を発見しました。

ベトナムでは、電気も水道もない島での発掘調査もあります。当然お風呂はなく、満天の星空のもと井戸水を浴びる生活でしたが、調査は大変有意義なもので、得られた成果をまとめて、このたび博士論文として提出します。

出産・育児で海外調査や研究活動がままならなく、つらい時期もありました。



●見学の女学生にかこまれて、インドネシアでの銅錢調査

そんなとき、思い起こしていたのは、母親としても研究者としても輝いていた川村学園大学の先生方であり、今でも私が目標とする女性の姿です。そして数年前より、史学科の非常勤講師として母校の教壇に立たせていただいている。

久々にJR天王台駅に降り立ったとき、まず驚いたのは、バスが次々とくること。そして正門をくぐると重厚感のある図書館や6階建の校舎がそびえ、校内は学生と活気で満ちていました。創立25年、母校の発展していく姿は、卒業生への大きなエールなのだと確信しています。

## 美女の埴輪 私の発掘体験記

平成3年(1991)の夏、初めて西ノ台古墳(千葉県山武郡郡成東町(現、山武市))の発掘調査に参加させていただいて以来、古代へのロマンにかきたてられて数回の調査に参加し、すでに1年以上がたちました。最初の調査のときは、国立歴史民俗博物館の杉山(晋作)先生のご指導のもと、器材の名前や使い方から覚え、足手まといになつてはいけないと、ただ無我夢中で頑張っていました。他大学の学生さんたちからは、現在の考古学の諸問題についてや、他の発掘でのわくわくするような新発見のお話なども聞くことができ、また、発掘で得た知識をどのように自分の勉強に生かせばよいのか教えていただきました。西ノ台古墳の発掘で、考古学研究会の仲間と、汗を流しながらお互いに励まし合い、泥だらけの顔を見て笑い合つた暑い夏の日、千数百年にして夢から覚めた“美女の埴輪”を掘り上げたあの興奮は、今でも脳裏に焼きついております。先生は、そこに何か埋まっていると思われたのでしょうか。私にその遺物を掘る機会を与えてください、先生のご指示のもと土を上げてゆくと、カツンと移植ゴテに何かのぶつかる音がして、私の心臓は一気に高鳴りました。大勢の見守る緊迫した空気の流れる中、はやる気持ちを抑えつつゆっくり丁寧に竹ぐしで土をよ



●西ノ台古墳の発掘風景



●出土した“美女の埴輪”

に言葉が話せたら、きっと当時のことをなつかしそうに、そして自慢げに話してくれたことでしょう。

この女子の埴輪が出土したのは約90mの大型前方後円墳の前方部前面の周溝の内溝部で、墳丘上に飾られていたものが転落したものと考えられ、古墳造営時は、整然と埴輪が並んだ荘厳な姿の古墳だったのでしょう。それをあの“美女の埴輪”は語っているのです。

このような、学生生活でもっとも充実した、生涯忘ることのできない思い出を与えてくださった諸先生方に心から感謝し、次回からの発掘にも全力を尽して頑張りたいと思っています。

阿部百里子(文学部史学科3年時)  
『KAWAMURA CAMPUS』Vol.1、平成4年)

## 大学時代の友人を大切に

Shimomura(Matsunomiya) Wakana  
(平成9年文学部史学科卒業) 霜村(旧松濤)春菜

人生の節目に私の背中を押してくれるのは、いつも大学時代の友人たちです。私が最高の状態でも最悪の状態でも、変わらぬ態度で接してくれる彼女たちに、私は支えられています。

社会人となった今のほうが、学生時代よりも多くの人と出会う機会があります。しかし友情より前に仕事としての利害があり、どんなに気が合っても離れざるをえない場合も多くあるのです。それは仕方のないことですが、とても残念に感じます。そんなとき、現在の私にとっても、学生時代の友人がどんなに貴重な存在であるか気づきます。

私は「食べ物を通じたコミュニケーション」に興味があり、野菜ソムリエをへて、現在は青果流通の新聞社の取締役

をしています。青果とは、野菜や果物などの農産物のこと。私の仕事は、その青果を第一線で扱う人たちへの講演や、販売提案をすることです。やりがいのある仕事と思っています。

平成24年(2012)6月末には、一年かけて執筆した青果のプロ向けの本『野菜と果物の品目ガイド』を出版することができました。もちろん一番に報告したのは、大学時代の友人たちです。彼女たちは自分のことのように喜んでくれました。そして、私はその様子を見て、一層うれしくなりました。

私は平成23年(2011)から川村学園女子大学で教壇に立させていただいているが、その最初の授業で話したのは「大学時代の友人を大切に」ということでし



●ナスの生育を見る

た。先輩面して話してしまったなあとも思いますが、私がそうであったように、いま、隣で勉強している人が、自分を応援してくれる一生の友人になるかもしれません。

同窓の皆さんも、今も大学時代の仲間とつながっている方は多いと思います。しばらくぶりなら、連絡を取ってみてください。きっと喜ぶはずです。自分の夢をかなえるために己の努力はあたりまえですが、応援してくれる人の存在もまた必要です。そんな友人に再会できるかもしれません。

# 学園での生活が今を支える

(平成16年文学部心理学科卒業、平成18年大学院修士課程修了) 青木絢子

私は平成17年(2005)度に人文科学研究科心理学専攻修士過程を修了し、現在、日本大学医学部附属板橋病院心療内科と吉祥寺通り花岡クリニックに臨床心理士として勤務しています。おもな仕事は、心理面接、心理査定です。

さまざまな人とかかわるなかで勉強不足を痛感していますが、親身に指導して

くださる医師、心理の先輩、スタッフに支えられ、楽しくて充実した毎日を送っています。そのなかで感じることは、川村学園での生活をとおしてすばらしい先生方や仲間に出会えたこと、また、現在も指導を受けるために母校に通っていることが私の基礎になっているということです。



これからも、支えてくださる方々に感謝し、日々成長していきたいと思っています。

## たくさんのお喋りが仕事に役立っている

(平成17年文学部心理学科卒業、平成19年大学院修士課程修了) 小田原 幸

私は現在、都内の東邦大学医療センター大森病院心療内科で臨床心理士として働いています。心療内科では、軽度うつ病や不安障害、摂食障害のほか、頭痛や腹痛といった身体症状をもつ患者さんもいらっしゃいます。そのような患者さんに対して、心理学の知識と技術を駆使して、アセスメントをしたり、カウンセリングを行っています。また、がんをはじめとした身体疾患をもつ患者さん、あるいはそのご家族、医療スタッフの心理的サポートをすることも私たちの仕事の一つです。このような臨床業務以外にも、研究を行って学会発表をしたり、研究論文を執筆すること、医学部生への講義や実習指導も行っており、これらは大学病院ならではの仕

事といえるのではないでしょうか。

こういった多岐にわたる仕事を行う上で、もっとも重要なスキルの一つにコミュニケーションスキルがあると考えています。患者さんとのコミュニケーションはもちろんのこと、多職種が働く医療現場において、相互理解を得るためにコミュニケーションが必須と考えています。思えば、大学から大学院をとおして、友人や先生方とともに多くのお喋りをしていた記憶があります。時間があれば心理学科の学生研究室や先生方の研究室に行き、助手や教務補助の方、そこを訪れる同級生、先輩や後輩、先生方とともに多くのお喋りをしました。こうして過ごした6年間は、(先生方にはご迷惑をおかけしたかと思いますが……)



コミュニケーションスキルを養う大切な時間であったと思っています。

臨床心理士資格を取得して5年目と経験の浅い身ですが、心療内科で心理職の常勤は私一人しかいないため、複数名の心理研修生を指導するという立場でもあります。指導を行うことは難しく、悩むこともあります。人と人の繋がり、コミュニケーションを大切にし、共に研鑽を積んでいきたいと思っています。

## 先生や両親は自分たちの味方

(平成23年人間文化学部日本文化学科卒業) 金澤瑞穂

平成24年(2012)、幼いころから続けている「民謡舞踊」のコンクールに出場しました。コンクールは約5年ぶりで緊張は大きかったのですが、先生方や周りの支えと応援で、無事に春の関東大会・秋の全国大会を連覇することができました。総勢11名で、うち6名は初出場。不安やこわさ、個人的には、同年代の仲間が結婚や出産といった喜ばしいお休みに入ったため、さみしさも大きくありました。しかし、そのお陰……で

はないですが、後輩が成長することの喜びをとても感じることができました。まったく同じ思いでないかもしれません。学校の先生や両親が、生徒やわが子に想う気持ちは、このような感情なのかなあ……と思いました。

学生の皆さん!! 先生方やご両親は必ず自分たちの味方であり成長を喜んでくれる存在だということを忘れないでください!! 必ず「こたえ」になるカギを差し出してくださいます。民謡・民踊は



日本全国各地にあります。まずは自身の生まれ故郷や身近な方の出身地の民謡を調べ、触れ合ってみてください。現代化されアレンジされたものもたくさんありますが、「素」のままの民謡にも多くの魅力があります。ぜひ民謡のあたたかさに一度触れてみてください!!

# 私の夢と人生は

Sasaki Masako

(平成7年教育学部幼児教育学科卒業) 佐々木政子



私が川村学園を選んだ理由は幼いころからの夢を叶えるため。三十数年前の自身の卒園アルバムには、はつきりと「大きくなったら」の項目に「ようちえんのせんせい」と残っているのです。そして今、私が夢を叶えて幼稚園教諭として頑張ってこられたのは、大学生という大切な時期にすばらしい先生方に教えていただき、素敵なお先輩方や気のかけない同級生、後輩たちと過ごせたからだと確信しています。

学生時代は本当にさまざまな初めての経験をしました。授業の履修登録や教科書の購入、憧れの階段教室での授業。学科では保育について基礎から学び、専門知識や実践力を身につけるこ

とができたと感じています。また授業以外でも、先生方といろいろなお話ができたことは、学問だけでなく、保育者として、社会人として、必要な教養についても学ぶ貴重な時間だったと大変感謝しています。

何もかもが新鮮で夢のような大学生活。授業のほかにも力を注いだのは、体育会ラクロス部での活動です。当時の3年生がつくられた新しい部活で、流行のスポーツでもありました。人目を引く道具と可愛らしいポロシャツにミニスカートのユニフォームからは想像できないような激しいスポーツで、けがの絶えない練習の日々でしたが、リーグ昇格をめざして行った夏合宿や試合で遠くの

グラウンドまで出かけたこと、学連の仕事を他大学の方々と行うなど有意義な活動ができました。そんな苦楽を共にした仲間たちは卒業し20年近く経つ今でも近況を報告したり、集まって学生時代の思い出に花を咲かせながら楽しいひと時を過ごすこともある一生の宝物となりました。

私にとって川村学園女子大学は今的人生に大きな影響を与えてくれた大切な母校となりました。

# 笑顔と挨拶を大切に

Kobayashi Sayaka

(平成11年教育学部幼児教育学科卒業) 小林清華



●園児と一緒に

私が卒業して早14年。社会に出てからはあっという間に感じますが、大学生活の思い出はつい最近のことのように思い出します。

私の大学生活といえば、高校生並みにどっぷりとはまっていたラクロス部を中心の日々でした。朝から夕方まで大学で皆勤賞が取れるのではないかというほどの毎日でしたが、とても充実した4年間を過ごしていました。そこで、他学科の仲間に出会ったり、先輩方から授業のことや、コミュニケーションの大切さなどさまざまなことを学びました。とはいえ、大学という4年間のゆったりとしたなかであるからこそできたことで

あると改めて思います。もちろん学業は優先であり、幼稚園教諭をめざしていました。のどかな環境、少人数での授業は、私にとっては学びやすい環境でした。

先生方がいつも笑顔で対応してくださいたことが印象深く、学生も伸び伸び過ごしていたように思います。

おかげさまで、今は幼稚園の園長として子どもたちと楽しい毎日を送っています。机上の知識ではわからないこともあります。悩むことは多々ありますが、また一つ経験となり、自信へつながっています。ときに大学で教えていただいた幼児への言葉かけを思い出し、子どもの笑顔を見るとほっとしたり、自分自身が

癒されたりしています。

学生の皆さんには今後さまざまな仕事に就くと思いますが、社会に出る前にたくさんの人とふれ、笑顔と挨拶を大切にして上手な人間関係を築くことができるよう心がけて素敵な社会人になってください。

# 幼稚園教諭になって

Okada Yasuyo

(平成12年教育学部幼児教育学科卒業) 岡田安代



「幼稚園教諭になる」という幼少期からの夢の実現に向け、平成8年(1996)4月、幼児教育学科に入学いたしました。

4年間の学生生活では専門的分野を多く学ぶことができました。なかでも、現場で必要とされるピアノの実技では、教則本のみではなく、さまざまな場面において活用できるリズムパターンや弾き方など、たくさんことを教えていただき、すぐに実践することができました。また、試行錯誤しながら制作した紙芝居、レポート発表、ダンス発表など、苦楽を共にし、おたがいを高めあってきた友だち

とのグループ活動は、今でも心に残る貴重な思い出です。

先生方、友だち、家族……。多くの方々に支えられ、充実した学生生活を過ごすことができたことに、深く感謝しています。

就職してからは、先生方にご指導いただいたことを胸に、クラス担任として日々反省を繰り返しながら保育に努めてきました。子どもたちが無邪気でかわいい笑顔で接してくれるたびに、そして、自分が指導したことができるようになり、「先生、見てー！」と自信にあふれる子ど

もたちの様子を目にするたびに、幼稚園教諭になれたことを本当に嬉しく思います。現在は、今までの保育経験を生かし、主任としてクラス活動のサポートとともに、後輩の育成指導にも励んでいます。

今後も夢のある保育のなかで、子どもたちが伸び伸びと自己を表現しながら、生きる力・考える力を育むことができるよう、努めていきたいと思います。

## 「自分のやりたいことをやりなさい」の一言

Yoshikawa Chiaki

(平成21年教育学部幼児教育学科卒業) 吉川千晶



私は幼稚園から大学まで川村という生粋の「川村っ子」。そんな私が今何をしているかといいますと、“表現者”とてさまざまな舞台に立たせていただいている。

川村幼稚園のころから変わらずに描いていた2つの夢。一つは幼稚園の先生、もう一つは舞台人。その変わらぬ夢を抱えたまま入学したこの大学。何事も中途半端が嫌いなので、実習にも全力で取り組み、保育園で夏季アルバイトをするなど、多くの大切な仲間と共に常に保育・教育のことを考える日々を過ごしていました。一方でステージの活動もしていました。二足のわらじ。両立は大変なこともありますでしたが、どちらも自分が好きでやりたいことなので、不思議とつらくありませんでした。

いつのころからでしょうか、周囲の方々に夢や目標を聞かれたときに話をすると、「いいじゃない、2つ合わせて“歌って踊れる幼稚園の先生”って素敵よ」といわれるようになったのは……。それがずっと心のどこかに残っているのです。

大学3年のちょうど卒論と就活に向けた活動が中心になったころ、周りの仲間たちとの微妙なずれを私は感じていました。

た。子どもたちも大好き、保育・教育も好き、でもこのまま卒業してすぐに現場に就職するのは何かが違う。ふとそう思ったのです。そんなときに広い心で受け止めてくれたのがゼミの先生でした。「自分のやりたいことをやりなさい」その一言がどんなに心強かったか。そこからはもう迷いませんでした。

仲間たちと共に笑顔で卒業し、保育現場で2年間皆が戦っているころ、私は新たな仲間たちと切磋琢磨していました。そして皆が3年目に入ろうとしているころ、私は舞台の専門学校を卒業し、卒業時に野尻記念舞台芸術学院賞という歴史ある賞をいただきました。舞台も決まり、その年の6月にプロとしての初舞台。ありがたいことにそこからさまざまなステージにコンスタントに立たせていただいている。東京だけでなく地方公演、また平成24年(2012)はある世界大会のステージにも立てさせていただき、国を越えて年代を越えてたくさんの方々の笑顔や拍手が何よりの自分のエネルギーとなっています。

今現在、舞台に立つ一方でミュージカルで出会うことのできた大切な方々と共に小学校などをまわり、絵本の読み聞かせ

のボランティア活動も同時に行っています。ただ絵本を読むだけでなく、ミュージカル調に歌やダンスを入れたり、絵本から飛び出したような華やかな衣裳を着たり、子どもたちに夢を与える活動をしています。大学で学んだ幼児教育をこうして生かすことができ、「私が本当にやりたかったことはこれだ！」と実感しています。

また、平成25年(2013)の8月に子どものための日本のオリジナルミュージカルの初演キャストとして出演が決まりました。子どもたちの大きな可能性を生かすも潰すも大人しだい。私が先生に大きく羽を伸ばして羽ばたかせていただいたように、今度は私が子どもたちに。子どもたちが輝き、多くの人に元気を与えられる作品になるよう私も全力で取り組みたいと思います。

継続は力なり、そして何事も満足することなく、前を、上を、常にその先を見つめて進んでいこうと思っています。どこかで私を見つけたら、ぜひそっと背中を押してください。

# 子どもたちの輝く瞳

Morokado Mai

(平成24年教育学部児童教育学科卒業) 諸角 舞



学生時代は、とにかく学ぶことに集中し、授業もたくさんありました。自分の学科以外の授業にもいろいろ出ました。副専攻をとるために、教授に授業参加の直談判をしにいったこともあります。放課後には秘書検定の講座を受けたこともあります。1期生ということもあり、取得できる資格が限られていたため、自分の力で動いてみたかったのです。4年間学び続け、児童教育に関すること以外にも多くの知識を得ました。3年生の夏には、卒論を書くための経験にもなると思い、カンボジアの小学校で体育を教えるボランティアに参加しました。初めて会う25人の仲間や、初めてのカンボジアという土地で学ぶことは多かったです。何より、カンボジアの子ど

もたちのきらきら輝く瞳を見て、自分自身もこのような子どもたちの将来にかかる仕事をしたいと改めて強く思いました。4年生の夏には教員採用試験の勉強のため、図書館の自習室に通いつめました。その甲斐あって採用試験に合格し、3月には1期生14人全員で無事卒業することができました。春からは夢に見た小学校での教員生活が待っていました。

しかし、大学の授業は直接現場で活きることばかりではありませんでした。大学のときに描いていた未来と違うこともたくさんあります。子どもや保護者、地域の方々や同僚との関係を築きながら、事務処理や教材研究などに追われ、日々が過ぎていきます。うまくいかない

ことのほうが多くて、心が折れそうになることもたびたびありました。そのようなとき、子どもの笑顔が私の心を癒してくれるのでした。子どもの輝く瞳を見て、大学3年のころの気持ちを思い出すのです。子どもにいく度となく助けられ、今こうして2年目を迎え、再び1年生の担任となって子どもと一緒に成長し続けています。まだ、夢の途中です。やりたいことはたくさんあります。

この先どのような未来があるかわかりませんが、いつまでも学ぶことを忘れず成長し続けたいと思います。

# 「自然の家で働きたい」との思い

Tomomatsu Yumi

(平成14年教育学部社会教育学科卒業) 友松由美



校門を入ると目に飛び込んでくる花時計と真っ白な校舎。社会教育の重鎮とされるすばらしい教授陣。そして、いつも笑顔で迎えてくださる職員のみなさん。私は、このような素敵な大学で、充実した学生生活を過ごせたことを誇りに思います。

学生時代の4年間は、勉強はもちろん、ボランティア活動や学友会、学園祭実行委員など、さまざまな活動でたくさんの人たちとかかわり、充実した日々を過ごすことができました。その体験をとおして、友人のありがたさや感謝の心、自分の夢をみつけることなど、かけがえのないものをたくさん得ることができました。

なかでも、自分の人生を大きく変えたのは、長野県にある国立信州高遠少年

自然の家(現、国立信州高遠青少年自然の家)でのボランティア活動です。初めは、先輩からの誘いに、軽い気持ちで行った自然の家。そこで実施されている事業に何度もかかわるうちに、社会教育や青少年教育について実践的に学ぶことができました。私自身、誰かのためにボランティアをしているというよりも、自分自身が楽しみ、視野を広げるために活動をしていたように感じます。月に一度は信州高遠に通い、いつからか「自然の家で働きたい」と思うようになりました。

現在、新潟県にある国立妙高青少年自然の家に勤務しています。利用者のみなさんの研修をバックアップすることはもちろん、事業担当や広報などを行っています。また、ボランティア担当として、

学生たちの窓口にもなっています。自分の学生時代の経験があったからこそ、学生とよい関係を築くことができたのではないかと思っています。ここでの経験が学生にとって「かけがえのないもの」となるように支援していくのが、私の役割だと思っています。

今の仕事に出会えたことや人とのかかわりを大切にしようすることは、学生時代の体験が生きているのだと思います。これからも、学生にとってかけがえのない体験ができる大学であり続けてほしいと思います。

# 大学時代に学んだことを生かす

(平成20年教育学部情報コミュニケーション学科卒業) 崎野綾子

現在私は、IT関係の株式会社アクシス第一統括部システム1部に勤めています。大学を卒業して5年。鉄道会社や保険会社、金融企業などさまざまな業界のシステム開発に携わってきました。

現在は金融企業にてヘルプデスクを担当しています。ユーザーが業務で必要なツールの作成を主に行っています。

ツールを提供したユーザーから「こんなツールがほしかった！」と嬉しそうにいわれたときは、この仕事をしてよかつ

たなと思います。また、ツール作成とは別にExcelやAccessの使い方を教える勉強会を行っています。この勉強会では、大学時代に教員免許を取得した経験がとても役立っています。大学時代に知識のない人に教えることの難しさや、前に立って授業をすることの難しさなど学んでいたおかげで、なんとか勉強会の講師を行っています。

ときには毎日終電帰りで休日出勤当たり前という時期がありましたが、仕事



の愚痴を大学のときの友人が聞いてくれて乗り越えることができました。

大学のときの友人との繋がりを大切に、また大学での経験を生かし、これからも人の役に立つシステムを開発ていきたいと思います。

## 仕事のやりがい

(平成20年教育学部情報コミュニケーション学科卒業) 山谷晴香

現在私は、大手ソフトウェア会社システム開発部に勤めています。大手保険会社をオーナーとして、出向SEとして作業しています。作業内容はオーナーの要望どおりのシステムになるよう検討を行い、それをシステム開発に連携し機能を作成しています。ほかに、製品のテスト検証やオーナー支援として調査などを行っています。

要件検討の段階では先行のシステム

に倣いつつ、個別の機能を追加するため、既存システムに影響の出ないよう何度も会議を開き検討を重ねますが、携わった商品がTVCNで広告されているのを見たり、契約件数が順調に伸びていると聞いたりしたときは仕事のやりがいを感じます。

大学で学んだことがすべて直接活かせるわけではありませんが、チームで役割をもって作業していることは、学生時



代に学友と共同作業をした際などの経験が大いに役立っています。また、有意義な学生時代を送れたからこそ、今現在、末端としてでも社会に貢献できているのではないかと考えています。

## 「伝える力」

(平成20年教育学部情報コミュニケーション学科卒業) 石坂麻美

私は今、キャノンソフトウェア株式会社ソリューション事業本部ドキュメントソリューション開発本部に勤務しています。仕事内容は、複合機(プリンター)のアプリ開発やサポート、また、文書管理システムのサポートです。開発業務で行っていることは、お客様の要望に合わせ商品をカスタマイズしています。また、サポート業務は製品仕様のお問い合わせ対応や、導入を行ったりしています。

大学の授業で学んだことから、社会人になってからでも役立っていることが

あります。それは……「伝える力」です。

私の会社では、新規ソリューションにつながる新しい技術の発表や、グループ会社への商品説明会、そして学習会などを行っています。発表や説明会のときは、どのような構成をすれば伝わるのか。学習会のときは、何をポイントにすれば解りやすいのか考えています。また、お客様と会話をする場合でも商品内容を勘違いされないように、常に気をつけながら説明をしています。

「伝える」ということは、本当に難しい



ことです。しかし、プレゼンテーションや卒論発表、教育実習など、大学の授業から「伝える」ための訓練をたくさん行ってきました。まだまだ、つたないところはありますが、大学から学んできたこの「伝える力」をもって、担当商品を世に広め、お客様に喜ばれるよう、がんばっていきたいと思います。

# コミュニケーションの大切さ

(平成20年人間文化学部生活文化学科卒業) 飯田(旧白井)真澄

大学を卒業して5年が経ちました。今ふり返ってみると、大学生活の4年間はとても有意義に過ごすことができたと思っています。

私は大学は勉強をするだけの場所ではないと思っています。中学や高校のように縛られず、自分の学びたいことを学び、興味のあることにチャレンジするともいい機会だと思います。

私は栄養学を学び、栄養士の資格をとるために大学へ進学しました。1、2年生のうちは実験や実習が多く、友人と試行錯誤しながらレポートを作成したのを覚えています。2年間で栄養学の必修科目はほぼ終了したので、3、4年生では自分の視野を広げるため、他の学部の授業にも積極的に参加しました。また春休みを利用して1ヶ月間ニュージ

ーランドでホームステイをしながら語学校へ通ったこともあります。自分の知らない土地、言語、少しホームシックになりながらも、とても貴重な経験ができたと思っています。

現在は学生時代、校外実習でお世話になった産婦人科のクリニックに勤務しています。私を含め管理栄養士が4名、パートの栄養士が1名、とても栄養面に力を入れたクリニックです。私は入社して1年目に管理栄養士の資格を取得しました。

現在の仕事内容は、妊婦への栄養相談をメインに、給食の献立作成や発注などです。また研究にも力を入れており、現在は妊娠糖尿病の研究を進めています。年に数回、学会発表もしています。仕事をしていて日々感じることは、コミュ



ニケーションの大切さです。同じ課のスタッフはもちろん、他課のスタッフやときには患者さんとのコミュニケーションも必要となります。

入社から5年が経ちますが、日々学ぶことはたくさんあります。しかし、少しずつ教える立場になってきていることも自覚しています。しっかりと後輩に伝えていけるよう、先輩から多くのことを学びたいと思います。そして何より患者さんの力になれるよう努めていきたいです。

# 毎日の給食

(平成23年人間文化学部生活文化学科卒業) 岩戸仁美

「きょうのきゅうしょくおいしかったよ！」

子どもたちからこの言葉を聞くたびにたくさんの嬉しい気持ちと同時に、この子どもたちのあふれる笑顔を大切にしたいと考えます。

大学を卒業後、附属保育園に勤務して3年になります。緑豊かな自然に囲まれた保育園で、0～5歳児の園児が毎日元気に伸び伸びと過ごしています。「きょうのきゅうしょくな～に？」「おやつはな～に？」と、私の姿を見つけるやいなや欠かさず聞いてきます。メニューを聞いて、その子の反応によっては、大好きなものか苦手なもののかが一目瞭然です。そんな素直な子どもたちとふれあうことが私の元気の源です。

園の行事も楽しみの一つです。なか

でも、ハロウィンでは魔女に変身です。いつもは真っ白なエプロン姿ですが、この日は真っ黒衣装です。0、1歳児クラスには怖がらせて泣かせてしまいますが、秘密の合言葉を合図に、一人ひとりにおやつをプレゼントします。普段は元気いっぱいな子もこのときばかりは照れくさそうに合言葉をいったりと、給食の時間とはまた違った姿を見ることができるのでたいへん楽しみです。

入園当初、「僕、野菜きらいなんだ。おうちでも食べない」といって、野菜があまり進まない男の子がいました。しかし今では、「野菜大好きだよ」とおかわりもするほどです。毎日の給食が食育へと繋がっていることを深く実感した出来事でした。ご家庭での食生活が本当にさまざまあるなかで、このように集団で毎



● 給食を園児と

日の給食を提供できる環境は、子どもたちにとって貴重な経験になっていることを改めて感じています。子どもたちの成長は本当に著しいです。体いっぱい使ってたくさん遊び、しっかりとお腹を空かせて給食を食べる。この生活リズムの形成とともに、食事と体(健康)が深くかかわっていることを毎日の保育生活のなかで自然と育んでいくように、子どもたちの健康を支えていきたいと考えています。

# 会津の良さを伝えたい

Masui Chisa

(平成23年人間文化学部観光文化学科卒業) 増井千紗

私は、大学卒業後の平成23年(2011)4月1日より、実家のある福島県会津若松市に戻り、鶴ヶ城や御薬園などの施設管理・運営を行っている「一般財団法人 会津若松市観光公社」で働いています。

みなさんもご存知のように、入社直前の平成23年3月11日に「東日本大震災」が発生しました。福島県も例外ではなく、多くの被害を受け、さらに今なお続く「原発事故」の影響、そして「風評被害」と、福島県は二重三重と辛い思いをしていました。当時は、鶴ヶ城の予約すべてがキャンセルとなり、お客様の姿が見えない日が続きました。私はそのような状況のなかで入社し、とても不安な毎日を過ごしていました。地元に対して愛着や誇りをもっていなかった私は、本当に会津

若松市に帰ってきてよかったのかと、とても悩みました。しかし、このような状況のなかでもお越しいただいたお客様や、営業先の方と触れ合ふことで、励ましや応援の言葉をいただき、もっと会津を知り、多くのお客様に会津の良さを伝えたい、と少しづつ気持ちが変化していました。

月日が経つにつれ、徐々にではありますが、少しづつお客様が戻ってきました。さらに平成25年(2013)に入り、会津藩士の娘であった新島八重が主人公の、NHK大河ドラマ「八重の桜」が放送され、震災以前よりも多くのお客様にお越しいただいています。入社当時には考えられなかった光景となっており、とても驚いています。今後もこの賑わいを維持していくための対策が課題となっています。



●会津若松市観光公社の事務所で同僚と(右が筆者)

ます。

入社して3年目となり、会津を知れば知るほど、疑問点や実際に体験をしたい、という思いが強くなってきました。まだまだ知識不足の点も多いですが、これからもさまざまな場所に出向き、多くのものを吸収しながら、会津の良さをお客様にお伝えできるように励みたいと思っています。ぜひ皆さんも機会がありましたら、会津へお越しください。

# 大学院時代を思い出し、今を生きる

Ito Hiromi

(平成20年大学院人文科学研究科生涯学習専攻修了) 伊藤弘美

私は社会人をへて、川村学園女子大学大学院人文科学研究科生涯学習専攻に入学いたしました。再び学生として学べることに、震えるほどの喜びを抱いていたことを昨日のことのように思い出します。教授には、研究テーマである「子育て支援」をとおして学問を追及することの意義を丁寧に教えていただきました。学術的な知識が乏しかった私は、教えていただくことすべてが貴重な財産となり、学ぶことのたのしさを実感した時間でもありました。学生、療育の仕事、そして母になるという何足ものわらじを履いての院生生活を充実させることができたのは、川村学園女子大学教職員の方々の温かい支えと学友たちの熱心な研究意欲に刺激されたおかげです。

現在、二児の母となり「子育て」に追われながら、つくばみらい市療育教室、取手市子ども発達センター、NPO法人がってん「ふくろうの郷」(就労継続支援事業)に非常勤職員として勤務しています。以前より従事している療育の職場では、お子さんが安心して自己表現できる環境を配慮し、コミュニケーション力の促進を目的としたお手伝いをしています。自分の未熟さに立ち止まりたくなることもあります。そのようなときには、大学院で得た研鑽を積み続けることの重要性を思い出しています。また母としての私は、わが子の成長を喜ぶと同時に、悩みも尽きることがありません。価値観が多様化している昨今、何が正しいと伝え、何を大切に成長してほしいの



●子どもの生活指導をする

か、周囲に流されて見失いそうになることがあります。修士論文でご協力いただいたお母さんたちの迷いの声が聞こえてくるようです。私には今もなお、暗中模索しながらも「子育て支援」という研究テーマが存在しています。

人ととの繋がりと温もりを感じることができる素晴らしい学びの場・川村学園女子大学のますますの発展を祈っています。



# 付録

## (参考資料)

# 川村学園90年のあゆみ(学園暦)

年	月 日	学園暦(社会暦を含む)
大正12(1923)	9. 1	関東大震災
大正13(1924)	2.12	川村文子、川村邸東側の農家を取得、木造亜鉛葺平屋36坪、敷地489坪(一部借地) 仮校舎とする
	3. 5	川村女学院設置認可。高等女学校に類する学校(4年制)として2月29日申請 入学定員1クラス50名、入学金3円、授業料月額5円(2年次より8円)
	4.12	川村女学院創設(仮校舎で開院式・第1回入学式) 「学生心得」(のちの「誓いの言葉」)の朗読唱和を始める
	4.-	会食開始(仮校舎の台所で生徒が当番で食事を作った)
	5.-	冬の制服制定
	8.13	本校舎(旧第1校舎)起工
	8.19 ~ 秋	評議員川村竹治、欧米の女子教育等視察旅行。アメリカ大統領にも会見(大正14年3月28日帰国) 三羽の鶴の校章制定
	12. 9	高等女学校令に基づく川村女学院高等女学科(5年制・通称高女科)設置認可 入学定員1クラス50名、入学金3円、授業料月額7円
	12.22	川村女学院の学則変更認可。本科(高等女学校に類する学校)を5年制に変更
大正14(1925)	2.14	本校舎移転開始(旧第1校舎、鉄筋コンクリート3階地下1階、スチーム暖房・水洗手洗完備)
	2.19	目白婦人学院(夜学)設置認可。本科(1年半)月謝4円、英語科(半年)月謝3円
	3. 3	ひなまつり開始
	4. 8	高等女学科開設(2年次編入も認める)
	4.22	治安維持法公布
	4.-	仮校舎を長崎村に移築、記念館とする(昭和20年4月13日空襲で焼失)
	5. 5	普通選挙法公布
	5.30	『鶴友会誌』創刊(第8号から『鶴友』となり現在に至る)
	8.-	宮内省より高田御料地(現在の目白警察署付近)を借用し、運動場とする
	11.13	通学組合方面別組分け
	12. 2	目白婦人学院の学則変更認可。本科修業年限1年半を1年に変更
	12. 8	冬の制帽制定(7期生までサークル、8期生からフェルト)
大正15(1926)	4.22	幼稚園令施行
	4.-	「やまとばたらき」(体操)を始める(昭和17年度まで行った)
	5.21	目白婦人学院廃止認可(生徒数の減少による)
	5.25	川村文子の「感謝の歌」「鶴友会誌」第2号に初出
	12.25	大正天皇崩御
昭和元(1926)	12.26	天皇崩御の報に接し、学院奉悼式
昭和2(1927)	2.17	「感謝の歌」を学院講師成田為三の指導で全校生徒斉唱(「いつもゆたかに」の作曲もこの頃)
	3. 6	第1回鶴友会講演会(昭和記念講演会)開催。鶴友会講演部主催
	3.15 ~	金融恐慌
	6.15	川村女学院付属幼稚園設置認可
	9. 7	付属幼稚園開園式・第1回入園式(20名入園)
昭和3(1928)	2.28	学院旗制定
	4. 1	学院診療所開設
	6.16	評議員川村竹治、台湾総督就任(昭和4年7月30日まで)
	7.23~27	第1回夏期修養会、学院校舎を使用して実施。費用5円
	7.24	父兄会組織結成
	11. 1	ラジオ体操放送開始
	11.10	川村竹治・文子夫妻、昭和天皇即位の大典に参列
	11.29~12.5	本科・高等女学科1期5年生参宮旅行(卒業学年の関西修学旅行の最初)
昭和4(1929)	1.15	高等専攻科(2年制の国文科と家政科)設置認可。1年制の専修科も併設
	3.21	第1回卒業式(本科22名・高等女学科20名卒業)
	4. 6	高等専攻科(国文科・家政科)と専修科、第1回入学式
	5.-	群馬県長野原町大屋原(通称法政大学村・北軽井沢)に寮舎建設地を購入、山の寮建設
	7.25~8.3	第1回山の修養会(於山の寮)実施
	10.24 ~	世界恐慌
	11.12	運動会で2期5年生有志「かしこしや」(感謝の舞)を舞う
	11.17	第1回同窓会主催母校後援音楽会開催(以後毎年恒例となる。収益は学園に寄付。同窓会初代会長川村文子) この日学院講師石井漠振付けの「感謝の歌の舞」(1人舞)を石井小波舞う
	12. 1	川村文子訓話集『雲のゆきかひ』第1輯発行(第3輯まで発行)
	12.27	高等女学科入学定員100名に増員認可
昭和5(1930)	5.24	第2校舎地鎮祭
	6. 9	偽秀旗制定(2学期から授与。昭和41年3月まで継続)
	7.-	静岡県沼津市我入道海岸に海の寮建設
	8.5~11	第1回海の修養会(於海の寮)実施
	12. 3	伊豆地震に奉仕部義援活動
	12.11	本科の入学定員を100名に増員認可
昭和6(1931)	2. 1	第2校舎(講堂・食堂・作法室等、昭和57年度まで使用)と運動場(昭和48年度夏前まで使用)落成式・祝賀音楽会
	2.23	第2校舎食堂で高等専攻科・本科・高等女学科3期5年生、中国料理試食会(テーブルマナー、以後卒業学年の恒例行事となる)

年	月 日	学園暦(社会暦を含む)
	9.18 10. 1 12.20	満州事変 誕生祝開始(以後毎月の定例となる) 川村文子著『結婚生活一代記』発行(のち『家庭生活』第1輯と改題)
昭和 7(1932)	1.28 2.24 3. 1 3.20 3.25 4. 7 5. 9 5.15 7. 5 9.15 10. 8	上海事変 川村女学院初等部設置認可(女児30名)、院長邸を改造し校舎とする 満州建国 『鶴友』第12号誌上に「校歌」の歌詞入選作(1等高等女学科4期生加藤昌子作)発表、のち学院講師成田為三作曲 評議員川村竹治、犬養毅内閣の司法大臣就任 初等部第1回入学式 「実践目標」制定 五・一五事件 満州国使節丁鑑脩一行来院、歓迎小学芸会開催 月刊誌『とこしへ』創刊(昭和18年第131号まで発行) 昭和8年度より高等専攻科に3年制設置認可、併せて1年制の専修科を家庭科と名称変更
昭和 8(1933)	1. 1 3.27 4.- 9. 3 11.14	川村文子著『家庭生活』第2輯発行 日本、国際連盟脱退 毎月の実践標語制定(初めは週間標語のち月間標語となる、現在の月間目標) 興文塾(寄宿舎)を自白から長崎に移転 高等女学科の入学定員を150名に増員認可
昭和 9(1934)	1. 6 3. 1 3.19 5. 5 5.5 ~ 7 9.3 ~ 8 9.10	旧第1校舎増築工事竣工(当時の第3校舎)、教室移転開始。初等部1階に 満州国政実施、皇帝溥儀 「学院歌」「感謝の歌」レコード吹込み 川村文子訓話集『雲のゆきかひ』第2輯発行 『川村女学院十年史』発行 創立10周年記念式典に卒業生「寿像」を川村文子に贈呈(学院講師相川善一郎制作、現在大学14号館に) 創立10周年記念祭 震災記念作業開始(現在に至る) 第1校舎1階に「歯科診療室」を開設
昭和10(1935)	4. 1 7.14 12.15 12.-	青年学校令公布 生徒の健康を願い、健康地蔵を安置(学院講師相川善一郎制作、現在本部玄関脇に) 『学院新聞』創刊(毎月1日発行、昭和13年7月20日発行の第31号まで現存) 初等部機関紙『平和』創刊(昭和12年12月発行の第5号まで現存、昭和32年復刊し、現在に至る)
昭和11(1936)	2.26 11. 3	二・二六事件 明治神宮祭体育大会参加
昭和12(1937)	6. 9 7. 7 11.15	弓道場開き 盧溝橋事件 同窓会機関紙『ゆかり』創刊(昭和16年7月発行の第5号まで現存、中断したが『手づくり瓦版』をへて、現在に至る)
昭和13(1938)	1.25 4. 1 6.30	興文会機関誌『興文』創刊(のちの川村短期大学紀要となる) 国家総動員法公布 東方隣地(自白2-1629・1630) 375坪購入、体育施設造成(創立15周年記念事業。戦後小学校校舎を建築)
昭和14(1939)	4.12	創立15周年式典。川村文子著小冊子『川村女学院創立満十五周年を迎ふるに当りて』配布
昭和15(1940)	4.23 5.10 9.27 11.10	川村学院(男子)中学校・財団法人川村学院設立。校長・理事長川村竹治 川村学院中学校開校式・第1回入学式。女学院第2校舎南側を仮校舎とする 日独伊三国同盟調印 紀元2600年奉祝式典。長崎町記念館まで旗行列
昭和16(1941)	3. 1 4. 6 12. 8	国民学校令公布 川村学院中学校、豊島区長崎に本校舎竣工、修祓式と始業式 太平洋戦争開戦
昭和17(1942)	1.10~20 12.28	本科・高等女学科・高等専攻科、報國隊出動命令により、教員引率で10日間陸軍兵器補給廠で勤労作業 以後10日単位で軍需関係の工場等にも出動 本科廃止申請(『川村学園三十年史』では廃止認可は昭和18年11月2日という)
昭和18(1943)	3.31 4. 1 5.13 7. 1 8.15 12.21	川村女学院高等女学科を川村女学院高等女学校と校名改称認可。本科の募集停止 本科付設の高等専攻科および家庭科廃止 高等女学校専攻科設置認可(ただし昭和18年度入学生は旧制度のままとした) 財団法人川村女学院設立認可。理事長川村文子 東京都制施行 『とこしへ』第131号発行(以後復刊せず) 都市疎開実施要綱発表
昭和19(1944)	3.15 3.23 4.12 8.23 11.24 12. 5	『鶴友』第24号発行(以後昭和26年まで休刊) 付属幼稚園第17回保育満了式(昭和23年廃止認可まで休園) 川村文子訓話集『雲のゆきかひ』第3輯発行 学徒勤労令、女子挺身勤労令公布 初等部児童約50名、教職員7名、長野県下高井郡穂波村角間温泉に集団疎開 B29による東京空襲 自白の初等部休校
昭和20(1945)	3.18 4.13 7.26	国民学校以外の学校授業停止(1年間) 空襲で第2校舎増設部一部(付属幼稚園)焼失、川村学院中学校舎全焼 ポツダム宣言発表

年	月 日	学園暦(社会暦を含む)
	8. 6・9 8. 8 8.15 9. 2 12.27	広島・長崎、原子爆弾投下 ソ連、日本に宣戦 終戦詔書済発 日本降伏文書に調印 第1校舎屋上神殿撤去
昭和21(1946)	2.28 4.10 5. 7	公職追放令公布 第1回普通選挙、女性候補者のために講堂提供 教職追放令公布
昭和22(1947)	3.31 3.31 4. 1 4. 1 4.12 5. 3	教育基本法、学校教育法公布 初等部廃止認可 6・3・3制度教育発足 学制改革により新制中学校・川村女学院中学校開設(昭和22年3月23日設置認可) 「誓いの言葉」を制定(現在に至る) 川村文化教室開設(昭和23年3月31日各種学校として認可) 日本国憲法施行
昭和23(1948)	3.10 3.31 4. 1 4. 1 4.12～16 7. 7 7.15	川村学院中学校廃止・財団法人川村学院解散認可。川村女学院、川村学院中学校(男子)を合併吸收 川村文化教室を各種学校として認可 新制高等学校発足 川村女学院中学校を川村中学校と校名改称。校長川村文子 新制高等学校・川村高等学校開設(昭和23年3月10日設置認可)。校長川村竹治 創立25周年記念祭 川村女学院付属幼稚園廃止認可 教育委員会法公布
昭和24(1949)	3. 8 4. 9 4.12 7.8～8.10 8.2～ 11. 5 12.10 12.15	第1回高等学校卒業式(20期生女子20名、学院中学4期入学男子30名) 授業5日制実施 創立25周年記念式 中学生・高校生 神奈川県吉浜海岸で臨海学校(海の修養会) 中学生・高校生 長野県戸倉上山田温泉で林間学校(山の修養会) 長崎運動場で中高合同運動会(昭和25年まで) 湯川秀樹ノーベル物理学賞を受賞 私立学校法公布
昭和25(1950)	4.- 7.- 10.16 10.20～22 11.18～19	短期大学制度発足(149校発足のうち、77校は女子短大) 校友会・自治会を一本化、生徒会発足 『鶴裳』創刊(『鶴友』の休刊を埋める小冊子第3号まで) 第1回東北修学旅行、中学校25期3年生(昭和26～36年度は近県修学旅行、昭和37年度から再び東北へ、現在に至る) 本格的文化祭(昭和30年までは文化祭、それ以降は学園祭と改称、現在に至る)
昭和26(1951)	2. 9 3. 9 4. 9 5. 3 7.12 9. 8 10.13 10.15 11. 4	学校法人川村学園に組織変更認可。理事長川村文子 川村小学校設置認可(4月1日開設)。校長川村文子 小学校第1回入学式(初等部から通算し新入生を14期生とする) 川村文子藍綬褒章受章 『学院新聞』、『川村学園新聞』と改称し続刊(昭和48年度まで発行) サンフランシスコ講和条約調印 『鶴友』復刊 図書館棟竣工、開館 自白で運動会再開(中学校・高等学校、昭和34年度まで)
昭和27(1952)	2.29 3. 5 3. 7 3.15 3.19 4.12 4.28 夏 11.- 12. 8	川村短期大学教職課程設置認可 短大政科設置認可(4月1日開設)、学長川村文子 川村幼稚園設置認可(4月1日開設)、園長川村文子 川村文子訓話集『紫雲錄』第1巻発行 川村竹治高等学校長退任、川村文子、小学校・中学校長と兼任 短大(家政科)開校式・幼稚園開園式、創立記念式典 サンフランシスコ講和条約発効 小学校、海・山の修養会を開始 小学校校舎移築完成 財団法人六華会設立認可。理事長川村文子
昭和28(1953)	1.31 2. 1 2.10 3.15 7. 2 7.25 8.28 10.25	短大保育科増設認可(4月1日開設) 日本放送協会(NHK)テレビ放送開始 六華幼稚園設置認可(長崎に沼津の寮舎を移築し園舎とする。4月1日開設)、園長川村文子 川村文子訓話集『紫雲錄』第2巻発行 短大政科栄養士養成施設として認可(適用は昭和28年4月1日) 短大保育科並びに幼稚園校舎竣工落成式 民法テレビ放送開始 幼稚園から短大まで合同体育祭(以後中学校・高等学校以上、運動会を体育祭と改称)
昭和29(1954)	2.13 3. 1 4.12～14 5. 9 5.16	創立30周年記念音楽会 第五福竜丸、ビキニ環礁の水爆実験により被災 創立30周年記念行事 PTA主催「川村両夫妻を祝賀する会」(於八芳園) 創立30周年記念体育祭

年	月 日	学園暦(社会暦を含む)
	7. 1 10.23 ~ 24 -	自衛隊発足 創立30周年記念文化祭 学園旗制定
昭和30(1955)	5.- 9. 8 12.19	旧第1校舎4階増築・完成(第1次ベビーブームの生徒増に対応) 学園顧問理事川村竹治逝去(9月13日葬儀) 原子力基本法、原子力委員会設置法成立
昭和31(1956)	3.14 8.20 12.12	小学校校舎焼失 『川村学園三十年史』発行 国際連合に加盟
昭和32(1957)	3. 5 3.20 4.12 7.16 ~ 8.19 10. 4 10.- 11.20 12. 6	川村文子著興文会編『感謝と家庭生活』(紫雲録特集号)発行 小学校文集『平和』復刊 小学校校舎落成式 北軽井沢山の寮の夏期修養会復活(小学校から短大まで19班で実施) ソ連、世界初の人工衛星打ち上げ成功 本部脇に紫雲窯(楽焼の窯)設置 川村文子「道徳教育について」執筆 日ソ通商条約調印
昭和33(1958)	5. 5 8.27 10.15 12.23	川村文子・紫雲流茶道研究会編著『紫雲流茶道隨筆』発行 川村文子発病、病床に伏す 川村秀文短大学監就任 東京タワー完成
昭和34(1959)	3.15 4.10 4.12 11.20	川村文子著『大御めぐみ』発行 皇太子明仁親王(今上天皇)と正田美智子さま御成婚 創立35周年記念式典 紫雲流茶道研究会編『紫雲流茶道作法のしるべ』(紫雲録特集第2号別冊)発行
昭和35(1960)	3.- 3. 5 10.12 11.11 12. 1 12.10 12.15	創立35周年記念事業第2校舎東側増築・同4階短大図書館竣工(PTA図書館経費寄贈) 川村文子著『大御おや』発行 三芳運動場開設式典 中学校・高等学校・短大、三芳運動場で体育祭開催 理事長・学園長川村文子逝去(午前2時35分) 川村文子学園葬 第2代理事長・学園長工藤キミ(幼稚園・小学校・中学校・高等学校・短大・文化教室 園長・校長・学長)
昭和36(1961)	4. 2 11.20	女子同窓会第2代会長工藤キミ就任祝賀会(於椿山荘) 川村文子追悼録『紫雲』発行
昭和37(1962)	4.10 8.15 11.14 12.18	短大創立10周年記念祝賀式 短大の研究機関誌『興文 川村短期大学紀要』創刊(のちの『川村短期大学研究紀要』) 六華幼稚園設置者を川村学園に移管認可 短大英文科増設認可
昭和38(1963)	4.12 11.22	川村文子先生記念館(第5校舎)・プール落成式・英文科増設記念祝賀会 ケネディ大統領暗殺
昭和39(1964)	4.12 4.16 9.15 10. 1 10. 4 10.10 ~ 24 11.13 ~ 15	創立40周年記念式典祝賀会(於東京ヒルトンホテル) 鶴友別冊『四十年の思い出』発行 創立40周年記念事業長崎校舎地鎮祭 『川村学園四十年のあゆみ』発行 東海道新幹線開業 創立40周年記念体育祭(幼稚園~短大) 東京オリンピック大会開催 創立40周年記念学園祭
昭和40(1965)	3.15 4. 1 9. 8 12.10	創立40周年記念事業東長崎に第7校舎竣工、短大英文科・保育科および六華幼稚園移転 六華幼稚園を川村第二幼稚園と改称 川村竹治10年祭、川村文子5年祭開催(於「川村文子先生記念館」) 朝永振一郎ノーベル物理学賞受賞
昭和41(1966)	2.21 7.30	中学校第1回合唱コンクール 北軽井沢ゆかり山荘竣工(同窓会より寄贈)
昭和42(1967)	12.11	自白に紫雲会館用地購入
昭和43(1968)	4.12 7.16 11. 2 12.10	創立45周年記念式典 北軽井沢ゆかり山荘開設 新体育館で体育館および幼稚園・小学校校舎増築工事落成祝賀会(創立45周年記念事業) 川端康成ノーベル文学賞受賞
昭和44(1969)	1. 8 5.26 11.14	小学校第1回書写コンクール(以後毎年年頭に実施) 東名高速道路全通 短大練馬に興文寮竣工
昭和45(1970)	3.14 ~ 9.13 4. 1 10.12	日本万国博覧会 小学校・中学校・高等学校に副校長、幼稚園・第二幼稚園に副園長をおく 短大栄養指導学内実習を開始、1食130円週4日
昭和46(1971)	1. 8 4.12 6.17	中学校3年生百人一首大会開催(以後年頭の恒例行事となり、現在は中学校全学年で実施) 短大創立20周年式典 沖縄返還協定調印

年	月 日	学園暦(社会暦を含む)
昭和47(1972)	2. 3 ~ 13 4. 1 4.- 5.15	札幌冬季オリンピック大会開催 川村文化教室を川村文化学院と改称 第二幼稚園防災頭巾を装備(以後幼稚園から高等学校まで全校装備し、災害に備える) 沖縄返還、沖縄県復活
昭和48(1973)	7.23 7.31 12.10	三芳運動場新合宿所竣工 第2運動場造成(旧紫雲会館) 江崎玲於奈ノーベル物理学賞受賞
昭和49(1974)	6.30 10.31 11.6 ~ 8 12.10	創立50周年記念事業第1校舎(中学校・高等学校校舎)目白通り側に竣工 創立50周年記念事業第6校舎竣工(短大・家政科校舎)。女子同窓会、地下カフェテリアの机椅子・厨房設備を寄贈 創立50周年記念式典と工事落成式 佐藤栄作ノーベル平和賞受賞
昭和50(1975)	5.12 6.21 7.20 ~ 1.18 9. 4 10. 3 11.20 -	当時の第1校舎から本部への歩道橋渡り初め 第2代理事長・学園長工藤キミ、病気のため辞任、顧問となる 第3代理事長・学園長川村秀文(中学校・高等学校・短大 校長・学長) 幼稚園・第二幼稚園・小学校・文化学院 園長・校長川村澄子 沖縄国際海洋博覧会 小学校給食開始、短大・家政科学生実習実施 第1校舎跡地に第1運動場造成、修祓式(サー・ハム全天候ウレタン舗装) 川村文子生誕百年祭式典(於虎ノ門ホール) 国際婦人年
昭和51(1976)	10.1 ~ 6 11. 1	短大・ハワイ研修旅行実施 学園祭、学芸発表会と改称(昭和57年度まで)
昭和52(1977)	3.18 7.14 11. 3	川村文子生誕百年記念胸像除幕式(日展理事・短大講師木下繁制作、現在本部玄関脇に) 気象衛星ひまわり1号打ち上げ成功 工藤キミ藍綬褒章受章
昭和53(1978)	4. 6 8.12	創立55周年記念事業計画用地として立科町の土地(面積45,821.87m <sup>2</sup> )購入(のち「蓼科山荘」建設) 日中平友好条約調印
昭和54(1979)	1. 1 7.-	米中国交回復 学園生活指導目標制定
昭和55(1980)	7.20 7.29 ~ 31 9.8 ~ 22 9.22	創立55周年記念事業蓼科山荘竣工 幼稚園蓼科山荘で5歳児の修養会実施 小学校3~6年秋の蓼科学習実施 イラン・イラク戦争勃発
昭和56(1981)	3. 2 3. 3 3.14 3.28 5.25 ~ 6.6 7.20 ~ 22 9.- 10.30 12.10	第3代理事長・学園長川村秀文逝去 第4代理事長・学園長川村澄子(中学校・高等学校・短大 校長・学長、幼稚園・第二幼稚園・小学校・文化学院 園長・校長は継続) 川村秀文学園葬 文化学院校長西村和子 小学校3~6年生春の蓼科学習実施 第二幼稚園蓼科山荘で修養会実施 短大・ナダ・アメリカ西海岸研修旅行 学校法人ゴス英語学校解散により跡地購入(のち短大英文科校舎建設) 福井謙一ノーベル化学賞受賞
昭和57(1982)	6.23 8.31 ~ 9.13	東北新幹線(大宮~盛岡)開業 短大ヨーロッパ研修旅行実施
昭和58(1983)	1. 8 4. 1 4.- 6.26 7.15 11.-	小学校「書写コンクール」を「書き初め大会」と改称、校長賞、金・銀・銅・努力賞授与 第二幼稚園長西村和子、文化学院校長川村俊夫 小学校給食を「会食」と名称変更、短大実習生栄養指導実施 第13回参議院議員通常選挙。全国区で比例代表制を初めて導入 蓼科山荘の体育館新築・宿泊棟増設、屋外運動場(テニスコート)造成工事竣工、落成式 中学校読書コンクール開始(第2回より読書感想文コンクールと改称、現在に至る)
昭和59(1984)	7.10 9.29 10. 1 10.4 ~ 5 10.13 11. 1	創立60周年記念事業新講堂建設および第2校舎改築、竣工 創立60周年記念式典、講堂のこけら落とし 創立60周年記念全校合同体育祭(於日本武道館) 創立60周年を機に学園祭復活(目白校舎・長崎校舎) PTA主催女子同窓会協賛の60周年祝賀会(於椿山荘) 新紙幣発行「1万円札 福澤諭吉」「5千円札 新渡戸稻造」「千円札 夏目漱石」
昭和60(1985)	3.17 ~ 9.16 9. 8 11. 3 11.30 12.21	国際科学技術博覧会 川村竹治30年祭(於小講堂) 創立60周年記念事業川村短大英文科校舎竣工式 創立60周年記念映画『三羽の鶴』制作 文化学院事務室と教室の一部第5校舎に移動
昭和61(1986)	3.15 3.31 4. 1 4. 1 7.29 9.12	創立60周年記念事業『川村学園六十年史』発行 大学新設計画書を文部省へ提出 文化学院校長西郷光雄 男女雇用機会均等法施行 大学設置認可申請 大学開発行為許可申請書を千葉県に提出

年	月 日	学園暦(社会暦を含む)
	10.14 12.22 12.26	大学農地転用許可申請書を農林水産省に提出 大学開発および農地転用許可 千葉県我孫子市下ヶ戸保ヶ前1133番地に大学建設用地29,610坪取得完了
昭和62(1987)	2.26 4. 1 7.25 12.10 12.23	大学用地地鎮祭 国鉄民営化 大学上棟式 利根川進ノーベル生理学・医学賞を受賞 大学設置認可
昭和63(1988)	3.13 3.27 4. 1 4. 5 4.10 5.16~21 5.26	青函トンネル開通 大学校舎修祓式・竣工式、女子同窓会壁画「夢みる天空」寄贈 川村学園女子大学開設。学長川村澄子 大学文学部第1回入学式(新入生240名) 瀬戸大橋開通 大学蓼科山莊でオリエンテーションキャンプ実施 大学開學式
昭和64(1989) 平成元(1989)	1. 7 2.22 2.24 2.- 4. 1 6. 4 6. 7 10. 7 11. 4 11. 9	昭和天皇崩御の報に接し、6日間半旗を掲げ弔意奉表 短大保育科『幼児教育特殊研究報告書』第1号作成 昭和天皇大喪の礼 小学校、東京私立小学校児童作品展「ほらできたよ」に出品開始 消費税3%導入 北京天安門事件 学園各校に自衛消防組織編成 大学第1回我孫子市市民大学開放講座開講 大学第1回学園祭 ベルリンの壁崩壊
平成2(1990)	1.20 3.15 4. 1 7. 5 7.- 8. 2 8.26 10. 3 12. 1 12.21	大学図書・情報棟建築地鎮祭 大学『川村学園女子大学研究紀要』創刊 第二幼稚園長川村正澄 大学学友会結成 大学教育学部校舎上棟式 大学学生課就職指導室開設 イラクのクウェート侵攻・湾岸危機 豊島区三芳運動場開所式(於三芳運動場) 東西ドイツ統一 川村文子30年祭(於小講堂) 大学教育学部増設認可
平成3(1991)	1.17 3.25 4. 1 5. 9 6. 3 11.- 12. 3 12.21 12.24	湾岸戦争勃発 大学教育学部校舎修祓式・竣工式 文化学院校長川村俊夫 大学教育学部開設(新入生240名) 小惑星探査機はやぶさ打ち上げ成功 長崎県雲仙・普賢岳で大火碎流 小学校、東京私立初等学校協会音楽祭「さあ　はじめよう」に参加開始 学生寮(興文寮・練馬区)用地買収 ソ連の消滅に伴い、独立国家共同体の創設 三芳運動場グラウンド・合宿所部分を豊島区へ売却 小学校校地(目白2丁目1614-2の一部、1614-5・6)買収
平成4(1992)	1.24 2.- 3.19 3.20 4. 1 4. 5 5.23 6.19 9.12 10.24~25 12.21	大学が日本私立大学協会入会 大学インフォメーション誌『Kawamura Campus』創刊 短大準学士の称号授与。保育科最後の第38回卒業式(保育科卒業生総数2689名) 大学第1回卒業式(文学部卒業生225名) 第二幼稚園長西村和子 幼稚園・中学校・高等学校、土曜休日導入 短大家政科を生活学科と改称 第2代学園長工藤キミ逝去 工藤キミ学園葬(於大講堂) PKO協力法成立 毛利衛日本人初の宇宙飛行士としてスペースシャトル搭乗 大学学園祭を「鶴雅(つるが)祭」と改称 短大保育科廃止認可
平成5(1993)	1.27 3. 3 3. 8 3.13 3.22 4. 1	小倉台幼稚園竣工 高校謝恩会を「感謝の集い」に改め実施 小倉台幼稚園開園祝賀会 第二幼稚園卒園式(六華幼稚園からの卒園児計1328名) 千葉県より小倉台幼稚園設置認可 小倉台幼稚園開設。園長川村正澄 第二幼稚園休園 文化学院校長西村和子

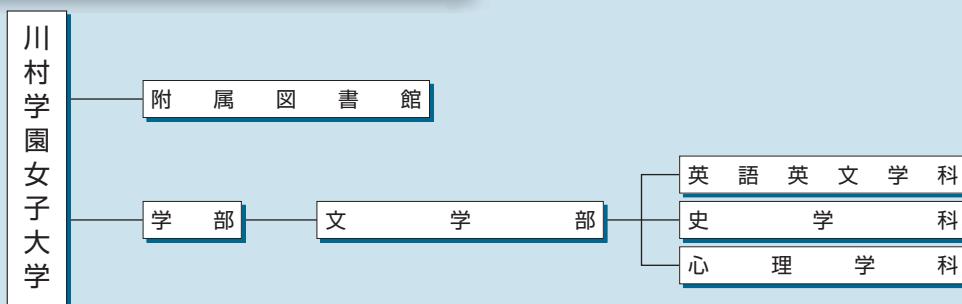
年	月 日	学園暦(社会暦を含む)
	4. 9 4.- 6. 9 12. 1	短大生活学科生活情報コース開設 小倉台幼稚園第1回入園式(126名入園) 長崎校舎閉鎖(平成6年度生活学科校舎として再開) 皇太子徳仁親王と小和田雅子さま御成婚 大学図書館報『櫻』創刊
平成 6(1994)	3.15 4. 1 4. 8 7. 2 7. 8 10.15～16 11.23 12.10	大学文学部史学科機関誌『あしたづ』創刊 長崎校舎再開(短大生活学科生活情報コース移転) 創立70周年記念事業新第1校舎地鎮祭および本部棟取毀報告祭 女子同窓会70周年祝賀会(於帝国ホテル) 向井千秋日本人初の女性宇宙飛行士としてスペースシャトル搭乗 大学で第20回イギリス・ロマン派学会開催 大学「川村英文学会」発足・第1回大会開催 大江健三郎ノーベル文学賞受賞
平成 7(1995)	1.17 3.20 3.21 3.22 4. 1 4.25 7.24 10.17 11.25～26	兵庫県南部地震(阪神・淡路大震災)発生 地下鉄サリン事件発生 大学教育学部第1回卒業式(卒業生236名) 創立70周年記念新校舎上棟式(新校舎を第1校舎とし、現在の中高校舎全体を第2校舎と改称) 短大生活学科に生活心理コース開設(長崎校舎)、英文科に英語実用コース・英語教養コース開設 大学『川村英文学会 Newsletter』創刊 創立70周年記念新第1校舎入館式 大学厚生棟(10号館)竣工 創立70周年記念学園祭
平成 8(1996)	1.23 1.27 2.15 2.17 3.- 4. 1 4.26 5. 8 6. 6 10. 1 11.18 12. 1	健康地蔵、本部玄関脇に遷座 創立70周年記念第1校舎竣工式 小学校校地(運動場)の土地共有持分を取得 短大、練馬の興文寮閉鎖 大学川村英文学会『川村英文学』創刊 文化学院校長熊谷園子、文化学院本科・選科を夜間部とし「川村オープンアカデミー」と通称 女学院2期卒業生・元歯科校医の滝口春子遺贈金により「滝口春子奨学奨励金規程」を定め5月より運用 「紫雲賞奨励金規程」施行 大学・短大学生寮 川村学園興文寮(千葉県柏市西町に建設)地鎮祭 全人種の平等などを規定した南アフリカ共和国憲法施行 PTAの名称を川村学園後援会「PTA」(通称「川村学園後援会」)に変更 大学学内誌『花時計』創刊 川村学園興文寮上棟式 『川村学園70年のあゆみ』発行
平成 9(1997)	3.24 4. 1 9.17 12. 1	川村学園興文寮竣工式 消費税5%導入 大学新図書館棟(黄鶴館)地鎮祭 地球温暖化防止京都会議開幕
平成10(1998)	2.7～22 4. 1 4.24 5.28 6.10～7.12 9.30 10. 6 12.22	長野冬季オリンピック開催 小倉台幼稚園長熊谷園子 川村学園PTAを川村学園後援会へ名称変更認可 大学院設置認可申請 サッカーワールドカップ日本初出場 大学学部増設認可申請 大学新図書館(黄鶴館)・研究棟(12号館)上棟式 大学院設置認可
平成11(1999)	4.14 6.15 7. 8 8. 9 11. 8 12.22	大学院人文科学研究科(修士課程)心理学専攻・生涯学習専攻開設 大学院第1回入学式(新入生24名) 大学新図書館・研究棟竣工式 大学グラウンド改修工事(中学校体育祭を大学グラウンドで実施) 学園広報誌『黄鶴』創刊 国旗・国歌法が成立 第二幼稚園廃止認可 大学人間文化学部増設認可
平成12(2000)	4. 1 7.13 7.21～23 9. 2 9.13 12.10	大学人間文化学部開設 学園ホームページ開設 幼稚園新築工事地鎮祭 沖縄でサミット開催 三宅島噴火で全島民避難 我孫子グラウンド造成工事地鎮祭 白川英樹ノーベル化学賞受賞
平成13(2001)	4. 1 4.10 9.11 9.15	小学校・中学校・高等学校長川村正澄 幼稚園長西村和子 幼稚園新園舎竣工式 米国同時多発テロ発生 幼稚園キンダーファミリーパーティーを大学グラウンドで開催

年	月 日	学園暦(社会暦を含む)
	10.30 12.10 12.26	短大英文科廃止認可(大学文学部国際英語学科に発展的継承) 野依良治ノーベル化学賞受賞 大学教育学部学科名称変更認可 (平成14年度より情報教育学科を情報コミュニケーション学科に改称)
平成14(2002)	1. 1 1.18 4. 1  5.31~6.30 8. 5 9.17 12.10	単一通貨「ユーロ」流通開始 小学校隣接地購入 創立80周年記念事業小学校校舎建替工事着工(旧校舎取壊し・地鎮祭) 小学校仮校舎に旧短大英文科校舎を使用 小倉台幼稚園長西村和子 サッカーワールドカップ日韓合同開催 住基ネット稼動 小泉首相訪朝、日朝平壤宣言 小柴昌俊ノーベル物理学賞、田中耕一ノーベル化学賞受賞
平成15(2003)	4. 1 4.10 5. 5 8.20 9. 1 10. 3 12. 9	大学付属機関「心理相談センター」開設 小学校新校舎上棟式 『学園案内』発行(平成22年度まで発行) 創立80周年記念事業小学校新校舎建設工事竣工式 小学校新校舎落成を祝う会(児童委員会主催) 中学校会食開始 自衛隊イラク派遣決定
平成16(2004)	3.30 4. 1  4.12 4.21 10.23 12.26	大学人間文化学部生活文化学科、栄養士養成施設指定認可 大学文学部英語英文学科を国際英語学科、人間文化学部生活環境学科を生活文化学部に名称変更 生活文化学科、第6校舎を自白キャンパスとして使用開始 大学院人文科学研究科比較文化専攻博士前期・後期課程開設 東京私立中学高等学校協会・第10支部平成16年度支部長校(中学校・高等学校) 創立80周年記念教職員の集い 我孫子グラウンド竣工式 新潟県中越地震が発生 インドネシア・スマトラ沖地震によりインド洋大津波発生
平成17(2005)	3.25~9.25 3.29 4. 1 6.13 10. 4 10.15	日本国際博覧会 スマトラ島沖地震 小倉台幼稚園募集停止 川村学園女子大学附属保育園安全祈願祭 短大(生活学科)廃止認可 郵政法案可決
平成18(2006)	3.20 4. 1  5.27 9.11 10.24 11.15 11.-	王ジャパン'06ワールド・ベースボール・クラシック初代世界一に 附属保育園開園 学園ホームページをリニューアル インドネシア・ジャワ島で大地震 小倉台幼稚園廃止認可 創立85周年記念事業大学第4期工事地鎮祭 小学校・中学校・高等学校、大学(我孫子・自白)にAED(自動体外式除細動器)設置 教職員対象のAED実技講習会を実施
平成19(2007)	3.30 4. 1  5.12 7.17 7.31 9. 1 9.26 10. 1 11.12	文化学院廃止認可 大学学長川村正澄 大学国際英語学科で留学制度発足 中学校・高等学校長寺本明子 大学SA(Student Adviser)センター開設 小学校運動会を大学グラウンドで実施 新潟県中越沖で震度6の大地震、柏崎原発火災など深刻な被害 大学と我孫子市教育委員会との学生ボランティア派遣協定調印式 第5代理事長川村正澄 大学第4期工事上棟式 郵政民営化スタート 大学と中山医学大学応用外国言語学科(台湾)間での学術交流協定締結式(於中山医学大学)
平成20(2008)	4. 1 4. 1  4.11 5.12 6. 4 9. 1 9.15 12.10	後期高齢者医療制度スタート 大学教育学部児童教育学科開設、教育学部情報コミュニケーション学科募集停止 人間文化学部生活文化学科1年生から我孫子キャンパスへ移転 創立85周年記念事業大学第4期工事竣工式 四川大地震発生 幼稚園にAED(自動体外式除細動器)設置 小学校・中学校・高等学校合同通学組合下校訓練実施 米証券大手リーマンが破綻、米国発の金融危機が全世界に波及 南部陽一郎、小林誠、益川敏英ノーベル物理学賞、下村脩ノーベル化学賞受賞
平成21(2009)	1.20 3.23 4. 1	米国初の黒人大統領として、民主党バラク・オバマ就任 サムライ・ジャパン'09ワールド・ベースボール・クラシック2連覇 第5代学園長川村正澄 名誉学園長川村澄子

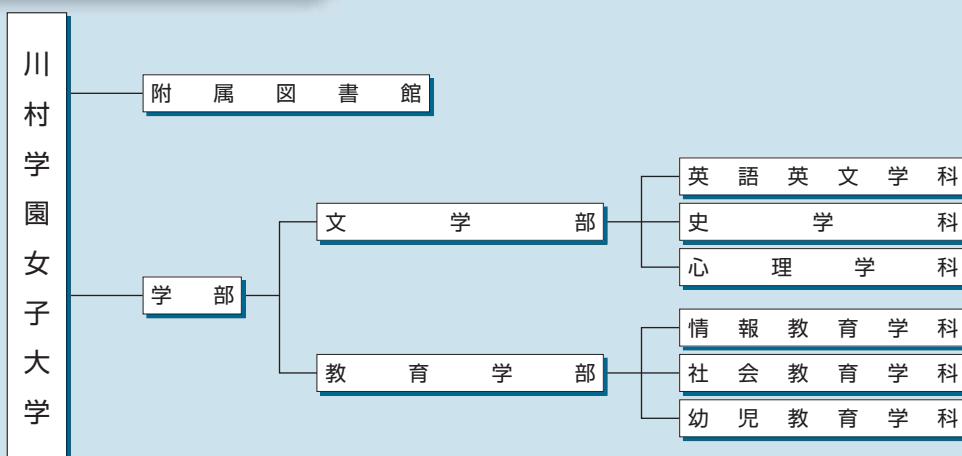
年	月 日	学園暦(社会暦を含む)
	4. 6 5.13 7.21 8. 3 8.18~26 9.-	大学15号館竣工 幼稚園・小学校・中学校・高等学校で学校情報連絡システム導入 若田光一日本人宇宙飛行士初の長期滞在、日本初の有人宇宙施設「きぼう」の船外実験施設取り付け成功 日本に裁判員制度発足、初の裁判員裁判が東京地裁で開廷 大学で「教員免許状更新講習」開設 新型インフルエンザ流行
平成22(2010)	3.31 3.31 4. 1 5.21 7.12 7.15	高校授業料無償化法成立 大学自白キャンパス閉鎖 通学組合を通学班と改称 高等学校「健康ノート」導入 日本初の金星探査機「あかつき」打ち上げ成功 高等学校仮校舎に第8校舎を使用(平成23年9月11日まで) 創立90周年記念事業第2校舎(中高校舎)全面リニューアル工事着工
平成23(2011)	3.11 3.12 3.18 4. 1 4. 5 4. 6 4.25 4.27 6.20 7.15 7.18 7.24 9.12 10.11 10.14 10.21 10.27 11.17	東北地方太平洋沖地震(東日本大震災・M9.0、国内史上最大規模)発生 高さ10m以上の大津波が東日本太平洋沿岸に甚大な被害 九州新幹線全線開業 東日本大震災の影響により、小学校・中学校・高等学校合同卒業証書授与式を挙行 大学人間文化学部日本文化学科を文学部日本文化学科、 人間文化学部生活文化学科・観光文化学科を生活創造学部生活文化学科・観光文化学科へ改称 大学院人文科学研究科生涯学習専攻学生募集停止、教育学専攻を増設 川村学園震災対策を施行 東日本大震災の影響により、小学校・中学校・高等学校合同入学式を挙行 大学の平成22年度卒業生と卒業パーティー実行委員の呼びかけにより、義援金を日本赤十字社へ寄付 中学校・高等学校義援バザー開催 大学は我孫子市の「我孫子市災害復旧事業費」へ寄付 義援バザーの売上を合わせ、義援金を日本赤十字社へ寄付 幼稚園・小学校・中学校・高等学校義援バザーを開催 なでしこジャパン、サッカーワールドカップ優勝 東北3県を除き、地上アナログ放送に完全移行、アナログ放送終了 第2校舎東棟の教室部分の工事が完了し、高等学校が第8校舎から第2校舎へ移動 神殿移設報告祭 オーストラリアコルベカトリックカレッジ(Kolbe Catholic College)と交流学習実施 大学はイギリス公立カレッジ・チチェスター・カレッジ(Chichester College)と学術交流協定を結ぶ 次年度より交換留学生として国際英語学科2年生1名の留学決定 財団法人六華会の組織変更が内閣府から承認(平成24年4月1日から一般公益法人) 幼稚園・小学校・中学校・高等学校の職員室に緊急地震速報受信装置を設置
平成24(2012)	1.10 2.25 2.29 4. 2 4.25 5.21 5.22 7.23 8.16~25 9.11 10.8~12 12. 3 12.10 12.20	第2校舎リニューアル工事竣工 高等学校1年生「クエストカップ2012全国大会」の本選出場、優秀賞を受賞、開会式で生徒代表宣誓 義援バザー売上金と義援金、大学鶴雅祭と目白学園祭の収益金等を合わせて、義援金を日本赤十字社へ寄付 川村女学院開院式寄贈 揚艸仙氏書の「坤徳」を第2校舎1階ラウンジへ移設 幼稚園預かり保育(にじ組)開始 小学校・中学校・高等学校にて金環日食観測会実施 東京スカイツリー開業 第2校舎窓ガラスに飛散防止フィルム施工 中学校・高等学校語学研修実施(オーストラリア・西オーストラリア州) 日本政府が尖閣諸島の魚釣島、北小島、南小島を地権者から購入し国営化 オーストラリアからの学生をホームステイ受け入れ、交流学習(小学校・中学校・高等学校) 内閣府、消防庁、気象庁は共同で、緊急地震速報の全国的な訓練の実施、学園(幼~高)でも訓練を実施 山中伸弥ノーベル医学・生理学賞受賞 高等学校合唱コンクール開催
平成25(2013)	2.23 2.28 4. 1 6.22 7. 1 9. 7 10. 1 11.16~17 11.23 12.23~26	高等学校1年生「クエストカップ2013全国大会」の本選出場、優秀賞を受賞 義援バザーの売上金と義援金、大学鶴雅祭と目白学園祭の収益金等を合わせて、義援金を日本赤十字社へ寄付 学園ホームページをリニューアル 大学緊急通報・安否確認システム導入 富士山が世界文化遺産に決定 中学校・高等学校で盛夏用制服(夏のワンピース)導入 2020年夏季オリンピック・パラリンピックの開催地が東京に決定 消費税率8%への引き上げ決定 学園祭にて第1校舎3階記念室を公開 川村学園同窓会支部として大学同窓会発足、同窓生山田邦子さんが大学支部設立記念講演 スキースクールに小学校5・6年生参加(希望制)
平成26(2014)	1.21 1.31 2.22 3.31	小学校・中学校・高等学校、電子黒板を設置導入 義援バザーの売上金と義援金、大学鶴雅祭と目白学園祭の収益金等を合わせて、義援金を日本赤十字社へ寄付 高等学校1年生「クエストカップ2014全国大会」の本選出場、優秀賞を受賞 『川村学園女子大学 25年のあゆみ』発行

# 本大学の教育研究組織の変遷

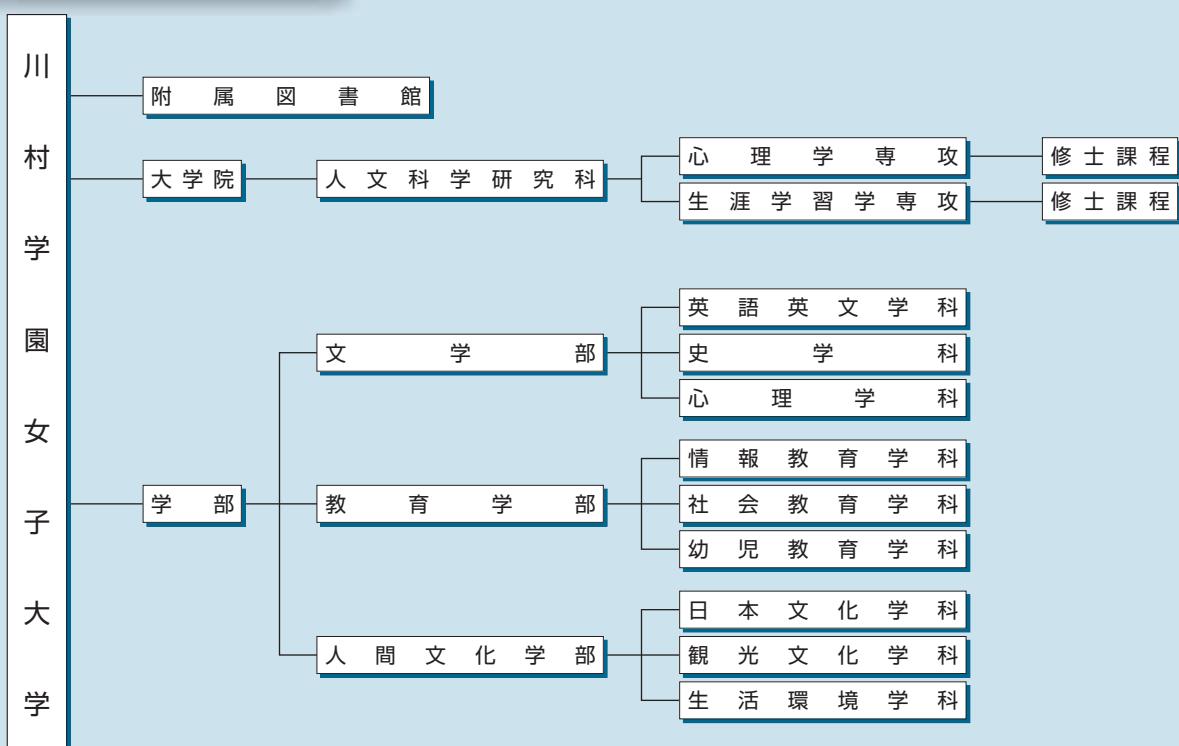
## 昭和63年(1988)度 (開学当時)



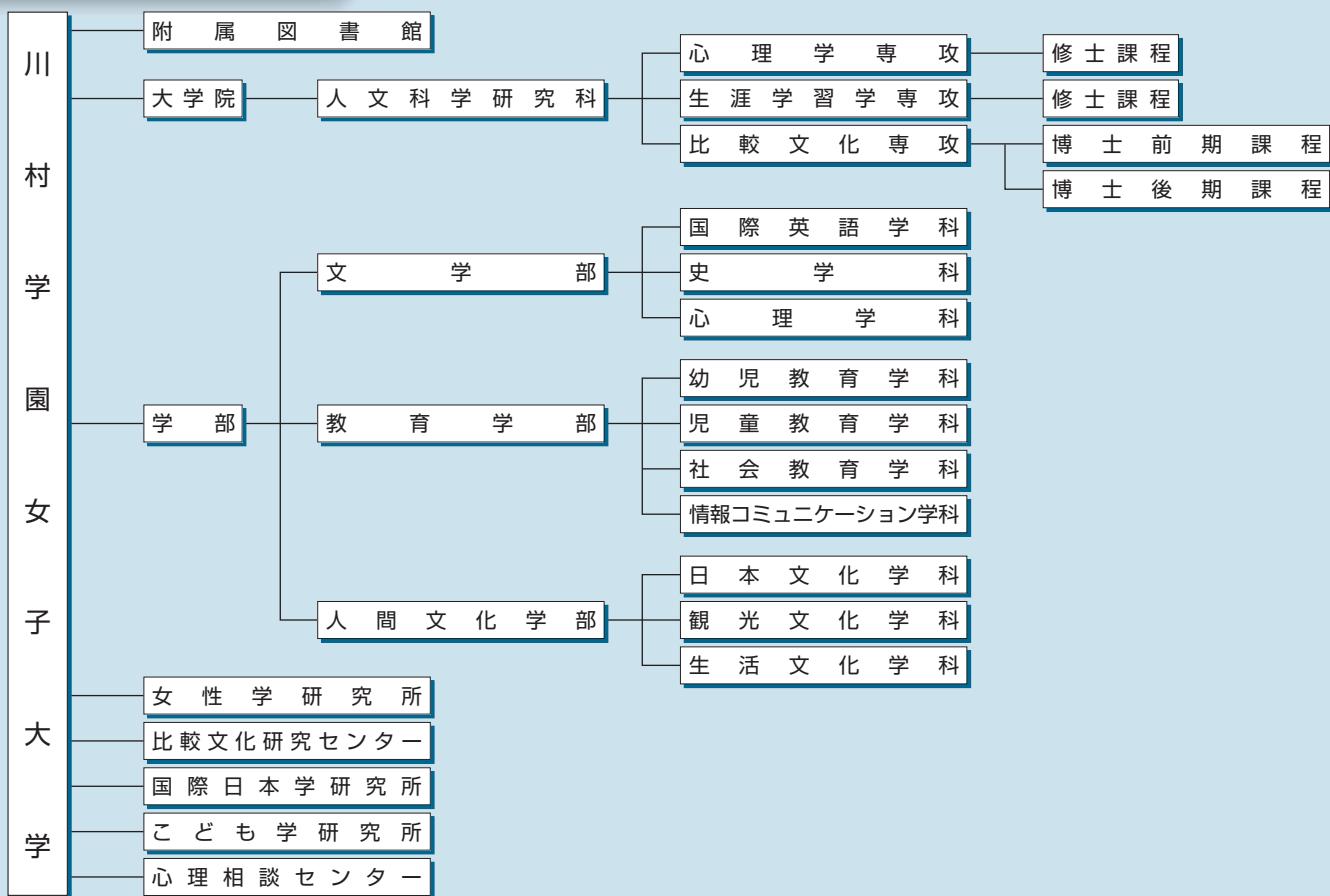
## 平成3年(1991)度



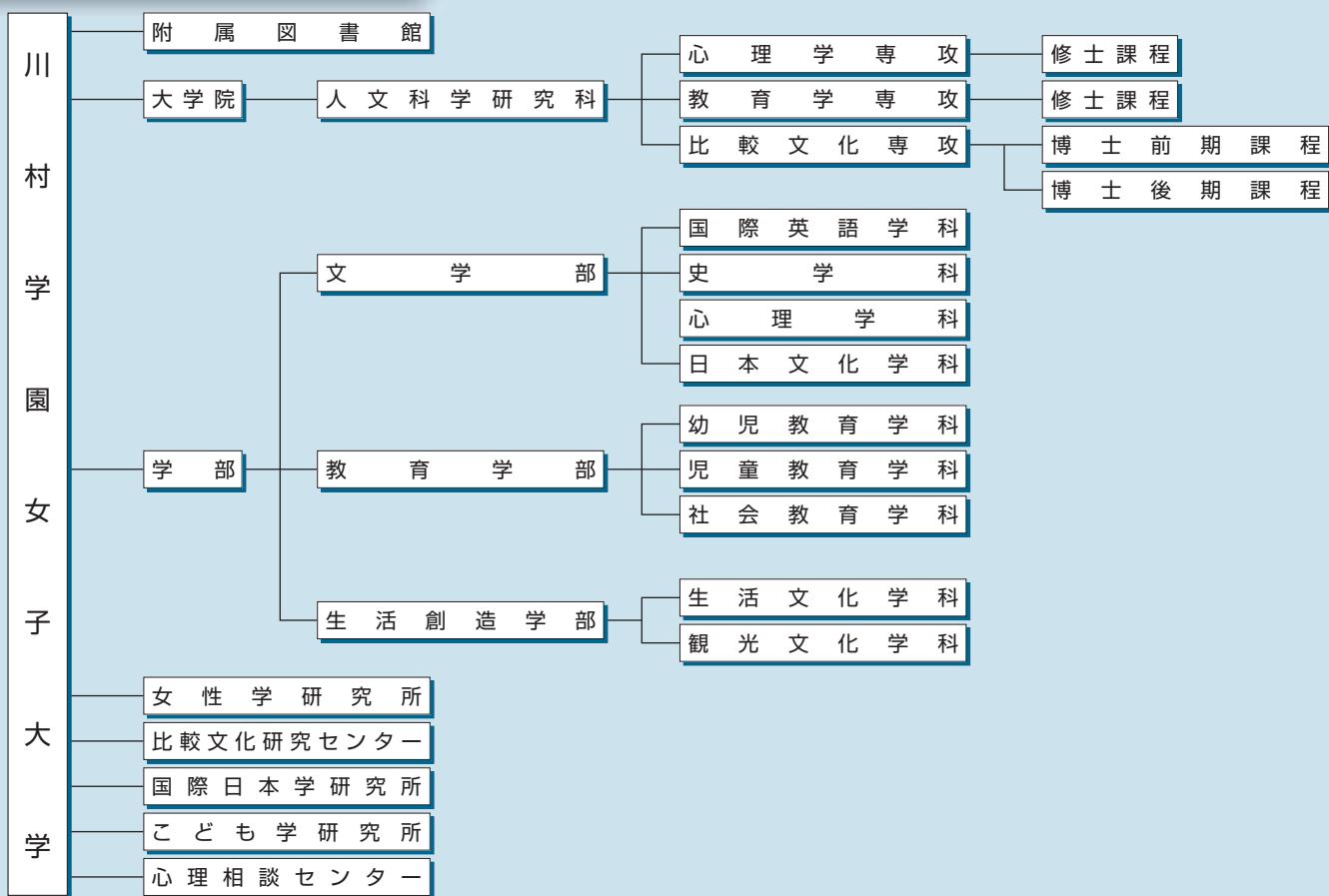
## 平成12年(2000)度



## 平成20年(2008)度



## 平成25年(2013)度(現在)



# 我孫子市の史跡・名所案内

手賀沼と利根川に囲まれ、水・緑・鳥と調和した豊かな自然に抱かれたまち、我孫子。古代から人びとがくらしてきたこの地には、先人たちの足跡がそこここに残されています。我孫子の歴史と現在の様子を、おもな史跡や名所を取り上げて紹介します。



(我孫子市教育委員会『あひこ歴史散歩』(平成23年3月)掲載地図をもとに作成)



①傾斜地にある日立精機2号墳



③手賀沼(アビスタ屋上より)



④相馬郡衙止倉跡

昭和53年(1978)、県立湖北高等学校(現、我孫子東高校)の建設のさいに発掘したところ、古墳時代の竪穴式住居をはじめ、奈良・平安時代にかけての建物跡が数多く発見された。ここには、奈良時代に下総国相馬郡の役所の機能を果たした郡衙がおかれて、税として納められた穀物を貯蔵する倉庫があったとされる。この一帯は日秀西遺跡とも呼ばれる。(県指定文化財)

## ①日立精機2号墳

我孫子には数多くの古墳が見つかっている。日立精機2号墳は、消滅してしまった1号墳と並んで旧日立精機工場内にあった。全長は約30m、高さ2.5mの前方後円墳であり、前方部と後円部の間に横穴式石室がある。縄文土器、土師器、須恵器などが出土している。古墳の築造は7世紀前半と思われ、現在は我孫子古墳公園として保存されている。

## ②水戸道中我孫子宿

水戸道中は千住を基点として水戸に至る116kmの街道であり、水戸徳川家と江戸を直結する重要な道であった。我孫子駅周辺の国道356号線沿いに、わずかながらに江戸時代の旅籠の名残りを見ることができる。天保2年(1831)に建築された茅葺屋根の旧我孫子宿名主邸(非公開)などがその一つである。我孫子宿から東にのびる成田街道には、東我孫子駅のそばに一里塚が現存している。



②旧我孫子宿名主邸

## ③手賀沼

手賀沼は古くから豊かで清らかな水をたたえ、農業用水や漁業の場として盛んに利用されてきた。江戸時代からの干拓事業のため、現在では当時の2割程度の面積となっているが、都心からもっとも近い大規模な湖沼である。手賀沼周辺の都市化にともない、昭和30年代ごろから水質汚濁が深刻化し、国や県と共に水質浄化策が取られてきた。その結果、手賀沼花火大会やトライアスロン大会などが開催され、地域の憩いの場となっている。



## ⑤旧井上家母屋

江戸時代、享保の改革の一環として行われた手賀沼の干拓事業を手がけた井上家の住宅。井上家は、代々名主としてこの事業に取り組み、干拓が完成したのは昭和30年(1955)であった。現存する建物は江戸時代末期以降のもので、母屋、表門、二番土蔵、庭門、屋根垣など9棟が国の登録有形文化財(建築物)に登録され、平成24年(2012)より市の指定文化財となった。本学では貝合わせ体験などで訪問してきた。平成25年(2013)度より整備中であり、一部が無料で公開されている。



## ⑥我孫子ゴルフ倶楽部

当時、我孫子町長であった染谷正治がこの山林地帯の一部を住宅地として開発する計画に行き詰まっていた。杉村楚人冠に相談したところ、ゴルフ場の建設を勧められたことをきっかけに、昭和5年(1930)に開場した。コースデザインは日本オープン初代チャンピオンの赤星六郎が設計し、平成24年(2012)のリニューアルでは世界的に著名なブライアン・シリバが担当した。バンカーに特色のある日本の名門コースの一つである。



## ⑦水生植物園

手賀沼湖畔に敷地約7800m<sup>2</sup>を有するあやめなどの水生植物園。150種類、約1万5000株のあやめなどが地域の人びとの目を楽しませてきた。毎年初夏に行われた「あやめまつり」は季節の風物詩ともいえるイベントであったが、平成24年(2012)以降、水生植物の面積を縮小し、今後の活用策を検討中である。平成25年(2013)にはひまわりの栽培を行い、ひまわり畑がみごとな新しい景観をつくり出した。このほかにも、耕作放棄地に花を植える活動が市内に広がりをみせている。



## ⑧鳥の博物館

「人と鳥の共存をめざして」(Harmony among Birds and People!)をテーマに、日本で唯一、鳥だけを扱った博物館として平成2年(1990)に開館した。博物館では、身近な自然の代表である手賀沼と鳥の関係を紹介したコーナーや、人と鳥が今後どう共存していったらよいかを考えるコーナーなど、地域の自然保護から地球の環境問題まで踏み込んだ展示をめざしている。世界的に有名な鳥類専門研究機関の山階鳥類研究所と隣接している。



## ⑨水の館

平成3年(1991)に開園した手賀沼親水広場内の施設。水と親しみながら水と人とのかかわりを学び、手賀沼浄化を考える拠点として整備された。高さ25mの展望室からは天気の良い日は富士山や東京スカイツリーが一望できる。1階の展示ホールでは、映像装置やパネルにより、見学者が楽しみながら学べる。プラネタリウムも設置。広場では市や各種団体のイベントが行われ、本学の学生もボランティアで参加することが多い。

## ⑩旧村川別荘

親子2代にわたる西洋古代史学者、村川堅固・堅太郎の別荘。旧我孫子宿の本陣離れを移築した母屋は、江戸時代後期の我孫子宿の建築物を偲ぶ資料として貴重である。

また昭和3年(1928)に斜面地を活かして建てられた銅板葺、千鳥破風の新館は、堅固が朝鮮古墳調査に随行したさいに見た建物の印象を元にデザインされたモダンな造りである。現在は無料で公開されている。



⑩旧村川別荘新館

⑪旧村川別荘母屋



### ⑪志賀直哉邸跡

志賀直哉は白権派の代表作家として知られている。友人の柳宗悦に誘われて当地に移住し、8年ほど居住した。現在、邸宅の跡地には創建当初の部材を再利用して復元された書斎がある。『和解』『城之崎にて』『暗夜行路』など、多くの有名作品がこの地で執筆された。我孫子を題材にした小説も多く、『雪の日』『流行感冒』も当時の我孫子の情景を偲ぶ資料となっている。

⑪志賀直哉邸跡の書斎



### ⑫杉村楚人冠邸園

杉村楚人冠は明治36年(1903)に東京朝日新聞社に入社し、日本初の世界一周旅行の企画、縮刷版の発行などを手がけた国際的ジャーナリストであった。明治45年(1912)、我孫子に別荘を建て、関東大震災を機に家族と共に我孫子に移住。嘉納治五郎、村川堅固らと共に手賀沼の景観保護活動を訴え、国による干拓事業への反対運動をおこした。現在では、杉村楚人冠邸園として母屋と庭園が公開されている。

⑫杉村楚人冠邸園



### ⑬天神坂

大正時代、我孫子は「北の鎌倉」と称され、この坂は文人たちに親しまれていた。天神坂の由来は、この地に天神様があったことにあるという。現在では、市が坂を整備し、趣のある景観が訪れる人の目を楽しませている。坂の西側には柳宗悦の邸宅跡があり、ここに志賀直哉や武者小路実篤らの文人が集っていた。坂の東側には、講道館柔道の創始者で教育者の嘉納治五郎の別荘地がある。



### ⑭柳宗悦邸跡

民芸運動を興した思想家、柳宗悦の邸宅跡。宗悦は、志賀直哉、武者小路実篤らと共に文芸雑誌『白権』を創刊した。大正時代、6年半にわたってこの地に住んだ。庭に3本のシの古木があることから、隣に住む叔父の嘉納治五郎が三樹莊と名づけた。イギリス人陶芸家のバーナード・リーチを招き、仕事場と窯を提供した時期もある。兼子夫人は声楽家としても著名であった。(非公開)

⑭柳宗悦邸跡



### ⑮旧武者小路实篤邸跡

武者小路実篤は白権派を代表する文人の一人。文学のほかに、美術・演劇・思想など幅広く活動し、作品数は6000を超える。志賀直哉に誘われて我孫子に移り住んだが、2年後、彼が理想とする特権や階級のない自由で平等な「新しき村」の実現のため、宮崎県へと旅立った。『或る男』では、手賀沼に映える美しい夕日の様子が描写されている。邸宅跡地前には記念碑がある。(非公開)



## 編集後記

---

昭和63年(1988)早春、まだ人影もない大学の正門に立ったことを思いだしています。あのときから四半世紀、キャンパスの姿は大きく変わりました。文学部のみで始まった大学は、教育学部、生活創造学部(人間文化学部より改称)との三学部体制となり、大学院も備えるようになっています。

その移り変わりを、卒業生や同僚たちから提供された原稿や写真により再確認する中で、ときには一枚の写真を前に、思い出話が尽きないこともあります。教職員、卒業生それぞれの思い出は異なり、一人ひとりの25年史が刻まれていることに気づかされたものです。編集委員の仕事は、この各人の‘熱い歴史’を取捨選択しなければならない作業でもありました。

第1章は学園の創立者川村文子先生の生い立ちから始まっています。その多くは、大学の総合講座のテキストとして用いている既刊の『こころ』にもとづきます。文子先生の女子一貫教育の理念は、川村澄子先生の‘4年生女子大学’設立へと継承され、我孫子という文化の薫り高い緑豊かな地で実を結びました。

ご覧いただいておわかりのように、大学の礎を築かれた諸先生のエッセーをコラムとして随所に掲載いたしました。また、学生と教職員との思い出に残る写真も満載しております。キャンパスの象徴である桜や櫻、四季を彩る草花の写真も数多く入れました。少しでも、〈読んで〉〈見て〉楽しい誌面となるよう心がけたつもりです。

司馬遷は、「前事の忘れざるは、後事の師なり」(『史記』)と言っています。歴史とは単なる過去の集積ではなく、将来への指針を示すものであるということでしょうか。大学の25周年という節目は、川村学園にとっての90周年にあたります。この小史が大学そして学園の発展への資料となれば幸いです。

なお、小史ではコラムや写真のキャプションを除いて、敬称・敬語を省く方針をとらせていただきました。文末となりましたが、ご協力いただきました多くの皆さんに厚く御礼申し上げます。

平成26年3月19日

「川村学園女子大学 25年のあゆみ」編集委員長 梅村恵子

---

「川村学園女子大学 25年のあゆみ」 ●編集委員 ●

梅村 恵子(編集委員長)

佐藤 浩子

生井澤 幸子

簗下 成子

斎藤 幸子

近藤 光江

荻原 延元

斎藤 慶子

藤原 昌樹

原田 耕平

大坂 佳保里

柚木 理子

豊川 洋

中村 修

金森 麻紀子

熊谷 園子(編集顧問)

事務局 入試広報室(目白)

---

●写真撮影・提供(編集委員・執筆者を除く)

エンドウミチオ

株式会社AMBER PHOTO

恵雅堂出版株式会社

秋田県藤里町

●装幀・本文デザイン

岩崎美紀

●挿画

荻原延元

●執筆協力

海野原岬／佐藤奈津美／岩瀬ほなみ

狩野葉月／佐野初帆／大理由薰

小林美貴／石井美帆／山崎はるか

磯明梨／椎名真希

●製図

長田健次

●編集協力

根岸徹／小島典子

●表紙写真(表)一本学アーチから正面を見る(恵雅堂出版株式会社撮影・提供)

●表紙写真(裏)—「夢みる天空」(5号館壁画)(小松省三画、昭和63年寄贈。エンドウミチオ撮影)

# 川村学園女子大学 25年のあゆみ Twenty-Fifth Anniversary

川村学園90周年記念

発行日 平成26年(2014) 3月31日

編集 「川村学園女子大学 25年のあゆみ」編集委員会  
発行者 学校法人 川村学園 理事長 学園長 川村正澄

発行 学校法人 川村学園  
〒171-0031 東京都豊島区目白2丁目22番3号  
電話 03-3984-8321(代表)

制作 株式会社 大巧社  
印刷・製本 株式会社 文化カラー印刷



川村学園90周年記念

